令和4年度自己点検・自己評価委員会総会

日時　令和5年5月13日（土）9:55～14:45

会場　F講義棟

あなたの学びを　あなたのカタチに

九州保健福祉大学

Kyushu University of Health and Welfare

学校法人 順正学園

建学の理念

学生一人ひとりのもつ能力を最大限に
引き出し引き伸ばし、社会に有為な
人材を養成する。

加計

令和4年度自己点検・自己評価委員会総会プログラム

日　　時　　令和５年５月１３日（土）　９：５５　～　１５：００（終了予定）

令和4年度 実績評価優秀者表彰			9:55　～
理事長・総長挨拶		加計勇樹　理事長・総長	10:00　～
学長挨拶（外部評価員紹介を含む）		兒玉　修　学長	10:05　～
実施部会報告	基本事項検討部会　DP関係	黒川昌彦部会長	10:15　～
	教育改革部会　　CP関係	大倉正道部会長	10:20　～
	研究活動部会	池脇信直部会長	10:25　～
	学生サポート部会	三宮基裕部会長	10:30　～
	キャリアサポート部会	徳永　仁部会長	10:35　～
	社会貢献部会	川﨑順子部会長	10:40　～
	学生受入部会　AP関係	渡邊一平部会長	10:45　～
質疑応答			10:50～11:00

《３Ｐを踏まえた各学科の中期計画報告・概要》

社会福祉学部　スポーツ健康福祉学科	正野知基学科長	11:00　～
社会福祉学部　臨床福祉学科	稲田弘子学科長	11:05　～
臨床心理学部　臨床心理学科	前田直樹学科長	11:10　～
通信教育部社会福祉学部臨床福祉学科	川﨑順子通信教育部長	11:15　～
質疑応答		11:20～11:30
薬学部　薬学科	木村博昭学科長	11:30　～
薬学部　動物生命薬科学科	明石　敏学科長	11:35　～
生命医科学部　生命医科学科	山本成郎学科長	11:40　～
大学院研究科総括	正野知基社会福祉学研究科長	11:45　～
質疑応答		11:50～12:00
《令和３年度授業アンケート結果報告》	大倉正道教育開発部門副部門長	12:00 ～
《講評・総評》外部評価員　講評	澤野幸司延岡市教育長	12:05　～
	吉玉典生延岡商工会議所会頭	12:10　～
学 長 総 評	兒玉　修　学長	12:15　～
一部終了（休憩）		12:20～13:25

二部≪事務部門目標設定報告≫

大学事務局	的場嘉男事務局長	13:30　～
庶務部庶務課	大石正憲課長	13:35　～
庶務部会計課	牧野喜代子課長	13:40　～
教務部教務課(ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ課を含む)	紺野智子課長	13:45　～
教務部通信教育事務課(図書館を含む)	矢野朋光課長	13:50　～
学生部学生課(英語村を含む)	加藤泰輔課長	13:55　～
キャリアサポートセンター	猪股健久主任	14:00　～
入試広報室分室	髙木真理子課長	14:05　～
質疑応答		14:10～14:30
閉会挨拶	黒川昌彦副学長	14:30　～

【点検・評価項目】（各部会において最重点項目に◎、重点項目に〇）

①使命・目的（教育目的の設定と反映を含む）、②学生支援（受入れ、学修支援、キャリア支援、学生サービス、環境整備、意見要望への対応を含む）、③教育課程（単位認定等、教授方法、学修成果の点検評価を含む）、④教員・職員（教学マネジメントの機能性、教員配置及びFD・SD、研究支援を含む）、⑤経営・管理と財務、⑥内部質保証、Ⓐ地域貢献（人的、物的、知的資源の提供、社会ニーズに応じた教育の提供を含む）、Ⓑ倫理教育（人権啓発活動、ハラスメント防止、情報教育等を含む）Ⓒ国際化（人材育成、国際交流推進等を含む）

令和４年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
基本事項検討部会 ※図書館部会を統合	○	○	○	○	○	◎	○	○	○

○今年度の取組状況（基本事項検討部会）

本学の建学の理念である「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸し社会に有為な人材を養成する」を念頭に、人材養成の基盤となる、教育力、研究力、学生支援、募集力、グローバル化、地域活性化、大学運営、内部質保証などを基本事項と定め、各の項目について、中核センター部門会議や各種委員会を中心に、協議・検討を進め、改善に取り組んできた。

基本事項検討部会では、自己点検・自己評価委員会総会に向けて、各部門や各委員会で協議・検討され、実現に向けて取り組まれたこれらの事項に対して、更に内部質保証の観点も踏まえて、必要な評価・検討を行った。

また、自己点検・自己評価に限らず、内部質保証体制の整備（内部質保証委員会の設置）や学長のガバナンスの下、必要な見直しや改善が行える体制の整備(学長諮問会議の設置)が行われた事で、これらの組織と基本事項検討部会が協力することで、更に本学の諸活動に対して妥当性や客観性を持って、連動した評価・検討が行える体制となった。

学生確保に向けては、本学独自の特色ある教育や研究、学生サービスの実施を検討していくことで、更なるブランド形成と募集力強化、発信力強化が行えるよう協議・検討に取り組んだ。

○今年度の取組状況（図書館部会）

1）学習支援及び教育活動への直接の関与

・ゼミ単位での利用説明会を開催し、学習支援を行った。

2）研究活動に即した支援と知の産生への貢献

・査読付きジャーナル「Journal of Health and Welfare Investigation」の編集作業を行った。今年度は３件の投稿があり、トータルでは５件の投稿となった。

・研究紀要第 24 号を前年度に引き続きリポジトリへの登録・公開とし準備を進めている。また紀要論文、学位論文ほか学内の研究成果物は遺漏なくリポジトリに登録、公開している。

3）コレクション構築と適切なナビゲーション

・電子ジャーナルおよび外国雑誌の利用調査を基に見直しを行った。また和雑誌についても見直し充実を図った。「人権コーナー」を設置し人権に関する書籍の展示を行った。

4）他機関・地域等との連携

・延岡市立図書館との連携を継続、認知症をテーマとした企画展示を行った。

・オープンライブラリはコロナウィルス感染対策もあり開催できなかった。

〇来年度の計画案

来年度は、新たにスタートする本学の第３期中期目標・中期計画に沿って、本学の自己点検・自己評価に関する基本方針の策定や評価結果の確認を行うと共に、内部質保証委員会と連携して内部質保証活動に必要となる基本事項の決定や検証・確認を行う。

１．３つのポリシーを踏まえた、人材養成に必要な使命・目的等の評価・検討。
２．学生生活、学修支援、学修環境改善など、学生サービス全般への評価・検討。
３．ＣＰやＤＰに沿った教育課程や教授方法の評価・検討。
４．大学の強みや特色を活かした研究力強化の評価・検討
５．安定した財務基盤を確立し、経営の規律と誠実性を考慮した経営・管理体制の評価・検討
６．内部質保証の為の点検・評価体制の確立に向けた評価・検討。
７．大学が行う地域活性化に向けた取り組みの評価・検討。
８．快適で平等な大学環境の維持に向けた評価・検討
９．国際化に向けた国際競争力の強化の為の評価・検討
10．図書館の管理・運営 及び 学生の利用促進に向けた評価・検討

令和４年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
【教育改革部会】（下記統合計画） 教育指導部会、カリキュラム部会 （大学院部会、通信教育部会を含み、第３期中期計画に移行計画）	◎	○	◎	○		○		○	

<u>○今年度の取組状況（教育指導部会）</u>

第２期中期目標・中期計画最終年の総括として、学生の能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会から高く評価される人材育成を目指した教育改革に取り組み、教育面でのブランド化として全学共通科目の充実を図るスタートを切ることができたが、第３期に向けた課題も確認された。

1. リメディアル教育として全学的に e-learning システムを引き続き導入し、全ての教科の基礎学力として重要な国語能力の向上に取り組んだ。全学共通の国語実力テストでは、学科毎での取り組みの偏りなどにより、効果に差が生じている。取り組み方法など課題の共有を図り、国語力強化に取り組む必要がある。
2. 本年度は全学的な遠隔授業対応が無かったものの、教員・学生共に理解が進んでおり、自粛要請学生に対する個別の遠隔対応（配慮）を積極的に呼びかけ対応促進に努め、一部で実現できている。
3. 各学科での更なる国家試験合格率の向上を目指した。しかしながら、多くの職種で全国平均を下回るなど、今後の課題も明確となった。
4. コロナ禍でワークショップ形式での FD 研修会が実施できなかったが、学生へのメンタルヘルス対応等について共通理解を図るきっかけを提供することができた。
5. 学生へのセクハラ・パワハラなど起こさないよう研修会の実施（未達）
6. ブランド化の一環として、全学共通基礎科目の運用を開始し、科目毎の検証を行い、次年度に向けた運用の更なる充実に着手することができた。

<u>○今年度の取組状況（カリキュラム部会）</u>

1. 大学共通基礎科目の検討

大学のブランド化の一環として、本学の特色を活かした大学共通基礎科目を改訂し、運用の開始を行うことができた。

●情報、AI、データサイエンス科目の再編―コンソーシアムなど大学連携を含め情報教育センターを中心に検討協議し、点検評価を行っている。

●医療、福祉を標榜する大学としての基礎教育の強化―「日向国地域体験学習」「医療・福祉連携講座」「インターンシップ」を体系的に実施し、点検評価を行っている。

2. 学修成果の可視化に向けたアセスメントポリシーの検証

学修成果の可視化に向け、システム（ユニパ）のバージョンアップを行い、利活用促進と運用の効率化に向け、点検評価を行っている。

3. シラバスチェック体制の強化

従来通りのシラバスチェックは行われたが、強化までとは至っていない。３つのポリシーからの検証、科目間の教授内容の検証など、体制強化に向けた取り組みを継続的に行いたい。

○今年度の取組状況（通信教育部会）

１．入学者の確保に向けた広報活動の充実

①広報媒体を見直し、九州管内中心から全国発信へと広報活動を充実した。さらに、ホームページの充実を図った。

②宮崎県内の社会福祉法人経営者協議会及び専門職能団体の会員案内時にチラシを同封し、志願者確保に努めた。

２．学生サポート体制の充実

①スクーリングは一部を除きオンラインで実施した。ネット環境が整っていない学生をサポートするため、スクーリング実施日にはLL教室等を開放して対応した。

②学習相談会は実施できなかったが、オンライン、電話、ＦＡＸ、メール等により丁寧に対応した。

③国家試験対策講座を9月に2日間、12月に2日間オンラインで開催した。また随時、参考書や模擬試験案内などの情報を提供した。

④学生授業アンケート結果を教員へフィードバックし、授業改善につなげる資料を提供した。

⑤実習の実施において配慮の必要な学生については、個別面談や電話等で対応した。

３．オンラインに対応した授業内容の検討

①実習について、不測の事態に備え、オンラインによる代替実習の方法を検討したが具体策は見いだせていない。（今年度の実習は予定通り実施できたため支障はなかった）

②科目単位認定試験について、オンラインによる実施を次年度より取り入れる。

○来年度の計画案（教育改革部会）

来年度は第３期中期目標・中期計画の初年度となる。大学並びに各学科の掲げる目標・計画の実現に向け、以下の点検評価項目の取り組み向上に努める。また「４つのen」として掲げたブランドビジョンを具現化するため、教育面でのブランド化に取り組み、改革の推進を行う。

1. ブランドビジョンの実現に向け、新設した大学共通基礎科目の検証、改善に努める。
2. 全ての教科の基礎学力として重要な国語能力の更なる向上に取り組むと共に、リメディアル教育として導入してe-learningシステムの活用法などの検証を行う。
3. 国家試験合格率の向上を目指す。少なくとも、全国の大学の国家試験合格率平均を下回ることがないよう国家試験対策の充実に取り組む。
4. 教職員の意識改革並びに課題の共有を目的に、FD・SD活動の促進に努め、学生を中心とした（学修者本位）研修活動の充実に努める。（ワークショップやハラスメント研修などの充実）
5. 学修者本位の教育環境充実に向け、以下の強化を図る。

・ユニバーサルパスポートを活用した学修成果の可視化の検証、改善

・シラバス内容の充実・検証及びチェック体制の改善・強化

・授業アンケートを初めとした教育IRの改善と実施体制の強化

6. ハイブリットコースを含めた通信教育部の改革並びに通学課程との連携強化を図る。

令和４年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
研究活動部会				◎		○	○	○	

○今年度の取組状況

1.学内共同研究

1)　教員による研究・社会貢献を推進するために、学内共同研究費（800万円）を研究経費助成および地域創生事業経費助成として配分した。研究経費助成の審査は、科研費の審査評価に基づき、地域創生事業経費助成の審査は、社会貢献度に基づきそれぞれ配分額を決定した。
令和4年度の研究経費助成の採択数は8件、地域創生事業経費助成の採択数は7件であった。

2)　成果に対する内部質保証として、令和3年度の研究経費助成および地域創生事業経費助成の成果報告書が該当者全員から提出された。

3)　研究推進部門における自己点検・自己評価（研究部門FD）の一環として、学内で各経費助成の成果をポスター閲覧形式で発表した（令和5年2月21日～令和5年3月10日）。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、発表会はポスター閲覧とコメント記載にて実施した。
また、地域貢献の一環として、成果を広く知ってもらうためにイオン延岡店においてポスター発表会を開催した（令和5年3月10日～令和5年3月17日）。発表成果は冊子にまとめ、継続的に自己点検・自己評価を行うための内部質保証の環境を整えた。

2.科学研究費助成事業

1)　科研費（文部科学省・日本学術振興会）申請ための令和5年度科研費公募要領説明会を動画にて全教員を対象に開催した（令和4年8月23日～31日）。公募内容の変更点、researchmap、電子システムの操作方法、研究費の不正使用防止、研究活動の不正行為防止を説明した。

2)　令和4年度の科研費申請数は41件で新規採択件数は4件であった。

3.外部資金獲得状況

令和４年度の外部資金獲得は、共同研究・実証３件、受託研究６件、特別寄付 21 件であった。

4.査読制ジャーナル

本学オリジナルの査読制ジャーナル*Journal of Health and Welfare Investigation*（*JHWI*）を発行した。現在、4編が本学学術リポジトリで公開されている。

5.順正学園学術研究交流会

学園間の学術研究交流を目的に、順正学園学術研究交流会を開催した（令和5年3月9日）。
吉備国際大学から5題、九州保健福祉大学から4題の発表があった。研究推進部門による組織的サポート体制にて実施した。

6.研究倫理研修会

全教員・大学院生を対象に、宮崎大学付属病院臨床研究支援センター研究倫理部門（岩江荘介准教授）の講演および理解度テストを実施した（令和5年2月15日）。

7.公的研究費コンプライアンス研修会（動画研修）

全教職員を対象に、三宮紀彦公認会計士事務所代表（三宮紀彦氏）の公的研究費コンプライアンス研修と理解度テストの実施ならびに誓約書を提出した（令和5年3月10日～28日）。

〇来年度の計画案

1.学内共同研究

学内共同研究費を研究経費助成および地域創生事業経費助成として適切な配分を図る。研究経費助成は、科研費申請の審査評価に基づき審査を行い、科研費採択率の向上を支援する。地域創生事業経費助成は、社会貢献度に基づき審査を行い、社会貢献活動を支援する。また、研究推進部門における自己点検・自己評価（研究部門FD）の一環として、成果発表会を開催し、新たな研究コミュニティづくりを提供できるよう取り組む。また、成果の内部質保証として、大学ホームページにWEBサイトを開設し広く内容を公開する。

2.科学研究費助成事業

科研費申請（文部科学省・日本学術振興会）ための科研費公募要領説明会を開催し、的確な説明と指導を行う。また、効果的な科研費申請書作成のための研修会を開催し、採択件数向上を目指す。科研費採択率向上の戦略として、学会発表や論文発表をノルマ化する。

3.公的研究費コンプライアンス研修および研究倫理教育研修

研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）および研究活動における不正行為への対応等に関するガイドラインに則った研修会を開催し、研究倫理に関する取り組みと不正防止の強化・整備を行う。

4.査読制ジャーナル

本学オリジナル査読制ジャーナルの充実化を図るために、査読ガイドランの策定と明確化、教育的査読の考え方、査読のインセンティブ制度を導入する。

5.順正学園学術研究交流会

学園間の学術研究交流を目的に、令和5年度も順正学園学術研究交流会を開催する。有意義な交流会になるための画期的な企画を立てる。

6.みやざきテクノフェア・東九州ものづくり交流展

社会貢献の一環として、大学の知的財産である「もの」を積極的に出展し、社会貢献の使命を果たすとともに、本学の研究知的財産を積極的にアピールする。

7. 研究データサイエンス

研究活動部会では、研究情報に関わるビッグデータを処理・分析し、そこから新たな価値を生みだすことのできる研究データ解析制度の導入を図る。

研究活動部会は、日本高等教育評価機構の評価項目に対応する各種委員会を統合し、九州保健福祉大学内部質保証システム体制の使命や目的を実現するための積極的な活動を行う。教育・研究、組織の運営ならびに施設設備の状況について、継続的に自己点検・自己評価を行うとともに、絶えず改善・向上のためのPDCAサイクルを高速回転させ、本学内部質保証システム体制を盤石化するための活動を行う。

令和４年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
【学生サポート部会】（下記統合計画） 学生生活部会、留学生部会		◎						◎	

○今年度の取組状況（学生生活部会）

1. 交通トラブル対策

・ 学生課へ届出があった事故件数は、令和4年2月から令和5年1月までの間で12件（R3.4～R4.1は30件）となっている。12件のうち学生が第一当の事故が9件（昨年は23件）、うち物損事故は6件であり重傷事故の発生はなかった

2. 犯罪，生活トラブル対策

・ 犯罪、生活トラブルに関する相談が2件あった
・ 相談に対して、原則、個別面談を実施し、関係学部・学科、部署へ通知し早期の問題解決に努めた

3. 防災に対する意識向上

・ 全学生、教職員参加による南海トラフ大地震を想定した消防防災総合訓練及び防災講座を実施した（R4年12月）

4. 感染症対応に伴う学生の不安解消のための支援

・ 本学学生のうち、濃厚接触を含む感染の情報が寄せられたのは703件であった
・ ユニバーサルパスポートを活用して、該当学生が早期に大学へ情報を伝達できる仕組みを構築・運用し、受講科目教員やチューター教員等への通知を迅速に行い学生の不安軽減に努めた
・ 学生より寄せられた情報を整理して回復状況の把握に努め、回復後にスムーズに授業に戻れるように配慮した

○今年度の取組状況（留学生部会）

1. 留学生の除籍・退学者が出ないための支援をする

・ 2023.3.31現在、在学生19名(韓国18・中国1)、2022年度の退学者1名(中国)
・ 退学理由は精神的不安定により入院治療を要することとなり、日本国内での入院のち帰国に至った

2. 日本での生活に慣れてもらうための機会を設ける
3. 日本人学生、教職員および地域住民との交流の機会を設ける

・ 2・3の取組として、英語村主催で下記のイベントを実施した（カッコは実施日と人数）
Easter（4/28　17名）、新歓ゲーム大会（5/23～/27　39名）、Afternoon Tea（6/14　16名）、American Independence Day（7/4　10名）、映画鑑賞会（8/5　8名）、夏季集中講座（9/5,16-22　22名）、Halloween（10/24-28　54名）、Thanksgiving（11/30　5名）、Christmas（12/22　29名）、Christmas Secret Santa（12/22　20名）の他に、教育後援会留学生支援経費にて日本人学生と大分市・別府市へ日帰り旅行（12/3　12名）

4. その他

一次帰国の申請者は延べ24名(韓国延べ23・中国1)あり、一時帰国者への『一時帰国理由書』の記入要請、学部学科教員との連携、帰国留学生との定期的な連絡により、問題なく再入国帰国できた。

【参考資料：令和3年度の留学生の状況】（令和4年3月31日時点）
在学生総数21名（韓国19・中国2）／令和4年度入学者数2人（韓国1）

○来年度の計画案（学生生活部会）

1．学生生活の安定のための支援

① 交通トラブル対策

・ 定期的な安全運転講習の企画・実施や交通安全啓発活動をおこない、交通事故の減少を目指す

・ 延岡警察署との連携を継続し、事故等に対して迅速に対応する

② 犯罪，生活トラブル対策

・ 学生生活上のトラブル事例等の情報を配信し、身のまわりの「危険なこと」への理解を高める

・ 犯罪、トラブルに巻き込まれないように、そのような兆候があれば速やかにユニパでの周知を行い、学生の無知・常識のなさ・情報収集力の未熟さからくるトラブル・軽犯罪の防止や啓蒙を継続する。また、発生した場合には迅速かつ適切に対応する

③ 防災に対する意識向上

・ 地震に対する備えとして、総合的な防災訓練を実施するとともに学生の防災意識向上のためオリエンテーションでの講習、防災マニュアルの配布など各種対策を昨年に引き続き推進する

2．心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

① 関係各所との連携体制の構築

・ 医療機関、学内健康管理センターとの連携の仕組みを検討する

・ チューター、学科長、学部長との連携、情報共有の仕組みとして、緊急時対応の連携フローを検討する

② 相談しやすい環境づくりと相談スキルの向上

・ 学生生活に不安を抱える学生との信頼関係づくり、相談しやすい窓口対応をしていくために、学生が相談しやすい環境を整える

・ 関係教職員の相談スキルの研修を企画・実施する

○来年度の計画案（留学生部会）

1．留学生の除籍・退学者が出ないための支援をする

・ 留学生であっても精神的な不安による退学者が出つつある。十分な意思疎通が難しい留学生にとっては相談できる場所も限られるため、相談できず不安を抱え込んでしまうこともある。留学生向けの相談体制を検討する

2．日本での生活に慣れてもらうための機会を設ける

・ 令和５年度は新型コロナ感染拡大措置も緩和されるため、少しずつ留学生と日本人が一緒に楽しめるイベントを増やしていきたい

・ とくに留学１年目の学生を対象に、日常生活上の不安や疑問を聞き取り、少しでも早く日本生活に順応できるように支援していく

・ 部活やサークル情報を提供し、日本人学生同様、課外活動を楽しむよう促す

・ 学生委員会内に留学生部門の設置を検討し、留学生を中心とした活動を促す仕組みづくりに取り組む

3．円滑かつ安全な一時帰国を支援する

新型コロナ感染拡大措置の緩和により、一時帰国希望者の増加が予想される。円滑かつ安全に一時帰国できるように、関係部署と情報共有し連携していく

令和４年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
キャリアサポート部会		◎					○		

○今年度の取組状況

＜取組内容＞

１．就職希望者の就職率100%をめざすとともに、数値目標だけでなく、個人指導重視の支援を通して学生の発達を促し、一人ひとりが満足できる進路選択ができるよう質の高いキャリアサポートをする。

２．低学年からのキャリア意識の醸成を目的とした支援、就職活動の円滑な展開や就職試験への対応に繋がる各種企画を積極的に実施する。また、キャリアサポート委員を中心とし、各学科の教員との連絡を密にすることで、多様性のある学生にもスムーズな支援が行えるよう、これまで以上の連携を図る。その他、ユニバーサルパスポートを利用し自分自身の経験を蓄積させることで、節目節目での振り返りや目標策定のための材料とし活用できるよう2022年度入学生よりマイステップを稼働させる。

３．学生へのキャリア支援については、これまでオンラインで開催していた各種のイベントについて感染対策を考慮し、極力対面形式に切り替え、コロナ終息後の就職活動の変化に対応できるよう準備を整える。売り手市場にも関わらず、就職活動が激化する薬剤師採用については、企業が設定する採用スケジュールに乗り遅れることの無いよう就職情報サイトと連携し、早期から企業研究や自己分析などを実施することで、ミスマッチを防ぐ取り組みを実施する。

＜取組状況＞

１．質の高いキャリアサポートを目指して、就職率向上のみに留まらず卒業の先にある社会人としての自立を促すよう、課員間で情報共有・意見交換を頻繁に行った。また、学生一人ひとりが満足できる進路選択ができるよう、キャリアサポートセンターと各学科、更には地元ハローワーク・ヤングJOBサポートみやざき延岡サテライト・九州コミュニティーカレッジと連携・協力し、多様な学生の進路支援にあたっている。さらには、2022年度入学生よりユニバーサルパスポートのマイステップ機能を使い、学生の活動記録を入力させる取り組みを開始し、前期・後期終了間際に入力促進のアナウンスを実施している。入力者は少ないものの、細かく記録を残す学生も多数みられた。コロナ禍で記録できる内容も少ないと思われるが、次年度以降の入学生もより多くの記録を残すよう指導したい。

　また、求人受付NAVI・求人検索NAVI（以下、求人NAVI）を導入して２年目となり、掲載企業側はリアルタイムで求人検索が可能となることへの理解が浸透し、登録件数を伸ばすことができた。これにより、学生の就職先の選択肢も飛躍的に増加した。さらに、職員が求人NAVIの就職管理機能を活用することで、面談記録を共有し一貫性を持ち継続的な支援に注力できるよう

になったことで、質の高いキャリアサポートを実現できた。特にコロナ禍であり企業来学による求人情報は減少したが、来客対応者が求人情報をガルーンで共有することで、求人情報の把握に偏りがないよう努めた。

２．低学年からのキャリア意識の醸成を目指して、本学・延岡市共催で対面式の workCafé のべおかを 11 月に開催し、低学年の学生が社会で活躍する企業の若手職員と直接面談できる場を設け、キャリア意識の醸成へ務めた。加えて、公務員試験対策講座については、これまで授業終了後に複数の日程で実施していたが、今年度については対面形式で土曜日に午前・午後の二部形式で実施した。休憩時間には、講師等を含む参加者同士で意見交換するなど、これまでにない和やかな雰囲気で終了することができた。さらに、昨年要望のあった薬剤師職の参加も実現でき、参加学生の満足度も増したことが事後アンケートにて伺えた。

また、全ての学生へ各種伝達事項の徹底を図り、その都度、学生には掲示板やユニバーサルパスポート、教員にはガルーンメールで周知するほか、キャリアサポート委員と連携を図りながら伝達強化を推進できた。しかしながら、意識の低い学生においては携帯電話への連絡も必要不可欠であり、情報伝達の更なる強化は今後の命題と捉えている。

３．学生へのキャリア支援を目指して、今年度、様々な職種の学内説明会を通年開催し、コロナ禍でありながらも企業との接触の機会を多く持つことで、採用スケジュールの変化にも対応でき、ミスマッチのない就職先の選択が実現できた。また、キャリアサポートセンター内での学生サポートの点においては、職員のデスクの配置をセンター内全てが確認できる位置に変更したことで、細やかな学生の変化に気づき、適切なタイミングでの声がけも可能となった。

〇来年度の計画案

１．就職希望者の就職率 100%をめざすとともに、数値目標だけでなく、個人指導重視の支援を通して学生の発達を促し、一人ひとりが満足できる進路選択ができるよう質の高いキャリアサポートをする

２．低学年からのキャリア意識の醸成を目的とした支援、就職活動の円滑な展開や就職試験への対応に繋がる公務員対策講座や、各種企画を積極的に実施する。また、宮崎県や延岡市などの地元企業や自治体と連携し、公務員を含む地元への就職者増を実現させる。さらに、ユニバーサルパスポートの私の活動記録に活動内容を残させることで、自分自身を振り返り、新たな目標を掲げることで自己成長につなげる材料として活用させたい。

３．学生へのキャリア支援については、学部学科の要望を最優先させ必要とされるイベントを積極的に対面形式にて実施する。また、就職情報サイトと連携し、早期から企業研究や自己分析などを実施することで、ミスマッチを防ぐ取り組みを継続する。さらに、求人情報等のデジタル化を見据え、情報伝達の再考に着手する。

令和４年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
社会貢献部会							◎		

○今年度の取組状況

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けながらも、感染防止策を徹底しながら可能な範囲で活動を推進した。

１．社会貢献活動の推進

宮崎県人権啓発推進協議会の受託事業である「人権啓発活動協働推進事業（大学との連携）（3 年間）」の 3 年目として、社会福祉学部臨床福祉学科が主体となり、11 月 12 日（土）に「ヤングケアラー」をテーマに講演会とパネルデイスカッションを実施した。（参加者総数 106 名）

各学部においても、企業、地域、関係機関との連携を図りながら、社会貢献活動を推進した。

２．情報公開、情報発信の充実

各学部・各学科・各部活動・ボランティア・各個人における社会貢献等の成果について、前期と後期に分けて調査し、集約した内容を大学ホームページに公表した。

３．ボランティアセンター活動の推進

ボランティア活動総件数 187 件、総参加人数 609 人（昨年比 1.03 倍）の実績となった。

学内企画活動では、共同募金活動（2 回）、青春の遊歩道の清掃活動、新企画として天下橋から大学までの通学路の清掃を実施した。

４．順正ジョイフルキッズクラブ（ＪＫＣ）の充実

延岡市の「ひとり親家庭等学習支援等事業」の業務委託事業（7年目）は、当初19回予定していたが、コロナ感染拡大の影響で18回の実施となった。登録者数20名であり、延べ参加人数は193名（前年：105名）であった。大学生による平和学習（読み聞かせ）や進路体験談の紹介を行うなど、中学生との交流活動を充実した。また、3年ぶりに学生食堂での昼食体験を実施した。

○来年度の計画案

１．社会貢献活動の推進

宮崎県人権啓発活動協働推進事業の継続実施を検討し、事業に取り組む。

各学部で推進している産学官連携による社会貢献活動の実施状況について情報収集し、ホームページ等を活用して情報発信していく。また、大学全体で情報を共有する機会や方法を検討する。

２．ボランティアセンター活動の推進

地域関係団体からの派遣依頼の調整はもとより、ボランティアセンター企画による学内外のボランティア活動を推進していく。ボランティアサークルの立ち上げサポートを行う。

３．順正ジョイフルキッズクラブ（JKC）の充実

令和 5 年度は、実施回数 20 回を計画する。プログラムの工夫や実施体制の強化を図る。

新企画として、むかばき自然体験等学外活動を計画し、体験・交流活動を充実していく。また、保護者の JKC 参観期間を設け、教員やコーディネーターと顔の見える関係づくりを行う。生徒・保護者にとって安心できる居場所となるような活動を目指す。

令和４年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
学生受入部会		◎			○				

○今年度の取組状況

1.　オープンキャンパス・キャンパス見学会

初の６月開催を含め、計４回開催（6 月 19 日、7 月 24 日、8 月 21 日、R5 年 3 月 25 日）した。トータル参加者数は昨年度、一昨年度より多かった（昨年度 232 名、今年度 343 名：高校 3 年生は微増）。オープンキャンパスに参加できなかった人や個別見学希望者を対象に 9 月、10 月、11 月、12 月に見学会を実施した。参加者数は昨年度とほぼ同数（36 名）であった。

２．体験授業、見学の受け入れ

延岡市内を中心に宮崎県内の高校生（高校単位）での受け入れを積極的におこなった。高校、PTA の受け入れ数は 10 校（昨年はコロナの影響もあり 6 校）であった。

３．高校教員対象入試説明会・高校教員対象見学（体験会）

例年通り、高校教員対象入試説明会を 6 月に実施した。参加者数は高校・予備校 31 校 34 名（昨年 27 校 30 名）であった。また年度計画にはなかったが、高校教員対象見学会（体験会）を 8 月 30 日に開催し、6 校 10 名の参加があった。

４．SNS を活用した広報

学生スタッフ、各学科によるInstagramへの投稿、公式LINEでの情報発信（イベント告知）、ホームページの情報掲載（更新）を行った。更新回数を例年以上に増やすことはできなかった。

○来年度の計画案

１．教育目的を踏まえたアドミッションポリシーの策定

・求める学生像、入学時に必要な知識能力などを具体的に示す。

２．学部学科のポリシーに基づく入学者選抜の実施

・2024 年度入学生の入学者選抜に関する評価等の見直し、公表、実施を行う。

・2025 年度入学生にむけた入学者選抜の検討、公表を行う。

３．入学者の追跡調査

・入学後の追跡調査、分析を行い初年次教育へつながる入学前教育の実施への検討材料の作成。

・入学後の追跡調査分析結果を考慮した次年度以降の入試科目、入学者選抜内容の検討。

４．大学名称変更、学科構成変更の周知

・SNS、高校訪問、DM、CM 等あらゆる方法で広く告知を行う。

５．高等学校との連携強化

・高大連携校を中心に、県内高校に対する出張講義や見学の受け入れ、課題研究のサポート。

６．満足度の高いイベントの実施と SNS を活用した告知

・オープンキャンパスなどのイベント内容の工夫。

・SNS を活用したイベント告知方法の工夫。

九州保健福祉大学　社会福祉学部　スポーツ健康福祉学科
2022 年度　第 2 期　中期目標・中期計画　〈3 つのポリシーを踏まえて〉

ビジョン (教育目標)	九保大だから学べる 「スポーツで健康に生きる幸せ」をプロデュースできる能力を身につけた人材を輩出する。
学科からのメッセージ	スポーツ健康福祉学科の教育は、健康長寿社会の実現を目指して、スポーツ・健康・福祉そして東洋医学の視点からアプローチします。本学には「スポーツ健康福祉」と「鍼灸健康福祉」の 2 つのコースがあります。「スポーツ健康福祉コース」では、スポーツを基軸に健康、福祉、教育、コンディショニング等の専門知識を有する健康運動指導士やアスレティックトレーナー、保健体育教員、社会福祉士等を養成します。「鍼灸健康福祉コース」では、スポーツとともに、健康、福祉、コンディショニング等の専門知識を有するはり師・きゅう師を養成します。本学では、入学後の基礎科目から 4 年次の卒業研究までを通して自ら考える力を高め、各コースの専門知識に加えて、人々の幸せをプロデュースできる能力（知識・技能・思考力・態度）を涵養します。
教育力 (ブランド力) 「学修成果の可視化」の観点を含む	【学生自ら考える力のアップへの対策】DP〈4〉CP1〈5〉CP3〈2〉 ・ 卒業研究発表会への参加が少ない 1 年生の参加を促進する。 ・ 学習成果の可視化については、現在各ゼミで行っている評価を事前に学生へ明示可能であるか、意見を聴取する。 ・ 来年度は3年生が主体性（問題発見・解決力）を持って運営にあたれる準備・工夫を考えていきたい。 《取り組み状況・実績・成果》 ・本年度は、4～2年生は対面で参加、1 年生のみハイブリッドによる参加とした。1 年生は卒業研究発表会への参加を基礎演習Ⅱの出席と読み替えることで、38人中35人の参加が得られた。また、提出されたレポートからも発表内容に興味を持ち、卒業研究のテーマについて考える姿勢がうかがえた。 ・3 年生のゼミ科目（スポーツ健康福祉学演習Ⅰ・Ⅱ）の成績、採点について、学科教員にアンケート調査を実施し、10名の教員から回答を得た。回答のあったすべての教員が成績評価の開示を行うことができると答えた。アンケート結果を学科教員全体で共有した。 ・学校行事、集中講義などと重なったため、卒業研究発表会の日程が直前まで決められず、運営計画を 3 年生主体で実施することが困難であった。発表会の運営計画は教員が作成し、当日の運営は 3 年生の担当者が行い、円滑に会を進行することができた。 《課題・次年度へ向けて》 ・引き続き、1年生の参加を促し、卒業研究に対する意識づけを行う。 ・学科改組（臨床福祉学科との合併、救命救急コースの解説）に伴い、4年後の卒業研究発表会の開催様式について、学科教員にアンケートやヒアリングを行い、学生にとって最も学習効果の高い実施方法を模索する。 ・学習成果の可視化をシラバスに記載できるよう学科内で検討する。 【基礎国語力増進への対策】CP1〈1〉 ・ 講義科目における e-learning システム「すらら－国語」導入の長期運用の可能性を調査する。 ・ 積極的な e-learning システム「すらら－国語」の活用を学生に推奨する。 ・ e-learning システム「すらら-国語」実施による学生の国語力の変化について調査・検討を行う。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ 基礎演習(リメディアル教育に関する講義科目)にて、「すらら－国語」を導入・運用することができ、実施率は前期・後期ともに 100%であった。 ・ 「すらら」開始前に実施した国語テスト（全学統一国語試験）の結果から学生のレベルに合った「すらら－国語」の学習課題を設定し、その学習課題全ての達成を基礎演習の単位認定の必須条件として実施した。その結果、対象学生の課題達成率は、前期は課題未達成者が 1 名、後期は 2 名出たため、各々98%、95%あった。 ・ 前期・後期のはじめに各々実施した国語テスト（全学統一国語試験）の結果比較では、「すらら－国語」実施後、前期のテストで成績下位層だった学生は、後期のテストでは維持ないしは上昇傾向となったのに対し、成績中位・上位層の学生は維持ないしは低下が多い結果となった。 ・ 自主学習を継続的に取り組んだ学生は成績が伸びている傾向にあったことから、計画的な学習や学習への取り組み姿勢についての指導方法を再度見直す必要があると考えられる。

	《課題・次年度へ向けて》 ・ 引き続き、「すらら－国語」の活用を促し、実施率・課題達成率 100%を目指す。 ・「すらら－国語」の長期的な実施を目指し、学習内容や学習時間の精査・検証を続ける。 ・ 今回の結果に基づき、国語能力向上にむけた「すらら－国語」の実施内容の見直しを図ると共に、学習方法や学習への取り組み姿勢ついての指導方法を改善し、学習に対するモチベーション維持・増進を図る。 【国語以外のリメディアル教育への対策】CP1〈1〉 ・ 既存のリメディアル教育への「すらら－数学・英語」導入の可能性について調査・検討を行う。 ・ e-learning システム「すらら－数学・英語」について、学生に対し積極的な活用を促すと共に、利用環境の整備を行う。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ 既存のリメディアル教育への「すらら－数学・英語」の導入の可能性について検討し、課題の抽出を行った。 ・ 学生に対し「すらら－英語・数学」の利用・活用方法についての説明会を開催するなど、取り組みやすくなるよう学習環境の整備を行った。利用率は「すらら－英語」・「すらら－数学」ともに約 3%であった。 《課題・次年度へ向けて》 ・ 引き続き既存のリメディアル教育への「すらら－数学・英語」導入の可能性を調査・検討を行う。 ・ 次年度も学生に対し「すらら－数学・英語」の活用を推奨すると共に、実施方法・環境を見直し、利用率の向上を目指す。 【国家試験合格率アップへの対策】CP2〈3〉 《はり師・きゅう師》 ・ 新卒合格率 100%を目指す。 ・ 新カリキュラム移行後の国家試験に対応した受験対策を模索する。 ・ ロードマップの更新を行い、その年度における受験者全員の国家試験合格を目指す。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ 令和３年度新卒合格率は、はり師 100%（４名中４名合格）、きゅう師 100%（４名中４名合格）、令和 4 年度の合格率（はり師 73.3%（15 名中 11 名合格）、きゅう師 73.3%（15 名中 11 名合格）となった。 ・ 令和 4 年度の国家試験は、前年度に比べ東洋医学系の設問（東洋医学概論、経絡経穴学、東洋医学臨床論）のレベルが高くなっており、4 年生はこれらの復習が重要になると考えられた。 ・ 合格率100%を目指し、担当教員で学生の学力に合わせた個別フォローを行った。 ・ 令和4年度は、春休み期間中から前期にかけてGoogle Formsを利用した、解剖学、生理学など基礎系科目の4択問題作成し、演習を学生のPCやスマホで行えるよう環境整備した。しかし、実施率が極めて低く、高い学習効果を得るには至らなかった。 ・ Google Meetを使用した講義室と自宅を結ぶハイブリッドの直前対策講座は、実施可能であったが、学習効果についてはさらなる検討が必要であると感じられた。 《課題・次年度へ向けて》 ・ 新卒合格率100%を目指す。 ・ 東洋医学系科目の学習比重を増やす必要があり、それに沿ったロードマップの更新を行う。 ・ webを使用した国家試験対策の実施率向上の方策を模索する。 《社会福祉士》 ・ 学部で連携して可能な限り早期より模擬試験に取り組ませ、その結果を基に弱点を分析し、弱点を克服するための方策を練る。 ・ 新卒合格率の全国平均を常に上回ることを目指す。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ ロードマップを作成し、目標到達状況を把握しながら、試験対策を強化してきた。 ・ 時事福祉学履修生29名：社会福祉士受験予定者27名（臨床25名・スポ2名）と精神保健福祉士受験予定者5名（内1名は両資格受験）に対して、年間16回の模擬試験（内有料模擬試験3回）を実施した。卒業生からの合格体験談を聴く機会を設け動機づけを行った。学生の教員担当制により2週間に1回の個別指導を行った。また、教員による試験対策解説講義を5回実施した。さらに、DVDを活用した試験対策講座視聴を4回設定し実施した。新規取組としては、後期に卒業生でかつ中堅クラスで活躍して

いるスーパーソーシャルワーカーから資格取得の意義や重要性の講義を１回行い、資格取得後の将来像をイメージできるような機会とした。
・ 早い時期からの試験対策として、2年・3年生の自主勉強会では、国家試験ガイダンスを行い、主要科目の模擬問題と解説時間を設定し実施した（前期7回、後期7回）。自主勉強会での模擬問題は、実習指導科目の基礎知識試験問題に連動させた。
・ 夏季休業中や年末年始も演習室を開放し、学習環境を整えた。

《課題・次年度へ向けて》
・ 本年度同様にロードマップを作成し、これまで同様に時事福祉学において段階的な学習を進めていく。試験対策の動機づけを意識しながら、個別指導を充実していく。
・ 2年3年生の自主勉強会では、オリエンテーションにて国家試験の概要や早期に取り組むことの必要性を説明し、勉強方法の習得と継続的な学習の習慣化のための方策を検討していく。
・ 卒業生からの合格体験談を聞く機会を設け、試験対策のモチベーションを高めていく。

【学科教員の教育力アップの対策】CP1　CP2
1．授業の質を高める。
・ 大学で実施されている教員相互の授業参観の推進を行う。
・ 学生からの授業評価を受けて、教員が自らの授業の問題点を把握し、改善するための工夫について学科内で発表、検討を行う。
・ 学部FD（教育部門）との連携を図り、研修の成果を教育に反映させる。
２．適切な教育評価を実施するため、特にはり師・きゆう師の国家試験関連科目（専門分野）における定期試験問題を教員間で閲覧可能な体制を整える。
３．その他
・ 各年度に実施した内容の結果・成果について検討し、年次改善が可能な体制を作る。

《取り組み状況・実績・成果》
１．授業参観は昨年度と同様、実施した教員は3名と少なかった。学生からの授業評価の有効活用に関しては、学生アンケート結果において高評価を得た教員から、講義のポイントについて報告を行う予定である（年度末）。「学部FDとの連携を図る」について、今年度は3月に『教学マネジメント』について、九州国際大学の神力潔司事務局長を講師に迎え、講演およびグループワーク形式で実施した（学部戦略部門）。このFDにより大学教育・教員にとって現状と重要な課題を再確認、再検討することができた。
２．国家試験に関わる教科担当教員（専門分野）が定期試験問題等を閲覧できるシステムについて、今年度も昨年同様、コロナ対策および作業の簡素化を図るため，学内メールシステム内での保管を実施した。上記以外の「適切な教育評価の実施」では、例年通り、学科として統一した卒業論文および卒業論文発表会の評価シートの活用が促された。
３．今年度は「教育の質の転換につながる取り組み」に1名が採択された。

《課題・次年度へ向けて》
１．課題として、昨年同様に実施件数が少ない「相互授業参観」の積極的な参加を促す必要がある。 また開催される各種FD等への積極的参加も継続して促す必要がある。

【教育施設のレベルアップのための対策】
・ 導入したICT関連機器の積極的な使用を促す。
・ 学生からの教育施設についての要望を引き続き確認し、スポーツ関連設備のさらなる充実を図る。
・ 体育館、グラウンドなどのスポーツ関連施設・設備・備品について、安全性等を調査し、整備を検討する。なお、使用頻度が少ないものについては、教員へ使用を促す。
・ 資格試験対策（鍼灸・社福・教職・AT）の自習室確保の検討と、試験対策の関連書籍および資料の充実を図る。
・ 新型コロナ感染症の拡大に際し、対面授業や実習が従来通り行えていない状況を踏まえたうえで、使用頻度が低い機器・設備に関して、可能な限り教員へ使用を促す。

《取り組み状況・実績・成果》
・ 教職の模擬授業においてICTを活用した授業を実践するため電子教科書を活用した。ICT関連機器（電子黒板機能付きプロジェクター）を活用した双方向型の講義を行った。
・ 教育施設（グラウンド）の管理を継続して行った。
・ 元キャリア支援室の活用法について、学部戦略を中心に話し合いを行い、学生が自由に使用可能なオープンスペースとして活用することが決定し、その整備を行った。

	・ はり師きゅう師国家試験の受験に向けた関連書籍をB-418演習室に追加した。 ・ コロナの影響もあり、国家試験対策の自習室の使用状況を詳細に把握することができなかった。 ・ 体育館、グラウンドなどのスポーツ関連施設・設備・備品について、本年度の使用状況を確認した。講義、部活動、研究など、使用目的と使用頻度の調査を行い、使用状況を学科教員内で共有した。加えて、新たに購入した機器・備品を庶務課と協力し、把握した。 《課題・次年度へ向けて》 ・ 引き続き、導入したICT関連機器の積極的な使用を促す。 ・ 教育施設について、大学内の担当部署に提案を続け、関連設備の充実を継続する。 ・ 体育館、グラウンドなどのスポーツ関連施設・設備・備品について、必要な整備を行う。なお、使用頻度が少ないものについては、教員へ使用を促す。 ・ 資格試験対策（鍼灸・社福・教職・AT）の自習室の使用状況について、4年生を中心としたアンケート調査を実施したい。 ・ 新型コロナ感染症によって、使用頻度が低下した機器・設備について、使用頻度の情報を学科教員で共有し、使用を促す。 【就職率アップへの対策】DP ・ 現在キャリアサポートセンターが取り組む、Webを利用した求人検索やSNSを活用した就職相談を学生に積極的に告知していく。 ・ 学科会議ごとに、就職内定者の情報を集約し、キャリアサポートセンターと情報共有を行う。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ 本年度も教員採用試験の現役合格者が２名であった。就職内定率は 82.8%（3/24 現在）であった。 ・ キャリアサポートセンターの利用増加を目指した。キャリアサポートセンターの面談数（社会福祉学部：4月～1月）は、R3年度が99件、R4年度が101件と同程度であった。 ・ 昨年度から引き続き、新型コロナ感染症の影響により、Webを利用した遠隔面談会や、workCafé 延岡、小規模就職説明がキャリアサポートセンターを中心に行われた。 ・ キャリアサポートセンターから送られてくる就職情報についてガルーンを通じて学科内教員と共有を行った。 《課題・次年度へ向けて》 ・ Webを利用した求人検索やSNSを活用した就職相談を学生に積極的に告知し、キャリアサポートセンターの活用につなげる。 ・ キャリアサポートセンターと学科の間で情報共有を行い、学科教員からもキャリアサポートセンターの活用を学生に促してもらうよう働きかける。 【学生生活サポート対策】 ・ 悩み（授業、部活動など）のある学生が、より相談しやすい体制を構築する。 ・ 学科会議において学生の状況を共有する。 ・ 学生同士、横の繋がりのみならず、縦の繋がりを築ける行事を開催する。 ※既に実施している、茶話会、合同交流会、運動会、宿泊研修等に加えて新たな行事を検討する。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ チューターによる学生相談に加え、保険室内の学生相談室でのカウンセラーによる学生相談を受けられることを学生に周知した。 ・ 個人情報の管理に十分配慮しながら、学内のカウンセリングに関する状況をカウンセラーと関係教員とで共有し、学生指導に活かした。 ・ 月1回の学科会議において、学生に関する情報交換を行い、その内容を教員間で共有した。 ・ オフィスアワーを積極的に活用するように学生に促した。オフィスアワー以外でも、何かあればチューターもしくは自分の話しやすい教員に相談が可能であることを伝えた。 ・ 今年も引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響により、宿泊研修・学科交流会等のイベントが軒並み中止になったことで、新入生の交流の場をつくることが難しかった。 ・ 今年も引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響により、2～4年生においては交流会のイベントは行うことができなかった。 ・ 学科戦略会議にて、学生生活のサポートにより役立つ学科行事の時期・内容等について現状の評価および次年度についての検討を行った。 《課題・次年度へ向けて》

	・ 問題を抱えた学生を可能な限り早期に発見・対応するために、チューター・学科教員・カウンセラー・保護者・事務職員との連携を図ったサポート体制をさらに充実させる。 ・ 次年度は、新型コロナウイルス感染症対策の緩和に伴い、宿泊研修、学科交流会等のイベントの開催が可能となる見込みがあるため、学科行事を可能な範囲で充実させ、学生同士の交流となる場を増やす。 【退学者防止対策】 ・ チューター時間(1回/月)、ゼミ指導時間(1回/週)を通じ、学生の学業への取組姿勢、出席状況、その他の学生生活状況を把握し、学生の学習意欲、心身面の健康状況をチェックする。 ・ 学科行事やゼミ活動等を通じ、異学年の学生や卒業生と交流の場を企画し、各学生が卒業までの過程をイメージした上で、卒業に向けたモチベーションを高く持ち学生生活に臨めるように学習環境を整える。 ・ 退学の意向を示す学生に対しては、チューターが個別に抱え込まず、学科教員全体で当該学生の課題解決、退学防止に向けた対策を考え、実施する。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ チューター時間(1回/月)、ゼミ指導時間(1回/週)での個別面談によりチューター生の学生生活状況を把握し、学業や人間関係、その他における学生生活をサポートし、大学での生活課題の抱え込み、孤立等を予防し、学生の学習・生活環境を整えた。 ・ 感染症予防のため例年実施の新１年対象の宿泊研修、 1～4年対象の学科運動会は昨年度に続きやむなく中止した。 ・ 昨年度に続き実施した2年生時のGPAおよび2年次までの習得単位数の基準の設置が、１～2年次の卒業に向けた共通の短期目標となり、学習目標を見失い将来の進路に悩む学生を減少することができた。 ・ 退学や休学の意向を示す学生の悩みや意向を個別面談にてチューター、学科長が聴く場を設け対応すると共に、当該学生の現況を学科会議(1回/月)で情報共有し、学業や学生生活に課題を抱える学生を学科教員全体でフォローする体制を構築し、学科学生の退学防止に努めた。 ・ 4年生の卒論発表会を12月10日(土)に対面方式で実施した。3年生は原則、対面参加、1～2年生はオンライン参加とした。卒論発表会参加により同学科4年生の卒論発表内容を聴くことは、専門科目受講数が少ない1～2年生が卒業までの学習目標を抱くと共に、そのステップのイメージアップにつながり、学業に関する希望を見失う学生の予防、退学防止に向け有用な機会となった。 《課題・次年度へ向けて》 ・ チューター時間、ゼミ時間等を通じた教員による個別支援の場と共に、大学での学びを活かし参加可能なスポーツ・レクリエーション活動を、感染症予防対策が必要な場合はオンラインを通じた学年別の交流会等を企画し、学科行事等を通じ、学科生1～4年間の横・縦関係による支援力を育て、学科学生が大学生活と卒業後の将来に希望をもち学業生活に臨む場を構築し、退学者防止に努める。 ・ 2年時のGPAおよび2年次までの習得単位数に設けた基準の意義を1・2年生にわかりやすく説明し、これらの基準を1・２年生が卒業に向けた短期目標として捉え、将来に希望をもち学業に取り組む環境を整える。3・４年生については卒業、資格取得等の具体的な目標をもち主体的に学業に取組む姿勢を、専門ゼミチューターを中心に育み指導する。 【学生指導力の向上】 ・ チューター制度を活用し、学生の単位取得状況や生活状況を把握し、学生一人ひとりの状況に応じた適切な助言、指導を行う。また必要に応じて保護者や関係者へ連絡を行う。 ・ 学科教員全体で学生の情報を共有する。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ 毎月の学科会議で学生の状況について情報共有を行うとともに、早期に支援が必要な学生について学科教員全体で支援ができるよう努めている。加えて科目担当教員との情報交換を行い、学生の学習への取り組みや出欠状況についても把握に努め、学生支援に結びつける努力を行っている。 ・ 各チューターおよびゼミ担当教員は、出席状況や成績、単位の取得状況を常に把握し、問題の早期発見と解決へ努めている。問題傾向の見られる学生とは早期に面談を行うなど問題解決へ導く支援を行っている。また必要に応じて保護者との話し合いの場を設けるなど学生支援に努めている。 《課題・次年度に向けて》 ・ 欠席の増加や学業不振といった学生の変化を早期に把握し、各学生に応じた支援を行うことによって、留年者や退学者を出さないよう努める。 ・ 学科教員間での情報共有はもちろんのこと、学業不振のチューター学生については、学科教員以外の科目担当の教員からの情報も把握し、学生支援に結び付ける必要がある。

	・ チューター学生以外でも授業や学内イベント等で積極的に学生とコミュニケーションを図り、声掛けや会話を行う中で学生を知ることが学生支援のためには必要であると考える。 【社会人としてのマナー対策】 ・ 教員から積極的に学生への挨拶を行い、模範を示す。 ・ 全学科教員が学生生活の様々な場面において、社会人としての態度や発言などのマナーについて必要な指導を行う。 ・ 学科行事やイベントを通して適切な態度を身につけさせる。 ・ 学外活動を通して、社会人としてのマナーを自覚させる。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ 全学科教員は学生に対して講義だけでなく様々な場面において、社会人としてのマナーや社会性を身につけるための働きかけを行った。 ・ 各種学外実習では、知識だけでなく、社会人として必要な態度やマナーの必要性を自覚する機会となった。 《課題・次年度に向けて》 ・ 学科全教員が、社会人としてのマナーの規範となるよう取り組む。 ・ 実習や就職に向けて、社会で必要なマナーや社会人として必要な態度を身につけられるよう、教員は積極的に学生に関わり、マナー修得に働きかける。 ・ 学外実習を通して、社会人として必要な態度やマナーを身につける。 ・ 学外講師のマナー講座を受講することで、必要なマナーを身につける機会にする。
募集力	【学科入学定員確保のための対策】AP 〇戦略的な募集活動を行う。 ・ 高校生や在学生に進学に関する調査を行い、戦略的に広報活動を行う。 ・ 部活動単位での募集活動を行う。 ・ 女子学生の受験者数を増やす。 ・ 県別に高校の特徴を把握し、本学科への進学が見込めそうな高校に広報活動を重点的に行う。 〇学内の施設・設備の整備を実施する。 ・ スポーツ関連施設・設備を整備し、特色ある環境にすることで他大学との区別化を図る。 ・ グラウンドやウェイトトレーニング場を段階的かつ継続的に整備し、高校生に魅力ある環境を整える。 〇社会的ニーズに応じた教育力を上げる。 ・ はり師・きゅう師やアスレティックトレーナー、健康運動指導士、教員免許等資格等の資格取得率を上げるため、対策講座や実践的研修を実施する。 ・ 地域の要請に応じて、教員が運動指導に出向いたり、アスレティックトレーナーを目指している学生を派遣したりすることで、より活発な交流を図る。 〇広報活動 ・ SNS を活用し、学生目線で一般市民へ大学をアピールする。 ・ スポーツ関連の各種大会やイベントに教員やアスレティックトレーナーを目指している学生を派遣し、学科の PR を行う。 ・ 在学生が出身高校へ現況報告や実習挨拶を行う機会等を活用し、本学科の PR を行う。 ・ スポーツ関連の各種大会やイベントに教員が赴き、学科の PR を行う。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ 戦略的な募集活動については以下の通りである。 ①進路ガイダンス、出張講義、教育実習での巡回訪問の際に、大学進学に際して大学を選ぶ理由、ポイントについて聞き取りを行った。特にスポーツ系の大学に求める事柄について聞き取りを行った。 ②サッカー部、野球部、AT 部等のクラブ活動を中心とした学生募集が行えた。 ・ 学内の施設・設備の整備については以下の通りである。 ①2 号棟プレイルームに AT ルームの機能を持たせた。それによってオープンキャンパスや大学見学会等で施設を有効に活用できるようになった。特に高校生が施設見学をする際に鍼灸の施設と合わせて同時に見学できるようになった。 ②グラウンドの天然芝の管理ではサッカー部の学生を中心に水やり、肥料の散布、冬芝の種蒔きを計画的に行い、緑化に努めた。また、芝刈りに関しては学科の教員が行うことで、芝生の生育が促進された。 ・ 社会的ニーズに応じた教育力を上げるについては以下の通りである。 ①資格取得率向上のために、各資格の担当者が模擬試験や個別に学生対応などの対策講座を行った。教員採用試験では、現役合格 2 名に繋がった。 ②AT の学生や教員が積極的に地域や高校に出向き、トレーナーとしてのサポートや講習会を実施した。特に

	神田講師、佐々木講師はオリンピックや日本代表関連のトレーナーとして競技団体をサポートした。また、両教員が本学の選手のみならず、地域のクラブチームの選手のサポートを行った。 ③高大連携事業では、正野教授が高校水泳部への指導を継続的に行っている。 ④学科の多くの教員がスポーツ関連の外部団体の委員を行うことで先進的なスポーツの関連の情報を得るとともに小中高の競技団体の指導者と交流を行い、本学の広報を行った。 ・ 広報活動については、上述した通り、多角的な視点から本学の広報活動を行った。SNS の活用では AT 部サッカー部、陸上部が学生を中心に行った。また、大学 HP 内の学科ブログの更新回数については月に２回の更新を行い、学科の魅力発信に繋がった。 《課題・次年度へ向けて》 ・ 高校生への進学に関する調査を、学園広報を通じて実施をお願いしたい。特に、本学科に関するスポーツ系への進学において高校生が重要視する点に関する情報を収集、分析し、戦略的に活用したい。 ・ 女子の受験生を増やすために、女子生徒が魅力を感じる点について積極的に PR していく。また、女子教育に関する取り組みを増やしていく（学部・学科単位のみでは難しいので、大学全体として取り組めるよう学内へも働きかける）。 ・ 施設の整備では継続的にグラウンドの整備に努める。トレーニングルームの器具を段階的に入れ替えていくよう学生課と協力して行う。他大学との競争においてスポーツ施設の充実を行わなければ、他のスポーツ系大学との競争は困難となる。 ・ SNS を活用した広報活動では学科ブログや学生生活のインスタグラムを充実させ、本学科の魅力や取組みを発信する。 ・ 学部改組により１学部１学科４コース制となるため、各コースでの募集活動を充実させるとともに学科全体が足並みを揃え、定員の確保に繋げる。特に各コースが受け身の募集だけでなく、積極的な募集を行う必要性がある。 【学科の魅力発信】AP ・ 近隣高校を中心に、出張授業の回数を増やし、学科の魅力を発信していく。 ・ 在学生・卒業生が近隣高校へ赴き、学科の魅力を発信する機会を検討する。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ 新型コロナウイルス感染症対策の緩和により、昨年度に比べ、高校へのガイダンスや出張授業の実施回数を増やすことができた。 ・ 新型コロナウイルス感染症対策の緩和となったが、未だ影響があり、在学生や卒業生が学科の魅力発信を目的に近隣高校へ行くような企画を積極的に立てることはできなかった。 ・ 教育実習やアスレティックトレーナー実習は、副次的効果として学科の魅力発信に繋がっているが、新型コロナウイルス感染症対策の緩和により、昨年度に比べ、特にアスレティックトレーナー実習においての近隣高校への時間数が大幅に増えた。 《課題・次年度へ向けて》 ・ 教員、在学生が高校へ赴く回数増えたものの、学科の魅力発信のためにさらに増やしていく必要がある。 ・ 在学生が学科に魅力を感じ、母校や地元で本学の魅力について発信してもらえるよう、在学生への教育を充実させる必要がある。
研究力	【学科教員の研究力アップのための対策】（DP〈4〉CP1〈5〉） ・ 学科長が学科教員に対して、年間１本以上の論文作成を促す。 ・ 学科長が学位（博士号）未取得者に対して学位取得を促す。 ・ 最新知識および技術を習得するため、関連学会、各種セミナーへの参加を促し、その内容を教育などにフィードバックする。 ・ 各年度に実施した内容の結果・成果について検討し、年次改善が可能な体制を作る。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ 学科会議あるいは学部会議において学科長が教員および学位未収得者に対し、論文作成の意義と学位取得の重要性を示した。また大学研究部門FDと共同で、「研究経費助成」及び「地域創生事業経費助成」の研究・事業内容について、学内および市内のパブリックスペースにおいてポスター発表会を年度末に開催し、質疑応答を行った。さらに今年度の論文等執筆等の研究成果について学科内調査を実施した。その結果、著作数（9）、科研費採択数（２：継続含む）、学内助成応募数（２）は増加した。一方、論文数（１）、学会発表（5）、学会参加（11）は減少した。また、1名が学位（博士号）取得に向けた研究を開始した。

	《課題・次年度へ向けて》 ・ コロナウイルスの影響が継続しているなか、著作数は増加したものの、論文数、学会発表、学会参加は減少し、量的な研究活動は昨年度より低下した。しかし、学会発表において「優秀演題の授与」など、質の高い研究を実施した教員もいた。また学内研究資金獲得では、2名が助成を受け研究を実施した。さらに学位取得の面では、新たに1名の学位（博士号）取得予定者が出た。現在、コロナによる社会的規制が緩和されつつあることから、研究の質を高め、研究活動量あるいは学位取得者を増やす努力が必要である。 【研究施設のレベルアップのための対策】 ・ 既存施設（機器備品を含む）の最大限の活性化および有効活用・共用化促進のために、「研究機器備品一覧」を作成した。 ・ 各年度に実施した内容の結果・成果について検討し、年次改善が可能な体制を作る。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ 本年度、学科教員が使用した機器について記載を求めた。その結果，学科備品（研究機器）および個人研究費による研究機器の合計使用数は14品目となった。そのうち5品目が学科研究機器であった。量的な研究活動が若干低下したことも昨年度より使用機器数減少した要因の一つと考えられた。 《課題・次年度へ向けて》 ・ 研究には質が求められるため、研究機器の使用頻度が直接研究成果とパラレルであるとは限らない。しかし研究機材を有効に活用することも求められるため、研究機器等ハード面の適切な管理とより使いやすい環境に整備する必要がある。 【外部研究資金獲得のための対策】 ・ 学部研究部門と連携し、外部資金獲得関連FDへ積極的な参加を促す。 ・ 大学より各教員に配信される外部研究資金研究案内について、学科会議においても周知し、応募を促す。 ・ 各年度に実施した内容の結果・成果について検討し、年次改善が可能な体制を作る。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ 今年度も大学より配信された外部資金が獲得可能な研究助成について学科会議で周知し、応募を促した。しかし今年度、新たに科研費を中心とした外部研究資金獲得申請が1名、昨年度からの継続が1名であった。 《課題・次年度へ向けて》 ・ 学内における研究資金獲得者は2名であったが、外部資金獲得者が1名（継続1名）となった。今後も外部研究資金獲得への積極的な応募を促す更なる取り組みを継続していく。
地域 連携力	【学科教員の地域連携力アップのための対策】（DP、CP） ・ 地域の依頼に応じたスポーツや健康に関する講演または講習会等を実施する。 ・ 地域との協力により、スポーツイベントを実施する。 ・ 地域の依頼に応じて、スポーツイベント等に学科教員を派遣する。 ・ 地域課題の解決を目的とし、地域の依頼に応じて、教員・学生による地域のスポーツや健康に関する調査研究を実施し、報告する。 ・ 地域の依頼に応じて、教員・学生を地域のイベントにボランティアとして派遣する。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ のべおか子どもセンターの依頼により、本学科教員が１回の講話をリモートで担当した。 ・ のべおか子どもセンターのイベントにおいて、本学体育館を使用、またボランティアとして学生を派遣し、子供向けの運動教室を実施した。 ・ 延岡市の駅伝大会に学生をトレーナーとして派遣し、中高校生にテーピングやストレッチ、補強運動の指導を行った。 ・ 木城町連携プログラムの一環で、教員を派遣し、地元幼児に運動指導を実施した。 ・ 延岡市内の小学校から依頼を受け、小学校教員に水泳授業の指導法を教授した。また、水泳授業の補助に学生をボランティアとして派遣した。 ・ 大学の地域創生事業経費助成を受け、３回の女性向けの運動教室を実施した。 ・ 宮崎県スポーツ習慣化推進事業「誰もが楽しめるスポーツイベント」4 回に本学科教員、学生が測定ブースの担当をした。 ・ 宮崎県地域部活動移行のコーディネーターとして県内の事業への取り組みを担当している。

	・ スポーツ指導センターの講習会の講師として講演を行った。 《課題・次年度へ向けて》 ・ 大学の施設や人材等を活用し、地域と協力したスポーツイベントを企画、実施する。 ・ イベント情報を教員が把握し、より多くの学生にイベント参加を促す。 ・ 地域における健康やスポーツに関する課題の解決を目的とした調査研究を実施する。
総合力	公私協力方式で設置された本大学の使命のひとつは、地域へ学生を呼び込み（定員充足率）、建学の理念に基づいて教育し、社会に有為な人材として輩出することで地域社会の発展に寄与することである（各種試験合格率、就職率）。スポーツ健康福祉学科の「教育力」、「募集力」、「研究力」、「地域連携力」を本中期目標・中期計画により向上させ、それらを戦略的・有機的に統合することで、学科の総合力を高め、学生および地域にとって有益な価値を創造し、提供することを目指す（公表論文数、講習会等講師派遣数、地域連携事業数など）。 《取り組み状況・実績・成果》 ・ 学科の「教育力」、「募集力」、「研究力」、「地域連携力」を向上させるために、本中期目標・中期計画に基づき様々な取り組みを実施した。 ・ 本年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響により教育活動が制限されたが、対応にも慣れ、ほとんどの授業が対面にて実施できた。 ・「教育力」の向上を目指した取り組みのひとつである卒業研究発表会を開催し、4～2年生は対面で参加、１年生のみハイブリッドによる参加とした。 ・「募集力」の向上を目指した取り組みにおいては、まだ学外での募集活動は制限されることもあったが、徐々にコロナ禍前の状態に戻りつつある。オープンキャンパスではGoogle meetを活用したOB・OGとの対談等を実施し、SNSを活用して部活動や学生生活を通した本学科の魅力や取り組みを発信できた。 ・「地域連携力」の向上を目指した取り組みにおいては、感染予防策を徹底しながら可能な限り対面での活動を実施した。のべおか子どもセンターの活動では、対面での活動が徐々にできるようになり、遠隔での講話も継続して実施した。延岡市内の小学校からの依頼による水泳授業の補助に学生ボランティア派遣も継続し、また、本学教員が小学校教員に水泳授業の指導法を教授した。 《課題・次年度へ向けて》 ・「研究力」についての改善が必要である。 ・「教育力」、「研究力」、「地域連携力」の戦略的・有機的な統合により、「募集力」を高める。 ・ 遠隔授業の経験によって得られた知見を活用し、さらに総合力を高める。
3つのポリシーからの総評	ディプロマ・ポリシー（DP）に掲げた目標達成のために、本中期目標・中期計画にて策定した「教育力」、「募集力」、「研究力」、「地域連携力」および「総合力」を高める取り組みを行った。 「教育力」 ・ 学生自ら考える力のアップへの対策（DP4）では、卒業研究発表会を 4～2 年生は対面、1 年生はハイブリッドでの参加で実施した。次年度より、3 年生中心の学生主体の計画・運営を再開させたい（CP1〈5〉）。学習成果の可視化では、各ゼミでの評価について意見聴取し、回答のあった全教員が成績評価を事前に学生へ明示可能であるとした。アンケート結果を学科教員全体で共有した（CP3〈2〉）。 ・ 基礎国語力増進を図るために e-learning を活用したリメディアル教育を実施したが、前期の国語統一テストの成績下位層は後期のテストでは維持ないしは上昇傾向、成績中位・上位層は維持ないしは低下が多い結果となった。自主学習を継続的に取り組んだ学生は成績が伸びている傾向にあったことから、計画的な学習や取り組み姿勢についての指導方法を再度見直す必要があると考えられる（CP1〈1〉）。 ・ 専門的知識・技能の活用力向上（DP3）を目指し、はり師・きゅう師国家試験対策では、担当教員で学生の学力に合わせた個別フォローを行った。また、国試対策を学生の PC やスマホで行えるよう環境整備したが、実施率が極めて低く、高い学習効果を得るには至らなかったため、web を使用した国家試験対策の実施率向上の方策を検討する必要がある（CP2〈3〉）。 社会福祉士国家試験対策では、模擬試験、卒業生の合格体験談による動機づけ、教員担当制による個別指導、教員による試験対策解説講義、DVD を活用した試験対策講座視聴等を実施した。新規取組として、卒業生かつ中堅クラスで活躍中のスーパーソーシャルワーカーから資格取得の意義や重要性の講義を行い、資格取得後の将来像をイメージできるような機会とした。国家試験の概要や早期に取り組むことの必要性を説明し、勉強方法の習得と継続的な学習の習慣化のための方策を検討していく（CP2〈3〉）。 ・ 学科教員の教育力アップの対策（CP1、CP2）については、学部 FD を実施し、教学マネジメントについての講演およびグループワークを行い、大学教育・教員にとって現状と重要な課題を再確認、再検討することができた。 ・ 就職率アップへの対策（DP）については、キャリアサポートセンターの利用増加を目指した。引き続き、新型コロナ感染症の影響により、大規模な就職説明会の開催は見送られたものの、web を利用した遠隔面談

	会等の新たな試みが行われた。4 年連続して教員採用試験で現役合格し、教職担当教員の対策講座の成果が出ている。 「募集力」 ・ 学科入学定員確保および学科の魅力発信のための対策（AP）では、教育実習や部活動を活用した取り組み、入試広報課と連携した取り組みを可能な限り実施した。オープンキャンパスではオンラインによる OB・OG との対談等を実施し、SNS を活用して部活動や学生生活を通した本学科の魅力や取り組みを発信した。一時 7 割近くまで落ちた定員充足率を、この 2 年間で 9 割前後まで戻してきた。 「研究力」 ・ 学科教員の研究力アップのための対策（DP〈4〉CP1〈5〉）は、カリキュラム・ポリシーを実践するための基礎となるものである。著作数、科研費採択数、学内助成応募数は増加したが、論文数、学会発表、学会参加は減少した。現在、教員 2 名が大学院博士後期課程に在籍し、学位取得を目指している。一方で、ここ数年業績のみられない教員がおり、研究活動の促進が依然として課題である。 「地域連携力」 ・ 学科の地域連携力アップのための対策（DP）は、地域社会に貢献するとともに、カリキュラム・ポリシーを実践する貴重な場でもある。コロナ禍の影響により、イベントの制限はあったが、徐々に感染予防策を徹底して実施できる活動が増えてきた。水泳授業のボランティアとして学生派遣が継続できたことは、学生の活動が信頼を得て、貢献できていることの証左であろう。 「総合力」 ・ 学科の「教育力」、「募集力」、「研究力」、「地域連携力」を向上させるために、様々な取り組みを実施したが、「総合力」を高めるためにはまだ不十分である。第 2 期中期目標・中期計画の実施・評価結果をもとに、次期中期目標・中期計画を策定し、さらなる改善を図っていく。
次年度への展望（まとめ）	第 2 期中期目標・中期計画の最終年も、引き続き新型コロナ感染症の影響から、取り組みに制約がかかった。そのような中でも遠隔授業等の経験から、授業や業務が改善され、新たな試みを実施することができた。 本学科の現状は、競合学部・学科新設による影響を受け、6 年続けて定員を確保できていない。さまざまな対策を講じ、9 割前後まで戻してきた。今後さらに創意工夫し、本学科へ進学したいという高校生に対する魅力づくりと、それらを広報する策について検討を重ね、可能なものから実施していく。 取り組みの改善によって成果が出始めたものと、まだ目に見える成果としてあらわれていないものがある。第 2 期目の実施・評価結果を次期中期目標・中期計画に活かし、さらなる学生生活の充実を図り、学生の満足度を高めることを目指し、課題として挙げられたところは改善策を講じながら計画を策定し、遂行していく。

九州保健福祉大学　社会福祉学部　臨床福祉学科
2022 年度　第 2 期　中期目標・中期計画　〈3 つのポリシーを踏まえて〉

ビジョン (教育目標)	九保大だから学べる 「人の生き方を支える幸せ」をプロデュースできる能力を身につけた人材を輩出する。
学科からのメッセージ	臨床福祉学科の教育には、誰もが自分らしさを発揮し安心して暮らせる社会の実現を目指して、社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士を育成する「臨床福祉」と、カウンセリングの専門性を有する心理・福祉の専門職を育成する「臨床心理」の 2 つの専攻がある。現在社会では、悩みや問題を抱える方の生活を支える福祉学と心を支える心理学の専門的な知識と技術を備えた人材がますます必要となっている。本学では、入学後の基礎科目から 4 年次の卒業研究までを通して自ら考える力を高め、専門知識に加えて人々の幸せをプロデュースできる能力（知識・技能・思考力・態度）を涵養する。
教育力 (ブランド力) 「学修成果の可視化」の観点を含む	【学生自ら考える力のアップへの対策】DP(6) (7), CP（1-7）（2-1）（3-3） ■卒業研究評価用ルーブリックの導入の検討を進め、学科共通および専攻ごとの試案を作成し、試案に基づいた卒業研究指導のあり方を学科で共有したうえで指導を実践し、学生が自ら学ぶ力を十分に引き出すことのできる卒業研究発表会の実現を目指す。 ■全ての講義において学科教育力を向上させるアクティブラーニングの導入を目指す。 ・ 卒業研究評価用のルーブリックの導入を検討する。アクティブラーニング実施科目における現状と課題の分析を行う。 その結果をもとに、導入可能なルーブリックの試案を作成し、卒業研究指導のあり方について学科で共通理解を行い実践し、最終的にはルーブリックに基づいた卒業研究発表会を開催する。 また、アクティブラーニング実施科目について拡大するとともに根幹をなすスモールグループディスカッションの効果的な実施方法について検討・評価・改善を並行して行う。 【2022 年度の取り組み状況】 ・ 学生の特性に差があるため、絶対評価となる卒業研究評価用ルーブリックの作成には至らなかった。 ・ 対面による卒業研究発表会を開催することができた。3 年生も聴講させ、質疑応答の時間を設けたことで複数の学年が相互に考える機会を与えることができた。 ・ いつでもどこでも学習に臨めるよう、学生が自由に使える演習室に PC および印刷環境を整備した。 ・ 卒業研究発表は、対面発表と遠隔発表どちらでも対応できるよう指導を行った。 【次年度の課題】 ・ 学生個々に入学時および学年進行にともなう学力差があるため、それぞれの到達レベルに応じた評価ができるような卒業研究評価を検討する。 ・ 研究活動も含めて、低学年から専門的学問に興味を持ってもらうよう、卒業研究発表会を全学年が聴講できる方法を検討する。 ・ 卒業研究の中間発表会の開催を検討する。 ・ 学生相互に学びあえるよう、異なる研究室メンバー同士の共同研究や勉強会などの企画を検討する。 【基礎国語力増進への対策】DP(3) (4) (5) (6), CP(3) (8) ■基礎演習および e-learning を活用した国語力増進プログラムを構築し、文章力・読解力の基礎を身につけ、専門書の内容理解やレポート報告書の作成、卒業論文の執筆ができるようにする。同時に論理的思考を身につける。 ・ 中期計画第 1 期では学生自身が積極的に e-learning による学習を進めることができなかった。初年度は学生が自発的に取り組む学習プログラムを再検討し試行し、計画的に検証し改善を行い、学習プログラムならびに学習効果の測定方法を構築する。 【2022 年度の取り組み状況】 ・ 前年度の取り組みの継続として 4-9 月期、10-1 月期に分けて課題を設定し、実施した。 ・ e-learning での学びを実践に活かすため、基礎演習Ⅰ・Ⅱの科目において文章の読解や要約、テーマに基づいた小論文の作成とプレゼンテーションソフトも用いた発表をおこなった。

	・ e-learning の学習課題と基礎演習の学習単元のつながりがわかるような課題設定をおこない、実践に活かせる工夫を試みた。 ・ 学習内容が基礎演習の評価向上に寄与していると思われる学生が一部存在したが、評価検証までには至っていない。 【次年度の課題】 ・ e-learning の学習状況が基礎演習等、大学での学習にどのように効果を上げているかの評価検証が必要であり、その手法について検討したい。 【国語以外のリメディアル教育への対策】DP (6), CP(3) (8) ■統計や社会調査等のデータの取り扱いに際し必要となる数学的知識や操作スキルの習得プログラムの作成と導入方法の検討ならびに実施（福祉専攻） ・ 中高までに学んだ人文科学・社会科学分野の知識の補修を基礎科目等において柔軟かつ適切に実施し、高大の学びの接続を意識させる。 ・ 統計や社会調査等のデータの取り扱いに際し必要となる数学的知識や操作スキルの習得プログラムを作成し導入方法を検討する。 ・ 大学院進学希望者への受験対策として高校英語の再学習の機会を設け、語学力の増進を図る。 ・ 公務員就職希望者への受験対策として高校履修内容の再学習の機会を設け、語学力及び一般教養分野の向上を図る。 【2022 年度の取り組み状況】 ・ 基礎演習の時間を活用して「資料の収集方法」や、「プレゼンテーション」を意識した演習時間を設けた。 ・ 社会調査法の講義時間を利用して、分析手法に関わる基本的な統計学の数的処理を演習形式で学ばせた。 ・ 一部ゼミにおいて英語文献を使用する等、リメディアルを兼ねた取り組みを行った。同時に、カリキュラムとは別に高校英語の再学習の機会を設けて指導を行なった。 ・ 公務員を目指す学生に対して、中学～高校の履修内容の再学習の機会を設けて指導を行った。（SPI・数的処理・文章理解・社会科学分野） 【次年度の課題】 ・ e-learning や基礎科目・基礎演習及び情報関連科目を利用した人文・社会分野の補修及び統計・社会調査に関する学習を継続する。 ・ 大学院や公務員を目指す学生に対して、英語の基礎や数的処理、社会科学の基礎など、個別の学習指導おこなう 【国家試験合格率アップへの対策】DP(3), CP(5)（6）(7) ■臨床福祉学科において社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の国家資格に関する知識、技術、価値を修得し、資格取得を目指すすべての学生が確実に国家試験に合格する。 ・ 学部共通科目である時事福祉学への受講を促す。 ・ 2 年次から国家試験対策学習支援を実施する。 ・ 社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の国家試験合格率アップのためのロードマップを作成する。 ・ 1 年次から資格関連科目授業において、資格取得の意義・意識づけを行う。 ・ 計画的に国家試験結果を振り返り、時事福祉学での国家試験対策の検討・評価・改善を行う。また、年度初めに模擬試験を実施し、2 年次からの国家試験対策学習支援の成果を評価し、学習支援の方法を検討する。 【2022 年度の取り組み状況】 ＜社会福祉士国家試験対策＞ ・ ロードマップを作成し、目標到達状況を把握しながら、試験対策を強化してきた。 ・ 時事福祉学履修生 29 名：社会福祉士受験予定者 27 名（臨床 25 名・スポ 2 名）と精神保健福祉士受験予定者 5 名（内 1 名は両資格受験）に対して、年間 16 回の模擬試験（内有料

	模擬試験 3 回）を実施した。卒業生からの合格体験談を聴く機会を設け動機づけを行った。学生の教員担当制により 2 週間に 1 回の個別指導を行った。また、教員による試験対策解説講義を 5 回実施した。さらに、DVD を活用した試験対策講座視聴を 4 回設定し実施した。新規取組としては、後期に卒業生でかつ中堅クラスで活躍しているスーパーソーシャルワーカーから資格取得の意義や重要性の講義を 1 回行い、資格取得後の将来像をイメージできるような機会とした。 ・ 早い時期からの試験対策として、2 年・3 年生の自主勉強会では、国家試験ガイダンスを行い、主要科目の模擬問題と解説時間を設定し実施した（前期 7 回、後期 7 回）。自主勉強会での模擬問題は、実習指導科目の基礎知識試験問題に連動させた。 ・ 夏季休業中や年末年始も演習室を開放し、学習環境を整えた。 ・ 令和 4 年度国家試験合格者 3 名／5 名中、60%（保健福祉系大学合格率 78.8%）であった。 ＜精神保健福祉士国家試験対策＞ ・ 社会福祉士同様、時事福祉学で 16 回の模擬試験（内有料模擬試験 3 回）を実施し、その結果を踏まえ指導を行った。 ・ 精神保健福祉士のみ受験の学生にも社会福祉士専門科目の模擬問題も実施し、基礎力の強化を図る予定であったが、体調不良等により受験できない学生もいた。 ・ 試験対策は、学生の意見を尊重し全体ではなく各自で試験勉強を行う方法とした。 ・ 精神面や身体面の調子を崩す学生に対して、病院受診援助や体調の確認を行った。 ・ 社会福祉士同様、年末年始も演習室を開放し、学習環境を整えた。 ・ 令和 4 年度国家試験合格者 15 名／24 名中、62.5%（福祉系大学合格率 65.0%）であった。W 合格者は 1 名／3 名であった。 ＜介護福祉士国家試験対策＞ ・ 年度初めにロードマップを作成し、計画的段階的に取り組んだ。 ・ 4 年生は模擬試験を 7 回と科目ごとの試験対策を通年実施した。また、早い時期からの対策として 1～3 年生は、終了した科目ごとに、また、夏季・冬季・春季の休業時期にも課題を実施した。 ・ 模試実施後の指導は、最初から正誤は教えず、一から自分で調べ問題用紙に解答解説を記載するようにした。教員が記載内容を確認し、調べ方ができていない・内容が十分でない学生に対しては、調べ方や勉強の方法などを指導した。 ・ 令和 4 年度学力評価試験（日本介護福祉士養成校主催）にて、個人で 1 位／4765 名中、学校別で 1 位／230 校であった。 ・ 令和 4 年度国家試験合格者 5 名／5 名中、100%であった。 【次年度の課題】 ＜社会福祉士国家試験対策＞ ・ 本年度同様にロードマップを作成し、これまで同様に時事福祉学において段階的な学習を進めていく。試験対策の動機づけを意識しながら、個別指導を充実していく。 ・ 2 年 3 年生の自主勉強会では、オリエンテーションにて国家試験の概要や早期に取り組むことの必要性を説明し、勉強方法の習得と継続的な学習の習慣化のための方策を検討し　ていく。 卒業生からの合格体験談を聞く機会を設け、試験対策のモチベーションを高めていく。 ＜精神保健福祉士国家試験対策＞ ・ ロードマップを作成し、前期、後期前半、後半で到達目標の明確化を図る。また、各段階の到達目標達成のために学生がやるべきことを具体的に伝えるとともに、目標達成状況について評価する。 ・ 4 年次夏季に実施される精神科病院実習での学びを国家試験勉強につなげるために、専門科目に関する国家試験の出題傾向とその内容を前期に掴むための指導をする。 ・ 4 年次は、精神科病院実習、卒業論文作成、就職活動などストレスの多い時間となる。前向きに課題に取り組めるように、常日頃から精神的・心理的側面、日常生活に対する支援を行う。 ・ 合格率を 100%とする。 ＜介護福祉士国家試験対策＞ ・ 本年度同様にロードマップを作成し、1 年生から計画的段階的に取り組んでいく。 ・ 来年度 4 年生は、中国人留学生がいるので、進捗状況を見ながら丁寧に時間をかけ指導していく。 ・ ダブルライセンス取得に向け、学習面だけでなく精神面にも働きかけ、モチベーションが保てるよう指導や励ましを行う。 ・ 調べ学習の継続を実施する。

	【学科教員の教育力アップの対策】CP ■「学習成果の可視化」に向けた授業改善の仕組みの導入 ・ 学部FDの積極的参加を促す。 ・「学修成果の可視化」に向けた教員相互による授業改善の仕組みの検討・評価・改善を行う。 【2022 年度の取り組み状況】 ・ 教員に対して学部 FD への参加を促した。 ・「学修成果の可視化」については、コロナもある程度落ち着き、授業形態や期末の成評価も正常化しつつあるものの、具体的な取り組みを十分に進めることまでは至らなかった。 【次年度の課題】 ・ コロナ禍から通常の授業が行われるようになる中で、教育内容変更した部分の影響を通常授業への変更を精査するともに、学科教員間で連携し、教員相互による授業参観改善の仕組みの具体化に向けて、検討・評価・改善を試みるように努める。 【教育施設のレベルアップのための対策】DP（3）（6）（7）、CP（6）（8） ■学生の学習場所を整備する。具体的には、4 年間で学生が利用しやすい環境を作るため、学習資料や PC 等の学習ツールを順次、設置する。 ・ 学生の学習場所として 4・5 階の演習室を開放し、国家試験対策や単位認定試験対策等の学習の利用を促し、利用状況を確認する。 ・ 演習室について修繕する物品（いす・机等）があれば、各演習室に関する窓口を設け、対応する。 ・ 学生の学習場所（4・5 階演習室）の利用状況を把握し、必要な設備を調査する。 ・ 学生の学習場所（4・5 階演習室）で学生が使用できる学習資料や学習ツール（インターネットが使える PC 等）を充実させる。 【2022 年度の取り組み状況】 ・ ４階キャリア支援室の利用について、ゼミ活動や個別学習等の使用ルールを定め、学生に開放した。 ・ 演習室の利用状況を把握し、パソコンなどの定期点検やパソコン周辺機器の整備（プリンター等の入れ替え）を行った。 ・ 演習室の利用については、夏期休暇や冬期休暇、21 時以降の使用については、学生に利用申請書を提出させ、教員が把握したうえで、使用を許可した。国家試験対策などで学生は利用している。 ・ 介護実習室の介護用品の充実として、車いす 2 台を購入した。 ・ 家政実習室のガスコンロの入れ替えを行った。 【次年度への課題】 ・ 演習室の利用状況を把握し、必要な設備については、今後も充実させる。 ・ 引き続き、学生の学習場所として 4・5 階の演習室を開放し、国家試験対策や単位認定試験対策・ゼミ活動等の学習の利用を促し、利用状況を確認する。 ・ 演習室の利用についての注意書きを掲示し、開放時間や感染予防対策の徹底、使用ルールなどを理解してもらう。 ・ 時代に即した教材などの導入を検討する。 【就職率アップへの対策】DP, CP(11) ■就職率100%を達成するため、教員間の連携の下、学生の個性や多様性を尊重したニーズに添った就職支援を推進する。また、推進にあたっては、地域社会や福祉現場、保護者、関係機関・団体等との連携を強化し、人材ニーズ把握に努めるとともに、キャリア教育、就職支援体制の充実強化に努める。 ・ キャリアサポートセンターとの連携による支援体制の強化に向けた取組を行う。 ・ 学生に対し、キャリアサポートセンターの積極的な活用を促すとともに、就職先情報を共有し個別指導に活かす。 ・ インターンシップへの積極的な参加を促す。

	・ 就職面談会(本学、他機関実施)の情報把握と学生への参加を促す。 【2022 年度の取り組み状況】 ・ キャリアサポートセンターから、適宜、学科在籍学生の就活状況について情報取得を行った。 ・ 2022 年度はコロナ禍の影響に伴う、キャリアサポートセンターが実施した、WEB 面接対策講座や WEB 就職面談会等の案内と出席を促した。 ・ 臨床福祉学科の 2 月初旬（2023 年 3 月 1 日現在）の就活状況は下記のとおりであるが、未定者の就職については、キャリアサポートセンターと連携して支援していく。なお、学科の就職率は国家試験終了以降の年度末にかけて上がるので、昨年度同様の数値は期待できる。また、キャリアサポートセンターへ進路確定の状況報告を行うよう指導している。 （2023 年 3 月 31 日現在就活状況） 在籍者名の内、就職率 84.8%、進学（大学院）3 名、専門学校 1 名、未定者 5 名 ・ 4 年生の情報交換会は行えなかった。 【次年度の課題】 ・ キャリアサポートセンターと教員間の就職情報や就活状況について、さらに密な情報共有化について強化する。 ・ 3 年生への就活への心構えや取組方法について、キャリアサポートセンターと連携して、ゼミの時間等を活用した説明会を行うなど、早期に対応する必要がある。とりわけ、公務員試験対策等、計画的な取組を支援する。 ・ 4 年生においては、ゼミ担当教員と連携し、前期の早い段階において、自身の勉強の進捗、実習、国家試験の準備等を踏まえた、年間スケジュールを立て、早めの就職活動を始めるよう促す。 ・ 就活情報の取得について、キャリアサポートセンターの活用を促すとともに、施設実習やインターンシップ等の機会の活用、卒業生からの情報収集、家族や知人の情報等、主体的な情報取得に努めるよう促す。 【学生生活サポート対策】 ■学生の悩みを早期発見できる支援体制の構築。 ・ オフィスアワーだけではなく、相談やコミュニケーションがとりやすい環境を作る。 ・ チューターも含めた複数の教員で学生に寄り添い、不安や困りごとに対応する。 ・ 学生の相談内容について、場合によっては学生課や学科で情報を共有し、安心・安全な生活を支援する体制を構築する。 ・ 個々の取り組みについて検証するため、学科会において個々の教員がどのような工夫や支援を行ったか、また、学生がどのような生活課題を抱えているのかを共有し振り返りを行い、内容によっては教員だけではなく、専門職（カウンセリング・学生課等）と連携を図るシステムを構築する。 【2022 年度の取り組み状況】 ・ 学科会議で気になる学生について報告し、情報の共有を図った。また講義中の学生の心身状況や出席状況についても科目担当教員が学科会で報告したり、その都度、チューターに報告した。 ・ 入学者に対してコロナ対策を実施しながら大学生活に 1 日でも早く適応できるよう学科教員が積極的に声をかけた。 また月 1 回のチューターデイでは学習状況や生活面ついて、ゆっくり学生と話す機会を設けた。 【次年度の課題】 ・ 長期に渡るコロナ禍のため、経済的・心理的な問題を抱えた学生に対し早期に対応できるよう今後も教員間での情報を共有し連携を図る。 ・ 入学者に対して大学生活に 1 日でも早く適応できるようチューターや在学生と交流を深められるような機会を学内で計画する。 ・ 1 人暮らしを始めた新入生に対して、在学生からのアドバイスを得られるような場の設定を検討する。 【中途退学者防止対策】CP(1) (5) (6) ■中途退学者ゼロに向けた支援体制の構築。 ・ 連続欠席者に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行う。 ・ 連続欠席者について、教員間で情報を共有し、早期対応を行う体制を構築する。 ・ 転学科してきた学生に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行う。

	・ 転学科してきた学生について、教員間で情報を共有し、早期対応を行う体制を構築する。 ・ 中途退学の学生の原因を分析し、対応策を検討する。 ・ 中途退学防止に有効であったと考えられる支援を教員間で共有する。 【2022 年度の取り組み状況】 ・ チューター時間(1 回/月)、ゼミ指導時間(1 回/週)の個別面談によりチューター生の学生生活状況を把握し、学業や人間関係、その他における学生生活をサポートし、大学での生活課題の抱え込み、孤立等を予防し、学生の学習・生活環境を整えた。 ・ 退学や休学の意向を示す学生の悩みや意向を個別面談にてチューターが聴く場を設け対応すると共に、当該学生の現況を学科会議(1 回/月)で情報共有し、学業や学生生活に課題を抱える学生を学科教員全体でフォローする体制を構築し、学科学生の退学防止に努めた。 【次年度の課題】 ・ チューター時間、ゼミ時間等を通じた教員による個別支援の場を設け、学科学生が大学生活と卒業後の将来に希望をもち学業生活に臨む場を構築し、退学者防止に努める。 ・ 学科学生が卒業、資格取得等の具体的な目標をもち主体的に学業に取組む姿勢を、専門ゼミチューターを中心に育み指導する。 【社会人としてのマナー対策】ＤＰ ■学科教員から学生に積極的な挨拶をする運動を推進する。 ■各チューターやゼミ担当教員が、マナーについて学生の心構えについて確認し、大学生の生活の様々な場面で、社会が求めるマナーが身につくように必要な指導を実施する。 ・ 教員から学生へ積極的なあいさつ運動を実施し、チューター・ゼミ担当教員が普段から細やかな指導を行い、学生にどの程度のマナーが身についているかを教員間で確認する。初年度の施行の結果を基に、取り組みを検証したうえで、指導計画に修正を加え、試行を重ね、指導体制のさらなる充実を図る。 【2022 年度の取り組み】 ・ 学科教員が積極的に模範となるように、挨拶や言葉遣い等々の取り組みを行ってきた。 ・ 1 年生の基礎演習等で基本的マナーや電話のかけ方、敬語を使用した会話、メールや手紙の書き方等々の指導を行った。まだまだ不十分ではあるが、普段から気を付けて生活するような行動がみられ始めている。実習指導でもマナーに関して指導していることもあり、理解度は徐々に高まっている。 ・ ボランティア等々で学外で大人とのかかわりを持ちながら、マナーを学ぶことができた。 【次年度の取り組み】 ・ マナーある言動が行える学生の育成は、授業だけでなく普段の生活においても教員が細やかな指導を継続する。 ・マナーある行動が学外でもできるように、様々な機会を活用しながら体験できるよう促したい。
募集力	【学科入学定員確保のための対策】AP ■入試広報、教員との連携を進めて広報活動を活発にする。高校訪問、出前講座等を活用して社会福祉に興味関心を向けてもらえるよう働きかけ、指定校・推薦入試を中心に早期の入学希望者の増加につなげる。 また、在学生の満足度の向上を目指し、退学を防止するとともに学生自らが本学科の魅力を発信したくなるような学科を目指す。 ・ 本学科の教育理念、方針（社会福祉の必要性を基礎に）についてわかりやすく説明できるチラシ等の作成を行う。 ・ 入学者に対する入学動機、傾向を調査し結果を広報活動にいかす。 ・ 入試広報室と定期的に情報交換会を設け、広報活動のあり方を協議する。 ・ 在学生や卒業生が活躍している様子を出身校に伝える。 ・ 高校訪問、出張講義等を積極的に行い、本学科をアピールする。 【2022 年度の取り組み状況】 ・ 学生募集用のチラシ配布を広範囲に行った。 ・ 入学者にアンケート調査を実施して入学動機、傾向の把握を行った。

	・ 在学生から出身校に向けての手紙を送付した。 ・ オンラインでの出張講義等積極的に参加した。 【次年度の課題】 ・ コロナ禍で直接訪問ができないため、オンラインを活用したが、今後直接の訪問が増加すると見込まれことから、広報のあり方について再度検討が必要である。 【学科の魅力発信】 AP ■大学生活の魅力も含め、臨床福祉学科で学べることを多世代にわかりやすく伝える。宮崎県で唯一、専門的に社会福祉・心理が学べる大学として、宮崎県の社会福祉を支えてきた実績や、本学科の卒業生の幅広い活躍を発信する。また、本学科に在籍するからこそ経験できることも積極的に発信する。 ・ 国家資格取得状況についてチラシ、ホームページ等を活用して発信する。 ・ ホームページのブログを活用して、学科の近況をアップする。 ・ 保護者通信で在学生の様子や学科の取り組みを紹介する。 ・ オープンキャンパスについて今までの内容を検証し、変更点も含めて検討する。 【2022 年度の取り組み状況】 ・ 社会福祉士国家試験や教員採用試験の合格情報やスクールソーシャルワーカー養成課程、サークル活動等ホームページのブログにて掲載した。 ・ 定期的な保護者通信の作成、発送を行った。 ・ オープンキャンパスはオンラインでの参加も可能な体制を整備した。 ・ 本学科の入試合格者へ学科案内チラシを送付した。 【次年度の課題】 ・ ホームページに最新情報を積極的に掲載する。 ・ ブログの更新回数を増やす。 ・ 大学見学会、オープンキャンパス等、オンラインと対面での参加を見込んだプログラムの充実を図る。
研究力	【学科教員の研究力アップのための対策】DP(4) (6) (7) ,CP（８） ■教員の研究力のレベルアップを図り、学術論文の数を増やす ・ 学科教員間で研究力アップの仕組みを検討する。 ・ 研究力アップの仕組みを充実させ、研修等で周知する。 ・ 学術雑誌への積極的な投稿を促す。 【2022年度の取り組み】 ・教員に対して積極的に学術論文に投稿するよう促した。 【次年度の課題】 ・ 教員に対して学術論文に投稿を促していく。 ・ 学術誌に積極的に投稿できるように、担当者から様々な情報を提供する。 【研究施設のレベルアップのための対策】】DP(1) (3) (7) ,CP（８） ■研究に必要な施設の改善 ・ 必要な研究設備の調査。 ・ 研究施設充実のための資金調達の検討。 ・ 必要な教育研究整備を行う。 【2022年度の取り組み】 ・ 研究施設についての調査を継続的に行った。 【次年度の課題】 ・ 今後も継続的に研究施設についての調査を行い要望等があれば都度、検討する。 【外部研究資金獲得のための対策】DP(1) (6) (7), CP（８） ■科研費申請の増加を目指す ・ 外部資金獲得に関する研修・FD等への参加を積極的に促す。

	・ 研修等で得た知識を活かして外部資金を獲得するための対策を立てる。 ・ 科研費や外部資金への積極的な申請を促す。 【2022 年度の取り組み】 ・ 同じ分野の教員同士で研究力アップのための話し合いを行った。 ・ 教員に対して積極的に科研費だけでなく、それ以外の外部資金についての案内を行った。 【次年度の課題】 ・ 教員間で連携して研究力アップの具体的な仕組み構築に向けて検討、評価を行っていく。 ・ 教員自身で年間の研究活動目標を立て、ＰＤＣＡサイクルを意識した活動を行うよう促す。
地域連携力	【学科教員の地域連携力アップのための対策】 ■学科教員の専門知識・技術を地域に提供する機会を増やすとともに、地域との連携・協働事業を推進し、地域の活性化、地域課題の解決、生涯学習等に寄与できる教員の地域連携力をアップする。また、学生への教育力にも波及させる。 ・ 教員と自治体・関係機関・団体・学校との連携活動状況（連携協働事業、教員の専門知識・技術、研究成果の提供状況）を把握し、状況を教員間で共有するとともに、その成果を検証・分析し、連携関係の強化を図る ・ 教員に期待される地域のニーズ・期待度を把握する（自治体・関係機関等） ・ 連携推進に係る検討チームを設置し、地域の要請に応えられる相談窓口を検討する。 ・ 地域連携推進事業成果報告会を開催し、今後の方向性を検討する 【2022 年度の取り組み状況】 ・ 宮崎県、延岡市をはじめとする各自治体からの要請により、各種審議会や委員会委員として学科教員の専門的知見を発揮し、地域との連携を高めてきた。実績として、自治体や各種団体委員には 31 件、研修講師派遣対応に 23 件、会議等出席に 21 件あり、地域のニーズに即応して役割を果たしてきた。 ・ 宮崎県人権啓発推進協議会の受託事業「人権啓発活動協働推進事業」では、3 年目も臨床福祉学科が中心となり、事業を実施した。 ・ 継続的な連携事業として、延岡市からの受託している JKC 事業や木城町との連携事業、延岡市並びに延岡市社会福祉協議会との協働による防災教育等、学生の参画により地域との連携・協働を推進した。本活動は、新聞報道にも取り上げられており、社会貢献活動に関してホームページにも公開している。 ・ 地域社会に根差した大学として、社会人などを対象とした専門的知識の学習機会として、履修証明プログラム（福祉教養を備えた市民育成プログラム）を企画し、学科教員による講座への参加を市民に募集した。コロナ禍にあり、実績は無かった。 【次年度の課題】 ・ 地域のニーズに対応すべく各種審議会や委員会の要請に応えながら、教員間で情報共有し、相学科教員総力で地域との連携力を高めていく。 ・ 福祉施設や教育現場（中学・高校）との連携を強化していくために、大学教員の専門知識や技術の内容を説明、提示する機会等を充実し、相互関係性を高めていく。 ・ 地域の活性化や地域課題解決に向けたフォールドワークを積極的に担い、大学と地域との合同企画などを検討し、学生の主体的参加を促しながら協働事業を充実していく。
総合力	【総合力】AP DP CP ■臨床福祉学科の強みでもある、学生に寄り添った丁寧な指導・対応、社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士・公認心理師の国家資格、高校の教職（福祉）・認定心理士など多様な資格の養成、就職率 100%、これらをさらに充実させ、「福祉」や「心理」の専門職として社会に有用な人材が輩出できるよう教員一丸となって、教育・指導に取り組む。また、研究活動、地域貢献（学生を含めた地域活動を含む）を推進し、魅力ある学科づくりを目指す。臨床福祉学科の強みを基に、学生募集 PR を積極的に取り組み、入学定員充足率 100%を目指す。 【2022 年度の取り組み状況】 ・ ディプロマポリシーに(DP)掲げている福祉・心理の専門職として必要な基礎知識・技能を修得し実践力を備えた人材育成を目指し、中期目標・中期計画に基づき取り組んだ。

	・ 中期目標・中期計画を円滑に実践するには、学科内での教員間の連携が必要である。改組により心理専攻の教員とは最後の年度ではあったが、教育面、学生支援等協力し連携することができた。 「教育力」 ・ 卒業研究は、論文提出、卒業研究発表会、要旨集提出を早い段階で学生へ周知し、学生指導をおこなった。研究発表は、対面若しくはオンラインどちらでも実施できるよう、事前に学生に周知し、実施することができた。国家試験対策等は、ゴールデンウイークや年末年始にも使用できるよう体制を整えた。また、演習室での感染予防の徹底、施設使用のルールを理解してもらい順調に実施できた。 ・ 社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士・公認心理士養成課程では、３つのポリシーの実現ができるよう、資格分野ごと会議を開催し、教員間の情報共有を図りながら、実習や教科教育の検討を行い実施した。 「募集力」 ・ ホームページや広報チラシに最新情報を積極的に掲載したり、九州管内の高校に広報ポスターを送付した。また、学生の出身校に学生の近況報告の文書を前期と後期に２回送付したり、ホームページで「学科のまなび」として、各教員の教科や研究内容等を音声付きパワーポイントとして作成し、掲載した。しかし、入学定員確保には至っていない。 「地域連携力」 ・ 宮崎県や各市町村の各自治体より各種審議会や委員会委員として地域との連携をはかった。宮崎県の受託事業「人権啓発活動協働推進事業」では、臨床福祉学科が中心となり、講演会等を開催した。また、JKC 事業や木城町との連携事業など地域貢献活動を積極的におこなった。 【次年度の課題】 ・ 入学定員確保が一番の課題である。令和６年度の改組により臨床福祉学科は、スポーツ健康福祉学科のソーシャルワークコースになる。スポーツ健康福祉学科教員と協働して、学生募集に取り組んでいきたい。各種資格の受験対策、講義・演習や卒業研究など学生の特性を考慮しながら柔軟に対応できるよう、普段から多様な対策を考える。。
3つのポリシーからの総評	【2022 年度】 ＡＤ(アドミッションポリシー)は、中高生に向けた見学・出張講義・ガイダンスに積極的に参加し、求める学生像や社会福祉についてアピールした。また。九州管内の高校へ広報ポスターを送付した。大学のホームページでは中高生や入学予定に対しては、各教員が教科の概要や研究などを、音声付きパワーポイントで作成し、社会福祉の理解や学科に興味が持てるよう「学科の学び」としてアップした。 DP（ディプロマポリシー）を具現化するために、個々のカリキュラムポリシー（CP）の実践に取り組んだ。昨年度より、社会福祉士と精神保健福祉士養成が新カリキュラムとなったため、移行がスムーズにできるよう教員間で連携・協議した。新カリキュラム変更に伴い、「ボランティア活動」を実習科目履修要件であるため、ほとんどの学生が受講し、地域の施設や人々との交流ができた。また、延岡市から受託している JKC 事業や木城町との連携事業、延岡市社協との協働による防災教育等、学生の参加により、DP の社会貢献力や行動力、コミュニケーション能力、福祉実践力に繋がった（DP1,2,3,4 CP3,6,9,10）。 卒業研究は学科の DP に掲げる福祉実践力や研究能力を養う重要な過程である。研究発表会は、専攻毎対面で実施した。学生からの質問もあり活発な研究発表会となった。また、１～３年生にも周知し今後に向けての意識を高めさせた。ルーブリック評価に関しては試案作成までには至らなかった（DP6,7CP7,8）。 リメディリア教育に関しては、初年度教育として「文章読解力・作成能力」に加え「資料の収集方法」や「プレゼンテーション」にも取り組んだ。また、心理学の大学院進学希望者への受験対策としてカリキュラムとは別に語学力（英語）の学習を行った。4 年生 3 人は大学院に合格した。公務員を目指す学生に対し、中学から高校の再学習を設け指導を行った。1 名の合格者が出た。また、保育士を目指す学生に、科目と実技の指導を行い、1 名合格した（DP3,4,5,6, CP3,8）。 国試を受験するためには、それぞれの資格の申し合わせ事項や要件を満たさなくてはならない。個々の学生の成績を丁寧に確認し、一人でも多く受験できるよう指導した。国家試験合格率のアップに関しては、各資格ともロードマップを作成し取り組んだ。自己採点ではあるが、合格率は、社会福祉士 62.5%、精神保健福祉士 60.0%、介護福祉士 100%、であった。国家試験の勉強を含め、学生の学習の場（ゼミ活動、自主学習等）として、演習室の整備やパソコン等、学習資料を少しずつではあるが、充実しつつある。（DP3,6,7,CP5,6,7,8）。 就職率アップへの対応に関しては、キャリアサポートセンターと連携を図り、就活情報を学科内で共有することができた（DP,CP11）。現在の就職率は 84.8%である。

	学生への支援では、多様な問題を抱えた学生に対し学科会議で気になる学生について報告し教員間で情報の共有を図った。学科全体で１名の退学者がいた。学科会議で個人情報ということもあり、どこまで教員間で情報共有できるのかなどの課題があがった。今後の課題である（CP1,5,6）。 地域連系力に関しては、JKC 事業や災害ボランティアセンター（延岡市委託）をはじめ、木城町との連携事業等を学生も参加し実施している。また、各自治体や関係機関からの各種審査会、委員会委員を積極的に担い、地域連携を継続している（DP,CP11）。
次年度への展望（まとめ）	【2023 年度】 ・ アドミッションポリシーは 2024 年度の学部改組により、スポーツ健康福祉学科の１コースとなるが、スポーツ健康福祉学科の教員と協働し、一致団結して取り組んできたい。その中で、社会福祉の意義・魅力を発信しソーシャルワーク希望の学生の入学定員確保をめざす。 ・ 令和５年度の入学生が、臨床福祉学科としての最後の学生になるが、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー実現のため、更なる教員間の連携を図り、教員一丸となって取り組む。 ・ 社会福祉士・精神保健福祉士の新カリキュラムの対応（教育・演習・実習）や各種資格の取得のための学習支援が円滑に実施できるよう教員一丸となって取り組む。

九州保健福祉大学　臨床心理学部　臨床心理学科

2022 年度　第 2 期　中期目標・中期計画 〈3 つのポリシーを踏まえて〉

ビジョン (教育目標)	九保大だから学べる 「心の健康」と「コミュニケーションする幸せ」をプロデュースできる能力を身につけた人材を輩出する。
学科からの メッセージ	臨床心理学科は、「誰もが自分らしさを発揮し安心して暮らせる社会の実現」を目指して、心理・福祉の専門職を養成する「心理・福祉コース」と、心理学やカウンセリングンの知識を有した言語聴覚士を養成する「言語聴覚コース」の 2 つのコースを設定しております。本学科では、入学後の基礎科目から４年次の卒業研究までを通して学生の論理的思考力を高め、専門知識に加えて人々の幸せをプロデュースできる能力（知識・技能・思考力・態度）を涵養します。
教育力 (ブランド力) 「学修成果の可視化」の観点を含む	（2020～2023） 【学生自ら考える力のアップへの対策】DP（５）（６）、CP１(1-7) ２（１） ３（３）（４） ・卒業研究評価用ルーブリックの検討を進め、コースごとの試案を作成し、試案に基づいた卒業研究指導の在り方を検討し、学生が自ら学ぶ力を十分に引き出すことのできる卒業研究を目指す。 ・できるだけ多くの講義において、学科教育力を向上させるアクティブラーニングの導入を目指す。 ・コース会議等で卒業研究のルーブリックと成績評価について検討する。 ・コース会議等で卒業研究の取組状況を確認し合い、全員の卒業論文完成を目指す。 【基礎国語力増進への対策】DP（２）（３）、CP１（１） ・入学前教育で国語力向上のための課題等を実施し、基礎国語力の増強を図る。 ・必修科目である基礎ゼミの講義内で e-learning を積極的に活用し、有用性を検討する。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・入学前教育で国語力向上の課題を実施し、基礎国語力の増進を図った。 ・学生に対して基礎演習と並行して、すらに積極的に取り組むように促した。 ・次年度も今年度と同様に学生の能力に合わせた基礎学力の向上を図っていく。 【国語以外のリメディアル教育への対策】DP（５） ・大学院進学希望者への受験対策として、高校英語の再学習の機会を設け、語学力の増進を図る。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・今年度は英語再学習者希望者の調査等を行って、状況を把握した。 ・英語学習希望者に対してリメディアル教育を行なった。 ・来年度も引き続き希望調査及び教育を行う 【国家試験合格率アップへの対策】DP（４）、CP１（２）（３）（４）（５） ２（３） ３（１）（２） ・国家試験対策部会で効果的な対策方法を検討・実施し、コース会議等でその効果を検証する。 ・1 年次から資格関連科目授業において、必要に応じて資格取得の意義・意識づけを行う。 ・資格希望者のうち、成績不振者に対して個別指導による国家試験対策を行う。 ・コース会議等で各学生の成績を提示し、教員間での情報共有を図る。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・資格関連授業やチューター時間において、資格取得の意義や具体的な方略等を説明した。 ・来年度はコースごとに国家試験への具体的な対策を行う。 【学科教員の教育力アップの対策】CP ・授業改善等に関する FD への積極的な参加を促す。 ・学修成果の可視化に向けた教員相互による授業改善の仕組みの検討・評価・改善を行う。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・授業改善等に関する FD への積極的な参加を促し、教育力の向上を図った。 ・次年度も引き続き、来年度も学修成果の可視化に向けた教員相互による授業改善の仕組みの検討・評価・改善を行っていく。

教育力 (ブランド力) 「学修成果の可視化」の観点を含む	【教育施設のレベルアップのための対策】DP（１）（５）、CP（４） ・社会生活コミュニケーション室、家庭生活コミュニケーション室等の設備やビデオ記録・配信システムを学内臨床実習等で活用する。 ・学生の学習場所として４、５階の演習室を開放し、国家試験対策や単位認定試験対策等の学習の利用を促す。 ・学生の学習場所で学生が使用できる学習資料や学習ツールを充実させる。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・学生の学習場所として４、５階の演習室を開放し、国家試験対策や単位認定試験対策等の学習の利用を促した。 ・統計ソフトがインストールされたパソコン等を整備し、学習場所で学生が使用できる学習資料や学習ツールを充実させた。 ・今後さらに学生が学習しやすい環境を整備していく必要がある。 【就職率アップへの対策】DP ・履歴書作成指導や模擬面接等を通じて、全ての学生が希望する施設へ就職できるよう、キャリアサポートセンターと連携を取りながら、きめ細かい指導を行う。 ・「即戦力の九保大生」「印象の良い九保大生」を求人側施設にアピールできるよう、学生の臨床教育を行う。 ・低学年からインターンシップを導入し、キャリアイメージを早期から形成できるよう支援し、就職率アップにつなげる。 【学生生活サポート対策】CP２（２）（５） ・定期的なチューター面談を実施し、学生の情報をコース会議等で報告し、教員間で共有する。 ・学生の学力の把握を常時行い、必要に応じてチューターからの指導を実施する。 ・学生の適性やモチベーションに応じた指導を行う。 ・学生の意見を教育内容や方法に反映させ満足度の向上を図る。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・定期的なチューター面談を行い学生生活を積極的にサポートした。 ・学生の意見をできるだけ取り入れて、学生生活満足度の向上を図った。 ・次年度も今年度同様に学生一人一人に寄り添い、チューターごとに学生生活をサポートしていく 【退学者防止対策】DP２（２）（５） ・連続欠席者に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行う。 ・学生がかかえる問題を早期に発見し、健康管理センターと連携して適切に対応する。 ・教員はオフィスアワーだけでなく、相談やコミュニケーションが取りやすい環境を作る。 ・チューターも含めた複数の教員で学生に寄り添い、不安や困りごとに対応する。 ・転学科してきた学生に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行う。 ・転学科してきた学生について、教員間で情報を共有し、早期対応を行う体制を構築する。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・連続欠席者に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行った。 ・学生が抱える問題を早期に発見し、健康管理センターと連携して適切な対応を行った。 ・次年度も引き続き学生の問題に対してできる限り早期に対応し、退学防止に努めていく。 【社会人としてのマナー対策】DP１、CP２（３）（４） ・各チューターやゼミ担当教員が、マナーについて学生の心構えについて確認し、大学生の生活の様々な場面で、社会が求めるマナーが身につくように必要な指導を実施する。 ・教員から学生に対して積極的なあいさつを行い、普段から学生にどの程度のマナーが身についているかを教員間で確認する。 ・学内実習を通して、社会人として現場で必要な基本的態度、他人との関わり方について具体的指導を行う。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・各チューターやゼミ担当教員が、マナーについて学生の心構えについて確認し、大学生の生活の様々な場面で、社会が求めるマナーが身につくように必要な指導を行なった。 ・教員から学生に対して積極的なあいさつを行い、普段から学生のどの程度のマナーが身についているかを教員間で確認を行った。 ・次年度も挨拶や言葉遣いを中心に社会人としてのマナーの指導を積極的に行っていく。

募集力	【学科入学定員確保のための対策】AP ・教員自身が学生ファーストの立場で教育を行い、在学生から家族や後輩、学校関係者に本学科の肯定的な評価が伝わるように日々努力する。 ・入試広報、教員との連携を進めて広報活動を活発にする。高校訪問、出前講座等を活用し、本学科に興味関心を向けてもらえるよう働きかけ、一般入試における入学希望者の増加につなげる。 ・本学科の教育理念、方針、コース内容などについてわかりやすく説明できるチラシ等の作成を行う。 ・入学者に対する入学動機、傾向を調査し結果を広報活動にいかす。 ・入試広報室と定期的な情報交換会を行い、広報活動のあり方を協議する。 ・高校訪問、出張講義等を積極的に行い、本学科をアピールする。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・教員自身が学生ファーストの立場で教育を行い、在学生から家族や後輩、学校関係者に本学科の肯定的な評価が伝わるよう可能な限り努力した。 ・入試広報、教員との連携を進めて広報活動を活発に行なった。 ・土日見学会、オープンキャンパス、高校訪問、出前講座等を活用し、本学科に興味関心を向けてもらえるよう積極的に働きかけた。 ・本学科の教育理念、方針、コース内容などについてわかりやすく説明できるチラシ等の作成を行った。 ・入学者に対する入学動機、傾向を調査し結果を広報活動にいかした。 ・入試広報室と定期的な情報交換会を行い、広報活動のあり方を協議した。 ・高校訪問、出張講義等を積極的に行い、本学科をアピールした。 ・次年度以降もこのような活動を通じてさらに広報活動を積極的に行っていく。 【学科の魅力発信】AP ・中高生の学科見学、高校からの模擬講義、出張講義に積極的に対応する。 ・社会で活躍している卒業生の情報を収集し、オープンキャンパスなどで紹介する。 ・国家資格取得状況についてチラシ、ホームページ等を活用して発信する。 ・保護者通信等で在学生の様子や学科の取り組みを紹介する。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・中高生の学科見学、高校からの模擬講義、出張講義に積極的に対応した。 ・社会で活躍している卒業生の情報を収集し、オープンキャンパスなどで紹介した。 ・次年度も今年度同様の広報活動を継続する。
研究力	【学科教員の研究力アップのための対策】DP(３)(４)(５),CP２（３）（４） ・学科教員間で研究力アップの仕組みを検討する。 ・研究力アップの仕組みを充実させ、研修等で周知する。 ・学会への参加等、研究活動に必要な研修の機会を保障する。 ・学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に推進する。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・学科教員間で研究力アップの仕組みを検討した。 ・学会への参加等、研究活動に必要な研修の機会を保障した。 ・学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に推進した。 ・次年度は研究力アップの具体的な仕組みをさらに検討する。 【研究施設のレベルアップのための対策】】DP(３)(５)(６),CP１（３）（４）（５） ・必要な研究設備の調査。 ・研究施設充実のための資金調達の検討。 ・必要な教育研究整備を行う。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・今年度は研究施設レベルアップのための対策を積極的に行うことができなかった。 ・次年度は施設設備のレベルアップのための調査と対策の方法を検討する。 【外部研究資金獲得のための対策】DP(５)(６)、CP１（７） ・外部資金獲得に関する研修等への参加を積極的に促す。 ・研修等で得た知識を活かして、外部資金を獲得するための対策を立てる。 ・科研費や外部資金への積極的な申請を促す。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・外部資金獲得に関する研修への参加を積極的に促した。 ・科研費や外部資金への積極的な申請を促した。 ・次年度は外部資金獲得のための研修会等への参加を積極的に促していく。

地域連携力	【学科教員の地域連携力アップのための対策】 ・教員と自治体・関係機関・団体・学校との連携活動状況（連携協働事業、教員の専門知識・技術、研究成果の提供状況）を把握し、状況を教員間で共有するとともに、その成果を検証・分析し、連携関係の強化を図る ・教員に期待される地域のニーズ・期待度を把握する（自治体・関係機関等） ・連携推進に係る検討チームを設置し、地域の要請に応えられる相談窓口を検討する。 ・学会等、関連団体の役員として、地域・社会貢献を行う。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・学会等、関連団体の役員として、地域・社会貢献を行った。 ・次年度は、教員と自治体・関係機関・団体・学校との連携活動状況の具体的な把握の仕方について検討していく。
総合力	【総合力】DP ・学生の心に寄り添った丁寧な教育・指導を行い、社会に有為な「公認心理師」「社会福祉士」「言語聴覚士」を輩出できるように教員一丸となって取り組む。また、本学科の特徴である基礎系教員と臨床系教員の連携を活かして、教員の教育力や学生の満足度の向上を図る。在学生、保護者、地域住民の本学科に対する評価およびイメージを常に意識した教育、指導、支援を学生に提供し、入学定員充足率 100%を目指す。 ＜取り組み状況と次年度の課題＞ ・学生の心に寄り添った丁寧な教育・指導を行い、社会に有為な「公認心理師」「社会福祉士」「言語聴覚士」を輩出できるように教員一丸となって取り組んだ。 ・次年度も今年度同様の取り組みを行っていく。
３つのポリシーからの総評	臨床心理学科では、ディプロマ・ポリシー（DP）に掲げた目標達成のために、本中期目標・中期計画にて策定した「教育力」「募集力」「研究力」「地域連携力」および「総合力」を高める取り組みを行った。 【教育力】 ・入学前教育で国語力向上の課題を実施し、基礎国語力の増進を図り、また入学後も学生に対して基礎演習と並行して、すらに積極的に取り組むように促した。 ・１年後の国家試験を念頭に置いた国家試験受験対策等を行った。 【募集力】 ・心理・福祉コースと言語聴覚コースの教員、および入試広報室が積極的に連携し、多くの優秀な学生を確保することができた。 【研究力】 ・学会への参加等、研究活動に必要な研修の機会を保障することで、各教員が学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に行った。 【地域連携力】 ・教員と自治体・関係機関・団体・学校との連携活動状況（連携協働事業、教員の専門知識・技術、研究成果の提供状況）を把握し、状況を教員間で共有するとともに、その成果を検証・分析し、連携関係の強化を図ることができた。 【総合力】 ・学生の心に寄り添った丁寧な教育・指導に取り組み総合力を高めることができた。次年度も本中期目標・中期計画に基づき、さらなる総合力アップを図っていく。
次年度への展望 (まとめ)	今年度は中期目標・中期計画の達成・実現に向けて、学科教員一丸となって取り組んだ。次年度も、本学科の特徴である心理・福祉コースと言語聴覚コースの教員の連携を活かして、教員の教育力や学生の満足度の向上を図り、効果的な臨床教育プログラムについて検討・実施し、その成果を検証していく。

九州保健福祉大学　薬学部　薬学科
2021 年度　第 2 期　中期目標・中期計画　〈3 つのポリシーを踏まえて〉

ビジョン（教育目標）	九保大だから学べる 「適正で安全な薬物療法」を支え患者さんの幸せをプロデュースできる能力を身につけた人材を輩出する。
学科からのメッセージ	薬学科の教育目標は、薬剤師国家試験合格のもっと先にあります。現在、薬物療法の高度化により、チーム医療の中で「薬の専門家」としての薬剤師の重要性がますます高まっています。また、現在の薬剤師は患者さんのフィジカルアセスメント（実際に患者さんの身体に触れながら、薬の効果や副作用の早期発見を行うこと）などを実施して最良の薬物療法を医師に提案することが求められています。本学では、入学後の基礎科目から 5,6 年次の卒業研究までを通して、広い視野で自ら考え、適正で安全な薬物療法を支え患者さんの幸せをプロデュースできる能力（知識・技能・思考力・態度）を涵養します。
教育力（ブランド力） 「学修成果の可視化」の観点を含む	教育力の可視化 【学生の主体的な学びの対策】　DP（5）、CP1（9）（来年度：教務委員会、カリキュラム委員会等） ・学生がゴールに向かう段階を意識し学習を進めることができるように、アセスメント・ポリシーを明確化して全学生に周知する。 ・ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーおよびアセスメント・ポリシーとの整合性を検証し、必要に応じポリシーを改訂する。 ・シラバスの記載内容が学生の主体的な学びをサポートしているか、各ポリシーとの関係性から検証する。 ・現行の卒業研究（特別研究Ⅰ、Ⅱ）ルーブリック評価について、観点・基準の妥当性および学生側の活用状況を検証する。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ 　前年度に引き続き、薬学科入学前ガイダンスおよび在学生オリエンテーションにて、全学年を対象に「薬学部薬学科履修系統図」「薬学部薬学科ディプロマ・ポリシー（DP）とアセスメント・ポリシー」を配布し、その主旨と学習過程における重要性を説明した。次年度も継続する。 　ポリシー間の整合性は、アセスメント・ポリシー作成時および本学 web ページへのアップロード時に検証済であり、現時点での整合性は保たれていると考えてきた。しかしながら、外部評価においてカリキュラム・ポリシーとアセスメント・ポリシーの対応が分かりづらい等の指摘を受けたため、今後、新設予定のカリキュラム委員会で検証・改訂することとする。 　シラバスの記載内容について、学科でチェックする担当の教員を決め、確認を行なった。ポリシーとの整合性には特に問題はなく、自主学習の内容と評価方法が記載されていると考えてきた。しかしながら、外部評価において改善が必要と指摘を受けた点があるため、次々年度から運用が開始される改訂コアカリを踏まえたカリキュラム対応と合わせ、上記のカリキュラム委員会で検証・改訂することとする。 　特別研究Ⅰ・Ⅱに対するルーブリック評価の観点は、シラバス記載の学習目標に基づき、ディプロマ・ポリシーとの整合性が確認されていると考えてきた。しかしながら、外部評価において改善が必要と指摘を受けた点があるため、次年度より速やかに改善を図っていく。6 年生全員に学科全体でのポスター発表を課し、より効果的なアセスメントを実施し、卒業研究での学びの効果を高めることに努める。 【基礎国語力増進への対策】　CP1（1）（来年度：リメデイアル委員会、教務委員会等） ・国語力が必要な必修科目（理科系作文法Ⅰ・Ⅱ）の講義で e-learning を積極的に活用し、有用性の高い運用方法を検討する。 ・e-learning による国語の学習成果を可視化し、成績評価の一部として反映する。 ・統一試験での個々の学生の成績に合わせた効果的な学習項目を吟味する。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ 　今年度も第 1 回および第 2 回統一試験（国語）の成績に従ってクラス分けを行い、理科系作文法Ⅰ・Ⅱの講義内で e-learning による国語の学習を行った。クラス毎に学生の学力に合った学習項目を設定し、約 2 週間毎に小テストを行って、その成績も単位認定の一部とした。また、理科系作文法Ⅰ・Ⅱ共通の教科書を使用し、通年で初歩から応用まで、理科系文章の特徴やレポート等の構成、論理的文章表現について演習・作文指導等を行った。

その結果、全体の得点としては、回を追うごとに緩徐ではあるが得点の伸びが見られた（第1回73.9点→第2回75.5点→第3回78.5点）。前年度は、第1回での得点に対する第3回での得点の伸び幅が大きく、学習の成果が大きく現れたが、今年度は、第3回までの得点の伸びは小さかった。この理由の一つとして、日本語の理解が例年より難しい留学生が複数おり、その学生が平均点を下げていることが考えらえる。第1回と第3回の両方を受験した学生（留学生は含まれない）についてのみ解析すると、最大で37点の成績向上が見られ、平均点は7.0点、最低点は27点上がっており、特に成績下位層の成績向上が目覚ましかった。

次年度は、今年度の取り組みを継続し、学習内容を一部見直し、学習成果がより顕著に現れるように改善したい。また、昨年度同様、作文力の向上を目指して、学習した作文手法を自ら活用し、的確な作文ができるよう日本語の理解が難しい留学生を含めて、きめ細かく指導する予定である。さらに、昨年度に引き続き、2年次以降も、国語力を維持発展できるようにカリキュラム上の工夫と教員間の連携が必要である。

【国語以外のリメディアル教育への対策】CP1（2）（来年度：リメデイアル委員会、教務委員会等）

・既存のリメディアル科目の科目構成および担当者の見直しを行う。
・学習者の能力に合わせた効果的な学習項目と運用方法を吟味する。
・リメディアル科目の効果的な学習方法を、学生が自ら見出すことができるように授業内容を検討する。

＜取り組み状況と次年度への課題＞

既存のリメディアル科目の構成および担当者の見直しを行った。次年度も継続する。

学習者の能力に合わせた効果的な学習項目と運用については、前年度検討された薬学数学、物理学Ⅰ・Ⅱ、化学Ⅰ・Ⅱおよび薬学数学演習の学習内容を今年度も踏襲して運用した（今年度も化学演習は不開講）。その実効性は、即時的に反映されるものでないため現時点では評価し難いものの、劇的に改善が進んでいるとは言えない状況である。リメディアル科目が医療現場や臨床研究でどのように役立つのか、実例を説明して学習意欲を高めることを取り入れて、次年度も引き続き学習方略について検討を行う。

リメディアル科目の効果的な学習方法を学生が自ら見出すことができるように前年度検討された授業内容については、前年度の取り組みを踏襲した部分と今年度検討された部分がある。「薬学数学演習」の授業を入学直後から演習形式で集中的に実施することで「薬学数学」開始前に基礎学力の確認と学習の習慣づけを行うという内容に関しては、前年度と同様に踏襲した。前年度検討された、意味を理解しながら繰り返し演習するように指導するという内容については、学習習慣や論理的思考力の向上に至らない学生に対して著効を示しているとは現時点では評価し難い状況である。強制的な自習時間を設定したこと、および留年生への指導強化の効果についても、現時点で即時的に効果が現れているとは評価し難い状況である。また、物理学Ⅰおよび物理学Ⅱでは、新たな取り組みとして「学生にボールを投げさせ、その軌道の確認や落下までの時間の計測を行わせる等の体験学習」、「演習問題の解法を解説した動画の作成・自由閲覧」を行い、学生の理解度の向上につとめた。これらについては、次年度も引き続き内容・効果の判定方法を検討する。

【国家試験合格率アップへの対策】　CP2（14）（来年度：国試対策委員会等）

・薬学総合演習試験の結果をもとに、弱点科目・項目などについて分析し、その科目・項目克服の方策を練る。
・薬学総合演習単位認定の厳格な基準を明示する。
・6年生の各学習レベルに合わせた指導内容を検討する。
・4年生の基礎薬学総合演習試験・単位認定試験の結果から、卒業率を解析し、早期の学習方法等の対策を講じる。
・3年生修了時から、CBT対策を始めて、国家試験まで順調に進められるようにロードマップを策定する。

＜取り組み状況と次年度への課題＞

今年度は、コロナ渦の影響が過去2年間より少なくなったが、光熱費の高騰による教室変更や、自習用教室の運用において、6年生に不便な思いをさせた。6年生用の国試対策、4年生用のCBT対策について、ほぼ例年通りの対策を行うことができた。昨年度末から新4年生にCBT対策のオンライン学習を案内した。一部の学生は早期から熱心に取り組み、1000問以上解いた学生もいた。このような学習量が多い学生のほとんどは、模試／単位認定試験などで80%以上の得点率に達成し、国試対策に向けて準備できていた。また、2-6年までの学生で、オンライン学習が自分のスタイルに合う学生は、多くの問題を解いていることが確認された。実務実習期間でない5年生に課題を出して、オンライン学習に取り組ませた。

この試みは継続する。
　6年生においては、前後期の中位層と下位層に具体的な学習内容を毎日記載させ、教員による口頭試問などのチェックを徹底した。また、中下位層のレベルアップコースの人数を増やし、後期にレベルアップ講座（夕方の補講形式）を受講させた。これらを合わした結果、昨年度より卒業率が若干改善された。ただし、まだ卒業率を上げる伸びしろがあるので、単模擬試験や認定試験の内容も含めて、国試対策の改善をしていくつもりである。次年度は、4年次の成績も含めて、成績が伸びやすい学生と伸びにくい学生の成績を細かく比較し、改善策を模索する。

【学科教員の教育力アップの対策】　CP　（来年度：教務委員会、カリキュラム委員会等）
・教員が教育の技法を高めるとともに、授業への取り組みを再考する機会となるように、講義、演習、実習およびグループワークなど様々な形態の授業について、教員相互の見学・参加を推進する。
・教員を期限付きで国内外を含め適切な医療施設・機関にて研修させ、最新の業務内容等を大学にフィードバックする。
・大学院生の学位取得率を改善させるため、各研究室のさらなる研究力アップを図る。

＜取り組み状況と次年度への課題＞
　今年度はコロナ禍で中断していた授業の相互見学に関する調査を再開した。今年度は授業評価アンケート結果をもとにした意見交換の場は設けなかった。次年度以降は必要に応じて実施する。効果的な教授内容・方法については、次年度より新規開設されるカリキュラム委員会において検証することとする。
　医療施設・機関における教員の研修は今年度も行われなかった。その理由の一つとして、長年の間実務から離れている教員が現場に立つことの問題点が教員側から挙げられていた。研修先の確保と研修内容について、次年度は感染症対策の状況を踏まえつつ、現場の意見を聞き検討する必要がある。
　大学院生の主担当講座・研究室での研究力強化に関し、共通研究機器の更新や使用ルール制定などを行なってきた。詳細は「研究力【研究施設のレベルアップのための対策】」を参照のこと。

【教育施設のレベルアップのための対策】（来年度：教務委員会、カリキュラム委員会等）
・文科省・厚労省等の補助金情報を収集し、積極的に応募を促す体制を構築する。

＜取り組み状況と次年度への課題＞
　旧型で作動不良となっていた心臓病患者シミュレータを更新した。これより、実習において学生がシミュレータで学ぶ時間をより長く確保することが可能になった。また、講義室、実習室のプロジェクター等の映像・音響システム老朽化に伴う更新を徐々に進めた。今後、さらに薬学科として各教員からの情報を収集できる体制を構築して補助金情報を収集し、積極的に応募を促す体制の構築が必要である。

【就職率アップへの対策】DP　（来年度：就職・同窓会委員会等）
・キャリアサポートセンターを積極的に活用する仕組みを構築する。
・社会人マナーやコミュニケーション能力の向上を目指した企画を模索する。
・早期からキャリア教育を推進する。

＜取り組み状況と次年度への課題＞
　キャリアサポートセンターでは、ユニバーサルパスポートを通じて就職面談会、企業の個々の説明会やインターンシップ等の日程を学生に配信し、学生が積極的にキャリアサポートセンターを活用できる機会を増やしている。また、昨年度より求人受付 NAVI・求人検索 NAVI を新規導入することにより、オンライン上にてリアルタイムで豊富な求人検索及び学生面談の予約が可能となり、飛躍的に利便性が向上し計画的な支援を行うことができた。さらに、専門の講師による就職活動前の学生を対象とした「就活メイク講座」「Web 面接対策講座」など全学共通イベントとして対面にて実施した。その他、WorkCafé のべおかや公務員試験対策講座も対面にて開催した。加えて、キャリアサポートセンターにも来室せずともキャリアサポートが受けられる Line のトークルームも一昨年度より継続利用可能とし、薬学科学生の相談に応じる体制を整えている。このような上記キャリアサポートセンター業務について、薬学教育に直接携わっている立場より協働で実施している。
　次年度は、教員から学生にキャリアサポートセンターの積極的な更なる利用を喚起する。

また、成績不振学生には卒業後の働くイメージをもたせ、「卒業したい意識」を高めて退学を防ぐなど、様々な方面から学生のキャリアサポートセンター利用につなげるよう努力する予定である。

薬学科では、就職率アップに関わる最重要イベントとして 5 年生を対象にした就職面談会（1 日目：宮崎県内事業所，2 日目：宮崎県外事業所〔午前：薬局，午後：病院・企業〕）を 3 月 4 日、5 日にキャリアサポートセンターとともに実施した。コロナ禍も落ち着きつつあるということで、3 年ぶりの対面での開催とした。さらに、昨今の薬学系事業所における採用活動前倒しに対応するため、薬学科独自で就職活動動向・職種別選考対策・自己分析に関するガイダンスを 5 年生および 4 年生を対象に計 6 回を実施した（5 年生：5 月，8 月，11 月、4 年生：4 月，9 月，1 月に実施）。

5 年生に対しては 5 月，8 月のガイダンスは学生がふるさと実習に行っていることを考慮してオンラインで、実務実習が終了している 11 月は対面でガイダンスを開催した。主に業界研究やインターンシップへの参加の仕方・注意点に関する内容で実施し、5 年生の 6 月から始まるインターンシップに対応することを目的として実施した。就職ガイダンスでは点検・評価のために毎回学生にアンケートを実施し、全てのガイダンスで 90%以上の学生が「とても参考になった、参考になった」とする結果を得ている。

4 年生に対しては 4 月、1 月はオンラインで、9 月は対面でガイダンスを実施した。アンケートでは全てのガイダンスで 90%以上の学生が「とても参考になった、参考になった」とする結果を得ている。一方で、参加率は 4 年生の 1 月に実施したガイダンスで 70%と低調（他の参加率の平均は 85%以上）であった。不参加の学生に後日インタビューをしたところ、既に 2 回のガイダンスを受けたために参加するモチベーションが低下したことを訴えられた。そのため、4 年生へのガイダンス回数として 2 回が適切ではないかと考えている。

次年度薬学科キャリアサポートにおいては、5 年生に対しては 2022 年度と同様、5 月 8 月にインターンシップ参加に関する内容を中心にガイダンスを行う。また、8 月開催分に関しては特に、今年度アンケートで好評だった「IR 情報からの企業の見方」を深掘りする形で開催したいと考えている。4 年生に対しては、上記の通り、年に 3 回の実施は多いと感じる学生がいることを受け、年 2 回の開催としたい。開催時期は実務実習によって就職先を意識し始める 9 月、1 月とし、業界研究や自己分析に関するガイダンスを中心に行い、学生が「就職のミスマッチを防ぐ」ことができることを目標に活動を行っていく。

【学生生活サポート対策】（来年度：学生・安全委員会、ハラスメント委員会等）
・学生の相談内容に応じた学内各部署（学生課、教務課、保健センター等）との連携体制を構築し可視化する。

＜取り組み状況と次年度への課題＞

学生相談に関しては、相談を受けた教員からチューターへ、あるいは学内部署からチューターへ、それぞれ情報が伝達され、さらに必要に応じてガルーンメールを介して学科教員又は関連部署に伝達された。学生の体調不良や受傷等に関しても同様に学科教員に学生の状況が連絡され、情報の共有が図られた。その結果、学生指導や授業・実習などでの対応がスムーズに行えた。学生情報の可視化の可否判断は、学生のプライバシーに配慮して、対応にあたる教員やチューターに委ねられているのが実情である。いずれも初動対応が円滑かつ速やかに行われ、事態の悪化を懸念する事案は見られなかった。教員と各部署間の連携体制は構築され、本取り組みは概ね有効に機能していると考えられる。今後も細やかな初動対応を確実に行い、問題点を可視化して各部署・教員間で協力して取り組む。

【退学者防止対策】（来年度：教務委員会、カリキュラム委員会等）
・学生の長期間無断欠席の回避を図るための学科内対策を構築する。
・学生課やキャリアサポートセンターと協力・連携して学生へ奨学金等の推薦を通じた経済的支援体制を構築する。
・縦断的な学生同士の繋がりを強化する体制を築く。

＜取り組み状況と次年度への課題＞

長期無断欠席となる学生は、学力や精神面に問題を抱えていることが多く、そのような学生についてはチューターが個別に対応している。チューター以外の教員も学習方法などの相談に応じている。今年度も、新入生の基礎学力不足によるドロップアウトへの対策として、自由科目「薬学数学演習」を開講した（「教育力（ブランド力）【国語以外のリメディアル教育への対策】」参照）。

	医療機関や企業からの奨学金の情報をキャリアサポートセンターへ集約し、学生に提示してきた。今後も継続して学生支援に活用する。 薬学科では毎年、スポーツ大会と新入生合宿研修により学生間の縦の繋がりを図ってきたが、今年度もコロナ禍のため、合宿は行わずに3密を避けつつ学内での研修を実施した。次年度も状況に合わせて、今年度と同様にイベントを実施する。 【学生指導力の向上】（来年度：教務委員会、学生・安全委員会、ハラスメント委員会等） ・学生の価値観、気質、能力を配慮したきめの細かい指導や対応を行うことを目指す。 ・講義や実習、チューター面談を通して、学生個別の適性およびモチベーションを見極め、学生生活における問題の早期発見に努める。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ 成績及び生活面の指導に関しては、チューター主導の面談、指導を前期、後期の最低2回実施した。成績不振の学生に関しては、学生との面談回数を適宜増やし、さらに保護者を含めた三者面談を行った。このような事例に関しては短期間での改善は難しい傾向にあった。一方、学業面において理解が不十分な学生や技能修得により多くの時間を要する学生に対して、一部の教員は、オフィスアワーを利用して個別にミニ授業や実習（学内臨床実習）を実施した。この中には学生自らの要望に対して実施したケースもあり、結果として知識・技能修得の向上にある程度有効であった。また、体調不良や精神面の不調から欠席しがちな学生に対しては、教務課から配信の連続欠席報告も活用し、早めに学生に声掛けをして面談を行い、病院の受診や学内カウンセリングの利用を勧奨した。 【社会人としてのマナー対策】（来年度：ハラスメント委員会、学生・安全委員会等） ・学生へ積極的な挨拶を促し、学生間における挨拶・礼節の実行も含めて、各教科・実習の態度にその評価結果を反映させる。 ・ハラスメント委員を増員してチューター教員との関係を密にして、初期の問題行動を共有してハラスメント委員や学科長から即時個別指導を行う体制を構築する。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ 本年度もコロナ禍の影響で、マスクを介した挨拶の実行となったため、積極的な挨拶の取り組みがなされていない場面も見受けられたが、講義・実習や休み時間等の学生との接触場面において、教員から学生に対して積極的に挨拶をし、学生にも挨拶の励行を指導した。今後も継続して指導していく。各教科・実習の態度への評価の反映については、教員各自に委ねており、次年度も実施する予定である。 学生からのハラスメント相談、申し出については、前年度と同様、適宜、ハラスメント委員間で初期の問題行動を共有し、個別指導を行う体制が整っている。また、ハラスメント相談を受けた場合には、九州保健福祉大学キャンパス・ハラスメント防止対策規定および九州保健福祉大学キャンパスハラスメントフローに従って、適切に対応する。ハラスメント委員の存在を知らずに、個別で相談できない学生への周知を図るため、今年度から、ハラスメント委員名が明記されたハラスメント防止ポスターを薬学棟（4号棟）と講義棟（7号棟）に掲示した。次年度は、ハラスメント防止ポスターを活用して、対面で相談に来ることができない学生にも対応することで、各種ハラスメントの事前防止に努める必要がある。
募集力	【学科入学定員確保のための対策】（来年度：入試教授会メンバー等） ・毎年、薬学科のアピールポイントをまとめ、高校訪問、土日見学会、オープンキャンパス等で活用する。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ 薬学科のアピールポイントは、スライド、学科独自のパンフレット、ポスター、チラシにまとめ、出張講義やキャンパス見学会ミニ（土日見学会）等にて活用した。特に、今年度注力した点として、他大学薬学部のポスター、チラシが延岡市内で配布されたことに危機感を持ち、本学のポスター 約700枚、チラシ 約1,000枚を宮崎県、大分県、鹿児島県、福岡県の薬局・病院・公共施設に配布した。これらの配布においては卒業生 約50名の協力が得られ、今まで以上に円滑な広報活動ができた。今年度の出張講義（高校訪問）は18件（対面17件、オンライン1件）、高校生来学が7校、中学生来学が6校、キャンパス見学会ミニ（土日見学会）が5件、高校教員対象オープンキャンパス参加者が5名、高校PTA対象見学会参加者が20名、オープンキャンパスの参加者は、6月高校生24名一般33名、7月高校生34名一般40名、8月高校生49名一般57名であった。さらに、6月に宮崎県内高校教員対象の

	入試説明会、11 月に宮崎テクノフェア、2 月に東九州ものづくり交流展においてでも薬学科の特色をアピールできた。 　昨年度よりも今年度は、オープンキャンパスや見学会などの規模をやや大きくすることができた。また、高校訪問も対面にて実施できた件数が増え、オンラインよりも自由度の高い説明をすることができ、訪問先から好感触を得られたものと感じている。次年度も 18 歳人口の少ない実情は変わりないため、他大学に負けない広報活動、本学の魅力発信をしていく必要がある。具体的には、学科独自のパンフレットの改訂（高校生を惹きつけるような本学教員の研究内容の紹介、整備された学習環境・分かりやすい講義のアピール等）、入学前教育の内容の見直しを行う。 【学科の魅力発信】　AP （来年度：広報委員会、地域連携委員会等） ・薬学科志願者を増やすために、薬剤師の魅力ややりがい、将来の展望などに関する情報を積極的に収集し、中高生を中心に広く発信する（ニーズの拡大）。 ・学科教育力の高さを客観的に示すために、これまでの卒業生の成績や合格実績などのデータを整理し、数値化・可視化する（本学科のアピール）。 ・効果的な情報発信を行うために、入試広報用コンテンツを統一するとともに、学科のアピールポイントやFAQ等を学科教員間で共有する。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ 　薬剤師の魅力ややりがい、将来の展望を発信するため、従来の対象（病院・薬局に勤務する卒業生）を変えて、保健所に勤務する本学卒業生（宮崎県職員）にインタビューできた。特に、コロナ禍の中でPCR検査等に奮闘している実情を収集できた。この内容は大学案内2024に掲載する予定である。 　学科教育力の高さは本学科のブランド力の１つである。そこで、教育力を客観的に示すため、これまでの卒業生の成績や合格実績などのデータを最新のものに更新し、より分かりやすいスライドを作成し、出張講義、見学会等に活用した。 　学科のアピールポイントやFAQ等をまとめた入試広報用の主力コンテンツとして、スライド、学科独自のパンフレットを作成した。スライドはガルーンのファイル管理にあげ、使いやすい体勢を整えた。一方、学科独自のパンフレットを全教員で確認し、文章を大幅に減らし写真を増やすなど、より読みやすい内容に改訂した。全教員が確認したことで、情報共有、広報活動に関する意識がより高まったものと思われる。 　次年度も18歳人口の少ない実情は変わりないため、他大学に負けない広報活動、本学の魅力発信をしていく必要がある。具体的には、さらなる学科独自のパンフレットの改訂（高校生を惹きつけるような本学教員の研究内容の紹介、整備された学習環境・分かりやすい講義のアピール等）や本学の臨床教育の良さをどう伝えるか、といった点を中心に広報活動の見直しを行う。
研究力	【学科教員の研究力アップのための対策】（来年度：研究促進委員会、研究環境整備委員会、薬学会九州支部会等） ・学術論文：筆頭著者あるいは責任著者が各講座・研究室教員である英語論文を、各講座・研究室単位で少なくとも毎年2報発表する。 ・学会発表：筆頭著者あるいは責任著者が各講座・研究室教員である学会発表を、各講座・研究室単位で少なくとも毎年2報発表する。 ・研究発表会：研究促進委員会を設立し、年2回、薬学棟各階の講座・研究室単位で学生を交えて研究発表会を行い、各講座・研究室の研究成果の進展度を可視化する。 ・可視化した研究力に基づいて、薬学科の研究費配分に反映するシステムを構築する。 ・学外学内共に共同研究活動を推進する。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ 　今年度の取り組みとして、研究成果発表（学術論文および学会発表）に関しては、目標に到達できていない。研究促進委員会主導で昨年度より開始され、各講座・研究室の研究成果の進展度を相互に把握する好機となっている、研究発表会「宮崎県北サイエンスフォーラム」は、今年度は計画通りに実施された。また今年度より、「宮崎県北サイエンスフォーラム」とは別に、教員各個人の未発表データを含めた成果の学科内限定発表会「薬学科リトリート」を実施した（守秘契約締結の上で数名の学生と他学科教員も参加が許可された）。薬学科の研究費配分に関しては、今年度も計画通りに実施された。講座・研究室間、学科間での共同研究活動に関しては、数件行われ、一部の成果が学術論文として発表された。

次年度への課題として、研究成果発表に関しては、学科教員個々人が、教育・研究職として就任しているという自負を改めて持ち、教育や社会貢献等の用務が多い日々においても就業時間を有効に活用し、より一層懸命に研究を進め、発表していくことが求められる。研究発表会に関しては、次年度も計画通り継続して実施する。今後２年間は、研究促進期間とし、各自の研究を活発に実行してもらう。３年目までに査読付き論文（英文）を出してもらい、学科全体の論文数を増加させ、対外的にも本学薬学科の研究が活発であることをアピールする。また、論文数が増えることにより、科研費やその他の研究助成金の獲得につながることが期待される。

【研究施設のレベルアップのための対策】（来年度：研究環境整備委員会、研究促進委員会等）
・学科内で共通機器や実習機器等の更新機器に優先順序を付けて、計画的に機器更新を図る体制を構築する。
・大学内での高額共同研究機器の獲得やその共同使用・維持システムを構築する。
・学科内の共通機器や実習機器等の管理者を明確にし、定期メンテナンス報告や研究成果を上げる効果的な使用法等についての情報を共有する。
・学科内の共通機器室の掃除を定期的に実施し、研究機器の不具合を確認するとともに実験室の環境美化保持に努める。
・製造業者や代理店が企画する公開セミナーやWebセミナーに積極的に参加し、学会内に設置してある研究機器の活用例や関連最新機器の情報を広く収集する。

＜取り組み状況と次年度への課題＞
4月に薬学科研究環境整備委員会で共通機器や実習機器等の更新機器に優先順序を付け、計画的に機器更新を図る体制を構築した。今年度は、実験動物センターの外部評価に対応すべく、オートクレーブの更新、安全キャビネットのメンテナンスを行った。また、使用頻度の高い超純水製造装置のメンテナンス、CO_2インキュベーターの更新、全自動血球計数器の更新を行った。さらに臨床教育・研究の向上のため、患者ロボットを更新した。これらの更新等については委員会および学科会議で議論を重ねた。次年度は、蛍光顕微鏡の導入を最優先課題とし、今年度に更新できなかった高速液体クロマトグラフの一部（オートサンプラー、蛍光検出器）等も今後更新していきたい。
大学内での高額共同研究機器について、共同使用・維持システムを構築するために、4月の学科会議やオリエンテーション時にて、共通機器の使用ルールや廃溶媒、医療廃棄物の区分について薬学科教員に資料を配布、説明した。高額共同研究機器の獲得については、研究助成金情報を全教員で精力的に情報獲得、発信、応募していく必要がある。
4月の学科会議で共通機器管理講座一覧を配信することで、学科内の共通機器や実習機器等の管理者を明確にした。また、定期メンテナンス報告、修理点検の案内を管理講座からガルーンメールにより随時配信された。研究成果を上げる効果的な使用法等については、ガルーンファイル管理にてマニュアル等の更新により情報共有がなされた。
8月、3月に全講座協力体制のもと、学科内の共通機器室の掃除を実施し、研究機器の不具合を確認するとともに実験室の環境美化保持に努めた。
本年度は一部の教員が、公開セミナーやWebセミナーへ積極的に参加したが、さらに活発な情報交換をしていく必要がある。また、全教員がより精力的な研究活動を行い、学会等で研究機器の活用例や関連最新機器の情報を広く収集する必要がある。
研究施設のレベルアップに関して、薬学科の置かれている状況や教員の研究能力、さらには研究力・教育力の高い新教員の獲得もふまえ、包括的にかつ未来志向で考えることを目的として、R5年度から研究力の高い基礎から臨床まで各分野の教員で構成する研究促進委員会を発足させる。これにより、学内の共通利用実験室の設備及び機器を計画的に充実させる。

【外部研究資金獲得のための対策】（来年度：研究促進委員会、研究環境整備委員会等）
・科学研究費等の競争的資金や寄付・委任経理金等、広く資金獲得のために、各講座・研究室単位で毎年申請を行う。
・科研費獲得者の応募書類の閲覧環境の整備

＜取り組み状況と次年度への課題＞
R4年度の薬学科の外部研究資金獲得実績は、科研費新規採択数が2件、科研費継続が7件、科研費以外の競争的資金が新規3件・継続1件（CREST）、受託事業が2件（のべおか市民大学院含む）、共同研究が1件、受託研究が7件、特別寄付が18件であった。R5年度の薬学科の外部研究資金応募実績は、科研費が17件（速報値；新規採択数3件）、科研費以外の競争的資金（民間助成等）が2件であった。

	科研費以外の競争的資金情報の連絡については回覧している。しかし、まだ研究費の応募さえしていない講座・研究室があり、応募を促進させる必要がある。また、若手研究者にとって、昇進にも関連する科研費の採択率を上げる必要もある。そこで、R5年度から研究促進委員会を発足させることになった。また、科研費獲得者の獲得時の応募書類をファイリングし、庶務で閲覧できるように整備した。
地域連携力	【学科教員の地域連携力アップのための対策】（来年度：広報委員会、地域連携委員会等） ・薬学科の研究力を定期的に地域に開示・発信する。 ・開示した研究力を基盤とした地域連携産官学プロジェクトの構築を行う。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ COC+授業コンテンツの後継版に該当する亜熱帯薬食資源学および薬食同源学について、オンデマンド授業および対面授業を実施した。亜熱帯薬食資源学の受講生は142名、薬食同源学の受講生は171名で、いずれも過去最高であった。これらの授業にて、本学薬草園の紹介や薬学科と宮崎大学の共同研究成果について発信できた。今年度は2年ぶりに、受講生が本学薬草園にて薬草を直接観察することはでき、受講者から高い満足度を得ることができた。次年度も宮崎県内の他大学の学生が興味を引くような、薬学科の研究成果を発信していきたい。 2022年度も引き続き、延岡市と薬用作物に関する連携協定が延長された。2022年度は製菓会社の虎彦との新商品開発の話があったものの、新型コロナウィルス感染症が定期的に拡大したことをうけ、商品開発の会議が開催されなかった。延岡産シコンを使用したハンドクリームは、2022年度に追加製造された1000本分が順調に販売された。2023年度はハンドクリームに関するパッケージデザイン等の変更を行うこととしており、延岡でのシコン生産に関するストーリー（一部に大学が栽培研究を行っていることなど）をパンフレット等に組み込んでもらうよう依頼している。その他、シコンについては2022年12月28日の夕刊デイリー新聞に取り上げられたように、文化財への活用についても検討を行うとともに2023年度には文化財関係者との共同研究を展開する。 地域薬剤師の職域拡大のために無菌調製およびフィジカルアセスメントの研修会を地域に向け行った。さらに、分かり易い服薬指導法の普及のためにADME人形及びADME図鑑による服薬指導法に関する講演を地域内外に向けオンラインで行った。宮崎テクノフェア及び東九州ものづくり交流展に参加し、一般市民に心音・呼吸音・脈拍（聴くぞう使用）及びADME人形を体験してもらった。地域薬剤師によるADME人形に関する学会発表も行われた。今後もフィジカルアセスメントにADME人形を加えた本学オリジナルの新たな教授法を各地の実施研修会やオンライン講義・研修会およびイベント参加や学会発表を介し全国へ発信できる体制を構築する。地域薬剤師との連携・交流を通し、制作した病態・薬物治療に関するコンテンツ等も普及させていきたい。 『地域連携委員会の設置』 「地域連携委員会としての目標」 ・西臼杵郡薬剤師会や宮崎県薬剤師会、本学卒業生との連携体制の強化 ・延岡市教育委員会との連携強化 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ 現状として、西臼杵郡薬剤師会や宮崎県薬剤師会、本学卒業生との連携体制は、各教員個人の関係性に依存する部分が多かった。すなわち、これまでも個別に薬剤師会や卒業生からの依頼を受けて講演を行ったり、個別で意見聴取が行われることはあっても、それが薬学科全体に周知される機会はなかったとも言える。2023年度からは薬学科は地域連携委員会を設置し、特に地域の薬剤師会である西臼杵郡薬剤師会および宮崎県薬剤師会との連携体制の強化をはかる。具体的には、薬剤師会の卒後教育ワーキンググループに地域連携委員会の委員が参加し、地域の薬剤師が現場で必要とするスキルアップのための講演会の企画・立案に参加するとともに、講演に適当と考えられる大学教員の紹介を行い、地域の薬剤師会との連携体制を強化する。本取り組みについては、2023年度から開始し、卒後教育ワーキンググループでの議事内容や卒後講演会の企画数、講師としての大学教員の参加回数によって活動内容をチェックする。講演会では毎回参加した薬剤師にアンケートをとり、活動内容の評価を行う予定である。 本学の卒業生との連携体制を強化するため、同窓会委員会と連携する。年1度の同窓会もしくは同窓会の案内にアンケートを同封し、大学での教育内容と現在の医療現場の間で感じるギャップに関する調査を行い、今後必要となる教育について情報提供を受ける予定である。

	延岡市教育委員会と連携するため、延岡市内の中学生や高校生の大学訪問、模擬講義等を積極的に受け入れるとともに、中学校・高校教員および延岡市教育委員会に対し、大学側に期待している訪問時のイベント内容や講義内容について議論する。この取り組みによって義務教育→高校→大学における学びの連続性を延岡市教育委員会と共有する。
総合力	・アドミッションポリシー（AP）に掲げている「信頼される有能な薬剤師」としての豊かな人間性と医療人としての高い潜在能力を有する専門職育成を目指して、精力的に学生募集を行い、定員充足を目指す。 ・ディプロマポリシー（DP）の実現を念頭に、アセスメントポリシーを充実してカリキュラムポリシー（CP）の実践に取り組み、卒業まで一貫した統合薬学教育を行う中で100%進級を目指す。 ・学科内の研究力の充実を目指し、研究成果を学外に発信し各種研究費の獲得や地域連携強化を図る。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ 今年度も、より低学年時点での学習の定着度を高めてディプロマポリシーの達成度を高めていく方策、すなわち、1年生の下位クラスに対して学習習慣を形成させて一定の学力向上をもたらすことを期待したリメディアル講義「薬学数学演習」をはじめ、低学年でのすら等の基礎学習、その他リメデイアル講義、高学年における思考力アップの学習形態や時間配分の見直しなどを継続して実施したが、顕著な効果は現時点において現れていない。次年度以降は、コアカリキュラム改訂がなされるタイミングで、より効果的なカリキュラムの編成や見直しを行っていく必要がある。またディプロマサプリメントなどを効果的に活用してディプロマポリシーの達成度の分析評価、教授内容の検証、効果的な時間割の年度計画や見直しなども進める必要がある。これらの改善を進めていくため、次年度から「カリキュラム委員会」を新設して対応にあたることを決定した。一方、外部評価において「シラバスとアセスメントポリシーの対応が分かりづらい」との指摘などがあったことも踏まえ、カリキュラム関係の改善を進める必要がある。 学科内の研究力の充実を目指し、今年度は、研究成果を学外に発信し各種研究費の獲得や地域連携強化を図る目的のため、学科内限定での新たな研究発表会「薬学科リトリート」を立ち上げた。また科研費採択実績のある教員による採択書類の学内閲覧を可能とする制度の導入が図られた。今後も継続して実施し、学科内の研究力の向上につなげていく。詳細は「研究力【学科教員の研究力アップのための対策】」を参照のこと。
3つのポリシーからの総評	・アドミッションポリシー（AP）に掲げている豊かな人間性と医療人としての高い潜在能力を有する専門職育成を目指して、学科一丸となって九保薬学のブランド化を図り、薬学のブランド力を広範に発信する方策を具体的に検討する必要がある。 ・アセスメントポリシーの充実により、ディプロマポリシー（DP）とカリキュラムポリシー（CP）の関連がより明確になり、卒業まで一貫した統合薬学教育を行える体制の基礎が構築できた。しかし、学生の意識としてこの学びの流れが十分理解されていないと考えられる。このため、この体制を学生・教員に周知・浸透されることにより、100%進級、100%ストレート卒業、100%国家試験合格を目指した教育を行う。 ・今後、コロナ禍で行えなかった「宮崎県北サイエンスフォーラム」や地域連携力のアップを図り、また、共通機器更新を含めて学科内の研究力の充実に努める。まだ成果は十分に得られておらず、今後も薬学科のブランド力の一環として研究成果を学外に発信し各種研究費の獲得や地域連携強化を図る必要がある。
次年度への展望 （まとめ）	今年度の外部評価では、本学科の教育・研究体制に関して厳しい指摘を受けました。したがって、次年度に向けて再来年度から新たに始まる改訂薬学コアカリキュラムの意義・意図を反映したAP, DP, CPの改正や薬学科の教育・研究体制に対する厳格な内部質保証制度の構築・維持が喫緊の課題となります。学生募集対策、留年生対策（退学者対策）、研究力の充実や卒業率・国試合格率アップは、本学科の抱えている大きな課題です。さらに、ストレート卒業率やストレート卒業学生の国家試験合格率が評価されるようになり、本学としてはこれらの課題を着実に解消できる方策を練ることが肝要となります。先に述べた新たな薬学科の教育・研究体制に対する内部質保証制度の確立に当たり、本学のこれらの諸課題が解決できるような取り組みを反映して本学科のブランド力を構築・維持する必要があると思われます。

	また、今後、入学前教育からはじめて、自らが考えて学ぶことのできる学生の育成を主眼として、各学年での「学生が主体的に学ぶ意欲をもち、学ぶ喜びを体感できる」教育・環境の設定が不可避であると思います。このためには薬学科教員が本学の教育・研究活動に各自が意識して取り組み、その中で教員間の和・信頼を大切にすることは言うまでもありません。薬学科教員の奮闘あるのみです。

九州保健福祉大学　薬学部　動物生命薬科学科
2022 年度　第 2 期　中期目標・中期計画　〈3 つのポリシーを踏まえて〉

ビジョン （教育目標）	九保大だから学べる　「薬に強い動物・動物性食品の専門家」として人々の幸せをプロデュースできる能力を身につけた人材を輩出する。
学科からのメッセージ	動物生命薬科学科の教育目標は、国家資格の愛玩動物看護師合格や実験動物１級技術者認定試験合格のもっと先にあります。現在、“地域創生”に至る国策の一つとして、産業動物や食の安全とそれに基づく関連産業の発展が求められています。本学では、入学後の基礎科目から 4 年次の卒業研究までを通して自ら考える力を高め、動物、医薬品および動物性食品に関連した「薬に強い動物看護師」、「薬に強い実験動物技術者」、「動物・薬・食に詳しい学芸員」、として活躍できる専門知識を習得すると共に、さらに人々の幸せをプロデュースできる能力（知識・技能・思考力・態度）を涵養します。
教育力 （ブランド力） 「学修成果の可視化」の観点を含む	教育力の可視化 【学生の主体的な学びの対策】DP　CP1〈2〉CP1〈3〉CP１〈4〉CP2〈8〉CP3〈15〉 ・アセスメントポリシーを明確化して全学生に周知する。 ・飼育当番、臨床実習及び卒業研究について、問題解決能力を高める指導方法により学生の思考能力を高める。 ・卒業研究レポートの評価表を作成、運用する。 ・半期あるいは通年 GPA をチューター面談に活用し、学修成果を確認・指導する。 〈取り組み状況と次年度への課題〉 アセスメントポリシー（学修成果評価方針）については学科で独自に作成した学修マニュアルを配布、前後期のオリエンテーションで全学生に周知した。飼養・管理・疾病対応などを含む動物飼育当番、臨床実習及び卒業研究について、問題解決能力を高める指導方法により学生の思考能力を高めた。卒業研究レポートについては、従来からの評価項目、評価基準にしたがって評価を実施した。GPA は進級判定あるいは資格取得判定の基準など学修評価として活用、それに基づきチューター面談時に学生を指導した。 次年度も本取り組みを継続する。 【基礎国語力増進への対策】CP1〈1〉CP2〈10〉 ・e-learning（すらら - 国語）を積極的に活用し、学修成果を可視化、有用性を検討する。担当者は、適応時間数に合わせて学生に学習させる項目を吟味する。 〈取り組み状況と次年度への課題〉 新入生に対しては「すらら－国語」を実施した。各学生の進捗度を調べ、課題達成率を各学生に周知し、参加を促した。 次年度も１年生は「すらら－国語」を継続、活用する。 【国語以外のリメディアル教育への対策】CP1〈6〉CP2〈10〉 ・英語は英語村の活用により実施 １～４年生の学年ごとに週１回以上の定期的受講を推奨する。 ・基礎科目の生物Ⅰ、化学Ⅰ、数学Ⅰはリメディアルの内容含む。 〈取り組み状況と次年度への課題〉 英語は英語村を活用、１年生に対しては英会話入門コース、また、フィリピン留学を希望する１～４年生を対象とした TOEFL 対策クラスへの定期的な受講・参加を促した。参加は２年生が主であった。 次年度も、全学年において、活用人数のさらなる増加を図る。 生物Ⅰ、化学Ⅰ、数学Ⅰはリメディアルを実施した。特に、生物は入学前教育の重要科目として、昨年同様に、課題学習（問題集）を実施、個別に指導した。

また、生物Ｉの初回授業で、生物基礎学力試験を実施、今後の学習資料とした。

次年度も本取り組みを継続する。

【資格試験合格率アップへの対策】CP2〈7〉CP2〈12〉CP3〈11〉
愛玩動物看護師国家試験及び実験動物１、２級技術者の資格試験対策について「学修マニュアル」に従って実施する。
〈取り組み状況と次年度への課題〉
学科で独自に作成した、学修マニュアルに記述の、資格取得に必要な科目、取得学年、必要な成績などに従って、愛玩動物看護師受験に際しては、国家試験作問委員を除く、4名の専任教員が受験対策授業（動物臨床演習）にて模擬試験（過去問題活用）を実施、さらに自主学習の推進、進捗確認の実施を行い。合格率アップの対策を実施した。
愛玩動物看護師の第一回国家試験は2月19日（日）に実施され、新卒者の合格率は93%（合格者14/15名）であった。なお、参考として既卒者・在学者の大学別合格率では、本学は95.5%で、全国2位の高い合格率であった。

実験動物１級技術者においても学修マニュアルに従って、筆記試験においては学習習熟度の確認試験、実技試験は技能習得度の確認試験を複数回実施し、合格率アップの対策を実施した。本年度の１級の一次・二次試験（総合）合格者100%（合格者5/5名）（参考：全国合格率69%）、２級の合格者１名（1/1名）の優れた結果であった。

愛玩動物看護師資格並びに実験動物技術者資格については、次年度も学修マニュアルに従って、試験対策を引き続き実施する。

【学科教員の教育力アップの対策】CP1　CP2
・学科FD（学科教員研修会）は未実施。
・授業に関する相互見学を勧奨する。
・学位取得、論文作成並びに学会・研修会等への参加（WEB参加を含む）を推奨する。

〈取り組み状況と次年度への課題〉
学科FDは未実施であったが、教員相互にWEB授業の円滑な進め方、評価方法などに関する情報交換が図られた。　授業に関する相互見学はごく少数であった。
学位取得に関しては、学位未取得者２名（2/8)、論文作成中。学会・研修会等への参加は、コロナ禍のために、少数の学会への参加が見られたのみであった。

次年度も引き続き、学科FD研修の実施、授業の相互見学、学位取得並びに学会・研修会等への参加、論文作成を推奨する。

【教育施設のレベルアップのための対策】
・科学研究費などの競争的外部資金に応募する。
・2022 年度から愛玩動物看護師の新カリキュラムがスタートすることで、教育備品の充実が必要である。

〈取り組み状況と次年度への課題〉
科学研究費の競争的外部資金に応募（5/8名）をしたが、新規採用には至らなかった。
継続として、科研費の基盤研究１、分担研究２。

教育施設設備の新規購入はなく、今後も調査を継続し、さらなる充実を図りたい。
現在、超音波診断装置の購入を第一優先に位置付けている。

次年度も本取り組みを継続する。

【就職率アップへの対策】DP　CP2〈11〉CP2〈12〉
・キャリアサポート委員及びチューターの面談指導等を積極的に行う。
・学科会議等で学生の就職活動状況を共有する。
・教員―キャリアサポートセンター並びに学生―キャリアサポートセンター間の連携を密にする。

・学生にインターンシップへの参加を促す。
・学生にキャリアサポートセンターが主催する就職対策講座への参加並びに模擬試験受験を促す。

〈取り組み状況と次年度への課題〉
本年度就職率：94%。
（就職の意思有：16/17 名、就職１名は本年３月の獣医師国家試験合格者）

担当教員及びチューター面談指導を行った。
キャリア―サポートセンターと連携、WEB を活用しての企業の就職説会（企業人事担当者との面談）等を行った。
インターンシップへの参加は、コロナ禍の影響で参加できなかった。
公務員模擬試験は全学的に申込者が少なく、実施できなかった。

次年度も引き続き、キャリアサポート委員並びにチューターによる学生の個別面談、キャリアサポートセンターとの連携を密にすることで、学生の就職先の希望動向、求人情報などを共有する。公務員模擬試験の活用を促す。

【学生生活サポート対策】
・一般に、チューターと担当学生が参加する研究室会や個別面談、又はこれに代わる方法により、チューターの学生に対する指導を実施する。
・特定の学生には、保護者とのコミュニケーションを取りながら、学生課並びに健康管理センターと連携して学科長及び各チューターが指導する。

〈取り組み状況と次年度への課題〉
通常は、チューターを中心とした個別面談にて学生指導、また、一部の学生に対しては学生課並びに健康管理センターとの連携による学生指導を実施した。　さらに、保護者と電話、メール等による相談を積極的に実施した。
引き続き、チューターを中心とした個別面談、学生課ならびに健康管理センターと連携を密にした学生指導を実施する。

【退学者防止対策】
・教務課、学生課並びに健康管理センターと連携、早期のチューター面談にて対策する。
・チューター会、茶話会等を開催して、学生間、学生―教員間でのコミュニケーションの場を設ける。

〈取り組み状況と次年度への課題〉
教務課からの授業出席状況の情報、学生課からの情報提供に基づき、早期のチューター面談にて対策を行った。本学科では、退学者はまれであるが、本年度は１年生１名、2 年生１名（薬学科転科生）の退学者があった。その事由は、2 名共に学力不足が原因ではなく、1 名は精神的な問題を抱えた学生（通院をしていたが、不登校）、他は進路変更（就職・結婚）であった。精神的な問題を抱えていた学生に対しては、健康管理センターとも連携し、カウンセリングを実施して対策している。
チューター会は、コロナ禍で３年間未実施となっている。次年度は、新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら、大学の方針に従う。

【学生指導力の向上】
・学生がもつ諸問題に対して、保護者とのコミュニケーションを取りながら、学生一人ひとりの適正およびモチベーションを見極めた上で、適切な指導を行う。

〈取り組み状況と次年度への課題〉
チューター面談並びに講義等を通じ、諸問題をできるだけ早期発見し、指導を行った。
学生情報は、学科会議において教員間で共有、対策を相談した。

次年度も本取り組みを継続する。

	【社会人としてのマナー対策】DP３ ・教員―学生間あるいは学生間の挨拶運動を積極的に実施する。 ・学外実習の事前指導及び飼育実習によりマナー対策を実施する。 〈取り組み状況と次年度への課題〉 挨拶運動については教員から積極的に挨拶をするとともに、学生に対しては挨拶の励行を促した。動物病院、牧場あるいは博物館への学外実習の際には、事前指導及び飼育実習によりマナーを指導・実施した。 次年度も本取り組みを継続する。
募集力	【学科入学定員確保のための対策】 ・九州圏内の大学では唯一、指定の科目を修得することで、国家資格の愛玩動物看護師受験資格を卒業時に取得することができることを広報する。 ・就職、資格試験、大学院進学、留学（獣医師誕生）などの高い実績を広報する。 ・これらの実績を、土日見学会、オープンキャンパス、入試広報パンフレットなどで活用する。 〈取り組み状況と次年度への課題〉 オープンキャンパス、土日見学会などで、就職、各種資格試験結果、進学などの実績、また、本年度（2022）新入生から、卒業時に、国家資格の愛玩動物看護師資格の受験資格が取得可能な新カリキュラムがスタートしたことを強調した広報活動を実施した。さらに本年度もフィリピン国立大獣医医学部編入留学生の１名が獣医師国家試験に合格、これまでに合計９名の獣医師（日本）が誕生したことも広報した。 【学科の魅力発信】AP ・就職、資格試験、進学、留学などの実績を整理(数値化)・可視化し、広報活動に活用する。 ・九州圏内の大学では唯一、2022 年度新入生から卒業時に国家資格の愛玩動物看護師の受験資格が取得できることを広報活動の重点項目とする。 ・フィリピン国立大学獣医学部への編入留学制度を活用した獣医師誕生の実績を広報活動に活用する。 ・実験動物技術者、学芸員資格も取得可能であることを広報する。 ・野生動物教育プログラムを広報活動に活用する。 ・社会で活躍している卒業生の情報を収集、広報活動に活用する。 〈取り組み状況と次年度への課題〉 学科で毎年独自に作成した学修マニュアル並びに学科パンフレットなどで実績を整理（数値化)、見学者などへの広報資料とした。 学芸員養成課程の学生が延岡市役所（１F 市民スペース）での展示会を開催（7/19～7/26)、広報活動の一つとして活用した。 国家資格の「愛玩動物看護師」については、国が開示した愛玩動物看護師法施行スケジュールを活用して広報活動を実施した。フィリピン国立大学獣医学部への編入留学制度並びに卒業生の情報、並びに合計９名の獣医師が誕生したことを学科パンフレット等で広報活動に活用した。 次年度も本取り組みを継続する。
研究力	【学科教員の研究力アップのための対策】 ・学術論文発表、学会発表並びに学会・研究会への参加を推奨する。 ・学位（博士）取得を推奨する。 ・学科内あるいは他学科との共同研究活動を推進する。

	〈取り組み状況と次年度への課題〉 論文は共著論文、その他作成中のもの、ともに少数であった。 学会等は学会・研究会への参加は一部の WEB 開催のものに限られ、結果として参加は少なかった。 学位取得に関しては、学位未取得者は２名であり、現在、論文作成中である。 学科内あるいは他学科、あるいは他大学との共同研究は少ないものの実施した。 次年度も本取り組みを継続する。 【研究施設のレベルアップのための対策】 ・企業セミナーあるいは学会・研究会等に参加し、最新研究機器の情報を広く収集する。 〈取り組み状況と次年度への課題〉 「Out of kidZania in のべおか　2022」に本学科が「動物看護師のお仕事」にて参加、その際に、超音波画像診断器（購入希望第一優先機器）を企業から貸与でイベント効果を高めた（犬の臓器画像観察）。 次年度も研究機器の情報収集を継続する。 【外部研究資金獲得のための対策】 ・科学研究費などの競争的外部資金へ応募する。 〈取り組み状況と次年度への課題〉 ・科学研究費の新規採択は無かった。継続として、科研費の基盤研究１，分担研究２。 次年度も本取り組みを継続する。
地域連携力	【学科教員の地域連携力アップのための対策】 ・地域連携プロジェクトの調査・実施。 ・市民大学講座などで本学科の教育・研究の成果などを発信する。 〈取り組み状況と次年度への課題〉 ・地域課題としての空き家に放置された地域社会に関わる記録・記憶の保存・空き家の活用の実施（日向市建築住宅課・門川町教育委員会など）。 ・地域防減災を目的とした企画展示活動（延岡市危機管理課）を実施。 ・認知症予防を目的とした企画展示活動（延岡市立図書館）を実施。 ・のべおか子どもセンターにて１講演（延岡市教育委員会）を実施。 ・国土地理院自然災害伝承碑登録にかかる調査記録化と情報提供（宮崎市危機管理課）を実施。 ・市民大学講座では１講演を実施。 次年度も本取り組みを継続、活動の周知化を行っていく。
総合力	・動物及び薬の専門職としての学力と、臨床、研究等の職業的現場に対応した知識・技能・態度を修得することができる人材育成を目指し、また高い就職率、資格試験合格率を外部に発信することができる教育を実践する。 ・あらたな国家資格の愛玩動物看護師、高い資格合格率並びに就職率、さらにフィリピン国立大学獣医学部編入留学制度を利用した獣医師の合格実績（9名）など、学科の魅力を学外に発信することで、入学定員の充足を目指す。
3 つのポリシーからの総評	アドミッションポリーシー（AP）に掲げた、動物と薬に関する専門性の高い職業への就業意欲、基本的な国語力並びに生物学の知識を修得した学生の育成に努める。動物看護師は、本年度から、念願の国家資格の「愛玩動物看護師」となった。学生募集では、国家資格の愛玩動物看護師（受験）資格取得を柱とする。

	本年度の新入生からは農林水産大臣及び環境大臣が指定する科目を開講する大学として、新カリキュラムがスタート、国家資格にふさわしい愛玩動物看護師の育成の充実化を図る。ディプロポリシー（DP）に掲げた人材を育成する基盤としては、基礎学力の向上が必要で、入学前教育における生物の課題学習、入学後に実施している「すらら：国語」、生物学、化学、数学等のリメディアル教育を今後も継続する。
次年度への展望（まとめ）	本年度（5月1日）に「愛玩動物看護師法」が全部施行され、本年度入学生から愛玩動物看護師受験資格取得が可能な新カリキュラムがスタートした。旧カリキュラムの学生も本学においては農林水産大臣及び環境大臣（以下主務大臣）が指定する科目（旧カリキュラム）を修めかつ主務大臣が指定する講習会を修了した場合にのみ、国家試験を受験することができたため、本年度の第一回国家試験においては、本学の本年度卒業生も受験ができ、その結果、高い合格率を得た（93%　14/15）（既卒者・在学者の大学別合格率では、本学は95.5%で、全国2位の高い合格率であった）。 九州圏内の大学では唯一、国家資格「愛玩動物看護師」受験資格が取得できる学科にふさわしい教育の質の確保並びに施設設備の拡充を図り、これらの特徴を学生の教育並びに学生募集に活かしたい。また、今後、高い国家試験合格率を達成することが、学生募集への大きな弾みとなるために、国家試験対策への取り組み方を検証しながら、高い合格率の継続を目標とする。 基礎学力向上のため、1年次では「すらら：国語」などを利用したリメディアル教育、英語村を活用した英語教育の推進も継続する。さらに2年次においては、留学を目標としたTOEFL対策に特化した英語授業（選択）を実施する。 本学科では休学、留年あるいは退学する学生は少ないが、精神的な面での支援が必要な学生が、休学あるいは退学へつながっている傾向がみられる。その対策としては、早期のチューター面談の実施、教員間の情報の共有化、教務課、学生課並びに健康管理センターと連携したカウンセリングをさらに活用する。 また、将来の目標を早期に想定するための方策として、1年次に動物病院などの外部インターンシップを継続・実施する。さらにはチューター面談の充実あるいはキャリアサポートセンターと協働して進路対策指導をしていく。これらの対策から、学生一人一人の目標をより明確に設定させ、学生の学習意欲の向上につなげる。

九州保健福祉大学　生命医科学部　生命医科学科
2022 年度　第 2 期　中期目標・中期計画　〈3 つのポリシーを踏まえて〉

ビジョン （教育目標）	九保大だから学べる「高度な倫理観と専門知識を持った医療技術者である臨床検査技師、臨床工学技士、細胞検査士、ME 技術者」として、人々の幸せをプロデュースできる能力を身につけた人材を養成・輩出する。
学科からのメッセージ	生命医科学科では、本年度から臨床検査技師と細胞検査士に加えて、臨床工学技士の資格取得も可能となり、全国でも珍しい臨床検査技師と臨床工学技士の国家資格ダブルライセンスの取得もできるようになった。このことを踏まえ、当学科では、医療専門職たる臨床検査技師、臨床工学技士、ならびに細胞検査士、ME 技術者、さらに生命医科学者として活躍できうる実践力、専門的知識と技術、高度な倫理観、自己実現意欲と能力、リーダーシップ等を身につけた、社会に有為な人材を育成することを目指す。
教育力 （ブランド力） 「学修成果の可視化」の観点を含む	**教育力の可視化** **【学生自ら考える力のアップへの対策】**DP（4,5）、CP1（3,5） 卒論評価用ルーブリックの策定し、実施計画を立案する。具体的には、卒論評価用ルーブリックの作成、卒業評価用ルーブリックに基づいた卒業研究指導マニュアルの作成、卒業研究発表会の計画立案などを実施する。現在実施している卒業研究発表においては、内容とともにプレゼンテーション技術の向上も図れるよう計画を立てる。 実習または演習科目で積極的にアクティブラーニングを導入する。現在アクティブラーニングを実施している臨床免疫学実習Ｉを継続しつつ、アクティブラーニングを採用する科目を積極的に増やす計画を策定する。その一環として系統講義をベースにアクティブラーニングを導入する手順を明確化する。アクティブラーニングを導入した科目は効果的な SGD（small group discussion）を計画し、グループごとに成果発表をさせる。学生が自ら学ぶための様々なアイディアをまとめ、具体的な指針案を策定する。 **■2022 年度の取り組み状況** 卒論評価用ルーブリックに基づいた卒業研究指導マニュアルに沿って卒業研究が実施された。本マニュアルは卒業研究を中心に臨床検査技師としての知識と技術の向上も兼ね相乗効果が得られるように工夫されている。実際に質の高い独創的な卒業研究成果が得られた。さらに臨床検査技師国家試験の模擬試験でも昨年度に引き続き全国平均より本学の平均値が 5～10 ポイント高い成績が得られた。アクティブラーニングに関しては実施可能な科目について継続的に実施されており、自ら学習し自主的に考える習慣が定着しつつある。 **■2023 年度への課題** 卒業研究指導マニュアルは十分な効果が得られていると考えられることから次年度も学生に周知徹底し、総合的な学力の向上を目指す。アクティブラーニングを採用している科目については最大限の効果が得られるよう、その成果を発表する場を設けてブラッシュアップするなど完成度を高める作業を行い学生のディスカッションやプレゼンテーションの能力を最大限引き出す。

【基礎国語力増進への対策】CP1（1）

■2022 年度の取り組み状況

国語力ならびに専門科目の学習に必要な基本的な知識の涵養を図るため、生命医科教員によるオムニバス科目であるコミュニケーション論を 2021 年度より継続して実施している。

コミュニケーション論では、専門科目、特に多くの実習で必須となるレポートの作成を念頭に置き、生命医科学系の大学生に必要とされる適切な用語、文法、構成等についても講義した。さらにグループワークによるプレゼンテーション、あるいは個々の課題としてレポート作成も実施している。これらの課題に対する取り組みにより、相手に正確に伝えること、自身に伝えられていること理解する能力の向上を目指した。

また、本講義以外の様々な講義・実習で積極的にレポート作成を課し、提出されたレポートを教員が評価または添削し、場合により再提出を求めるなどフィードバックに努めている。

■2023 年度への課題

全学で実施している国語力の評価試験により、1年間を通じで国語力が平均化され、文章の内容を理解する事すら困難な学生は少なくなったものと考えられるが、学生個々の差異はまだまだ大きく開いている。

著しく国語力が乏しい学生に対しては、新たに何らかの手当てを行う事を検討している。

また、レポートで使用される文語体は日常的に使う口語表現とは異なるため一朝一夕に習得する事は困難である。論理的な文章の組み立ても自身が繰り返し行う事により培われるため、次年度も引き続きレポート課題の提出、フィードバックを実施する必要がある。

【国語以外のリメディアル教育への対策】CP1（1,2）

■2022年度の取り組み

前年度同様、合格が確定した学生に対して、入学までの貴重な時間を有効に活用し、大学での学修へのスムーズな移行が可能となるような取り組みを行った。具体的には、入学前教育として、生命医科学科における学修に必要となる主要科目（数学、生物、化学、物理）の基礎学力を高めるべく、以下のように各科目の学修課題を実践した。

【数学】分数、平方根、指数、対数、比例計算などの基礎的な計算力を必要とする計算問題を解き、自己採点したものを提出する。

【理科（生物、化学、物理）】以下の問題集で学修・解答後、自己採点したものを提出する。臨床検査技師コース（細胞検査士含む）希望者は生物と化学、臨床工学技士コース希望者は生物と物理、まだ決めていない人は、どちらかを選択して学習する。（問題集:トレーニングノートα生物基礎／α化学基礎／α物理基礎　増進堂・受験研究社）

課題での学修後、わからないところは教科書等で復習し、入学後も各課題を繰り返し利用することを推奨した。

■2023年度への課題

入学前教育の目的として、学修へのモチベーション維持や大学での学習の事前認識による不安解消がある。特に、高校までの学修科目の復習を行い、改めて基礎学力を確認しておくことは、後者（大学教育への不安解消）に大きく寄与することになる。

本学科における授業は、科学や医学・医療情報を含んだ内容であるため、国語力に加え、数学・理科などの理系的素養が当然重要となる。入学前からこれらの科目の基礎学力を高めておくことで入学後の学修をスムーズにすると共に、4 年後の臨床検査技師と臨床工学技士国家試験合格への大きな礎になるはずであるという認識の下、上記のような取り組みを継続することが必要だと考えられる。

また、上記の科目以外にも【英語】のリメディアル教育も重要と考えられるが、その学修法については、今後の状況を見ながら、検討すべき課題であると考える。

以上のような項目の実践を徹底し、学生の習熟度の均一化を図るために、必要に応じて、担当教員による個別指導や学生同士の学習に対するサポート体制を構築することが肝要である。そして、リメディアル教育の成果達成に努めつつ、進学時に、専門科目の学修に支障を来さないよう、読解力、理解力を高めるような指導、サポート体制を継続していくことが重要だと思われる

【国家試験合格率アップへの対策】CP2（12）

■2022 年度の取り組み

①前期で国家試験の対象となる全科目の講義を毎日行い、翌日に小試験を実施した。さらに2週間の講義内容に関する中試験を実施し、学修の成果を確認しながら基礎的な学力を養成した。

②後期では国試の模擬的試験について詳細な解説を行い、応用力と学力の向上を図った。

③前期・後期を通し、外部講師による実践的な講義を行った。

④臨床検査技師国家試験模擬試験を毎月実施し、各学生の実力を把握させるとともに問題ごとの正解率を担当教員に提示し、本学の学生が苦手とする範囲を克服するきめ細やかな指導を行った。

教員が一丸となってこれらの取り組みを行った結果、全国レベルの臨床検査技師国家試験模擬試験で毎回全国平均より高い平均点数を得ることができた。最終的に2023年2月に実施された国家試験で受験生全員の合格を達成することでき、本学科の国試対策プログラムの有用性が実証された。

■2023 年度への課題

これまでの取り組みが功を奏したことから、現在までの国試対策プログラムを継承しつつ、外部講師による講義のタ時期や講義内容・試験内容を調整し全体の完成度を高めたいと考えている。

【学科教員の教育力アップの対策】

■2022 年度の取り組み

昨年度と同様、教員の教育力アップの一つの指標として、臨床検査技師国家試験の模擬試験の分野別得点率を全国平均と比較してみたところ、ほとんどの分野で全国平均を上回っていた。昨年度に続き、個々の教員がそれぞれにさらなる教育力アップに取り組み、それが功を奏したものと考えられる。

さらに、国家試験受験者は全員合格し、その平均点が約 144 点となり、昨年の約 135 点より大幅にアップしていることも、個々の努力による教育力アップの結果だと考えられる。

■2023 年度への課題

国家試験の合格率というわかりやすい指標で教員の教育力アップが示されたので、昨年度を踏襲してさらなる教育力アップに努める。また、昨年度同様学会等での最新知識の吸収と、その学生教育への還元も引き続き積極的に実施していく。以上のような対策をもって、ディプロマポリシーである「学生が臨床検査技師、臨床工学技士、細胞検査士、ME 技術者、さらに生命医科学者として活躍できる人材」となるよう、カリキュラムポリシーに沿った教育を引き続き効率よく実践していく。

【教育施設のレベルアップのための対策】

■2022 年度の取り組み状況

After コロナを鑑みて、「対面授業＋遠隔オンライン授業（ハイブリッド型）」をさらに充実化させ、未来型教育システムの構築と教育の質のワンランクアップを目指した。結果的にコロナ収束に近づいた時点で、学生の気づきと主体的な学びを促進するデータ駆動型教育の実現を目指した。学生の五感に訴えかける AL 専用の ICT ネットワーク環境スペースを整備した。これらの環境整備には、設備投資が必要となる。文科省・厚労省等の補助金情報を収集し、積極的に応募を促す体制を整えたが、獲得には至らなかった。また、豊かな人間性と高度な倫理観・専門知識を持った医療技術者である臨床検査技師、臨床工学技士、細胞検査士、ME 技術者を養成するため、教育に必要不可欠な医療機器等の更新、さらには教養図書および専門図書の充実化も一部実現できた。社会変化に対応する未来型次世代教育の実践環境を構築するためのプラットフォームであるユニバーサルパスポート RX を活用し、DX 時代に向けてのデジタル人材育成の体制と教育環境のレベルアップも一部実現できた。

■2023 年度への課題

次年度は、コロナ収束と VUCA の時代を鑑みて、未来型教育システムの構築と教育の質のワンランクアップを目指す。同時に、Microsoft Teams を利用した九保大式オンライン遠隔授業システム構築も図る。学科の教務担当教員が学生の気づきと主体的な学びを促進する教育環境の整備と専門教育に関する相談体制を整える。生命医科学科棟では学習支援のための教材や DVD 鑑賞もできる演習ルームを確保し、課題などの自主学習のスペースを最適化する。また、コミュニケーションの学習支援のためのプレゼンテーションルームを整備し、企業情報の閲覧や就職活動に関する相談などができる最適スペースを整え、さらなる学習・教育環境を進

化させる。昨年度に引き続き、豊かな人間性と高度な倫理観・専門知識を持った医療技術者である臨床検査技師、臨床工学技士、細胞検査士、ME 技術者を養成するため、教育に必要不可欠な医療機器等の更新、さらには教養図書および専門図書のさらなる充実化を図る。さらに、カリキュラム・ポリシーに基づく教育評価、ディプロマ・ポリシーならびに学修ポートフォリオに基づく学位授与を確実に実践するために、未来型次世代教育の実践環境を盤石にするためのユニバーサルパスポート RX をフル活用する。教育 DX ならびに Society5.0 に向けての人材育成対応型の教育環境のレベルアップを目指す。

【就職率アップへの対策】DP

■2022 年度の取り組み

キャリアサポートセンターと綿密な連携関係を構築し、高い就職率を目標とした。宮崎県、九州地区、西日本の医療施設に、九州保健福祉大学生命医科学部生命医科学科の卒業生をアピールする為、就職懇談会など実施可能な項目を実施し、同時に履歴書作成・面接対応などについても指導した。また、国家試験後にも病院及び企業を招聘して説明会を実施した。今年度は取り組みが奏功し、現時点での就職率は例年より高いと思われる。

■2023 年度への課題

地域に関わらず臨床検査技師・細胞検査士が活躍できる医療施設へ積極的に出願するよう入学時より学生に指導する。また、学生が資格試験を心配する余り、就職試験の開始時期が遅れることの無い様、合格圏内に近い学生には早期からの就職活動開始を指導する。

【学生生活サポート対策】

目標

学生生活のサポート対策として以下の事を重点的にサポートすることを目標とする。

①授業、実習への欠席低下のサポート。

②退学防止のための学生へのサポート。

③学力向上のためのサポート。

■2022 年度の取り組み

1）欠席の多い学生に対しチューターや科目担当者から電話やメールにより連絡し話を聞き、なるべく出席しやすいよう指導を行なった。

2）退学する学生は、①授業についていけない。②思っていた進路と違った。という事がほとんどである。そのため①授業についていけない。学生については、教員、学生間のコミュニケーションを図り質問しやすい環境つくるよう努めた。また、②思っていた進路と違った。という学生に対し大学北側の植物園へ学科で遠足に行き、上級生と話しやすい環境をつくり、勉強についても尋ねることができる環境つくりを行った。

3）学力向上へのサポートとして質問しやすい環境つくりも込めた 2）のコミュニケーションをとる機会をつくりと同時に教員が積極的に声掛けを行い、学生が教員に話しやすい環境を目指した。

■2023 年度への課題

1)ごく少数であるが電話やメールでも連絡の取れない学生がいる。学生とのコミミュケ―ションをとれるよう最善を尽くすことが次年度の課題の一つである。

2)学力向上のため、これまで以上に教員へ質問しやすくなるよう教員自ら発信する。

【学生指導力の向上】

■2022 年度の取り組み

基礎学力の向上、学力不足の解消を目的として入学前教育(数学、生物、化学)、入学後には国語力教育のための「すらら」を実施した。専門課程(教科)では、グループワークやアクティブラーニング、個別質疑応答形式の授業を取り組むことに努めた。教科毎に演習形式や授業内で国試に則した内容を盛り込み専門知識習得のアップや国家資格取得の意識付けを行った。

入学後のコーチング・フォローとして学科教員による「寄り添い型」の取り組みを行った。チューターは、年数回学生との面談を行い学生の話を聞くことを徹底し、成績不振者や欠席の多い学生とはメールや電話で密に連絡を取り、学生の適正およびモチベーションを見極めながら指導を行った。また、保護者と情報・状況を共有した上で、その学生にとって最善の解決方法を模索した。

学部・部門間では情報の共有や連携強化を行った。

■2023 年度への課題

入学前教育による基礎学力の向上、学力不足の解消、専門課程ではロジカル・コミュニケーションや国試取得を目標とした内容を教科毎に盛り込み、また、演習形式や振り返り授業、グループワークやアクティブラーニング型授業を各教科に継続して導入する。

地区別懇談会を積極的に利用して、学生の実情を報告し保護者連携の充実化をはかる。

インタラクティブ、オンゴーイング、テーラーメイドのアプローチによる学生支援を継続して実施する。チューターまたは学科教員は学生からよく話を聞くことを徹底し、保護者と連絡をとり情報・状況を共有した上で、学生にとって最善の解決方法を模索することを継続して行う。

退学予備軍をサーチのための専門教科の GPA 判定を行い、転科等を考慮した適切な指導を行う。

全体的にエビデンスに基づく「早期支援システム」の PDCA サイクルを強化する。

【社会人としてのマナー対策】 Ⅰ①、⑤、⑥、⑦、Ⅲ.Ⅰ3、Ⅲ.Ⅱ4

①入学時から社会人、特に医療従事者には、相手方への挨拶が必須であることを意識するよう指導する。

②来客や教員だけではなく、学生間でも挨拶することの大切さを身に着けさせる。

③講義、実習だけではなく、生活全般で時間厳守を心がけるよう指導し、自らの責任や協調することの大切さを理解させる(特に臨地実習)。

④学科の全学生を対象として社会人(医療従事者)としてのマナー対策を講習会や個々の講義等でもできる限り対応する。

	具体的には、基本マナーとしての挨拶の仕方、敬語使用や連絡時のマナー(メールの書き方、電話応対、オンライン時、お礼状等を含む)、呼称、話の聞き方ほか。マナー対策講習会等に基づいて、日々の生活の中で、各専任教員が折に触れ個々の学生に注意を促す。 ① ⑤その他、社会におけるマナーや職能倫理への認識を折に触れ教員がフォローし、必要な指導を行う。 ②
募集力	**【学科入学定員確保のための対策】** **■2022 年度の取り組み** 本学科の最大の特徴は臨床検査技師および細胞検査士資格を4年間で同時取得できることにある。このダブルライセンス制度は、九州の 4 年制大学では本学科が唯一の存在であるため、このユニークな特徴を周知することで入学定員の確保を果たすことができると考えられる。 周知を確実に行うために入試広報をはじめとする事務部門とも十分な連携することが重要であると考え、広報活動を行ってきた。具体的な周知方法としては中学校、高等学校などの教育機関、あるいは様々な団体による大学見学、高校訪問、学会や地域のイベントへの積極的な参加である。 さらに大学見学に関してはオンラインでも施設内を見学する方法を取り入れた。これは遠方の見学希望者によりアプローチできる方法であると考えている。 また1件のみではあるが、電話による学科の質問回答を行った。この回答方法は今後も活用していきたいと考えているが、電話で対応できることはあまり知られていない。今後は中学校や高校の教員へ電話対応できることを周知していく。 更に、学科定員確保には海外からの留学生獲得も重要になってくるため、タイの教育提携校からの留学生獲得を目指している。そのための布石として研修生を受け入れる門戸を開いている。 高校との関係性をより強くするため、高校が行う研究を補助できる教員のホームページ掲載を計画した。 **■2023 年度への課題** 学科および大学のさらなる周知が必要であると考える。周知を確実に行うためには従来的な手法と現代的な手法を掛け合わせた方法が必要である。具体的に従来的な手法とは高校や中学校への説明会や模擬講義、パンフレット配布などである。現代的な手法とは SNS などを活用した方法である。従来の方法は実際に施設を見てもらう事でインパクトを与えやすいという利点がある。しかし、立地などの条件から遠方からの来学者を増加させることは困難であることも考えられる。そこでまずはより広い人に周知するための SNS 活用が期待される。実際に本学の出願を広報した Youtube 動画は 2 カ月で 8.5 万回再生されており、簡便かつ効果的な方法の一つであると証明された。その他効果的であると考えられる SNS 活用方法としては Instagram ライブや Youtube ライブなどで質問回答を行う事である。従来的なオフラインによる質問は質問者以外回答を聞くことができないが、ライブ配信による回答であればその動画をコンテンツとし

て蓄積していくことができる。このようにフローコンテンツとストックコンテンツを上手く使い分ける必要がある。

また、各コンテンツに関しては大まかなターゲットしか意識されていないため、目的が曖昧になりやすかったと考えられる。一つ一つの広報コンテンツの内容を充実させるためにペルソナ設定を意識したコンテンツ作成を行っていくことが課題であると考える。

【学科の魅力発信】 AP

■2022 年度の取り組み

学科の魅力を発信するために昨年度同様入試広報との連携を図り、広報活動を行っている。

今年度もオフラインのみでなくオンライン用いた見学会を行った。約 30 の見学会などを行い学科や大学の魅力を発信した。

また、大学および学科の認知を目的として 545 の高校に大学および学科に関連するパンフレットやチラシを配布した。少子化の現在、九州に限定した広報活動には限界があると考え、九州以外の山口、広島、岡山、島根、香川、徳島、愛媛、高知、島根、鳥取、兵庫、大阪、京都、和歌山、静岡の高校にも配布した。

■2023 年度への課題

今年度も行ったオフライン・オンラインハイブリッドの方法は来学することが容易でない方々への魅力発信手法として非常に有効であるため、今後も続けていく必要があると考える。普段の見学会では保護者と生徒のみが対象になることが多いが、学校単位で遠隔見学を行う際には中学校または高等学校の教員もいるため、中学校、高等学校自体への周知も期待できる。来学した教員の方に魅力を伝える機会が少ないため、引率で来た教員は別で施設などを紹介するなどの対応が必要ではないかと考える。

また、本学は多くの充実した設備が揃っている。1台数千万円する機器などが多く導入されており、保護者の方にそれらを紹介すると大きな反響を頂いた。臨床検査技師や細胞検査士の仕事を周知することは勿論必要であるが、本学の充実した設備をより広めていく活動も課題であると考える

現在行っている活動の多くは県内の高校を対象としたものである。少子化の現在、宮崎県内のみに対象を絞ることは今後の入学者減少に繋がると懸念される。そこでまずは認知を目的とした活動を増やすことも課題の一つであると考える。

これらの課題に対する具体的な対策としては【学科入学定員確保のための対策】でも触れたように、より DX 化を推進し、SNS 中心のコンテンツの拡充が必要であると考えている。SNSは費用をかけずに広報ができる点も利点である。【学科入学定員確保のための対策】の課題解決策として提案した方法を活用すれば学科の魅力も全国レベルで発信しやすくなると考えている。

研究力	**【学科教員の研究力アップのための対策】** **■2022年度の取り組み** 研究力アップ達成のためには研究活動を進める上で必要不可欠な環境要素（資金、人材、成果報告システム（プラン）、時間（期間））が適切に整備されることが重要である。その状況について総括する。 【資金面】 外部研究費獲得のための一手段として科研費申請をこれまで通り行ったが、これまで同様採用実績がないことから、学科内で確保することはできなかった。対策として、申請書作成に対する事前準備や課題検討などについて随時働きかけることが必要かと思われる。科研費以外の外部研究費にも随時申請公募が通知されるものについては、積極的に申請を検討できるよう常に意識しておくことが肝要であったが、達成できなかった。一方、今年度の学内研究費助成として、2件の課題が地域創生事業経費を得ることとなり、それを用いた研究が有効に行われた。 【人材】 前年度に比べ、教員数が減少したが、特別研究員事業等の研究者支援やシニア職員を含めた流動化促進等の人材育成プランの活用による増員はなかった。重要な若手研究者の育成についても安定研究環境の創出や独創的・挑戦的な研究を進めるための設備整備などの進展はなかった。しかし、そのような厳しい環境の中、若手教員は実質的に本学科の業務・研究活動進展に十分貢献した。また、大学院教育を通じて若手研究者の育成を図るため、今年度も複数の院生が研究活動を行い、成果を残せたが、過程終了後、学外への就職で、やはり学内での若手研究者の確保には至らなかった。 【成果報告システム（プラン）】 前述の学内研究費助成としての2件の地域創生事業についての課題がまとめられ、学内及び市内商業施設での展示が行われた。また、延岡市での「東九州ものづくり交流展」においても、機能性多糖体成分（β－グルカン）や水素吸入装置の紹介、子宮頸がん予防パンフレット配布などが実施できた。 【時間（期間）】 教員減により実質的に学科教員に対する種々の負担が大きくなったこともあり、研究稼働時間の十分な確保はやはりできなかったと思われる。しかし、教員各自が創意工夫しながら、研究に携わる時間を効率良く捻出することで、上記のような成果報告に繋げることができたと思われる。 **■2023年度への課題** 上記のような今年度の研究環境の現状を踏まえ、完全な研究環境が整わずとも、研究活動をどうにか実践し、「学会・研究会発表」や「学術論文作成」のような何らかの形で成果報告できるように教員が一丸となって研究活動を常に意識することが必要である。 大学院生対象の進捗状況報告として行っていた研究カンファレンスが今年度実施できなかったことは、研究活性化の面からも反省すべき点である。教員の日常的な研究活動におけるモチベーション維持に貢献するものとして捉えることができるので、今後も継続していくことが重要である。 学科の研究活動の活性化において大学院生の存在は非常に重要な要素であるが、学部生からの令和5年度院生の確保ができなかったことについては憂慮すべき状況である。

今後は院生の継続的に確保できるように必要なあらゆる手段を講じていかなければならない。また、院生が本学の研究現場に残り、研究活動が続けられるような条件・環境を整えるべく、引き続き積極的な検討が必要である。

今後も新興・融合研究領域への取組の強化、新分野創成や異分野融合の推進などを踏まえた研究計画を検討し、産学官連携による研究開発投資の確保、地方創生への貢献などを実践した成果を提示できるような研究課題を検索することが重要である。加えて、地方大学として、大学共同利用機関との連携による学術研究基盤の効率的な形成について今後も検討していかなければならないと思われる。

研究に活用できる時間が今後飛躍的に増える可能性は少ないため、現状でいかに効率的に稼働時間を継続的に捻出できるかが課題である。そのため、研究計画も多様性に富んだ内容で現実的な研究稼働時間に対応できるものを準備することが各教員に求められると思われる。

【研究施設のレベルアップのための対策】

2020年度の取り組みとして、既に導入済みの設備や器具を把握した。導入した設備と多くの研究者の研究分野が一致していないと研究施設のレベルアップとは言えないため、教員や大学院生を含む研究者の研究内容を把握して、不足しているものを洗い出した。

次年度への課題として、機器は時間が経つあるいは使用するにつれて劣化や故障が起こると予想される。予算は潤沢ではないため、今後導入する機器についてはメンテナンス費用やランニングコストのことも考え、経済的に持続可能な研究施設を目指す。

■2022年度の取り組み

研究施設を立ち上げて8年目になり機器の故障が起こってきているため、それらの修理を行った。pHメーターの電極など使用できないものが見つかり交換した。新しいものに変えても使用方法や片付け方が悪いと劣化が早まるので、使用方法や片付け方と注意点をまとめたマニュアルを作成した。

■2023年度への課題

機器は時間が経つあるいは使用するにつれて劣化や故障が起こると予想される。予算は潤沢ではないため、今後導入する機器についてはメンテナンス費用やランニングコストのことも考え、経済的に持続可能な研究施設を目指す。

使用している設備の劣化を防ぐために、他の機器の使用方法や片付け方と注意点をまとめたマニュアルを作成する。

使用期限や定期的にメンテナンスの必要がある器具が他に無いか把握するために、点検するためのリストを作成する。

【外部研究資金獲得のための対策】

生命医科学科教員の研究を円滑に遂行するため積極的な外部資金獲得を目指す仕組みを構築する。

	科研費や民間の研究助成金の募集情報を随時教員に提供し、積極的な応募を促す。教員は毎年科研に応募することを目標にする。また、生命医科学科内および外部研究機関との連携をはかり効率的に研究助成を受けられるよう情報を共有する。 **■2022年度の取り組み状況** 2022年度は研究資金獲得に積極的な働きかけを行ったものの、学外共同研究（近森病院）１件を獲得できたのみで、科研の獲得には至らず今後の課題として残った。 **■2023年度への課題** 2023年度は研究資金調達のため余裕を持って申請の準備を行う。また学内外の研究者との連携や共同研究を推進する。
地域連携力	**【学科教員の地域連携力アップのための対策】** **目標** 本学の教員は高度な専門領域を持つ集団であり、且つ県内唯一の医療系私立大学である。そのため本学教員に対する期待は大きいものと思われる。これらの事から以下を目標とする。 1）医学部の教員や専門の臨床検査技師との連携をとること。 2）宮崎県や近隣の県の臨床検査技師会との連携を取る事。 **■2022年度の取り組み** 1）宮崎大学との共同研究を行った。 2）宮崎県臨床検査技師会と連携し学会をサポートすることとしていた。 3）医師のタスクシフト/シェアの医療行為に関する県内の技師会員への技術指導を行なった。 4）宮崎県医師会の下部組織の宮崎ICLS（二次救命処置）の研修会で指導者として協力した。 **■2023年度への課題** 1）コロナ渦のため病院検査責任者とのコンタクトが取れなかった2022年度から2023年度は可能な限り、顔の見える関係をつくり就職に対しても有利になるよう働きかけたい。 2）教員が担当以外の病院も訪問し、就職斡旋できる関係を構築する。 3）県内の臨床検査技師会や臨床工学技士会のイベントにはなるべく参加し、他の医療職種とも連携を図る。
総合力	国家資格である臨床検査技師や臨床工学技士に加えて細胞検査士認定資格も取得可能である「魅力と強み」をアピールポイントにして、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を備えた豊かな人間性を持つ入学者を受け入れ、定員充足を目指す（AP）。 教養と専門性の高い知識および技術を有した臨床検査技師、臨床工学技士、細胞検査士、ME 技術者、または生命医科学者として活躍できる人材育成のために（DP）、「振り返り学習」授業やアクティブラーニング型授業に力点を置き、専門知識・技術・態度の修得を目的とした

	カリキュラムポリシー（CP）の実践に取り組む。 臨床検査技師国家試験合格率、臨床工学技士国家試験合格率、細胞検査士認定試験合格率、ME 技術者認定試験合格率、さらには就職率 100%を目指す。
3 つのポリシーからの総評	資格という意味では臨床検査技師、細胞検査士、臨床工学技士、ME 技術者ライセンスを基本とし、さらには臨床検査技師と細胞検査士、あるいは臨床検査技師と臨床工学技士のダブルライセンスの取得もできる生命医科学科として、また将来の医療分野の研究者～生命医科学研究者を育てるために 3 つのポリシーを制定している。このディプロマポリシーの実現を念頭に、個々のカリキュラムポリシーの実践に取り組んだ。 ディプロマポリシーの問題発見・解決能力、専門的知識・技能の活用力、コミュニケーション能力、およびプレゼンテーション能力の達成度を客観的に判断するため、卒業研究の評価へのルーブリック評価を継続し、積極性、理解力、研究能力、プレゼンテーション能力、論文作成能力、そして国家試験合格に向けた知識の習得についての評価を昨年同様実施した。 ディプロマポリシーに掲げている対象者を支援する汎用的能力やコミュニケーション能力を臨床実習の現場で実践するため、臨床実習前にはキャリアサポートセンターとの協力でマナー講座を実施し、学生自身によるロールプレイを継続して行なった。再来年度から本格的に実施が必要となる、臨床実習前にカリキュラムポリシー（２）の客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：OSCE）様の試験もこなれてきた感があり、本格的に導入される一歩手前まで来ている。 アドミッションポリシーⅠにある、求める学生像のような生徒にアピールするため、YouTube、インスタグラムなどでの学科情報の発信を引き続き積極的に行った。また、アドミッションポリシーⅡの入学までに修得すべき学力・能力を確実なものにするため、推薦入学の学生には生物・化学・物理・数学の問題集を用いて入学前教育を実施し、国語力アップのためにコミュニケーション論を活用し様々な取り組みを行った。
次年度への展望（まとめ）	次年度は国家資格ダブルライセンスプログラムの 4 年生 1 名が両ライセンス所得に臨むことになる。国家試験対策や卒業研究をどのように行っていくかは手探り状態となると考えられるが、是非ともダブルライセンスを取得できるよう全面的にサポートする。来年度 3 年生にも現在 2 名の国家資格ダブル選択者が存在するため、昨年度に引き続き非常に難しいカリキュラム運用となる。土日祝日の利用や早朝夜間の講義はもちろん、夏季休暇、冬期休暇、春期休暇の利用も引き続き必要となる。また、次年度はタスクシフトを含めた臨床工学技士の新カリキュラムが動き出すことになる。この新カリキュラムでは授業科目増や臨床実習期間の増加などがあり、臨機応変に対応することが求められる。 大分県に 2 つの臨検・臨工の養成校ができ、鹿児島市や宮崎市に臨床検査技師の養成校ができるとうわさされる中、、当学科の強みである九州唯一の臨検・細胞検査士ダブル取得について、さらに強力なアピールが必要と考えられる。

九州保健福祉大学　保健科学部　作業療法学科

2022 年度　第 2 期　中期目標・中期計画　〈3 つのポリシーを踏まえて〉

ビジョン (教育目標)	九州保健福祉大学だから学べる、「たとえ障がいがあったとしても自分らしく生きていくことの幸せ」をプロデュースできる能力を身につける
学科からのメッセージ	作業療法学科の教育目標は、作業療法士国家試験合格のもっと先にあります。少子高齢化に伴う介護の問題、うつ病による自殺、障がい者の雇用問題など、生活困難の様が多様化しています。作業療法は健康面の問題でどのような状況に置かれても、常に心と身体のバランスに目を向け、その人らしく生きていくことを医療・福祉の側面から支えていきます。本学では、入学後の医学の基礎科目から 4 年次の卒業研究までを通して自ら考える力を高め、患者さんに対し「病気や障がいがある人も自分らしく輝いて生きていくこと」の幸せをプロデュースできる能力（知識・技能・思考力・態度）を身につけることができます。
教育力 (ブランド力) 「学修成果の可視化」の観点を含む	【学生自ら考える力のアップへの対策】 ・演習系、座学系を問わず、ほとんどの科目でアクティブラーニングが用いられて、授業遂行がなされているが、教員によってその手法はまちまちである。 ・各年次に実施される学外実習にてルーブリック評価表を使用し、実習遂行結果を学生に提示する。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ 全学年のルーブリック評価が完成し、現在使用している。今後はその活用を検討する。厚労省が推奨する臨床参加型実習（CCS：クリニカル・クラーク・シップ）への移行を受けて対応する。 【基礎国語力増進への対策】 ・キャリア教育や作業療法概論およびホームルームなどで、当日学んだことを作文する時間を設け、書く力、まとめる力、読み解く力を養う。 ・国語の e-learning 結果を学生に提示する。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ ホームルームなどでの作文時間の確保、実習セミナーなどでの作文レポート課題の創案などを行なった。学生募集停止を受けて「すらら」は実施しない。 【国語以外のリメディアル教育への対策】 ・既存のリメディアル教育内容の検証を行う。 ・高校まで勉強経験のなかった学生が多く存在する。そのため教科書の読み方、ノートの取り方、勉強の仕方など勉強の仕方をいちから教えてきた。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ リメディアル検証は募集停止を受けて実施しない。学科内リメディアルは学習の仕方などのガイダンスを編集して配布し、授業に応用させる。 【国家試験合格率アップへの対策】 ・1 年次から主体的に学習する機会の提供（放課後自主学習）を行ってきた。同時に国家試験に必要な基礎科目(解剖学、生理学、運動学)を中心とした学習内容を行っていく。 ・各年次の特性（基礎学力が低い、全体的に意欲が低いなど）を勘案した学習方法を、担当チューターが中心となって、学科全体で話し合いながら国家試験対策を考えていく。 ・国家試験模試の結果を粗点グラフ、席次などで可視化した総合成績表を配布する。 ・規則正しい生活を常に指導する。 ・成績の振るわない学生に対して特別指導を行う。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ 放課後自習学習、成績の振るわない学生に対する特別指導など、すべてを実施した。作年度から「国試塾」という国試対策業者を導入した。4 年生の国試対策学習に対する出席率はまあまあ良好であった。

教育力 （ブランド力） 「学修成果の可視化」の観点を含む	【学科教員の教育力アップの対策】 ・日本作業療法協会が指定する教員の教育力向上研修や新しい評価方法の研修会に積極的に参加し、その内容を学科内にフィードバックする。 ・年 1 本以上の論文執筆を目指す。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ ・診療参加型臨床実習講習会を始めとする研修会に複数の教員が参加し、教授法や教育力の向上に努めた。論文投稿をはじめ学会発表などを行なってきた。取り組みは今後も継続する。 【教育施設のレベルアップのための対策】 ・文科省、厚労省の補助金情報を収集し、採択される可能性の高いものがあれば積極的に応募する。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ ・科研費を獲得している教員は、現状ではいない。取り組みは今後も継続する。 【就職率アップへの対策】 ・キャリアサポートセンターとの連携をとり、募集のため来学された施設には出来る限り対応する。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ ・国家試験合格者の就職率は、　92.9%(13/14)であった。取り組みは今後も継続する。 【学生生活サポート対策】 ・悩みのある学生に対するカウンセリングの仕組みを充実させる。（保健室等の利用） ・予防接種や自分自身の体の変調に気づくように、心身の病、感染症についての啓発活動を行う。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ ・学生のメンタルサポートは複数回のチューター面接などで取り組んでいる。しかし、メンタルヘルス系や発達系の問題を抱えた学生が増えており、これに対して教育現場で対応する限界を感じている。 【学生指導力の向上】 ・個人面談の際にチューター以外の教員も参加し、面談過程および面談結果を共有し学生指導力の共有を図った。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ ・学生の問題や問題解決については、月一回の学科会議等で情報を共有している。取り組みは今後も継続する。 【社会人としてのマナー対策】 ・1 年次より各科目にて対人関係の第一歩である挨拶の大切さを教え、教員自ら学生への積極的な挨拶運動を実施した。 ・学外実習を契機として実習に出る前に、前社会人（1 年生）、社会人（2 年生）、前医療人（3 年生）、医療人（4 年生）としての倫理およびマナーを段階的に学ばせる。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ ・取り組みの成果は各学年での臨床実習で成果を出していると考える。取り組みは今後も継続する。 【学科の魅力発信】 ・日頃の広報活動のほか、オープンキャンパス時、大学祭時など外部の人たちと触れ合う機会を有効に活用し、作業療法の魅力を伝えた。 ・卒業生の動向（海外青年協力隊で活躍している卒業生や地域、病院で活躍している卒業生現状報告など）を高校への学校説明会、出前講義時に学生や進路指導の先生に伝えた。 ・教員は社会貢献（地域）や研究などで外部に作業療法の魅力を啓発できる機会が多い。そのような機会に意識をもって作業療法の魅力を啓発した。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ ・募集停止のため、作業療法啓発以外は実施していない。

募集力	
研究力	【学科教員の研究力アップのための対策】 ・学術論文 　各教員が論文を少なくとも1篇以上投稿する。 ・学会発表 　各教員が少なくとも1報以上発表する。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ ・共著を含めると、まあまあの数の論文を発表した。取り組みは今後も継続する。 【研究施設のレベルアップのための対策】 ・様々な研究者やスタッフとの協働によるチーム型研究体制を図る。 ・博士号取得を推進する。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ ・チーム型研究体制の構築は、部分的にしか達成できていない。取り組みは今後も継続する。 【外部研究資金獲得のための対策】 ・科学研究費等の競争的資金の申請を毎年行う。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ ・取り組みは今後も継続する。
地域連携力	【学科教員の地域連携力アップのための対策】 ・健康増進のための作業療法的提案を地域社会に発信する。 ・授業の一環として地域の障害児を招き、学生との交流を通して活動性や対人関係能力の育成の一助となる。 ＜取り組み状況と次年度への課題＞ ・作業療法啓発や市民大学などの活動をしている。障がい児の育成についても活動している。取り組みは作業療法啓発については今後も継続するが、障害児関連については未定である。
総合力	・ディプロマポリシーである「有能な作業療法士として社会に貢献できうる実践力と、作業療法の発展に寄与できる研究能力を修得する」ことを目的に、カリキュラムポリシーに法って教育を展開する。
3 つのポリシーからの総評	DP:各年次に実施される学外実習にてルーブリック評価表を使用して、実習遂行結果を学生に提示し、臨床コミュニケーション、共感、作業療法の実践、チーム医療などの涵養に努め、それら実践力および研究力を身につけた者に対して学位を与えようとしている。 CP:基礎科目では資質の基盤となるコミュニケーション能力を、専門基礎科目では作業療法の基盤となる一般臨床医学を、専門科目では作業療法学と演習および学外臨床実習により段階的かつ構造的に教育を実践している。 AP:募集停止により該当せず。
次年度への展望 （まとめ）	これまでどおり有能な作業療法士として社会に貢献できうる実践力と、作業療法の発展に寄与できる研究能力を育成してゆく。また、厚労省が推奨する臨床参加型実習（CCS：クリニカル・クラーク・シップ）への移行を受けて対応する。最終の学生となるために、全員の卒業と国家試験合格を目指す。

九州保健福祉大学　保健科学部　言語聴覚療法学科
2022 年度　第 2 期　中期目標・中期計画　〈3 つのポリシーを踏まえて〉

ビジョン (教育目標)	九保大だから学べる 「コミュニケーションする幸せ」と「口から食べる幸せ」をプロデュースできる能力を身につけた人材を輩出する。
学科からのメッセージ	言語聴覚療法学科の教育目標は、言語聴覚士国家試験合格のもっと先にあります。現在、脳梗塞などでコミュニケーションが取れない、食事ができない高齢者や、コミュニケーション上のやり取りが不得手なお子さんが増えています。本学では、入学後の基礎科目から 4 年次の卒業研究までを通して自ら考える力を高め、「コミュニケーションができる」「口から食べられる」など、言語聴覚士として幸せをプロデュースできる能力（知識・技能・思考力・態度）を涵養します。
教育力 (ブランド力) 「学修成果の可視化」の観点を含む	（2022） 言語聴覚療法学科は、2022 年度をもって閉鎖となる。 ここでは、最終年度の 4 年生への対応を中心に、2022 年度の取組状況を記載する。 【学生自ら考える力のアップへの対策】DP（６、７）、CP１（６） ・学科教員間で卒業研究の取組状況を確認し合い、全員の卒業論文完成を目指す。 ・卒業論文提出後、副査による査読や論文発表会を実施し、考える力、発表する力の向上を図る。 ＜取組状況＞ 　2021 年度は、新型コロナウィルス感染症の影響による外部臨床実習の度重なる日程変更により、卒業論文の提出時期も大幅にずれ込んだが、2022 年度は実習開始時期を見直し、4 年生全員が所定の期日までに卒業論文を提出することができた。論文発表会についてはゼミ単位で対応し、副査による査読を経て卒業論文集を発行した。 【基礎国語力増進への対策】CP（３） ・学外総合臨床実習の事前・事後学修や専門ゼミを通して、基礎国語力の増進を図る。 ＜取組状況＞ 　4 年生の中には読解力など基礎国語力が身についていない学生がおり、学外総合臨床実習の事前・事後学修や専門ゼミの卒業論文指導で増進を図った。 【国家試験合格率アップへの対策】CP２（９） ・国試対策担当教員を中心に、効果的な国家試験対策方法を検討・実施する。 ・模試の成績不良学生を中心に、特別プログラムや個別指導を行う。 ・各学生の成績等の情報を学科教員間で共有する。 ＜取組状況＞ 　国試対策担当教員が国家試験対策の研修会に参加し、それを基に国家試験対策プログラムを見直した。また、模試の成績不良学生に対する個別指導を強化した。各学生の成績等の情報を教員間で共有し、危機感を持って学生に対応した。 　その結果、4 年生 6 名中 5 名が合格し、国家試験合格率は 83.3%であった（新卒全国平均 81.6%）。国家試験対策プログラムを見直したことにより、2021 年度の 57.1%から、合格率が大幅にアップした。 【学科教員の教育力アップの対策】 ・4 年生は、学外総合臨床実習（8 週間）と事前・事後学修、専門ゼミでの卒業論文指導、国家試験対策が中心となる。学科教員間で教育目標を共有して、全員の臨床実習終了、卒業論文提出、国家試験合格を目指す。 ＜取組状況＞ 　4 年生全員が学外総合臨床実習を終了、卒業論文を提出することができた。国家試験は 1 名が不合格となり、全員合格は達成できなかった。

教育力 （ブランド力） 「学修成果の可視化」の観点を含む	【教育施設のレベルアップのための対策】 ・実習棟の設備を臨床実習の事前・事後学修等で活用する。 ・文科省・厚労省等の補助金情報を収集し、採択される可能性の高いものがあれば積極的に応募し、学科内施設の整備に利用する。 ＜取組状況＞ 　実習棟の設備を臨床実習の事前・事後学修等で活用した。乳幼児聴力検査システムの更新について補助金を申請し、採択された。最新の機器が搬入され、教育施設のレベルアップにつながった。 【就職率アップへの対策】DP ・全ての学生が希望する施設へ就職できるよう、キャリアサポートセンターと連携して指導を行う。 ・「即戦力の九保大生」「印象の良い九保大生」を求人側施設にアピールできるよう、学生の臨床教育を充実させる。 ＜取組状況＞ 　４年生全員が、国家試験前に内定をいただくことができた。 【学生生活サポート対策】CP２（１１） ・定期的なチューター面談を実施し、学生の情報を教員間で共有する。 ・学生の適性やモチベーションに応じた指導を行う。 ・学生の意見を教育内容や方法に反映させ満足度の向上を図る。 【退学者防止対策】 ・学生がかかえる問題を早期に発見し、健康管理センターと連携して適切に対応する。 ＜取組状況＞ 　定期的なチューター面談を実施し、各学生の問題点を学科教員間で共有して、解決に向けて対応した。 　学生の意見を国家試験対策プログラムに反映させ、満足度の向上を図った。 　2022 年度の退学者は 0 名であった。 【学生指導力の向上】 ・学内臨床実習等でポートフォリオを導入し学習成果の可視化を図る。 ・国家試験対策でグループ学習や教員による個別指導を取り入れ、模擬試験の平均点アップにつなげる。 ＜取組状況＞ 　臨床実習の事前・事後学修で、学習成果の可視化について検討し、一部導入を図った。 　国家試験対策プログラムを見直したことにより、模擬試験の平均点が大幅にアップした。 【社会人としてのマナー対策】DP１、CP１（２） ・臨床実習の事前・事後学修を通して、臨床に必要な基本的態度、患者への関わり方について具体的指導を行う。 ＜取組状況＞ 　学外総合臨床実習（8 週間）の事前・事後学修を通して、臨床に必要な基本的態度、患者への関わり方について具体的に指導を行った。 　マナー対策については、時間的にも内容的にもさらに検討する必要があり、次年度以降、臨床心理学科言語聴覚コースのカリキュラムに反映させる予定である。
募集力	2020 年度より募集停止となり、言語聴覚療法学科としては募集していない。

研究力	【学科教員の研究力アップのための対策】 ・学会への参加等、研究活動に必要な研修の機会を保障する。 ・学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に推進する。 【研究施設のレベルアップのための対策】 ・相談システム「ハロー」等、学内の施設を活用するとともに、医療、保健、福祉、教育機関との連携を強化し、研究フィールドの充実・拡大を図る。 【外部研究資金獲得のための対策】 ・科研費の獲得率の向上を図る。 ・その他の委託研究費の獲得率の向上を図る。 ＜取組状況＞ 新型コロナウィルス感染症の影響で多くの学会・研究会がオンライン開催になった中、各教員は論文発表等、研究活動を推進した。相談システム「ハロー」を活用するとともに、医療、保健、福祉、教育機関との連携を強化した。 学科教員 7 名中、科研費は継続 2 件、申請 2 件（採択 1 件）、委託研究費は 2 件であった。
地域連携力	【学科教員の地域連携力アップのための対策】 ・宮崎県や延岡市等の各種委員会の委員として、発達支援、就学支援、地域包括支援等に貢献する。 ・学会等、関連団体の役員として、地域・社会貢献を行う。 ＜取組状況＞ 2021 年度に引き続き、各種の委員会の委員として、発達支援、就学支援、地域包括支援等に貢献した。また、委託費による研究を通して地域連携力の向上を図った。学会等、関連団体の役員として、地域・社会貢献を行った。
総合力	建学の理念およびディプロマポリシー（DP）に掲げた目標を達成するために、カリキュラムポリシー（CP）の教育内容 1～6 と教育方法 7～11 を取り入れた授業を実施し教育評価 12～13 を行う。 「コミュニケーションする幸せ」と「口から食べる幸せ」をプロデュースできる能力（知識・技能・思考力・態度）を育成するため、中期目標・中期計画の達成・実現に向けて、学科教員一丸となって取り組む。 2022 年度は言語聴覚療法学科の最終年度となるため、4 年生全員の卒業および国家試験合格をめざす。
3 つのポリシーからの総評	建学の理念およびディプロマポリシー（DP）に掲げた目標を達成するために、アセスメントポリシーの充実を図り、カリキュラムポリシー（CP）の教育内容 1～6 と教育方法 7～11 を取り入れた授業を実施して教育評価 12～13 を行った。 新型コロナウィルス感染症拡大の影響の中、4 年生全員が学外総合臨床実習（8 週間） を終了、卒業論文を提出し卒業することができた。国家試験合格率は 83.3%で、全国平均をやや上回る結果であった。 開学以来の臨床教育・研究の成果と相談システム「ハロー」を中心とした社会貢献に対して、言語聴覚療法学科（言語聴覚コース）が 2022 年度の第 58 回宮崎日日新聞賞「科学賞」を受賞した。
次年度への展望(まとめ)	2023 年 3 月 19 日の学位記授与式で、保健科学部言語聴覚療法学科最後の卒業生（21 期生）を送り出した。24 年間で培われた臨床教育の成果や課題は、臨床心理学部臨床心理学科言語聴覚コースに引き継がれることになる。引き続き、効果的な臨床教育プログラムについて検討・実施していきたい。なお、既卒生の国家試験対策については、希望者に国試対策受講生として支援を行う予定である。

九州保健福祉大学　保健科学部　臨床工学科
2022 年度　第 2 期　中期目標・中期計画　〈3 つのポリシーを踏まえて〉

ビジョン (教育目標)	九保大だから学べる 「高度なチーム医療」を支え患者さんの幸せをプロデュースできる能力を身につけた社会に有為な人材を輩出する。
学科からのメッセージ	臨床工学科の教育目標は、臨床工学技士国家試験合格のもっと先にある。医療の高度化が進み、多くの医療機器が臨床で使用されており、いまや医療現場には工学知識を持つ臨床工学技士がますます重要になっている。本学では、入学後の基礎科目から 4 年次の卒業研究までを通して自ら考える力を高め、チーム医療の一員として医師の指示のもとで生命維持管理装置の操作や、自らの判断で医療機器の保守・管理を行うなど、高度なチーム医療を支えるのみならず、患者さんの幸せをプロデュースできる能力（知識・技能・思考力・態度）を身につけることを目標としている。また本学は、タイを中心とした ASEAN 諸国の大学ならびに病院との交流があり、毎年、臨床工学科の施設を中心とした研修を受け入れている。そのため海外の方との交流を通じ、グローバルな視点も養うことができる。
教育力 (ブランド力) **「学修成果の可視化」の観点を含む**	【学生自ら考える力をアップする対策】 従来の卒業研究指導法に加え、卒業研究指導時ならびに卒業研究発表会で使用するルーブリック表を作成し運用する。学科教員全員でルーブリック表の内容とその運用について検証を行い、必要があれば改訂を行う。また、卒業研究で優秀なものについては、研究成果を積極的に国内外での学術大会において発表させる。2022 年度は対象学年が 4 年生のみであるので特に卒業研究の指導に力を入れることとする。 〈2022 年度〉 ■卒業生は 10 月下旬の卒業発表会において全員合格となった。しかし、対外的な研究会での発表は出来なかった。 【基礎国語力増進への対策】 教員監督のもとにスララを学習させる。一方、基礎数学である計算力向上にため従来どおり補講をおこなう。 〈2022 度〉 2022 年度は対象学年が 4 年生のみであるので特に力をいれる項目はなかった。 【国家試験合格率アップへの対策】 国家試験過去問題の活用方法の検討が重要であり学科内での国家試験データベースのバージョンアップを実施する。従来から 4 年生に対して実施している国家試験対策模試において、前期で各自の弱点科目を見つけさせ、前期終了後にこれを学習させる。後期の国家試験対策模試で学習状況、達成度を分析し、12 月からの集中対策に活かす。 ■現在まで実施してきた試験対策方法を踏襲する。 〈2022 年度〉 2022 年度は臨床工学科としては最後の卒業生となり全員が国家試験に合格できるよう指導を強化した。しかし、本科生の合格率は 88%(9 名受験 8 名合格)、別科の合格率 100%（2 名受験 2 名合格）となり、本科生 100%達成できなかった。 【卒業判定】 4 年次の最終卒業判定については 4 年次前期までの必要単位数の取得とともに、卒業研究および全国で 3 回実施される全国統一模擬試験（日本臨床工学技士教育施設協議会編）を受験し、少なくとも 1 回以上 60%ラインを超えていること。これを満たさない場合は、学科内における再試験を実施し判定をおこなう。 ■全国統一模擬試験で少なくとも 60%を超えることは国家試験合格の可能性の目安となるので、国家試験対策を踏襲する。 〈2022 年度〉 3 回の全国統一模擬試験を実施したが、受験者のうち 1 名が卒業判定で規定の点数を満足していなかったが、再試験を実施し最終的に合格とした。

教育力 (ブランド力) 「学修成果の可視化」の観点を含む	【学科教員の教育力アップの対策】 　最新医療の知識、技術を習得するため、関連学会や各種セミナーへ学科教員が参加できるような体制を構築する。また、他校や臨床現場より教員を招聘し、相互に講義手法についての意見交換を行う。 さらに、タイの大学との教員交流により多角的な教育力アップを図る。 ■他校および臨床現場の教員との意見交換を積極的に実施する。 ①交流を深めるために講義終了後に意見交換を行う機会を設ける。 〈2022 年度〉 　他校の教員を非常勤講師として招いているが、このコロナ禍で非常勤講師の授業が遠隔授業となることが多く、意見交換の機会が少なかった。 【学生生活サポート対策】 〈2022 年度〉 　学生を退学させることなく全員卒業が達成できるように指導をおこない、4 年生全員卒業することができた。 【学生指導力の向上】 〈2022 年度〉 　コーネルノートの使用方法を各教員で具体的に指導し、国家試験対策においても授業ノートを中心に対策を実施した。 【社会人としてのマナー対策】 　教員から学生への積極的な挨拶運動を実施することに学科の学生は全員挨拶ができるようになっている。特に授業開始および終了後の挨拶は重要視している。また、当学科では 3 年生に対して、ソーシャルマナーインストラクタの資格（JAL 国際線キャビンアテンダント）を有する外部講師を招聘して、ソーシャルマナー講座を受講させている。 ■マナーに関する講義の受講後マナーが顕著に向上することにより、引き続きソーシャルマナー講座を開講する。 〈2022 年度〉 　本年度もコロナ禍により実施出来なかった。
募集力	令和 2 年度より募集停止となり臨床工学科としての募集は実施していない。
研究力	【学科教員の研究力アップのための対策】 【学会発表・学術論文】 ■各教員の専門性にもとづき所属する学会にて年間 1 ～ 2 演題の研究成果を発表する。 ■専任教員については、学会発表にて成果が上がっているものを学術論文とし年間 1 編の投稿を目指す。 ■通信制大学院の学生を指導している教員については、大学院生を指導するとともに共同著者として学術論文に投稿する。 〈学術論文 2022 年度〉 ① 渡辺 渡，明石 敏，宮内亜宜，右田平八．Respiratory syncytial virus (RSV)感染に対する高気圧酸素分圧（HBOp）の効果の基礎的検討．日本臨床高気圧酸素・潜水医学会雑誌 2022, 18, 19-21.査読有 ② 新山大地，竹澤真吾，戸畑裕志．静磁界が心臓埋込み型デバイスに与える影響とその比較検討．医療機器学．2022，93，26-32，査読有
地域連携力	【学科教員の地域連携力アップのための対策】 一昨年度より県立延岡高等学校の生徒を受け入れ、英語による大学の授業、実習を行っている。これによって、地元の高校生が国際感覚養成と大学の魅力を体験し、視野が広がることを期待している。このプログラムには高校側より毎年定期的な開催の希望が出ており、引き続き本学科としても対応してきた。 〈2022 年度〉 　タイからの研修生が来日した際にメーカ見学を実施するとともに、県立延岡高等学校の生徒を受け入れ、英語による授業、実習体験学習を行う。同様に近隣高校に情報を流して高校生も一緒に英語で研修を受けられるようにする。計画通りに受け入れ研修を実施し大変好評であった。

総合力	教育力、募集力、研究力、地域連携力により、大学院教育も含めて教育連携システムの構築を目指し活動をおこなっている。学部の卒業生が医療現場へ就職し、本学科生の臨床実習指導などを担うようになってきている。また、通信制大学院を卒業した 70 数名の臨床工学技士は、医療現場での指導者となっていることより、彼らが本学科出身の技士を指導して社会に有為な人材を育成するとともに、本学科卒業生や医療現場で前向きな臨床工学技士が、通信制大学院へ入学し高度専門教育を受け社会での指導者となり本学出身の技士の教育・技術レベルの高さをアピールしている。一方、臨床工学技士は本邦のみの医療職種制度であり、国策にしたがい ASEAN 地区で最も医療が進歩しているタイ国を中心に臨床工学技士制度を輸出する。その第 1 歩としてタマサー大学、キンモクード工科大学での実習施設構築への協力および研修生の受け入れをおこなってきた。次段会として両大学卒業生を本学科への留学するよう促しており、これが実現すると日本の臨床工学技士免許を持ったタイ人技士が本国で指導者となって行くことは明白であり、彼らとともに ASEAN 地区で本学のブランド力を構築することを目指す。 次年度は、引き続き上記内容を生命医科学科臨床検査コースの協力を得て本年度達成できなかった課題を達成すべく引き続き努力する。また、海外からの学生研修時に地元の高校生参加も募り、地域連携力を強化するとともに大学の魅力を感じてもらう新たな試みによる入学者増を狙う。
3 つのポリシーからの総評	教育力、募集力、研究力、地域連携力により、大学院教育も含めて教育連携システムの構築を目指し活動をおこなってきた。教育力、地域連携力については一定の実績が評価できるが、募集力においては、各コース（学部生、別科生、大学院生）において、すべて定員以下となっている。また、研究力に関しては、少しずつではあるが学科内のコラボレーションも進み研究成果も上がりつつある。
次年度への展望(まとめ)	令和 1 年度をもって募集停止となり、生命医科学部生命医科学科の臨床工学コースとして臨床工学技士の育成がはじまっている。臨床工学プログラムコース制となるが、医療現場での職能の多様性を鑑み学生の希望に応じての医療従事者育成に努めたい。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学（大学全体）

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	全学共通計画・対策
教育力(使命・目的等を含む)	１）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	1　3つのポリシーを明確に示し、その実質化並びにアセスメントポリシーの策定に努め、ステークホルダーへの理解を深めることで、教育目標の実現を図る。 2　学修者本位の教育課程編成の理念のもと、学部学科毎に掲げる3つのポリシー（DP・CP・AP）を明確に定め、学生などのステークホルダーに対し、ホームページ・ガイダンス・オリエンテーション等様々な方法を活用し周知する。また、学生自らの学びを省察できる体制を構築する。 その方法として以下の取り組みを重点課題とする。 ・学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）の積極的な活用（特に学修ポートフォリオ、マイステップの機能） ・基礎教養教育における学部横断型カリキュラムの全学協働による展開と受講促進 ・初年次教育につながる入学前教育の実施 3　学部・学科のポリシーに基づく入学者選抜を実施するために以下の取り組みを行う。 ・アドミッションポリシーに沿った、入試科目の設定 ・高等学校の教育課程に応じた出題範囲の設定と見直し ・学力の3要素、意欲、資質、能力を多面的に評価する評価基準の見直し ・入学者の追跡調査 ・上記４つの実施とその結果の分析、それを踏まえたアドミッションポリシーの策定 4　学部学科の人材養成の目的を明確化に示し、土台となる横断的な基礎教養教育を実践することで、医療・福祉などのコ・メディカル専門人材を育成する。その一例として、アクティブ・ラーニングを推奨し、自ら考え実践できる人材の養成に繋がる教育手法を共有する。 5　学修成果の点検・評価においては、３つのポリシーを踏まえて、内部質保証を重視した点検・評価を行うことで、ＰＤＣＡサイクルを円滑に確立し、より質の高い学修成果が身につくように、卒業生や地域社会関係者による効果的な第三者評価の実施など、教育の改善向上に取り組む。 6　大学全体のFD活動はもとより、学部学科毎のFDの実践を推奨し、個別の課題を横断的に共有することで、全体の課題解決に取り組む。また、教育実践の点検評価として、授業アンケートの実施方法並びに内容を検証することで、教育内容・方法及び学習指導等の改善に取り組む。 7　中核センター教育開発部門が中心となり、教授方法改善に繋がるFD活動を毎年実施し、学部学科の垣根を超えた教員間のグループワークを行うなど、教育方法の改善に取り組む。 8　本学は医療・福祉を中心とした専門職人材養成を目指す学部学科により構成されている。その土台となる基礎教養教育の充実並びに開発に努め、地域社会に貢献できる人材養成を実践できるカリキュラムを構築する。 ・カリキュラムツリー（履修系統図）及び履修モデルの活用、精査 ・シラバスの検証とチェック体制の強化
	２）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	1　中核センター教育開発部門を中心に、教職協働によるエンロールメントマネージメントに関する方針・計画・実施体制を適切に整備し、運営する。 ・全学的なチューター制度を土台に、学修支援システム（ユニパ）の積極活用により、学生　個々の支援体制を強化 ・退学防止の観点から、授業の連続欠席者情報を教職員が共有し、早期対応を図ることで、未然に退学を防止 ・学生のキャリア開発を重点課題と掲げ、在学中のあらゆる活動を可能な限り可視化（ユニパ、マイステップの積極活用）し、学生の満足度を向上

教育力(使命・目的等を含む)		2　SAまたはメンター制度を確立する。 英語村及びボランティアセンターを機能拡充し、学習支援体制を充実する。 3　教務課が中心となり教室管理を行っており、出欠管理システムを導入し、教職協働により適正に管理運営を行っている。今後については、経年劣化に伴う改修等も見据え、将来計画を踏まえた実現可能かつ実効性のある学修環境を提供する。 4　学生アンケートの実施と内容改善に努め、得られた情報を適切に分析・検討し課題の明確化を行う。 ・授業アンケートの回答促進を行い、毎年度の回答率向上に取り組む ・授業アンケートを含めその内容精査に努め、効果的に学生の意見を反映できる体制確保に取り組む。 5　本学では、学科等毎に進級規程を定め学生便覧において周知徹底を図り、厳正に適用することで進級・卒業率の向上に取り組んでいる。単位認定評価においても、全ての学部学科において卒業研究を必須化したり、ルーブリック評価を用いた評価を推奨している。 6　自ら考え行動できる専門職人材を養成する為に、学部学科を横断した教養科目の開発に取り組み、専門的な知識と技術の実践に必要な、思考力・判断力・コミュニケーション能力、及び国語力等の基礎学力向上に取り組む。 ・すららの利用促進を含め、基礎学力向上に向けた取り組み強化について全学的に検証 ・大学独自科目の推進、強化
	3）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	1　教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備を進める。地元企業と連携し、学生のキャリア形成支援の取り組みとしてオープンカンパニーを含む企業との接点を積極的に提供する。また、外部機関と連携し学生のキャリア支援を強化する。 2　就職支援サイトと連携することで就職支援の強化に努める。 ミスマッチを防ぐことを最大の目的とし、本学独自の就職ガイダンスを実施する。また、各地で開催される就職説明会等の情報を収集し、職種にあった情報をリアルタイムで提供する。 3　キャリア支援の一環として、公務員試験対策講座の強化を進める。参加学生の要望や各自治体の採用試験に合わせ、現場の専門職も参加した、より有意義な講座とする。 4　学生に各種就活イベント等への参加を促進する。 各学科のキャリアサポート委員と連携し、学科が求めるガイダンスを通年で実施する。また、対面での就職活動を意識したイベントも新たに計画する。
	4）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	1　校地、校舎等の学修環境の整備と適切な運営・管理を行う。 ・施設設備の優先順位や必要性を明確化した上で、中長期的視点に立った修繕計画の立案や既存施設の老朽化対策を検討することで、学修環境の整備や管理を行う。 2　実習施設、図書館等の有効活用を検討し、学生のニーズに対応する教育研究環境を整える。 3　学修環境に関するアンケート調査や学生との意見交換の結果を分析・検討し、安全で快適なキャンパス生活実現に向けた環境整備に取り組む。 ・建物の利用状況や用途、設備の整備状況等を把握し施設の有効活用を図る。
研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	1　外部研究費の獲得や国際学術誌への論文投稿などを促進する研究支援体制を構築することで研究環境の整備に努め、実施される研究活動についても研究倫理や安全面での管理を行い、適切な研究体制の運営を行う。 2　研究活動を適正に行う為に、関係諸規程の見直しや制定を行い周知する。併せて関係委員会などにおいて厳正な研究内容の審査を実施し適正な運用を行う。 3　研究活動への助成として、研究経費助成や地域創生事業経費助成など現行の助成以外にも、学内資源の配分を見直すことで、国際的な研究を対象した更なる助成体制を創設し、研究のグローバル化に取り組む。

		4　研究活動の点検・評価においては、内部質保証を重視した点検・評価を行うことで、ＰＤＣＡサイクルを確立し、より質の高い研究活動が実施できるよう、適切な研究体制を構築する。 5　論文発表，学会発表等の研究成果を可視化・公表することで、地域における研究のノード機関としての役割を構築する。
学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	1　心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望を把握し、分析・検討することで学生サービス向上に活用する。 ・健康管理センターを中心とした教職協働による支援体制の強化 ・学生の健康管理に関して外部機関と連携 ・課外活動支援の充実 2　各機関および諸団体から提供される奨学金情報は、遺漏のないように対象となる学生に確実に案内をすることで、学生の経済的負担を軽減することに繋げる。 ・家計急変等の情報を教職員間で共有することで、学生支援体制を構築 3　バリアフリーをはじめとする施設・設備の利便性向上を図る事で、学生サービス向上に繋げる。 ・アンケート調査及び学生との意見交換を実施。
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	1　アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れの実施と検証を行う。（再掲） 2　入学定員に沿った適切な学生受入数の維持に取り組む。 3　入試データの分析、高校との連携強化に取り組む。 ・入学後の追跡調査、入学後の学生の伸長などの分析を行い、各部署と連携し高校への情報発信を実施 4　学生を活用した大学の魅力を発信する。 ・部活動の活性化、学友会組織の強化、在学生に対するイベントの企画・告知・実施 5　効果的な学生募集の実施に向けて、同窓生（会）との組織的な連携に取り組む。 6　地域の学びの拠点として、施設の開放や受け入れなど以下の内容を積極的におこなうとともに広く活動を周知する。 ・地元学生・生徒のための体験行事、課外学習の受け入れ ・施設の貸し出し、本学を会場とした公開講座の実施やセミナーなどのイベントを開催 7　教員一人ひとりの研究内容、成果についての情報発信を行う。また、高校生の課題研究に積極的にかかわり、高校との連携強化に取り組む。 8　ＳＮＳを活用した、本学の魅力（学科の特色）や大学・学科の情報発信を行う。 ・学生スタッフを配置し、学生目線の情報発信による募集広報戦略を展開 9　通信教育部独自の募集方法として教育提携校や提携施設を増やし募集を図る。また社会人および通信制や定時制を持つ高等学校への通信教育の周知を図り、ハイブリッドコースの魅力も新たに取り入れながら広報活動を行うとともにインターネットを利用した募集強化の充実を図る。
グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	1　学内の国際化推進に努める事で、グローバル化を推進する。 ・留学生の受け入れ増加、受け入れに伴う環境整備の推進、ラーニングサポートセンター（英語村）の充実など 2　海外留学・短期研修プログラムについては積極的な案内を進めて、参加学生の増加を図る。 ・ラーニングサポートセンター（英語村）において、留学を希望する学生の語学力の向上のためのネイティブ講師によるレッスンを充実 ・留学を目的とした英語力の向上を目指すだけでなく、国際交流のためのイベントなどを充実 3　海外の研究者との共同研究や、海外での学会発表、国際ジャーナルでの論文発表など、海外を意識した研究活動を推奨し、学内での研究助成対象とすることで、研究のグローバル化を推進する。

地域活性化	1）地域活性化の為の拠点創生 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	1　知の拠点として、産官学の地域連携も含めた地域振興及び人材育成に取り組む。 ・自治体、関係機関、団体、学校等との連携を推進 ・県内の大学間連携を推進
大学運営・財務	1）教学マネジメントの確立並びに組織改革 建学の理念実現に向けて、学長のガバナンスの下、積極的に教職員の能力開発を行うことで、教学マネジメントの確立に取り組む。併せて組織体制を見直すことで大学運営の機能性向上に取り組む。	1　大学の意思決定や教学マネジメントにおける学長の適切なリーダーシップを確立し機能させる為に、学長の補佐体制や規則等の整備を行うことで効果的な改革を実施する。 2　権限の適切な分散と責任の明確化に配慮した教学マネジメントを構築することで、組織の機能性向上を図る。 3　職員の配置と役割の明確化を行い、教学マネジメントの機能性確保に取り組む。 4　学長のガバナンスの下、建学の理念を実現すべく、事務局とも連携・協働しながら教育目的及び教育課程に則した教員の採用・昇任等を実施する。また、研修などを通じて質の高い教員を維持・確保し、適正な配置に取り組む。 5　FDをはじめとする教育内容・方法等の改善の工夫を行う事で、効果的な教員の能力開発を実施する。 6　SDをはじめとする大学運営に関わる職員の資質力向上への取組みを推進する。
	2）適正な財務基盤の強化並びにチェック体制の構築 学生確保の改善により適正な財務基盤の確立・強化を行うと共に、経営の規律や誠実性を考慮したチェック体制を構築することで、安定した大学運営を行う。	1　経営の規律と誠実性の維持に取り組む。 2　使命・目的の実現の為に継続的努力が行える体制を構築する。 3　環境保全、人権（ハラスメント）、安全等へ配慮することで健全な職場環境を構築する。 4　使命・目的の達成に向けて、意思決定ができる体制の整備とその機能性向上に取り組む。 5　学長のガバナンスの下、建学の理念を実現すべく、法人及び大学の各管理運営機関の意思決定が円滑に為されるよう改善に取り組む。 6　法人及び大学の各管理運営機関の相互チェック機能を見直すことで、適正な管理を行う。 7　第３期中期目標・中期計画に基づき、適切な財務運営の確立に取り組む。 8　安定した財務基盤の確立と収支バランスの確保に取り組む。 9　会計処理を適正に実施すると共に、会計監査の体制整備と厳正な実施に取り組む。
内部質保証	1）内部質保証体制の構築 内部質保証の組織体制を構築することで、自己点検・評価の機能性を高め、より効果的な点検・評価が行えるよう改善に取り組む。	1　内部質保証のための組織整備を行うことで、責任体制の確立に取り組む。 2　内部質保証のための自主的・自立的な自己点検・評価を実施し、その結果を共有することでPDCAサイクルの確立と検証に取り組む。 3　IRなどを活用して十分な調査・データの収集を行い、分析・評価することで、より効果的な点検・評価の実施に取り組む。 4　PDCAサイクルの仕組みを確立し、その機能性を高める事で、学部、学科、研究科等の点検・評価と大学全体の点検・評価を連動して点検・評価する。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学（スポーツ健康福祉学科）

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	スポーツ健康福祉学科
教育力(使命・目的等を含む)	１）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	◆3つのポリシーを明確に示し、それらを踏まえた学修成果の可視化を図り、学生が自らの学びを振り返り展望することができる体制を構築する。 ◆リメディアル教育、とくに基礎国語力の向上について、学修成果の可視化を図りながら学びに対するモチベーション維持・増進を図る。 ◆建学の理念、学部・学科の人材養成の目的を踏まえたアドミッションポリシーを策定し、学力の3要素、意欲、資質、能力を多面的に評価する評価基準の見直しを図る。 ◆卒業研究をはじめとしたアクティブ・ラーニングを活用し、自ら考え実践できる人材の養成に繋がる教育手法について検討し、実践する。 ◆3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価を行い、より質の高い学修成果が身につくように、教育の改善向上に取り組む。 ◆学部（学科）FDを継続して企画・実施することで、個別の課題を横断的に共有し、学部（学科）全体および各コース個々の課題解決や、教員個々および教員組織としての教育力の向上に取り組む。 ◆国家資格取得を目指す学生に対してロードマップを作成し、指導内容と学生の習熟度を評価し、学修成果の可視化を図りながら国家試験合格を目指す。
	２）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	◆問題を抱えた学生を可能な限り早期に発見・対応するために、チューター・学科教員・カウンセラー・保護者・事務職員との連携を図った支援体制を強化する。 ◆学科行事やゼミ活動等を通じ、異学年の学生や卒業生と交流の場を企画し、各学生が卒業までの過程をイメージした上で、卒業に向けたモチベーションを高く持ち学生生活に臨めるように支援体制を整える。 ◆進級規程に定められたGPAおよび修得単位数の基準の意義を1・2年生にわかりやすく説明し、これらの基準を卒業に向けた短期目標として捉え、将来に希望を持ち学業に取り組めるように、また3・４年生については、卒業や資格取得等の具体的な目標を定めて主体的に学業に取組むことができる支援体制を整える。
	３）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	◆学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」をキャリアサポートセンターとの協力により構築し、キャリアサポートセンターを積極的に活用するように促す。 ◆ミスマッチを防ぐため、学生個々の具体的な進路や希望する就職先に応じた「就職支援体制」をキャリアサポートセンターとの協力により構築する。 ◆キャリアサポートセンターと協力し、公務員対策を強化する。 ◆教員が有する地域社会・地域資源との関係を活用して、学生の就職に活かす。また、新たな就職先の開拓にも努める。
	４）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	◆学科の各コースの強みや特色を活かした教育・研究環境の整備に取り組む。 ◆実習施設、演習室、図書館等の有効活用を図る。 ◆学修環境に関して学生の意見を基に検討し、学科レベルで可能な学修環境の整備に取り組む。

研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	◆地域における中核的な研究拠点として、学科の特色を生かした研究を推進する。 ◆学生を巻き込んだフィールドワークを行い、研究に繋げる。 ◆学科や学内の教員間での共同研究を促進する。 ◆研究機器・備品等ハード面の適切な管理およびより使いやすい環境に整備する。 ◆学会発表や学術雑誌への論文投稿を促し、研究力のアップを図る。 ◆研究成果をフォーラム、シンポジウム、研修会等で地域住民に還元する。 ◆研究活動の助成として、科研費申請や学内の「研究経費助成」、「地域創生事業研究助成」への申請を促す。
学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	◆悩み（学生生活や授業など）のある学生が、より相談しやすい体制を構築する。 ◆チューター制度を活用し、学生の単位取得状況や生活状況を把握し、学生一人ひとりの状況に応じた適切な助言、指導を行い、また必要に応じて保護者や関係者へ連絡を行う。 ◆学科会議において学生の状況を共有し、学科全体で支援する体制を整える。 ◆学生同士、横の繋がりのみならず、縦の繋がりを築ける行事を開催する。
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	◆戦略的な募集活動を行う。 ◆学科の施設・設備の整備を実施する。 ◆社会的ニーズに応じた教育力の向上を図る。 ◆学科の魅力・特色や大学・学科の情報発信・広報活動を積極的に行う。
グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	◆留学生の受け入れについて、事務部門と連携・協力して環境整備を図る。 ◆海外留学・短期研修プログラムについては積極的な案内を進めて、参加学生の増加を図る。 ◆海外での学会発表や、国際ジャーナルでの論文発表などを推奨する。
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	◆教員とともに学生も参加し、地域の活性化や地域課題解決に向けたフィールドワークに積極的に取り組む。 ◆大学の施設や人材等を活用して、地域（自治体、関係機関、団体等）と共同企画を検討し、学生の主体的参加を促しながら協働事業を充実していく。 ◆イベント情報を教員が把握し、より多くの学生にイベント参加を促す。 ◆地域のニーズに対応すべく各種審議会や委員会の委員要請に応えていき、知の拠点としての役割を果たしていく。 ◆福祉関係機関や教育現場（小学校・中学校・高校）との連携を強化し、教員の教育力・研究力を発揮する機会を創ると同時に、地域の活性化や人材育成のために大学の知の還元を推進する。 ◆地域における福祉、健康やスポーツに関する課題の解決を目的とした調査研究を実施する。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学（臨床福祉学科）

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	学科別計画・対策
教育力(使命・目的等を含む)	**1）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	◆福祉現場のニーズに対応できる専門知識や技術、実践力を備えた福祉・教育人材を育成するというディプロマ・ポリシーに基づく単位認定を行うための基準を策定し、学科での周知活用を目指す。 ・福祉人材育成に求められる評価ポイントを整理し、学科内で共有し各教員が単位認定の在り方を検討する ◆社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の資格取得を目指す学生に対してロードマップを作成し、指導内容と学生の習熟度を評価しながら国家試験合格を目指す。 ◆3つのポリシーを踏まえた学習成果の点検や評価を定期的に学科内で行い、より質の高い教育の提供を目指す。 ・学科内で学内教育および実習教育等の学外教育において注意や教育上の配慮を要する学生の情報を共有し、学生教育の質の向上を目指す。 ◆大学および学部FDに積極的に参加し、教員の教育力向上を目指す。 ◆座学講義におけるアクティブラーニングの導入を推奨する。また、アクティブラーニング実施科目の実施状況を学科内で共有し、効果的な教授法について検討する。
	2）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	◆ディプロマ・ポリシーに基づいた卒業研究の評価基準を策定し、卒業研究指導のあり方を学科で共有したうえで指導を実践し、学生が自ら学ぶ力を十分に引き出すことのできる卒業研究発表会の実現を目指す。 ◆1年次からの卒業研究教育法を確立し、4年間を通じた卒業研究指導を目指す。 ◆教員による講義参観や複数担当教員科目を通じて、教員相互で教授法について定期的な意見交換を実施し、また、授業アンケートの結果を踏まえ、各講義の教授法改善の良循環を目指す。 ◆国語力増進プログラムを構築し、文章力・読解力の基礎ならびに論理的思考を身につけさせ、専門書の内容理解やレポート報告書の作成、卒業論文の執筆技術につなげる。 ◆統計や社会調査等のデータの取り扱いに際し必要となる数学的知識や操作スキルを習得させ、エビデンスに基づいた論理的思考教育を目指す。
	3）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	就職率100%を目指す ◆「基礎演習」（1年次必修）の中で、キャリア教育を取り入れ、就職についての動機付けを行う。 ◆学科会議等を利用して、個々の学生のニーズを教員間で共有し、学科全体としてのサポート体制を整える。 ◆ミスマッチを防ぐために、インターンシップや就職ガイダンス等への参加を促進して、学生の自己覚知を促す。 ◆キャリアサポートセンターを積極的に活用するように指導する。特に就職面接対策講座等の受講を促す。 ◆キャリアサポートセンターとの連携を密にはかる。特に就職面談会等の情報を教員も把握して、参加促進をはかる。 ◆教員が有する地域社会・地域資源との関係を活用して、学生の就職に活かす。また、新たな就職先の開拓にもつとめる。
	4）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	◆学修環境に関して学生の意見を基に、学修環境について検討し安全で快適なキャンパス生活実現に向けた環境整備に取り組む。 ・演習室、図書館、英語村等の有効活用を図る。

研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	◆地域における中核的な研究拠点として学科の特色を生かした研究を推進する。 ・地域のネットワークや資源を活用し、地域に密着したテーマに基づいた研究を推奨する。 ・学生を巻き込んだフィールドワークを行い、研究に繋げる。 ・学科教員間での共同研究を勧める。 ・研究成果をフォーラム、シンポジウム、研修会等で地域住民に広く還元する。 ・学会発表や学術雑誌への論文投稿を促し、研究力のアップを図る。 ◆研究活動の助成として、科研費申請や学内の「研究経費助成」、「地域創生事業研究助成」への申請を促す。
学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	◆学生の健康相談や経済的支援（奨学金等利用を含む）に関して担当部署、保護者等との連携を図る。 ◆学内のバリアフリーに関する課題を検討し学内の利便性を図り、学生のサービスへとつなげる。
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	◆学科の魅力発信 ・高校（特に出身校や福祉科高校など）と連携を図り、学科の魅力を伝える。 ・学科ブログを更新し、近況をアップする。 ・保護者通信で在学生の様子や学科の取り組みを紹介する。 ◆オープンキャンパスのあり方を検討し、分かりやすい学科案内方法を検討する。 ◆高校のガイダンス（出張講義）や大学見学会、体験型模擬授業、こども体験学習等を積極的に受け入れ、福祉の職業理解につなげる。 ◆学生が地域（学外）に出る機会（ジョイフルキッズクラブ、ボランティア活動、授業活動等）を通して、地域との交流を図る。 ◆公開講座やセミナー、科目履修証明プログラム等を通して、教員一人ひとりの研究内容や講義内容を地域住民へ情報発信をする。。
グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	◆海外での学会発表や、国際ジャーナルでの論文発表などを推奨する。 ◆留学生の受け入れを積極的に行い、事務部門と連携・協力して、受け入れに伴う環境整備を図る。
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	◆教員をはじめ学生参加により、地域の活性化や地域課題解決に向けたフィールドワークを積極的に取り組む。 ◆大学と地域（自治体、関係機関、団体等）と共同企画を検討し、学生の主体的参加を促しながら協働事業を充実していく。 ◆地域のニーズに対応すべく各種審議会や委員会の委員要請に応えていき、知の拠点としての役割を果たしていく。 ◆福祉関係機関や教育現場（中学・高校）との連携を強化し、教員の研究力を発揮する機会を創ると同時に、人材育成・地域の活性化に還元していく。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学 臨床心理学科

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	学科別計画・対策
教育力(使命・目的等を含む)	１）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	1　臨床心理学科における3つのポリシーを明確に示し、ステークホルダーへの理解を深めることで、教育目標の実現を図る。 2　臨床心理学科が掲げる3つのポリシー（DP・CP・AP）について、学生などのステークホルダーが、ホームページ・ガイダンス・オリエンテーション等の様々な方法をスムーズに活用できるように促す。また、学生自らの学びを省察できる体制を構築する。その方法として以下の取り組みを重点課題とする。 ・学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）の積極的な活用を促す。 ・基礎教養教育における学部横断型カリキュラムの全学協働による展開と受講を促進させる。 ・国語力等の向上にのための課題実施及び、elearningを積極的に活用する。 ・初年次教育につながる入学前教育の実施する 3　学生自らが考える力を向上させる。その対策として以下のような取り組みを進めていく。 ・卒業研究指導のあり方を検討し、学生が自ら学ぶ力を十分に引き出すことのできる卒業研究を目指す。 ・できる限り多くの科目において、学科教育力を向上させるアクティブラーニングの導入を目指す。 ・コース会議等で卒業研究の取り組み状況を確認し合い、全員の卒業論文の完成を目指す。 4　基礎国語力増進させる。対策として以下のような取り組みを進めていく。 5　学修成果の点検・評価においては、臨床心理学科の３つのポリシーを踏まえて、ＰＤＣＡサイクルを円滑に確立し、より質の高い学修成果が身につくように、教育の改善・向上に取り組んでいく。
	２）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	1　大学院進学希望者への効果的な対策を行う。 ・高校英語の再学習の機会を設け、英語力の向上を図る。 ・英語村を積極的に活用し、インプットだけではなくアウトプットの学習にも力を入れる。 2　国家試験合格率アップへ向けた対策を行う。 ・国家試験対策部会で効果的な対策方法を検討・実施し、コース会議等でその効果を検証する。 ・１年次から資格関連科目の授業において、必要に応じて資格取得の意義・意識づけを行う。 ・資格希望者のうち、成績不振者に対して個別指導による国家試験対策を行う。 ・コース会議等で各学生の成績を共有し、教員間で個別の対策を検討する。 3 学科教員の教育力のアップを図る。 ・授業改善に向けたFDへの積極的な参加を促す ・学修成果可視化に向けた教員相互による授業改善の仕組みを検討する。 4　教育施設のレベルアップを図る。 ・社会生活コミュニケーション室、家庭生活コミュニケーション室等を設備し、学内の実習・演習等で積極的に活用する。 ・学生の学習場所として演習室を積極的に開放し、国家試験対策や単位認定試験対策等の学習の利用を促す。 ・学生の学習場所で学生が使用できる学習資料や学習ツールを充実させる。

教育力(使命・目的等を含む)	**3）キャリア支援並びに就職支援の強化** 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	1　学生の希望する就職先への就職率をアップさせる。 ・履歴書作成や模擬面接等を通じて、全ての学生が希望する就職先へ就職できるよう、キャリアサポートセンターと連携を取りながら、きめ細かい指導を行う。 ・「即戦力の九保大生」「印象の良い九保大生」を求人側施設にアピールできるよう、学生に臨床教育を行う。 ・低学年からインターシップへの積極的な参加を促し、キャリアイメージを早期に形成できるように支援を行う。 2　キャリア支援の一環として、行われる公務員試験対策講座への積極的な参加を学生に促す。 3　学生に各種就活イベント等への参加を促進する。 ・キャリアサポートと連携し、学科に必要なガイダンスを通年で実施する。 ・対面での就職活動を意識したイベントへの参加を促す。
	4）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	教育施設のレベルアップを図る。 ・社会生活コミュニケーション室、家庭生活コミュニケーション室等を設備し、学内の実習・演習等で積極的に活用する。 ・学生の学習場所として演習室を積極的に開放し、国家試験対策や単位認定試験対策等の学習の利用を促す。 ・学生の学習場所で学生が使用できる学習資料や学習ツールを充実させる。
研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	1　学科教員の研究力アップを図る。 ・学科教員間で研究力アップの仕組みを検討する。 ・研究力アップの仕組みを充実させ、研修等を周知する。 ・学会への参加等、研究活動に必要な機会を保障する。 ・学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に推進する。 2　研究施設のレベルアップ。 ・必要な研究施設・設備の調査を行う。 ・研究施設充実のための資金調達の検討を行う。 ・必要な研究施設整備を行う。 3　外部資金の獲得を目指す。 ・外部資金獲得に関する研修会等の参加を促す。 ・研修等で得た知識を活かして、資金獲得の具体的な対策を立てる。 ・科研費や外部資金への積極的な申請を促す。
学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	1　学生生活を積極的にサポートする。 ・定期的なチューター面談を実施し、学生の情報をコース会議等で報告し、教員間で共有する。 ・学生の学力の把握を常時行い、必要に応じてチューターからの指導を実施する。 ・学生の適性やモチベーションに応じた指導を行う。 ・学生の意見を教育内容や方法に反映させ満足度の向上を図る。 2　退学者を防止する。 ・連続欠席者に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行う。 ・学生が抱える問題を早期に発見し、健康管理センターと連携して適切に対応する。 ・教員はオフィスアワーだけでなく、相談やコミュニケーションがとりやす環境を作る。 ・チューターも含めた複数の教員で学生に寄り添い、不安や困りごとに対応する。 ・転学科してきた学生に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行う。 ・転学科してきた学生について、教員間で情報を共有し、早期対応を行う体制をとる。

		3　社会人としてのマナーを身につけさせる。 ・各チューターやゼミ担当教員が、マナーについて学生の心構えついて確認し、大学生の生活の様々な場面で、社会が求めるマナーが身につくように必要な指導を実施する。 ・教員から学生に対して積極的な挨拶を行い、普段から学生にどの程度のマナーが身についているかを教員間で確認する。 ・学内実習を通して、社会人として現場で必要な基本的態度、他人との関わり方について具体的な指導を行う。
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	1　学科入学定員確保のための対策。 ・教員が学生ファーストの立場で教育を行い、在学生から家族や後輩、学校関係者に本学科の肯定的な評価が伝わるよう日々努力する。 ・入試広報、教員との連携を進めて広報活動を活発にする。高校訪問、出前講義等を活用し、本学科に興味関心を向けてもらえるよう」働きかけ、一般入試における入学希望者の増加に繋げる。 ・本学科の教育理念、方針、コース内容などについてわかりやすく説明できるチラシ等の作成を行う。 ・入学者に対する入学動機、傾向を調査し、結果を広報活動に活かす。 ・入試広報室と定期的に情報交換会を行い、奉公活動のあり方を協議する。 ・高校訪問、出張講義等を積極的に行い、本学科をアピールする。 2　学科の魅力を発信する。 ・中高生の学科見学、高校からの模擬講義、出張講義等に積極的に対応する。 ・社会で活躍している卒業生の情報を収集し、オープンキャンパス等で紹介する。 ・国家資格取得状況についてチラシ、ホームページ等を活用して発信する。 ・保護者通信等で在学生の様子や学科の取り組みを紹介する。
グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	1　学内の国際化推進に努める事で、グローバル化を推進する。 ・学科の学生に対して、ラーニングサポートセンター（英語村）の積極的な利用を促す。 ・学科教員に対して。海外の研究者との共同研究や、海外での学会発表、国際ジャーナルでの論文発表など、海外を意識した研究活動を促す。
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	1　学科教員の地域連携力を向上させる。 ・教員と自治体・関係機関・団体・学校との連携活動状況（連携協働事業、教員の専門知識・技術、研究成果の提供状況）を把握し、状況を教員間で共有するとともに、その成果を検証・分析し、連携の強化を図る。 ・教員に期待される地域のニーズ・期待度を把握する（自治体・関係機関等） ・連携推進に係る検討チームを設置し、地域要請に応えられるよう相談窓口を検討する。 ・学会等、関連団体の役員として、地域・社会貢献を行う。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学　通信教育部

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	学科別計画・対策
教育力(使命・目的等を含む)	**1）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	・３つのカリキュラムポリシーを明確に示すとともに、通信教育部の特徴について、学生などステークホルダーに対し、多様な情報媒体（雑誌、ホームページやガイダンス等）を活用し周知する。 ・学修者が目標とする資格取得や学習方法を支援するため、カリキュラムツリー（履修系統図）や履修モデルを提示する。 ・定期的な授業アンケートを実施し、学修成果の点検や評価を行い、教育内容・方法及び学習指導等の改善に取り組み、より質の高い教育の提供を目指す。 ・オンラインによるスクーリングの効果的な教授法について検討する。
	2）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	・通信教育部の学習支援体制の改善点を明確にし、環境を整備していく。 ・特に、ハイブリッドコースの学生が、学内で相互交流したり、添削課題等に取り組むことができる場所・空間を確保する。 ・学生によっては通信環境が不安定な場合もあるため、学内において、スクーリングや単位認定試験の際に活用できるパソコン室を設置し、運用する。 （LL教室等学内優先で使用されている為、随時使用できない状況にあるため） ・オンラインによる学生相談会を実施し、得られた情報を適切に分析・検討していく。 ・学生の学修進捗状況を確認し、継続的な学修環境へのサポートを通して、退学防止に努める。
	3）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	・キャリアサポートセンターと連携し、通信教育部からの就職希望者に対しても就活情報の提供を行う。また、必要に応じてオンラインでの面接指導や履歴書添削など、個別の就職支援も行う。 学生からの要望があれば、求人受付ナビの閲覧が出来るように設定し、本学に届いている全国からの求人情報をオンラインで確認出来るよう設定する。
	4）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	・ハイブリッドコースの学生が、学内で相互交流したり、添削課題等に取り組むことができる場所・空間を確保する。（再掲） ・学生によっては通信環境が不安定な場合もあるため、学内において、スクーリングや単位認定試験の際に活用できるパソコン室を設置し、運用する。 （LL教室等学内優先で使用されており、随時使用できない状況にあるため） （再掲） ・通信事務課に隣接して学生の相談スペースを確保し、通信生が来学した際に、気軽に相談できる環境を整備する。
研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	・基礎となる学部において研究活動を推進する為、通信教育部独自では目標や計画は策定しない。
学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	・通信制への入学動機等から、心身に関することや経済的な背景を把握し、支援の必要性を通信事務課と教員で情報共有し、支援体制を構築していく。 ・経済的支援（奨学金等利用を含む）に関して担当部署、保護者等との連携を図る。 ・学修の進捗状況を把握し、必要に応じて個別に相談対応していく。 ・学生の問い合わせに対して、メール・電話等を活用して迅速に対応できるようサービス向上に努める。

募集力(ブランド力)	1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化 ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	・通信教育部の特色（福祉と心理が学べる）や学習方法の選択性（ハイブリッドコース設定のメリット）等についてわかりやすいパンフレットや広報媒体等を作成し、募集広報戦略を検討する体制を作っていく。 ・通信教育部独自の募集方法として、教育提携校や提携施設を増やすとともに、募集を全国圏域に拡大していく。 ・社会人及び通信制や定時制をもつ高等学校に通信教育の周知を図る。 新たにハイブリッドコースの魅力も取り入れながら広報活動を行う。 ・インターネットを利用した募集強化の充実を図る。
グローバル化	1）国際競争力を意識したグローバル化の推進 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	・大学全体でのグローバル化の推進には協力するが、学部の特性から通信教育部独自では目標や計画は策定しない。
地域活性化	1）地域活性化の為の拠点創生 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	・福祉人材の充足と質の向上に資するため、福祉施設等や関係機関・団体との提携により、実践現場職員のスキルアップに寄与できるよう知の拠点としての役割を果たしていく。 （現状：ある福祉職場では高校卒業の職員が入職と同時に通信教育部に入学させて資格取得と大学卒業を目指せる環境を整備している。学費も職場が出資）

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学（薬学科）

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	学科別計画・対策
教育力(使命・目的等を含む)	１）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。 (学修成果基盤型教育の徹底)	1　全教員で薬学科のブランドビジョンを策定した上で、３つのポリシーの改訂を行い、教員・学生・学外への周知を行う。カリキュラム委員会が中心となり、ブランドビジョンを達成するためのカリキュラム編成を行う。 2　学修者本位の教育課程編成の理念のもと、薬学科の3つのポリシー（DP・CP・AP）を明確に定め、学生などのステークホルダーに対し、ホームページ・ガイダンス・オリエンテーション等様々な方法を活用し周知する。また、学生自らの学びを省察できる体制を構築する。その方法として以下の取り組みを重点課題とする。 ・学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）の積極的な活用 （特に学修ポートフォリオ、マイステップの機能） ・基礎教養教育における学部横断型カリキュラムの全学協働による展開と受講促進 ・初年次教育につながる入学前教育の実施 3　薬学科のポリシーに基づく入学者選抜を実施するために以下の取り組みを行う。 ・アドミッションポリシーに沿った、入試科目の設定 ・高等学校の教育課程に応じた出題範囲の設定と見直し ・学力の3要素、意欲、資質、能力を多面的に評価する評価基準の見直し ・入学者の追跡調査 ・上記４つの実施とその結果の分析、それを踏まえたアドミッションポリシーの策定 4　薬学科のブランドビジョンをを明確に示し、土台となる横断的な基礎教養教育を実践することで、医療・福祉などのコ・メディカル専門人材を育成する。その一例として、アクティブ・ラーニングを推奨し、自ら自分自身の学修における問題を提議し、解決策を考え、それを実践できる人材の養成に繋がる教育手法を共有する。 5　学修成果の点検・評価においては、学修成果基盤型教育における評価基準を事前に設定した上で３つのポリシーを踏まえて、内部質保証を重視した点検・評価を行うことで、ＰＤＣＡサイクルを円滑に確立し、より質の高い学修成果が身につくように、卒業生や地域社会関係者及び地域医療関係者による効果的な第三者評価の実施など、教育の改善向上に取り組む。 6　大学全体のFD活動はもとより、薬学科のFDの実践を推奨し、個別の課題を横断的に共有することで、全体の課題解決に取り組む。また、教育実践の点検評価として、授業アンケートの実施方法並びに内容を検証することで、教育内容・方法及び学習指導等の改善に取り組む。 7　中核センター教育開発部門が中心となり、教授方法改善に繋がるFD活動を毎年実施し、学部学科の垣根を超えた教員間のグループワークを行うなど、教育方法の改善に取り組む。 8　本学は医療・福祉を中心とした専門職人材養成を目指す学部学科により構成されている。その土台となる学部横断的な基礎教養教育の充実並びに開発に努め、地域社会に貢献できる人材養成を実践できるカリキュラムを構築する。 ・カリキュラムツリー（履修系統図）及び履修モデルの活用、精査 ・シラバスの検証とチェック体制の強化

教育力(使命・目的等を含む)	**2）学修支援体制の強化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	1　中核センター教育開発部門を中心に、教職協働によるエンロールメントマネージメントに関する方針・計画・実施体制を適切に整備し、運営する。 ・全学的なチューター制度を土台に、学修支援システム（ユニパ）の積極活用により、学生　個々の支援体制を強化する。 ・退学防止の観点から、授業の連続欠席者情報を教職員が共有し、早期から学生の対応に取り組む。 ・在学中のあらゆる活動を可能な限り可視化（ユニパ、マイステップの積極活用）し、学生のキャリア開発を継続的に支援する。 2　教職協働により在籍学生数に応じた教室の割り当ておよび管理を行う。教室設備の経年劣化に伴う改修等も見据え、将来計画を踏まえた実現可能かつ実効性のある学修環境を提供する。 3　リメディアルを含めて、学生アンケートの実施と回答率向上に努め、得られた情報を適切に分析・検討し課題の明確化を行う。 ・授業アンケートの回答促進を行う。 ・授業アンケートを含めその内容精査に努め、効果的に学生の意見を反映できる体制確保に取り組む。 4　単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等は学生便覧やオリエンテーションにおいて周知徹底を図り、厳正に適用することで進級・卒業率の向上に取り組む。卒業研究はルーブリックを用いて公正な評価を行う。 5　自ら考え行動できる専門職人材を養成する為に、学部学科を横断した教養科目の開発に取り組み、専門的な知識と技術の実践に必要な、思考力・判断力・コミュニケーション能力、及び国語力等の基礎学力向上に取り組む。 ・すららの利用促進を含め、基礎学力向上に向けた取り組み強化について全学的に検証する。 ・学部横断科目の履修者を増やす。
	3）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援体制」を構築する。	1　教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備を進める。地元企業と連携し、学生のキャリア支援の取り組みとしてオープンカンパニーやインターンシップを含む企業との接点を積極的に提供する。また、外部機関と連携し学生のキャリア支援を強化する。 2　就職支援サイトと連携することで就職支援の強化に努める。ミスマッチを防ぐことを最大の目的とし、本学独自の就職ガイダンスを実施する。また、各地で開催される就職説明会等の情報を収集し、職種にあった情報をリアルタイムで提供する。 3　キャリア支援の一環として、公務員試験対策講座の強化を進める。参加学生の要望や各自治体の採用試験に合わせ、現場の専門職も参加した、より有意義な講座とする。 4　学生に各種就活イベント等への参加を促進する。各学科のキャリアサポート委員と連携し、学科が求めるガイダンスを通年で実施する（就職面談会〔5年生対象〕など）。また、対面での就職活動を意識したイベントも新たに計画する。
	4）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	1　校地、校舎等の学修環境の整備と適切な運営・管理を行う。 ・施設設備の優先順位や必要性を明確化した上で、中長期的視点に立った修繕計画の立案や既存施設の老朽化対策を検討することで、学修環境の整備や管理を行う。 2　実習施設、図書館等の有効活用を検討し、学生のニーズに対応する教育研究環境を整える。 3　学修環境に関するアンケート調査や学生との意見交換の結果を分析・検討し、安全で快適なキャンパス生活実現に向けた環境整備に取り組む。 ・建物の利用状況や用途、設備の整備状況等を把握し施設の有効活用を図る。

研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。 （次ページ　学生支援の前まで）	1　外部研究費の獲得や国際学術誌への論文投稿などを促進する研究支援体制を構築することで研究環境の整備に努め、実施される研究活動についても研究倫理や安全面での管理を行い、適切な研究体制の運営を行う。 2　研究活動を適正に行う為に、関係諸規程の見直しや制定を行い周知する。併せて関係委員会などにおいて厳正な研究内容の審査を実施し適正な運用を行う。 3　海外の研究者との共同研究や、海外での学会発表、国際ジャーナルでの論文発表など、海外を意識した研究活動を推奨し、研究のグローバル化を推進する。 4　研究活動の点検・評価においては、内部質保証を重視した点検・評価を行うことで、ＰＤＣＡサイクルを確立し、より質の高い研究活動が実施できるよう、適切な研究体制を構築する。 5　論文発表，学会発表等の研究成果を可視化・公表することで、地域における研究のノード機関としての役割を構築する。 6　学科内の高額共通機器等について、計画的な導入・更新を図る体制を見直す。 7　学科内の共通機器等の管理者を明確にし、不具合時の対応だけでなく研究成果を上げる効果的な使用法等についての情報を共有する。
学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	1　心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望を把握し、分析・検討することで学生サービス向上に活用する。 ・健康管理センターを中心とした教職協働による支援体制の強化 ・学生の健康管理に関して外部機関と連携 ・課外活動支援の充実 2　各機関および諸団体から提供される奨学金情報は、遺漏のないように対象となる学生に確実に案内をすることで、学生の経済的負担を軽減することに繋げる。 ・家計急変等の情報を教職員間で共有することで、学生支援体制を構築 3　バリアフリーをはじめとする施設・設備の利便性向上を図る事で、学生サービス向上に繋げる。 ・アンケート調査及び学生との意見交換を実施。
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	1　アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れの実施と検証を行う。（再掲） 2　入学定員に沿った適切な学生受入数の維持に取り組む。 3　入試・入学後のデータを分析し、高校との連携強化に取り組む。 ・入試データおよび入学後の学生の伸長状況などのデータを分析し、関連部署と連携し、高校への情報発信を実施 4　学生を活用した大学の魅力を発信する。 ・部活動の活性化、学友会組織の強化、在学生に対するイベントの企画・告知・実施 ・オープンキャンパスにおける学生ボランティア、「在学生と語ろう」の実施 5　効果的な学生募集の実施に向けて、卒業生の大学に対する満足度を向上させ、同窓生（会）との組織的な連携に取り組む。 6　地域の学びの拠点として、施設の開放や受け入れなど以下の内容を積極的におこなうとともに広く活動を周知する。 ・地元学生・生徒のための体験行事、課外学習の受け入れ ・施設の貸し出し、本学を会場とした公開講座の実施やセミナーなどのイベントを開催

募集力(ブランド力)		7　教員一人ひとりの研究内容、成果についての情報発信を行う。また、高校生の課題研究に積極的にかかわり、高校との連携強化に取り組む。 ・県北サイエンスフォーラム ・県内高校の課題研究サポート 8　ＳＮＳ・ウェブサイトを活用した、本学の魅力（学科の特色）や大学・学科の情報発信を行う。 ・薬学科の活動やイベント、薬用植物園の開花状況などを定期的に発信 ・学生スタッフを配置し、学生目線の情報発信による募集広報戦略を展開
グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	1　学内の国際化推進に努める事で、グローバル化を推進する。 ・留学生の受け入れ増加、受け入れに伴う環境整備の推進、ラーニングサポートセンター（英語村）の充実など
		2　薬学科教員が、定期的に米国提携校のフィンドレー大学への短期研修プログラムに参加し、フィンドレー大学からの薬学生の受け入れも定期的に行い、両校の交流を推進する。薬学科学生の海外留学・短期研修プログラムについては、実施可能かどうかを積極的に検討する。また、学生の英語力向上を目指す。 ・ラーニングサポートセンター（英語村）において、留学を希望する学生の語学力の向上のためのネイティブ講師によるレッスンを充実 ・留学を目的とした英語力の向上を目指すだけでなく、国際交流のためのイベントなどを充実
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	1　知の拠点として、産官学の地域連携も含めた地域振興及び人材育成に取り組む。 ・自治体、関係機関、団体、学校等との連携を推進 ・県内の大学間連携・高大連携を推進

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学（動物生命薬科学科）

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	学科別計画・対策
教育力(使命・目的等を含む)	**1）3つのポリシーを踏まえた学修成果 の可視化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	1　３つのポリシーの明確化による教育目標の明確化 ・前後期毎のオリエンテーションにて、学科独自に作成した学修マニュアルを用いておいて、3つのポリシーを明確に示す。 ・修学支援システム（ユニパ）の積極的な活用。 2　基礎学力を向上させ資格試験の合格率を向上させる。 ・愛玩動物看護師、実験動物技術者の受験資格に必要な科目、成績などを学修マニュアルに明記、各資格試験受験担当者からの受験指導を実施する。（学芸員資格は必要な科目修得で取得できる） ・生物学について、入学前教育（課題学習：問題集）を実施する。 ・リメディアル教育を生物Ⅰ、化学Ⅰ、数学Ⅰで実施する。 ・学部横断的な基礎教育科目の履修を学生に推奨する。 3　学生の学修目的の把握・明確化 ・１年次にインターンシップ（動物病院、宮崎大学附属牧場） 4　教育において注意や配慮を要する学生情報の共有化を図る。 ・学科会議等で情報の共有化、分析、支援対策・体制、進捗方法等を確認することで教育の質の向上に努める。 5　大学及び学部FDに積極的に参加、教員の資質向上に努める。
	2）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	1　チューター制度・学修支援システム（ユニパ）の積極的活用 ・教員間で学生情報の共有化を随時、あるいは定期的（学科会議）に図り、円滑な学生対応により、退学者等を予防する。 ・必要に応じて、医務室並びに学生課等と連携を図り、円滑な学生対応を実施する。 2　基礎学力の確認・向上 ・入学直後に、「生物学」の試験を全員に実施、基礎学力を確認すると共に、成績は教員が共有、学生の教育指導に活用する。 ・1年次においては、「すらら」を利用することで基礎国語力の向上に取りくむ。 3　卒業研究のレベルアップ ・３年次から卒業研究の教員（チューターを兼ねる）を固定し、２年間の継続した教育研究指導を実施する。 4　学科独自の学修マニュアル・飼育マニュアルの作成により、学習効果の向上を図る。また、学科独自の学科基準薬を定め、愛玩動物看護師、実験動物技術員などの職域にふさわしい薬の知識を修得する。
	3）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	1　就職率100%を目指す。 ・1年次において、①キャリア教育（必修）で専任教員並びに外部講師のキャリア並びに②動物病院、宮崎大学農学部附属牧場、リバーパル五ヶ瀬川におけるインターンシップ（選択科目：必修扱い）を通して、将来、愛玩動物看護師やその他の職域で必要な知識・技術を知ることで、学生個々の就職先における学びの必要性について早期に動機づけを行う。 ・動物病院・企業―教員間のネットワークを活用、キャリアサポート委員並びにキャリアサポートセンターと情報共有し、学生が希望する職種の情報提供を円滑に行う。 ・学科―キャリアサポートセンターと積極的に連携、動物病院・企業等の情報の収集、並びに学生への円滑な情報提供あるいは学内就職説明会を実施する。
	4）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	1　高度な獣医療に関わる愛玩動物看護師（国家資格）の育成に相応しい教育設備の充実を図る。そのために、教育・研究機器の新規導入あるいは更新の優先順位を立案・計画する。

研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	1　研究活動の推進 ・科学研究費助成事業など競争的外部資金への応募を推奨する。 ・学内・学外との研究ネットワークを広げ、共同研究を推奨する。 ・学術論文・学会発表を推奨する。 ・学会・研究会等への参加を推奨する。 ・学位（博士）取得を推奨する。
学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	1　チューター制度を活用、適宜面談を実施することで学生の健康並びに健康状態を把握するとともに、学生の要望をも把握する。その情報は学科会議等で教員間で共有、対策を検討、実施することで学生サービスの向上を図る。 ・健康管理センターを中心とした教職協働による支援体制の強化 ・学生課とも協働し、奨学金情報を収集、学生に情報提供する。 ・講義・実習に汎用する大学会館における学生専用の休憩室（飲食可能な）の設置について関係部署と協議、学生サービス並びに利便性を向上を模索する。
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	1　九州で唯一、大学として新たな国家資格の愛玩動物看護師受験資格取得が可能であることを発信する。 ・大学ホームページ（学科）を活用、学科の特色を発信する。 2　大学（学科）と動物病院との連携を強化する。 ・愛玩動物看護師病院実習における病院提携の登録の推進を行い、登録証を発行することで、本学のブランド形成と募集力の一助とする。 3　オープンキャンでは、本学科で取得できる３つの資格（愛玩動物看護師、実験動物技術者、学芸員）並びにフィリピン国立大学獣医学部編入留学制度とその実績（日本の獣医師誕生）を積極的に展示、広報する。
グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	1　フィリピン国立大学獣医学部（UPLB）への海外留学並びに短期研修プログラムを推進して、参加学生の増加を図る。 ・ラーニングサポートセンター（英語村）において、留学を希望する学生の語学力の向上のためのネイティブ講師によるレッスンの受講を推進する（英語村を積極活用）。 ・2年次の英語科目（選択）では留学を目的としたTOEFL対策の授業を推進する。 2　UPLBからのインターンシップ学生を円滑に受け入れるための学内・学外の仕組みを構築する。 3　海外留学生（UPLB以外）の受け入れるための仕組みを模索する。 4　学術交流協定校のUPLBと教員間（全学科を対象とした）の国際交流を図り、共同研究のグローバル化を模索する。
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	1　学科教員の地域連携力の資質向上を目指す。 ・地域連携プロジェクトの調査・実施を推進する。 ・市民大学講座などで本学科の教育・研究の成果を発信する。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学（生命医科学科）

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	学科別計画・対策
教育力(使命・目的等を含む)	**1）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	1　生命医科学科における3つのポリシーを明確に示し、教育の目標・目的を明確にする。 2　学修者本位の教育課程編成の理念のもと、生命医科学部生命医科学科に掲げる3つのポリシー（DP・CP・AP）を明確に定め、学生へホームページ ・ガイダンス・オリエンテーションなど、様々な方法を活用し周知する。 ・学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）を積極的に活用する。 ・基礎教養教育における学部横断型カリキュラムの全学協働による展開と受講を促進する。 ・初年次教育につながる入学前教育を実施する。 3　生命医科学科のポリシーに基づく入学者選抜を実施するために以下の取り組みを行う。 ・アドミッションポリシーに沿った、入試科目の設定を行う。 ・高等学校の教育課程に応じた出題範囲の設定と見直しを行う。 4　生命医科学科卒業後の将来像を明確に示し、基礎教養教育を実践することで、グローバルな医療専門職としての人材を育成する。 5　学修成果の点検・評価においては、３つのポリシーを踏まえて、点検・評価を行いＰＤＣＡサイクルを円滑に確立し、より質の高い学修成果が身につくように教育の改善に取り組む。 6　大学全体のFD活動はもとより、生命医科学科のFDの実践を推奨し、個別の課題を横断的に共有することで、全体の課題解決に取り組む。 また、教育実践の点検評価として、授業アンケートの実施方法並びに内容を検証することで、教育内容・方法及び学習指導等の改善に取り組む。
	2）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	1　生命医科学科教員を中心とし入学前・進級・国家試験・卒業に至る間の体制を適切に整備し運営する。 ・チューター制度を土台に、学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）の積極活用により、学生個々の支援体制を強化する。 ・退学防止の観点から、授業の連続欠席者情報を教職員が共有し、早期対応を図ることで、未然に退学を防止する。 ・国家試験合格率アップのための対策を講じる。 2　学生アンケートの実施と内容改善に努め、得られた情報を適切に分析・検討し課題の明確化を行う。 ・授業アンケートの回答促進を行い、毎年度の回答率向上に取り組む。 ・授業アンケートを含めその内容精査に努め、効果的に学生の意見を反映できる体制確保に取り組む。 3　生命医科学科では卒業研究を必須化しており、同時に卒業を見据えてルーブリック評価を用いた国家試験合格相当かの評価を行う。
	3）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	1　教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備を進めるため、キャリアサポートセンターと協力して以下の事を行う。 ・履歴書の書き方指導 ・面接の受け方の指導 2　次世代の医療人として「キャリアアップ」と「キャリアデザイン」を目指すために、本学科オリジナルの「キャリア教育」を構築・展開する。
	4）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	1　学修環境に関するアンケート調査や学生との意見交換の結果を分析・検討し、安全で快適なキャンパス生活実現に向けた、環境整備に取り組む。

研究力	1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	1　学科教員の研究力アップを図る。 ・外部研究費の獲得や国際学術誌への論文投稿などを促進する。 ・学科教員間で研究力アップの仕組みを検討する。 ・研究力アップの仕組みを充実させ、研修等を周知する。 ・学会への参加等、研究活動に必要な機会を保障する。 ・学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に推進する。 ・本学出版の査読制ジャーナル（JHWI）のさらなる充実化を目指す。 ・大学の知的財産の充実化を図るために、「ものづくり」を中心とした企業的人材育成と産学官連携事業の強化を推進する。 2　論文発表，学会発表等の研究成果を可視化・公表することで、地域における研究のノード機関としての役割を構築する。
学生支援	1）学生生活の支援を中心としたサービス向上 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	1　心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望を把握し、分析・検討することで学生生活に積極的なサポートを行う。 ・健康管理センターをを中心とした教職協働による支援体制の強化 ・退学へつながる欠席の多い学生への教員からの連絡 ・学生の健康管理に関して外部機関と連携 ・課外活動支援の充実
募集力(ブランド力)	1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化 ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	1　アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れの実施と検証を行う。（再掲） 2　入学定員に沿った適切な学生受入数の維持に取り組む。 3　入試データの分析、高校との連携強化に取り組む。 ・入学後の追跡調査、入学後の学生の学力の伸長などの分析を行う。 4　学生を活用して大学の魅力を発信する。 5　地域の学びの拠点として、施設の開放や受け入れなど以下の内容を積極的におこなうとともに広く活動を周知する。 ・地元学生・生徒のための体験行事、課外学習の受け入れを行う。 ・施設の貸し出し、本学を会場とした公開講座の実施やセミナーなどのイベントを開催する。 6　教員一人ひとりの研究内容、成果についての情報発信を行う。 また、高校生の課題研究に積極的にかかわり、高校との連携強化に取り組む。 7　ＳＮＳを活用した、本学の魅力（学科の特色）や大学・学科の情報発信を行う。
グローバル化	1）国際競争力を意識したグローバル化の推進 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	1　学内の国際化推進に努める事で、グローバル化を推進する。 ・学科の学生に対して、ラーニングサポートセンター（英語村）の積極的な利用を促す。
地域活性化	1）地域活性化の為の拠点創生 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	1　知の拠点として、産官学の地域連携も含めた地域振興及び人材育成に取り組む。 ・自治体、関係機関、団体、学校等との連携を推進する。 ・県内の大学間連携を推進する。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第3期】

九州保健福祉大学（大学院：社会福祉学研究科・保健科学研究科・医療薬学研究科）

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	各研究科別計画・対策
教育力(使命・目的等を含む)	1）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	◆3つのポリシーを明確に示し、それらを踏まえた学修成果の可視化を図り、大学院生が自らの学びを振り返り展望することができる体制を構築する。 ◆時代のニーズに対応したカリキュラムおよび指導体制の検討・検証を引き続き行う。
研究力	1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	◆各研究室や教員個々の研究力向上を図り、国内外の学術論文発表数を増やす対策を講じる。
募集力(ブランド力)	1）ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化 ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	◆定員充足を目指し、とくに社会人を対象にした広報活動に取り組む。 ◆各研究室や教員個々の研究・指導内容に関する情報発信を行う。
地域活性化	1）地域活性化の為の拠点創生 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	◆大学院と医療・福祉現場との連携強化を図っていく。

授業アンケート結果 報告書
令和 3 年度(2021 年度)まとめ

教育開発・研究推進中核センター教育開発部門

１．はじめに

本学では平成 17 年度(2005 年度)より、各教員の授業方法・内容の充実を目指し、すべての講義・演科目について、受講学生に対しアンケート調査を前期・後期に 1 回ずつ実施してきた。平成 22 年度(2010 年度)に設問の大幅な見直しを行い、平成 23 年度(2011 年度)から集計結果を公開してきた。平成 26 年度(2014 年度)に設問を 2 項目追加し、現行の授業アンケートは 15 項目の設問および自由記述から成っている。

授業アンケートの設問は、授業に対する学生自身と教員の取り組み姿勢、授業内容の理解度・達成度および授業の意義という観点から設定されている。その集計結果は、本学の教育理念「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」に相応しい教育が行われているか否かを知る貴重な手掛かりとなる。以下、令和 3 年度 (2021 年度) の授業アンケートについて、実施方法と全体および学科単位での集計結果を示す。

２．授業アンケート実施方法

アンケートの内容と配付・回収：

アンケートの設問は「学生自身の授業の取り組み」に関する 5 問（結果の図中 Q1～Q5)、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」に関する 7 問（Q6～Q12)、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」に関する 2 問（Q13～Q14)、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」に関する 1 問（Q15）である。 回答は「あてはまる」から「あてはまらない」までの 4 段階または時間や回数などを 4 段階に区切った選択肢から 1 つ選ぶ形式とした。また自由記述の欄があり、授業の感想や要望等があれば記入することになっている。すべての科目について、前期・後期に 1 回ずつ、原則として授業実施時に時間を設け、ユニバーサルパスポート(本学 WEB 学習支援システム)において実施している。

アンケート対象学生数と科目数：

令和 3 年度(2021 年度)の授業アンケートの対象となった教員数、科目数、学生数を下記※表 1 にまとめた。

※ 表 1

アンケート実施		科目数	専任教員数	非常勤教員数	教員数	アンケート回収数	受講生数
令和 3 年年度(2021 年度)	前期	552	97	40	137	5479	12046
	後期	589	102	37	139	3185	11910

アンケート集計・解析方法とフィードバック：

各学科の学年ごとに、設問に対する 4 段階回答を集計し、学年及び学科単位で回答の割合を図示した。各授業科目については、科目間での比較のために差が顕著に表れるよう 4 段階回答を 8、3、2、0 点として点数化し、また設問項目間での比較のために評価レーダーチャートを作成した。

アンケートの集計・解析結果については、各教員へ担当分の結果を配布しており、アンケート結果をふまえ授業改善につなげられるように、令和 3 年度の授業アンケートより、学生からのコメント等に対し、科目担当教員がユニバーサルパスポート上で学生へコメントを入力し、フィードバックを実施

した。 令和 3 年度の授業アンケート回収率について、前期約 45%・後期薬 27%と回収率の低下が著しく、回収率低下の要因として、授業アンケート回答時期とコロナ禍でのオンライン授業実施時期が重なったことが回答率の低下の一因であると考察する。来年度は学生に向けて、授業アンケートの積極的な参加を促し、回収率向上を図る。

３．授業アンケート結果

授業アンケート結果については、アンケート内容である「学生自身の授業の取り組み」、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」について、各学科での回答割合を図で示した。全学的な総括は、過去の結果との比較および学科間での相違に着目して行った。

全学的アンケート結果（図Ⅱ）

各学科のアンケート結果を基に大学全体での傾向をまとめた。「教員の授業に対する取り組み」は概ね高評価であったが、2021 年後半において視機能療法学科の評価値が著しく低かった。「学生の理解度・達成感」では、令和 2 年度(2020 年度)と同様に高い値を維持していたが、2021 年後半の視機能療法学科の評価値が著しく低かった。「学生の授業への取り組み」では、予習・復習時間や準備学習が不十分であった。総合評価としては、学科募集停止により 4 年生のみの在籍となっていた視機能療法学科の 2021 年後半の評価のみが著しく低かったものの、令和 2 年度(2020 年度)と同様に、総じて「意義ある授業」が行われている。しかし授業外学習については、シラバスに銘記して学習を促しているにも拘らず、学習時間が増加していない。今後は、シラバスに銘記して学習を促すだけでなく、学生の日々の生活実態を調査した IR データ等に基づいて学習を阻害している要因を明らかにし、学習習慣の改善につなげていく必要があると考えられる。

「学生自身の授業の取り組み（Q1～5)」

前期・後期ともに、大部分の学科において授業を 4 回以上欠席した学生は 5%以下であったが、スポーツ健康福祉学科の学生の欠席率が他学科に比べると若干高めであった（Q1)。視機能療法学科の学生（4 年生のみ）は全員 1 回も欠席していなかった。予習（Q2)、復習（Q3)、準備学習（Q4）については、学科により差はあるが、20～60%の学生は全く授業外に学習していないことが示された。作業療法学科では、予習（Q2）および復習（Q3）を「ほとんどしなかった」学生がやや多く、後期では 50～60%を占めている。一方、授業に関しては大部分の学科において 90%程度の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と答え、居眠りや私語など無く意欲的に取り組んでいると考えられた（Q5）令和元年度(2019 年度)より、授業外学習の具体的な方法手段をシラバスに明記することとしている。しかし、シラバスを通して発信された授業外学習の具体的な方法手段の指導が、学習習慣改善の方策として十分に機能しているとは言い難い。今後は、学生の日々の生活において学習を阻害している要因も明らかにしながら、学習習慣の改善を図っていく必要があると思われる。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み（Q6～12)」

シラバスに沿った授業と目標や習得すべき事項の説明(Q6, 7)、授業開始時間や授業雰囲気確保に対する教員の努力や学生の授業への参加を促す努力(Q8, 9, 10)、およびわかりやすい講義資料の作成や説明が行われたか(Q11, 12)について、前述した 2021 年後半における視機能療法学科を除き、前期・後期ともに全学科において 90%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と答え、大部分の学生は教員の取り組みを認めていると考えられた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度（Q13・14)」「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か（Q15)」

学生の理解度（Q13)、学習意欲の高まり(Q14)および授業の意義(Q15)について、前述した 2021 年後半における視機能療法学科を除き、前期・後期ともに全体として約 90%の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と答えていた。これらは授業に対する教員の熱心な取り組みの成果であると思われる。

臨床福祉学科アンケート結果(図Ⅲ)

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】では、1～5 回欠席した学生が全学年を通して 30～40%であり、前年度とあまり変化なかった。4～5 回欠席した学生は、全体的に前年度より減少しているが、4 年生の後期が一番多い。これは、単位数が卒業要件を満たすことができそうと学生が判断し、学生自身で加減していると考えられる。また、1 年生は、欠席 0 回の学生が前期 65%から後期は約 50%と減少したが、4～5 回欠席は減少、6 回以上は 0 回となっている。

【予習復習時間】では、学年が上がるにつれ「1 時間以上」の実施率が上昇している。学年が上がるにつれ、実習や専門的な教育が増えるため予習復習時間が上がっていくことは当たり前のことでもある。全教員に 1 年生のうちから予習復習の学習習慣を身に着けるような指導を促していきたい。

【授業中の取り組み】では、「Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか」の問いに対して、「あてはまる・ややあてはまる」が前期では 2 年生（60%弱）以外が 90～95%であった。後期では 4 年生（85%）以外が 95%であった。前年度の 4 年生後期は、「Q5」に関して「あてはまる・ややあてはまる」が 100%であった。そのことが国家試験の合格率に反映しているのか、今年度の社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の合格率は前年度に比べ低下した。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

学生から見た教員の授業の取り組みに関する設問では、「あてはまる・ややあてはまる」が、2 年生の前期を除いて肯定的な回答を得ており、学生からは概ね良好な評価であった。1 年生後期は前期に比べ、「あてはまらない・あてはまらない」が若干ではあるが増えている。大学の授業にも慣れ、学生が客観的に教員の授業を評価していると考えられる。1 年生の授業意欲を低下させないため、授業の改善・工夫に取り組んでいく。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度・達成度に関する設問では、「あてはまる・ややあてはまる」が 90%弱と概ね良好であった。特徴的なこととして、「あてはまる」だけに着目すると、3 年次の前期・後期とも 75～80%弱であり、学年を通して一番低い結果となっている。前年度も同じ学年の学生（前年度 2 年生）が、同じような結果であった。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について 90%以上の学生が「あてはまる・ややあてはまる」と肯定的な回答をしている。しかし、「あてはまる」だけに着目すると、前期・後期とも 1 年生が 80%弱、3 年生が 80%、4 年生が約 90%、2 年生は前期 70%・後期 100%であった。2 年生のこの差は、後期回答者が 1 名のためと考えられる。1 年生は「基礎演習」3,4 年生は「専門ゼミ」でチューターと面談する機会があるが、2 年生は「基礎演習」がないため、令和 3 年度より、２年次のチューター面談を積極的に取り組むことにした。また、教務課から配信される出席状況や、学科会議等で学生の状況を共有している。チューターのみでなく、学科教員全体で見守り、指導していく体制を整えていきたい。

スポーツ健康福祉学科アンケート結果　（図Ⅳ）

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】は、3 回以内の欠席でみると、1～3 年の前期後期とも 90%以上であり、おおむね良好な出席状況である。4 年生の前期は就職活動等の影響か 80%を切っていたが、後期は 100%となっていた。気にかかる点は、改善傾向にあった 1 年前期の欠席 0 回の学生の割合が約 59%と、2020 年度の約 71%から大きく低下し、後期には約 33%とさらに低下したことである。

【予習復習】は、前期では学年が上がるにつれて 30 分以上の実施率が上昇する傾向が認められる。後期では 1 年生はやや上昇傾向、2 年生では予習復習ともに上昇し、特に 1 時間以上の予習復習の実施率が大幅に上昇している。しかし、3 年生では予習復習ともに大幅な低下が認められた。4 年については、1 時間以上の予習復習の実施率が増加している。1 年の約 3 割～4 割が、予習復習を「ほとんどしなかった」であるが、この割合を低下させていくことが課題である。

【学習への意欲的な取り組み】では、約 88%～100%の学生が肯定的に回答している。

2021 年度は前年度に引き続きコロナウイルス感染症の影響を受けたが、授業の大部分は対面授業を実施できた。学生も対応に慣れたようで、大きなトラブルもなく、一部制約は残ったものの、ほぼ順調に授業が行われた。出席状況について 3 回以内の欠席でみると、おおむね良好であった。3、4 年後期に予習復習を「ほとんどしなかった」学生の割合が大きく減少していた。全ての学年の前後期ともに、この状態になるような教員側からのアプローチをさらに創意工夫しなければならない。中期目標・中期計画に沿って各種国家試験に対する地力を養成するための取り組みを実施してきた結果、2021 年度の各種国家試験の合格率は、昨年度に引き続きすべての試験で全国平均を上回ることができた。しかし、学年進行とともに受験をあきらめる学生もみられ、意欲的に資格取得を目指す者とそうでない者との二極化の傾向が続いている。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6～12 のすべての質問において、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると全学年においてほぼ 9 割の肯定的な回答を得ており、学生からは概ね良好な評価を得ている。しかし、2 年生において「あてはまる」の評価が他の学年に比べて低い傾向が認められる。昨年の 1 年次でも同様の傾向がみられていた学年である。コロナ禍の混乱した時期に入学した学生たちである。原因を探り、対応を工夫・改善していく。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

学生の理解度・学習意欲の高まりについては、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると、ほぼ 9 割の肯定的な回答を得ている。「学生から見た教員の授業に対する取り組み」の評価同様、2 年生において「あてはまる」の評価が他の学年に比べて低い傾向が認められる。昨年の 1 年次でも同様の傾向がみられていた学年である。原因を探り、対応を工夫・改善していく。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について、90%以上が「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をしている。「あてはまる」だけに着目すると約 68～94%であった。昨年の 1 年次でも同様の傾向がみられていた 2 年生の前期の評価が約 68%、後期は約 69%であった。1 年生は 80%を超えていた。原因を探り、本学科への進学に対する満足度を上げるために、学習意欲の向上を図る取り組みの工夫が必要である。

作業療法学科アンケート結果　（図Ⅴ）

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、欠席 3 回までを含めるとほぼ 100％と概ね良好である。2 年次の後期が前期に比べてやや悪い。

予習時間について、前期では 3 年生はほとんどしなかったは無いものの、30 分未満が 60%であり、4 年生は「ほとんどしない」と「30 分以下」で 100%であった。学外実習がカリキュラムのほとんどの時間を占めることと関係があるかもしれない。後期には 3 年生は「ほとんどしなかった」が、50%に増加した。

復習時間について、前期の結果は、3 年生は予習期間よりもさらに減少し、「ほとんどしなかった」が 50%であった。4 年生も予習時間に比べて、減少していた。4 年次の前期のほとんどが学外臨床実習であるためかもしれない。後期では、3 年生の結果は前期と同じ傾向であった。

「Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか」の質問に対する回答では、3 年生は予習時間と復習時間の中間の時間であった。4 年生は復習に時間とほぼ同じであった。後期では 3 年生で、時間が少し延びていた。

Q5 の私語や居眠および遅刻早退については､3 年生では前期では 90％が｢あてはまる（していない）」と回答しており、後期では「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」がなくなった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスについて、概ね 90％以上がシラバスどおりの授業進行であると回答している。教員の授業内容説明についても同様である。私語等に対する注意も、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年でほぼ 100％に近い。教員の授業に対する取り組みも（開始時間も含む)、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年で 90％を超えている。ただし、全学年を通して居眠りはまま見られるが、そもそも私語は少ない。授業参加への促しについても、教員の説明のわかりやすさ及び講義資料についても同様である。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度および意欲」

「授業の目標や修得すべき事項の理解」「授業での学習意欲の高まり」のどちらについても、前期は全ての両学年で肯定的意見が 80～90％程度だった。後期にはさらに「あてはまる」の割合が増加した。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

傾向は前項と同じである。全学年の 90％程度以上が肯定的だった。後期になると、さらにその割合が増した。

言語聴覚療法学科アンケート結果(図Ⅵ)

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、いずれの学年も欠席 3 回以内の学生が 100%と良好な結果を示していた。2 年生、3 年生後期、4 年生後期では 100%が欠席 0 回であった。

予習および復習については、30 分以上学習する学生は、2・4 年生で 80～100%と高い割合を示していた。3 年生は、前期は 25～35%と低い結果だったが、後期には 70%と改善がみられた。

なお、3 年生、及び 4 年生では授業以外にも学外臨床実習の事前・事後学修や国家試験対策を実施しており、学習の実時間数はさらに多くなると考えられる。

学習に意欲的に取り組んだかに対して「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した学生の割合は 80～100%であった。3 年生は前期で 80%と他学年に比べて低い結果であったが、後期には 100%と改善がみられた。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスにそった授業、授業目標・修得すべき事項の説明、授業の開始時間の厳守、授業の雰囲気、授業への参加の促し、わかりやすい説明や指導、講義資料の適切性については、いずれの学年も 90～100%が、「あてはまる」「ややあてはまる」と回答しており、教員の授業に対する取組みが高く評価されていた。

学年別にみると、2・4 年生では全項目で 100%が「あてはまる」と回答していた。一方、3 年生後期では授業目標・修得すべき事項の説明で 10%が「あまりあてはまらない」と回答しており、学生の理解度を確認しながら、授業目標等について繰り返し説明する必要がある。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業の目標や修得すべき事項を理解できたか、及び授業で学習意欲が高まったかに対しては、いずれの学年も 95～100%が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答しており、授業に対する学生自身の理解度・達成度は高いといえる。

学年別にみると、3 年生は「あてはまる」と答えた割合が他学年に比べて低く、学生の理解度に配慮した丁寧な指導が必要である。

「学生にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業は意義のあるものであったかに対しては、いずれの学年も 100%が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答しており高く評価できる。

3 年生が最終学年となる 2022 年度には、今回の結果をふまえて、個々の理解度に応じたきめ細かい学習指導を行うことが求められる。学生の満足度を高めるためにも、学科教員間で授業の内容や方法について引き続き議論を重ねていくことが重要であると考えられる。

視能療法学科アンケート結果(図Ⅶ)

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】本学科は募集停止のため、1、2、3 年生はおらず 4 年生のみの在籍である。授業への出席率は高い。授業欠席に対する単位への影響等を指導してきており、後期・後期とも 100%の出席率であった。4 年生では、国家試験や就職等、社会人としての自覚が芽生えた結果であることが考えられた。

【学習への意欲的な取り組み】前期は、予習・復習時間とも多かった。しかし、後期では、予習・復習時間が前期より少なくなっており、個人に会わせた国家試験対策ができなかったことや就職活動等で集中力が低下したと思われる。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6～Q12 のすべての質問では、前期は「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると 90%以上の回答を得ており、学生からは概ね良好な評価を得ていた。しかし、後期では、国家試験対策が学生の期待どおりではなかったことから評価は低下している。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

Q13～Q14 の質問における、学生の理解度・学習意欲の高まりについても、前期は「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせるとほぼ 100%の肯定的な回答を得ている。しかし、後期は低い評価となっている。その理由として、国家試験対策が例年のように機能せず、モチベーションが低下したことが考えられる。授業が判らない場合や、不服、不満等がある場合に学生が気軽に相談や不服申し立てできるような窓口を当科として設ける等の対策を構築していることから、有効に活用してもらいたかった。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について、「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をした生徒は、前期で 100%であった。一方、前期よりも後期で肯定的な学生が減少しており、今年度は学科教育が有効に機能していると総括できない結果となっている。

当科においては、基礎科目においても国家試験に準じたカリキュラム教育を行っている授業もあるが、そうでない授業もある。しかし、社会に有為な人材の育成という本学の建学の理念を考えると、多方面での教養や知識が、本学卒業後にも、必ず役立つといった、広い視野をもって学習すべきと考える。

臨床工学科アンケート結果　（図Ⅷ）

「学生自身の授業の取り組み」

授業の欠席回数について前期ではほぼ全員出席しているが、前期に比して後期になると 4 年生の欠席が若干増加している。これは、卒業研究が終了すると国家試験対策のみとなり学生の受験対策への認識の違いによるものである。予習の時間に関しては、各学年ともに前期より後期が増加している。3 年次においては前期に予習をする時間より後期の方が授業の内容が本格的もの（専門的）になり予習していることがわかる。これは昨年度までの傾向と一致している。

復習についても予習と同様な傾向を示しており、予習・復習をしないと授業についていけないことを理解している。学習時間は前期よりも後期の方が多くなっている。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「シラバスにそっての授業」、「授業目標や修得すべき事項の説明」、「授業の雰囲気」、「学生への授業参加の促し」、「わかりやすい説明や指導」、「講義資料の適切さ」、「修得すべき事項」に関して、全学年ともに 95%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、教員の授業に対する評価は高いと推測される。教員全体のミーティングでは前期・後期ともに同様の対応を行ってきた。今後、アクティブラーニング等の取組を増加させ、引き続き、学生個々の能力を伸ばす指導を継続させることが重要である。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標は習得すべき事項の理解」、「授業での学習意欲の高まり」については、についてはともに 3 学年は前後期ともに 95%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しているが、4 学年については前期において 50%の学生が授業での学習意欲は高まらなかったと回答しているが、後期になり目前に国家試験受験という目標がはっきりとしていたために学習意欲が高まってきている。各学年ともに後期になると医療職になるための学習の重要性が理解でき学習が十分になされていることが伺える。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

全学年ともに、「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、学生自身にとって授業は意義あるものであったと認識していることが推測される。シラバスに記載されている授業目標、修得すべき事項を十分理解した上で授業に望んでいたと言える。各学年ともに前期においては具体的な学習目標の認識が低いが、後期になるにしたがい学生自身が学習の目標を理解し授業を取り組んでいることがアンケート全体より理解できる。今後は、前期の段階において授業の意義を認識させる工夫が必要であると思われる。

薬学科アンケート結果　（図Ⅸ）

「学生自身の授業の取り組み」

欠席については、前後期通じて全学年で 9 割以上が 0-3 回の欠席であった。しかし、6 年生後期では 6 回以上の欠席が 10%ほどいた。6 年生後期は、他学年に比べて欠席率が高い傾向があり国試対策の観点から個々の学生の集中度を高める指導が必要である。

予習・復習については、5 年生以外は若干の差があるが、各学年とも予習・復習に時間をかけている割合に大差はなかった。しかし、今年度は 5 年生の前期における予習・復習の時間が 1 時間以上と他学年より長かったが、後期は他学年と同様レベルとなった。予習・復習にほとんど取り組まない学生は各学年で 2-3 割程度いることから、各学年で予習・復習の習慣を身に着けるように指導する必要があると感じられた。

シラバス記載の準備学習では、各学年ともにほぼ 8 割以上の学生が行っていた。学習に意欲的に取り組みましたかという設問に対しては、1-5 年生では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせるとほぼ 90%程度であった。しかし。6 年生では前後期ともに「ややあてはまる」の割合が増加した。

「教員の授業に対する取り組み」

前後期通して、教員の授業に対する取り組みに関するすべての設問では、例年と同様に、「あてはまる」、「ややあてはまる」が 80%程度であった。しかし、6 年生では、「担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか」、「担当教員の講義資料は適切でしたか」の質問に対して、「ややあてはまる」の回答が増加していた。この点を改善するために、今年度はオムニバス講義における各教員に対するアンケートを行い、教員にその結果を開示して、教員に改善を促した。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

1，2，3，4 年生前後期通して、授業に対する学生自身の理解度・達成度は「あてはまる」、「ややあてはまる」の解答が 90%程度であった。しかし、6 年生では特に後期で、授業の目標や修得すべき事項や学習意欲が高まったかの項目について、「あまりあてはまらない」、「ややあてはまる」の回答が増加していた。例年に比べて 6 年生は授業に対する学生自身の理解度・達成度を感じていないと思われた。「教員の授業に対する取り組み」でも述べたように、今年度は学生自身の理解度・達成度が増加するように、アンケート結果をもとにして教員の講義改善指導を行った。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

全学年前後期通して、意義のある授業であったか否かについては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価が、ほぼ 90%超あった。しかし、6 年生では特に後期に「あてはまらない」「あまりあてはまらない」が増加しており、先にも述べたように授業の改善に取り組む必要性を感じた。

動物生命薬科学科アンケート結果　（図Ｘ）

「学生自身の授業の取り組み」

欠席については、前期は４年生を除き各学年 90%以上の学生に欠席がく、欠席 1 - 3 回の学生を合わせても出席状況は良好であった。しかし、後期では欠席回数が全学年において前期より増加していた。1－3 年生における増加理由は不明で、特に、3 年生後期で 1-3 回以上の欠席者は４年生に比べ少ないものの、１・2 年生に比べ明らかに多かった。この理由を解明し、改善することが今後の課題であると感じた。なお、4 年生は、就職活動のための欠席増加が考えられた。

予習・復習時間については、1－3 年生は、「ほとんどしなかった」、「30 分未満」を合わせると 60%以上の学生が該当した。しかし、４年生においては、前・後期ともに、「ほとんどしなかった」、「30 分未満」の学生は明らかに少なく、20 - 30%であった。1－3 年生における予習・復習時間が短いことについては、今後、指導の必要性があると考えた。

シラバスに記載されている準備学習については、「ほとんどしなかった」、「30 分未満」を合わせた回答は学年および学科により 20 - 50%程度とバラツキがみられたが、予習時間よりも多かった。一般的には「予習の時間」と「シラバスに記載されている準備学習」は、ある程度の相関があると考えられるが、今回の回答では 1 - 3 年生において乖離が見られた。今後、設問内容も検討する必要があると思われた。なお、後期の 4 年生においては予習・復習並びにシラバスに記載されている準備学習を 30 分～１時間以上準備した学生が 70%以上を占めていた。これは資格試験科目に対しての準備と思われた。

「学習に意欲的に取り組みましたか」という設問に対しては、いずれの学年においても「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた回答は 90%を超え、学習への意欲的な取り組みは、良好であった。

「教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に対する取り組みに関する設問では、すべての学年において、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、ほとんどの項目が 90%以上と良好であったが、3 年生においては、「担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を毎回説明したいましたか」、「担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか」「担当教員の資料は適切でしたか」について、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」を合わせて 10%程度あったことは、取り組みの改善する必要があると考えた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標や修得すべき事項の理解」並びに「授業での学習意欲の高まり」の質問に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、ほとんどの学年および学期において、90%以上と良好で、この結果は「教員の授業に対する取り組み」の評価とほぼ相関していた。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、全学年および全学期において 90%以上であった。「あてはまらい」との回答は全学年及び前学期においてなかったものの、3 年生の後期において「あまりあてはまらない」が約 10%あり、意義ある授業となるように、「教員の授業に対する取り組み」を含めて改善をする必要があると考えた。

生命医科学科アンケート結果報告(図XI)

「学生自身の授業の取り組み」

全学年において欠席数 3 回以内は、前期・後期を通じて 85%以上であった。特に 4 年次の後期は国家試験前の時期であるにもかかわらず 6 回以上欠席した学生が 15%弱みられた。その他の学年においては前期・後期を通じ、どの学年も 95%以上を保っていた。更に欠席 0 回について比較すると 4 年次前期では欠席 0 回の学生が他の学年と比較し、最も少ない状況であった。予習を 1 時間以上行った学生は前年同様に高学年になるに従い高くなる傾向にあるがそれでも 10%程度である。また、4 年次では前期・後期ともに 30%程度であった。前年度より 20 ポイントも減少傾向にあり国家試験対策を含め指導の必要性を示唆する結果となった。また 1 年次前期についてはほとんど「予習」をしていない学生が半数(56%)もいたが、後期になると各学年ともに「ほとんどしていない」学生が減少傾向になっている。「復習」については、1 年次から 3 年次は前期・後期通じて 15～34%程度であったが、4 年次になると 70%前後が 1 時間以上復習を行っており、国家試験の受験学年であることを意識しているものと思われる。

「教員の授業に対する取り組み」

「教員は、シラバスにそって授業を行ったか」と言う設問に対し「あてはまる」「ややあてはまる」の合計が前期・後期ともに 98%を超えており概ねシラバスに沿った授業が行われていると推測される。「教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していたか」と言う設問に対しては「あてはまる」「ややあてはまる」の合計が前期 97%以上、後期では約 98%以上を超えており、おおむね学生の満足度が高いことがうかがえる。「授業の開始時刻を守っているか」と言う設問に対し「あてはまる」「ややあてはまる」が前期で 95%以上、後期では全学年を通じて 100%であり概ね教員が開始時刻を守っていることが示唆された。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標や修得すべき事項を理解できたか」と言う設問に対し学年が上がるに従い「あてはまる」「ややあてはまる」の合計が前期 97%・後期 99%を超えており授業中に適切に目的や重要点の指導が行われていることが示唆される。また、「授業で学習意欲が高まったか」と言う設問に対して「あてはまる」「ややあてはまる」と回答したのは前期が 96%で後期は 98%を超えており学習意欲が高まったことが示唆される。前期では「あまりあてはならない」「あてはまらない」が 4%近くあったが後期では２%以下に下がっており学習を重ねることにより学習の意欲が多少なとも上がっており改善がみられている。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

総合評価として「授業は意義あるものだったか」と言う設問に対し、「あてはまる」「ややあてはまる」の合計が前期 98%を超えておりまた後期は 99%を超えている。学年別にみても 2 年次の前期のみ 96%であるがとその他の学年と時期において 98%を超えており 1 年次から 4 年次を通して一般教養科目から専門科目迄全てにおいて興味を抱き有意義な学習と感じ取っているのではないかと思われる。尚、全質問に対し 4 年次は国家試験の受験年度となり学業に対し積極的に励んでおり、臨床検査技師になりたいという自覚が各学生に寝ずいているものと思われる。

臨床心理学科アンケート結果報告（図XII）

「学生自身の授業の取り組み」

全体の出席状況に関しては、欠席 3 回以内の学生が 1、2 年生ともに 90～100%であり、良好な結果を示していた。2020 年度は後期になると 1 回～3 回欠席の割合が増加していたが、2021 年度は後期の出席状況は前期よりも良くなっとり、出席指導の効果が見られたと考えられる。

予習時間は、「ほとんどしなかった」の割合が１年生では約 45％であるのに対して、２年生は約 50％に達していた。１年生の予習時間の割合は 2020 年度に比べると改善傾向にあるが、２年生の予習の時間があまりにも短く、学科で徹底した指導を行なっていく必要がある。

復習に関しては、１、２年生共に前期よりも後期の割合が高い傾向を示した。特に２年生の後期は、1 時間以上復讐を行っている学生の割合が 15%以上を示し、2020 年度の割合を上回る結果となった。この結果から、引き続き学科全体で予習復習の学習習慣を身につけるような指導を促していきたい。

授業中の取り組みに関しては、１、２年生において、前期・後期ともに「あてはまる・ややあてはまる」が 90％を超えており、学生は意欲的に大学の授業に取り組んでいるという結果であった。これは出席状況と同様に非常に高い値であり、今後もこのような結果を継続できるよう、学科として取り組んでいく。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

学生から見た教員の授業の取り組みに関しては、１、２年生ともに全ての質問項目において「あてはまる・ややあてはまる」が前期・後期ともに 90％以上となっており、2020 年度と同様に教員の授業に対する取り組みは、学生から高く評価されていた。今後も学生から授業評価を意識した取り組みを継続して行っていく必要がある。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度・達成度に関しては、１、２年生共に、理解度、意欲の質問項目において「あてはまる・ややあてはまる」が 90％を超えており、学生の授業に関する理解度・到達度は高いと考えられる。また、この結果から、学生が授業に対して意欲的に取り組んでいることが推測された。しかしながら、本学科では回答者が 1、２年生に限定されていたため、今後、学年が上がるごとに、このデータが変化していく可能性は否めない。学年が上がっても学習意欲を継続できる指導を今後学科で検討していかなければならない。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義に関しては、前期・後期ともに 90％以上の学生が「あてはまる・ややあてはまる」と回答しており、概ね高い評価であった。この結果は、学生の授業に対する高い意欲と、各教員の地道な取り組みによるものであると考えられる。しかしながら、2021 年度と比べると、２年生の評価が昨年度の 95%よりも若干下回っており、学年が上がっていくにつれ、学生の授業への意欲に関する懸念もある。現在のところ、全体的な結果は概ね満足できるものではあるが、この結果に満足することなく、常に学生ファーストの視点で、今後の授業を展開していけるように、学科教員一丸となって取り組んでいく必要がある。

図　I

学生支援システム「UNIVERSAL PASSPORT」により、
Webアンケートを実施。

（以下、アンケート内容のイメージ）

123456789　科目Ａ（教員Ｂ）

授業アンケート　　年度（前期）

授業アンケート　Q1～Q18

Q1　〔あなたの授業に対する取組について〕
あなたは、この授業を何回欠席しましたか

○ ①　0回

○ ②　1回～3回

○ ③　4回～5回

○ ④　6回以上

Q2　〔あなたの授業に対する取組について〕
あなたは、1回の授業に対して平均どのくらい予習を行いましたか

○ ①　1時間以上

○ ②　30分～1時間

○ ③　30分未満

○ ④　ほとんどしなかった

Q3　〔あなたの授業に対する取組について〕
あなたは、1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか

○ ①　1時間以上

○ ②　30分～1時間

○ ③　30分未満

○ ④　ほとんどしなかった

Q4　〔あなたの授業に対する取組について〕
あなたは、シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか

○ ①　全部やった

○ ②　ほとんどやった

○ ③　あまりやらなかった

○ ④　全然やらなかった

Q5　〔あなたの授業に対する取組について〕
あなたは、この授業で居眠り・私語・遅刻・早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか

○ ①　あてはまる

○ ②　ややあてはまる

○ ③　あまりあてはまらない

○ ④　あてはまらない

Q6　〔教員の授業に対する取組について〕
担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか

○ ①　あてはまる

○ ②　ややあてはまる

○ ③　あまりあてはまらない

○ ④　あてはまらない

Q7　〔教員の授業に対する取組について〕

担当教員は、授業の目的や修得すべき事項を毎回説明していましたか

○ ①　あてはまる

○ ②　ややあてはまる

○ ③　あまりあてはまらない

○ ④　あてはまらない

Q8　〔教員の従業に対する取組について〕
担当教員は、授業の開始時刻をきちんと守っていましたか

○ ①　あてはまる

○ ②　ややあてはまる

○ ③　あまりあてはまらない

○ ④　あてはまらない

Q9　〔教員の授業に対する取組ついて〕
担当教員は、学生の私語などに注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか

○ ①　あてはまる

○ ②　ややあてはまる

○ ③　あまりあてはまらない

○ ④　あてはまらない

Q10　〔教員の授業に対する取組について〕
担当教員は、学生に授業への参加を促しましたか（質問等）

○ あてはまる

○ ややあてはまる

○ あまりあてはまらない

○ あてはまらない

Q11　〔教員の授業に対する取組について〕
担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか

○ ①　あてはまる

○ ②　ややあてはまる

○ ③　あまりあてはまらない

○ ④　あてはまらない（具体的に書いてください）

Q12　〔教員の授業に対する取組について〕
担当教員の講義資料（教科書を含む）は適切でしたか

○ ①　あてはまる

○ ②　ややあてはまる

○ ③　あまりあてはまらない

○ ④　あてはまらない（具体的に書いてください）

Q13〔授業に対するあなたの理解・達成度〕
あなたはこの授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか

○ ①　あてはまる

○ ②　ややあてはまる

○ ③　あまりあてはまらない

○ ④　あてはまらない（具体的に書いてください）

Q14　〔授業に対するあなたの理解・達成度〕
あなたは、この授業で学習意欲が高まりましたか

○ ①　あてはまる

○ ②　ややあてはまる

○ ③　あまりあてはまらない

○ ④　あてはまらない

Q15　〔総合評価〕
あなたにとって、この授業は意義あるものでしたか

○ ①　あてはまる

○ ②　ややあてはまる

○ ③　あまりあてはまらない

○ ④　あてはまらない（具体的にかいてください）

Q16　この授業でよかったと思う点について書いてください

Q17　この授業で改善した方が良いと思う点について書いてください

Q18　この授業の感想（自己反省を含む）、また授業担当者へ伝えたいことなどを自由に書いてください

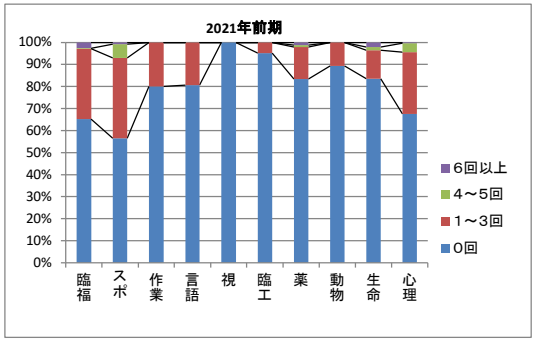
このアンケートは、授業改善を目的として実施するものです。あなたの意見は、今後の授業改善の参考となります。アンケートの回答によりあなたが不利益をこうむることはありませんので、率直な回答をお願いします。

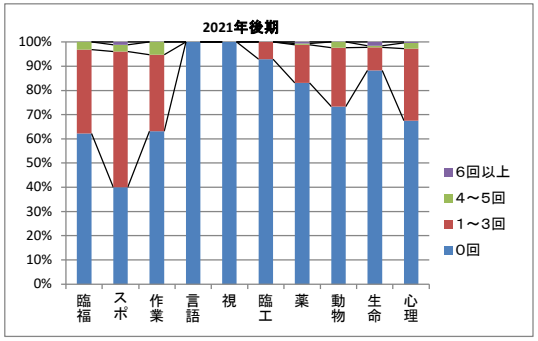
回答

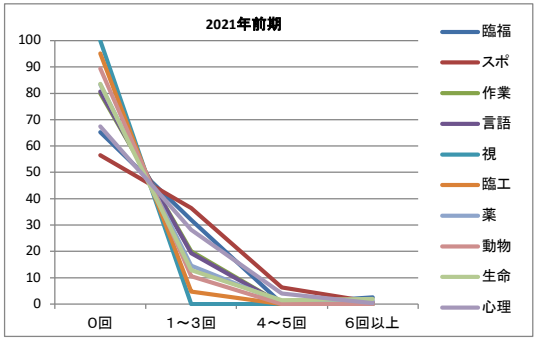
図Ⅱ

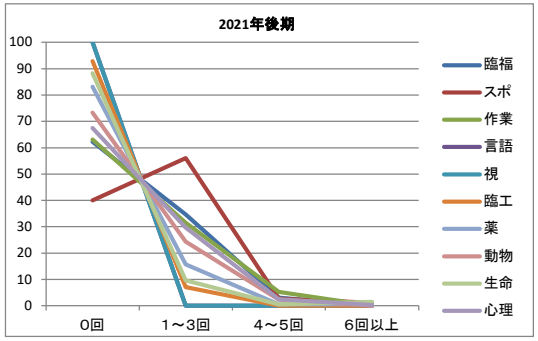
授業アンケート　令和3年度（2021年）

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

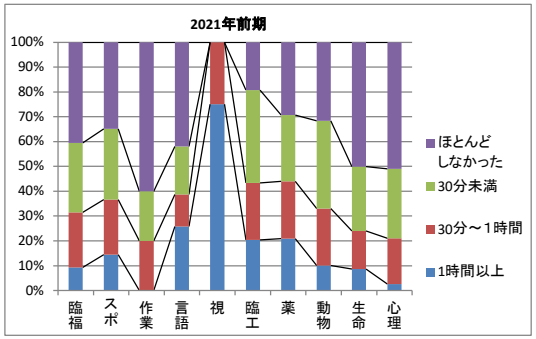


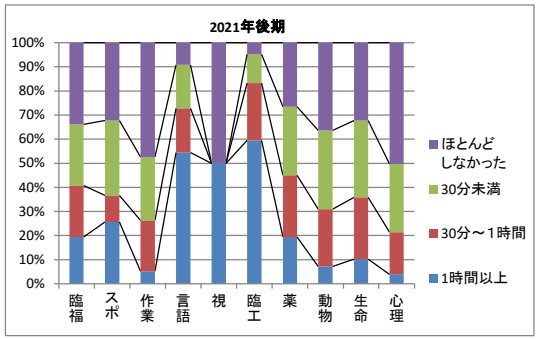


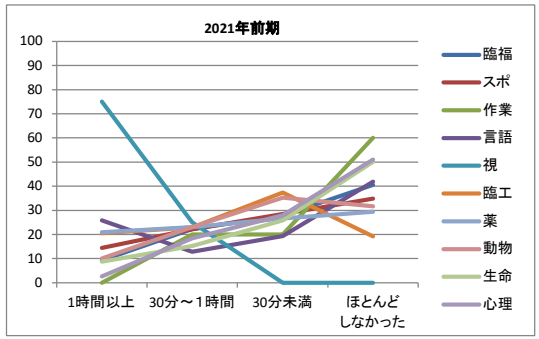


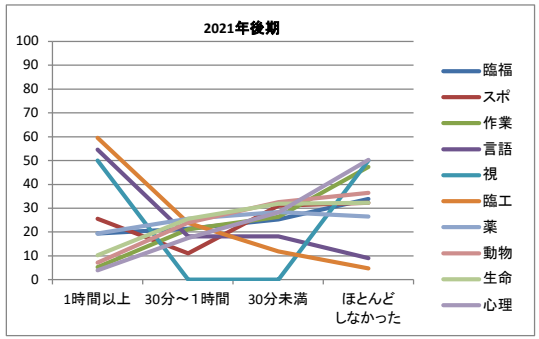


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して平均どのくらい予習を行いましたか。

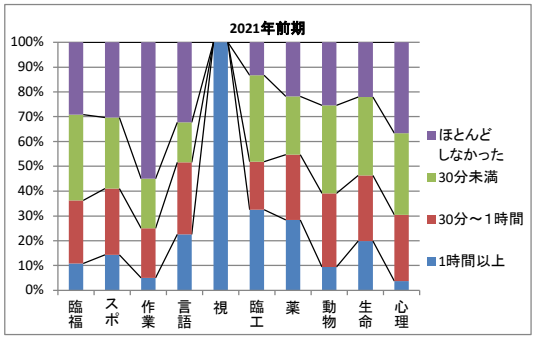


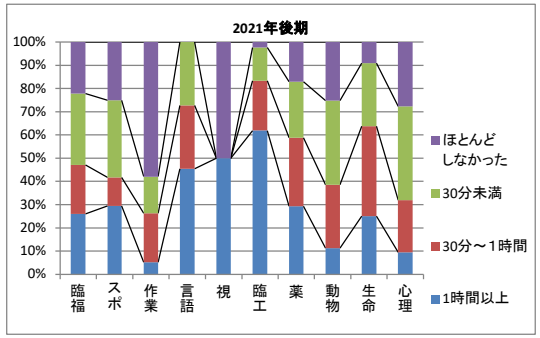


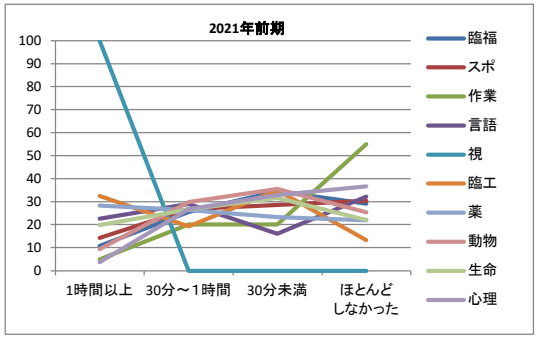


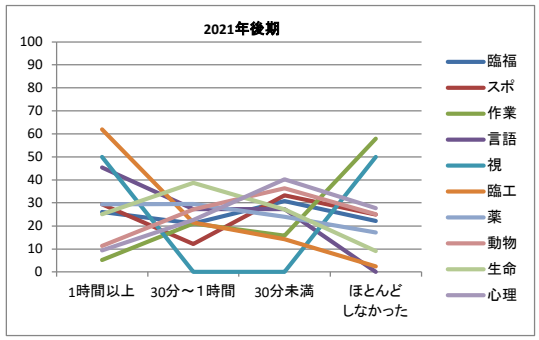


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



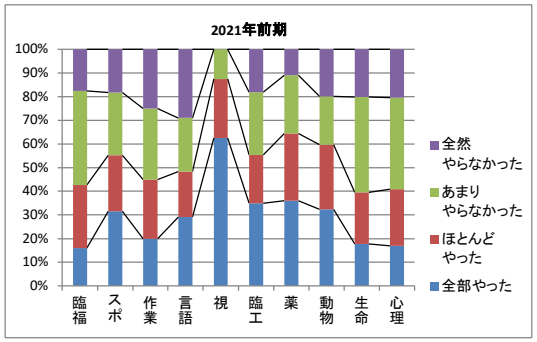


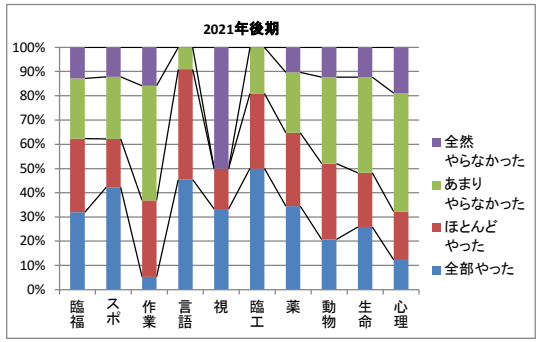


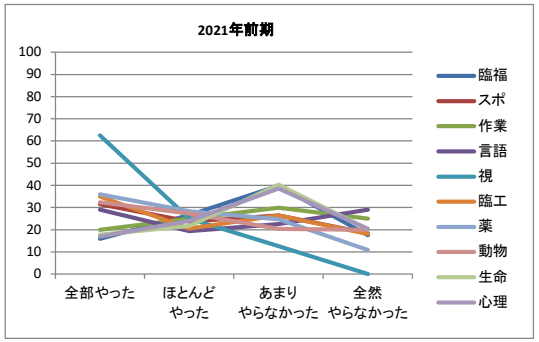


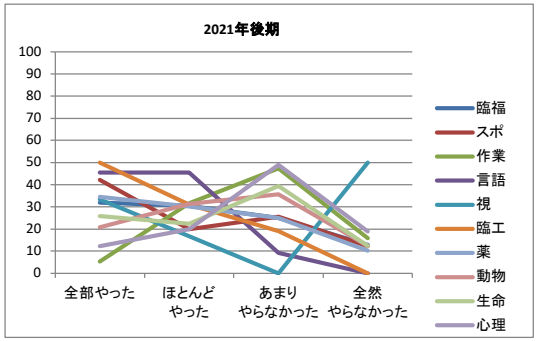
図Ⅱ

【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

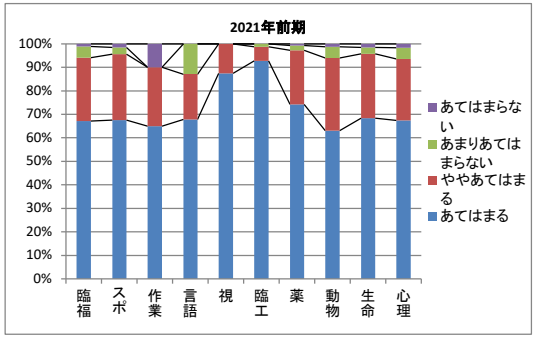


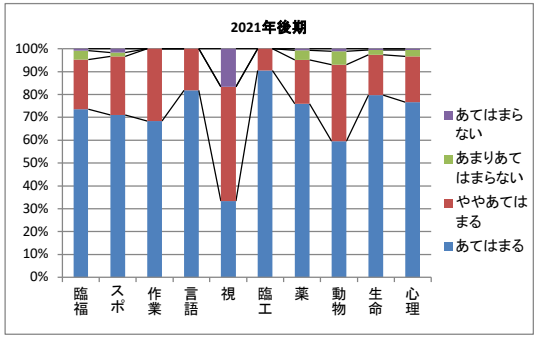


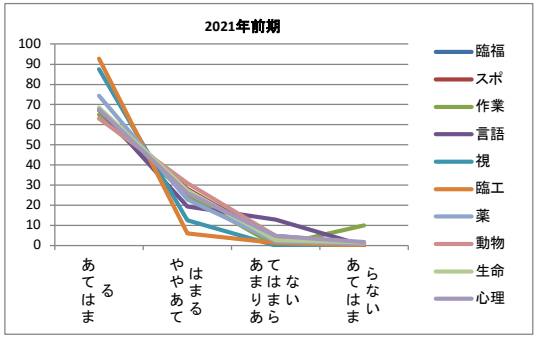


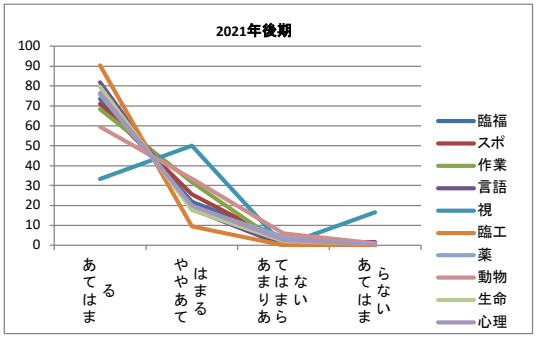


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

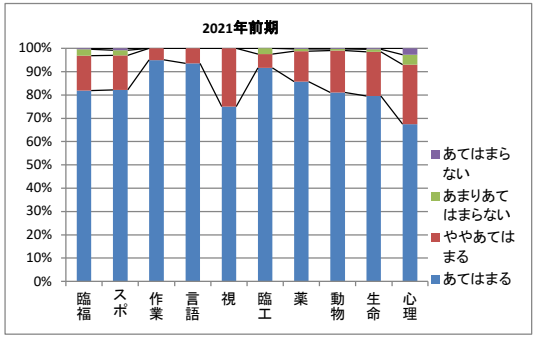


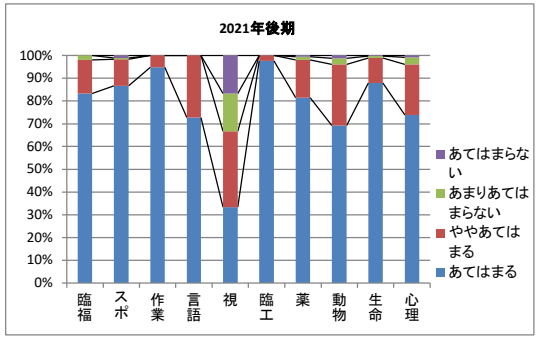


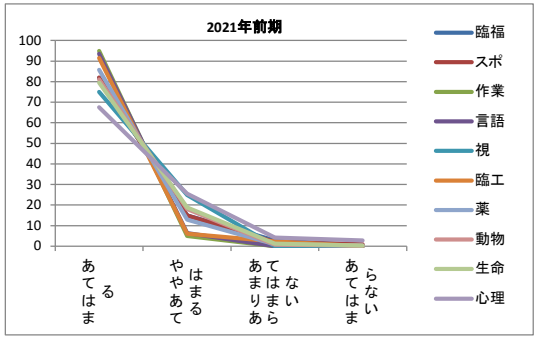


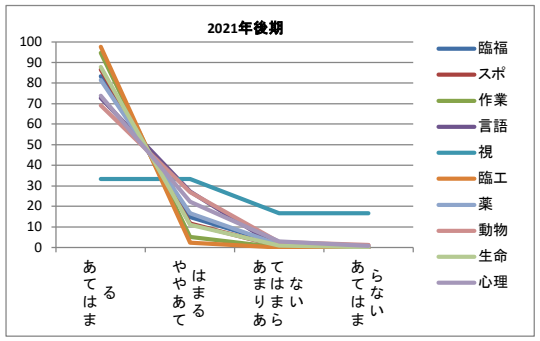


【教員の授業に対する取り組み】
Q6.担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。



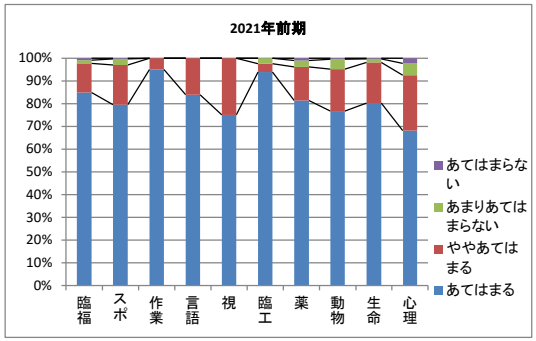


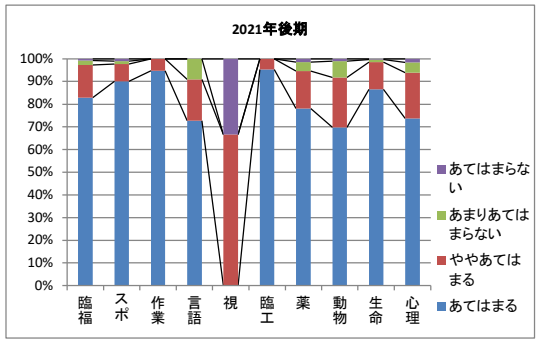


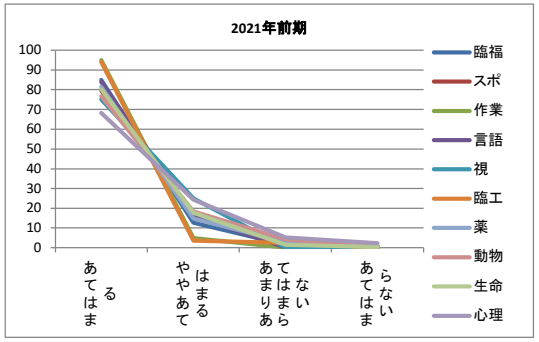


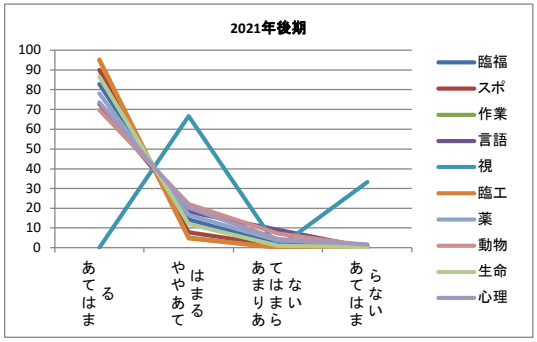
図Ⅱ

【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

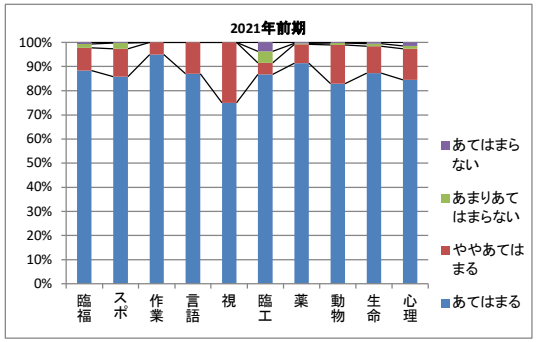


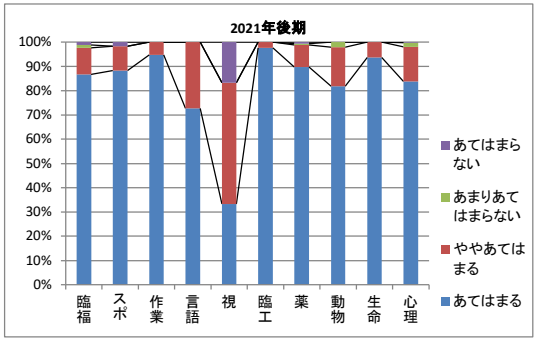


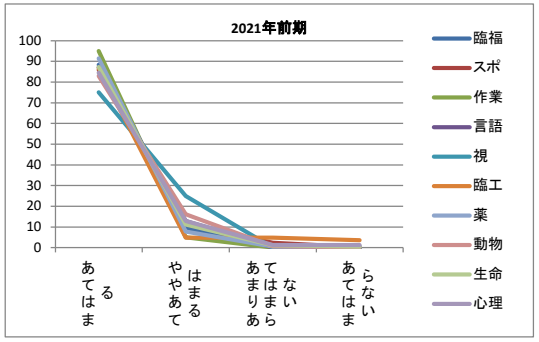


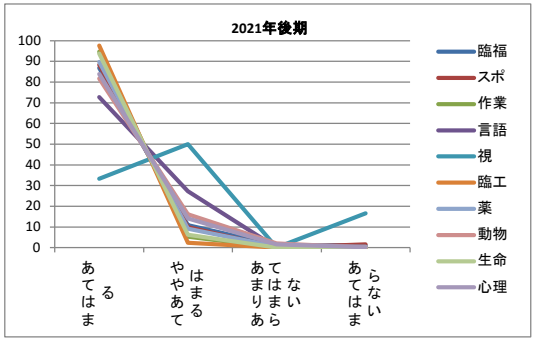


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

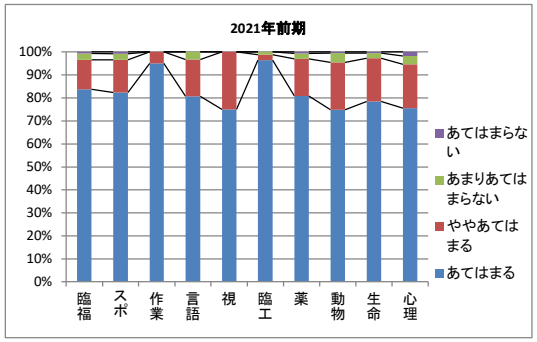


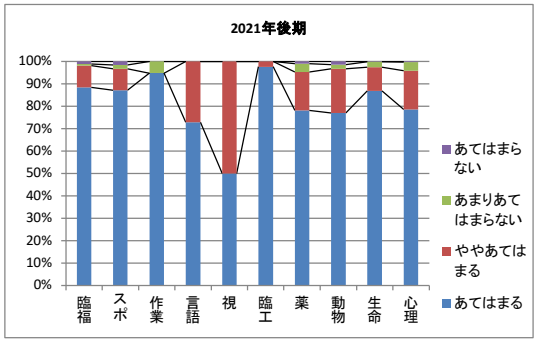


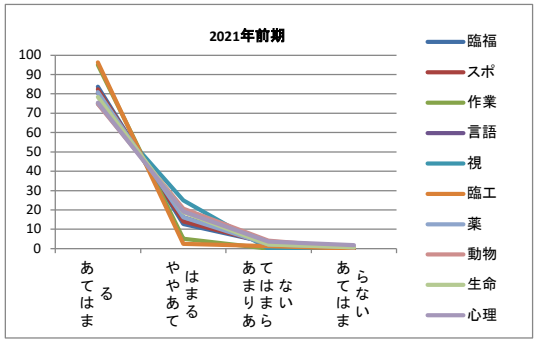


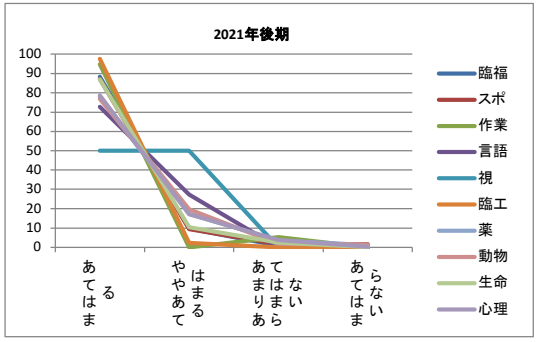


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。



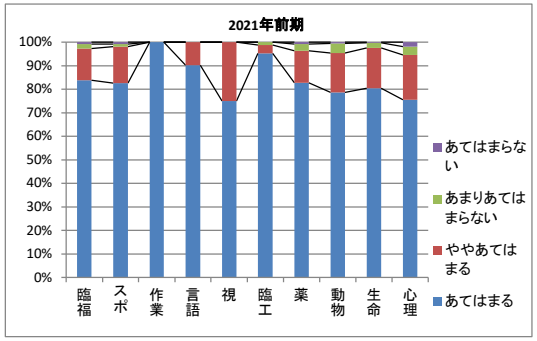


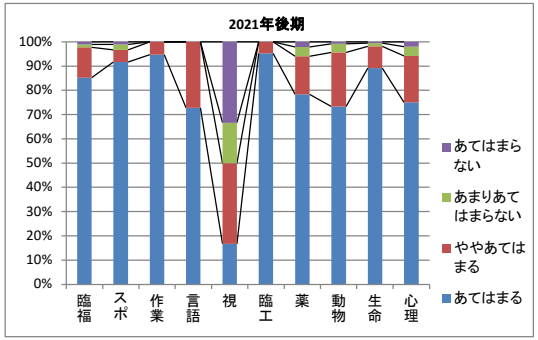


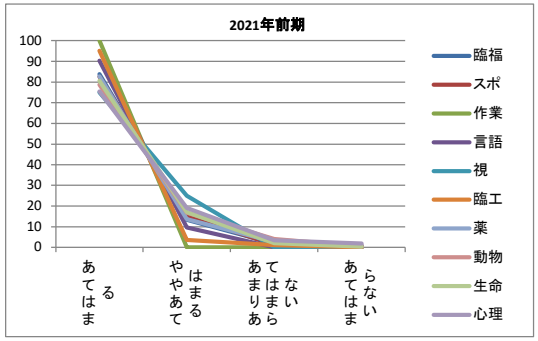


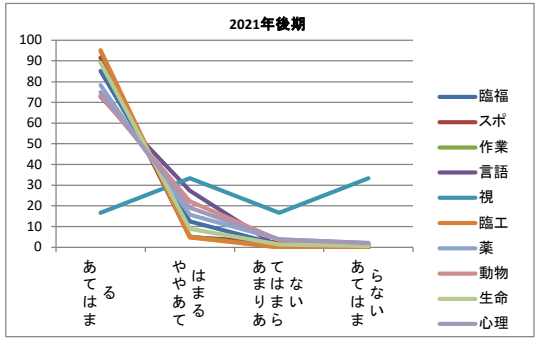
図Ⅱ

【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

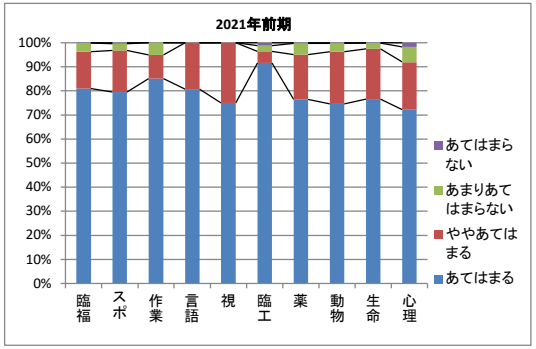


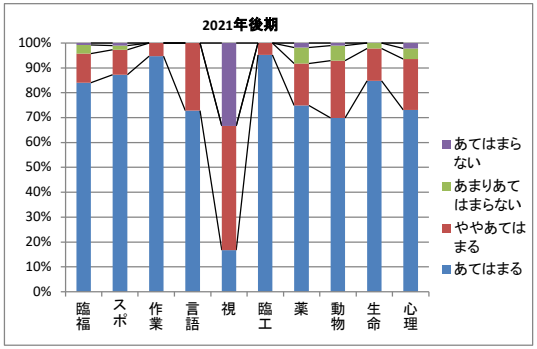


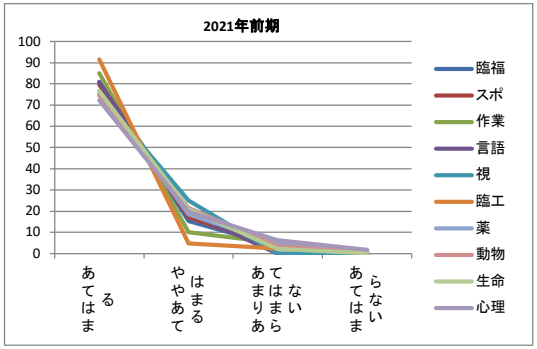


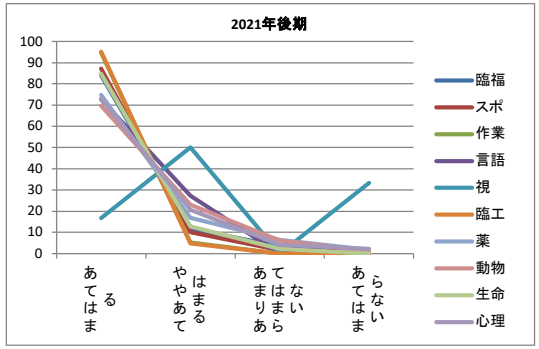


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

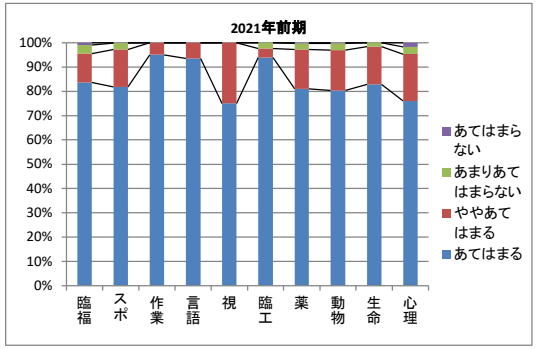


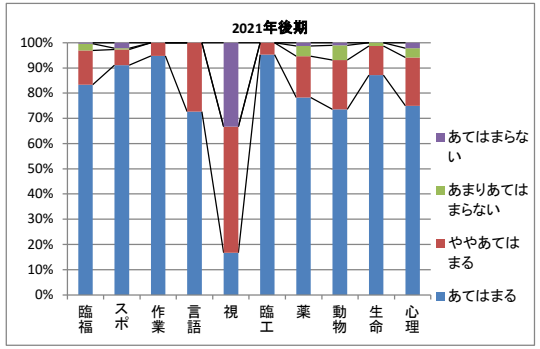


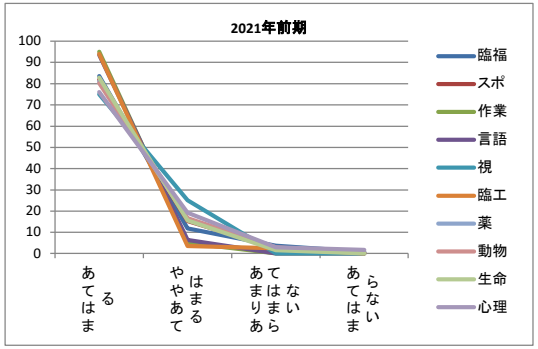


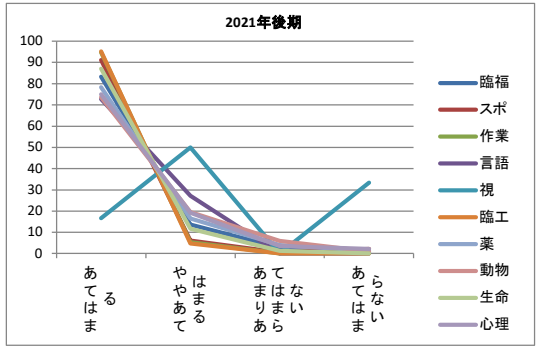


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。



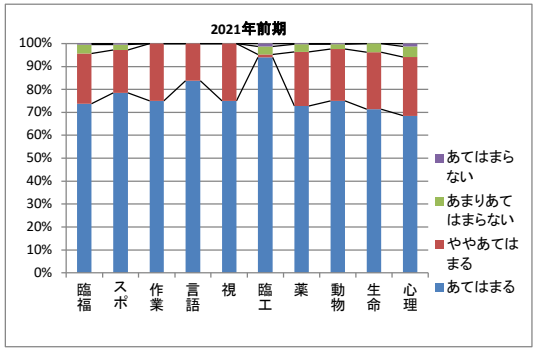


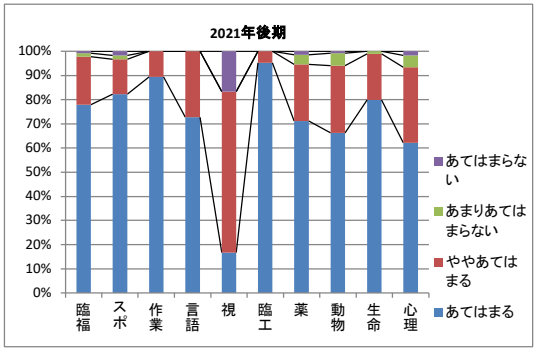


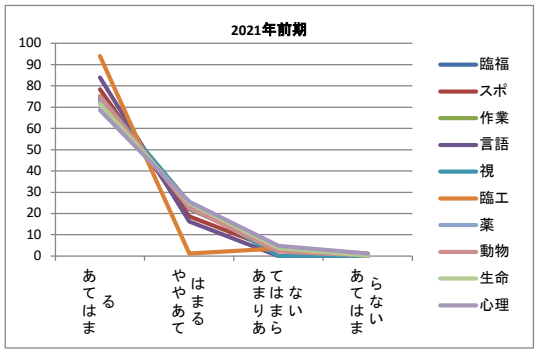


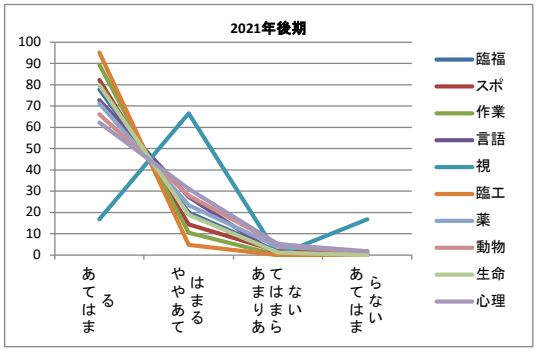
図Ⅱ

【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

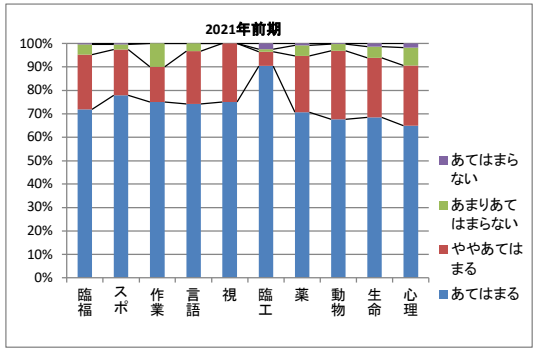


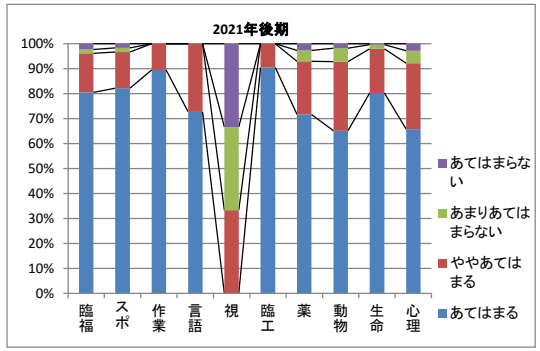


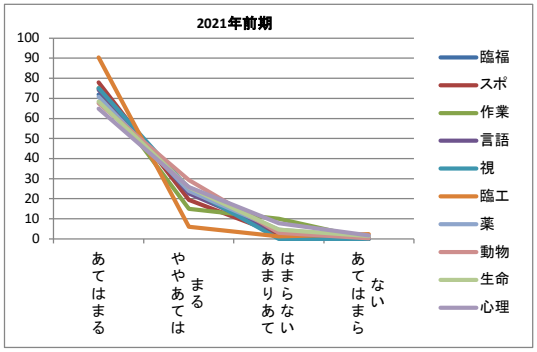


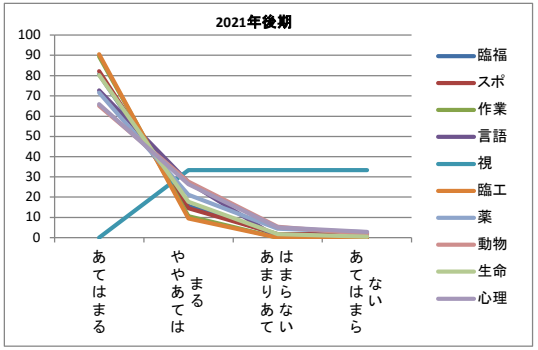


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

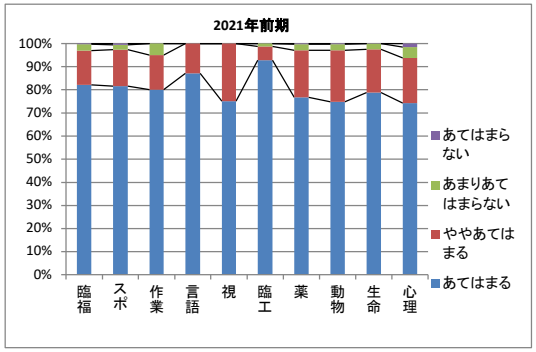


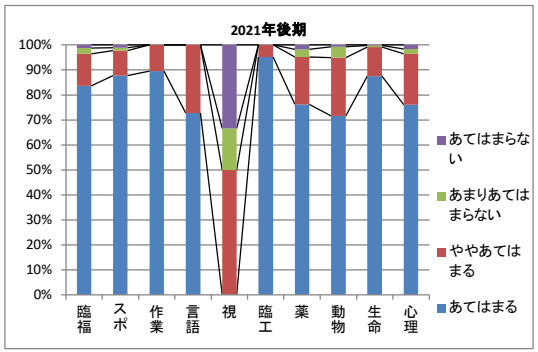


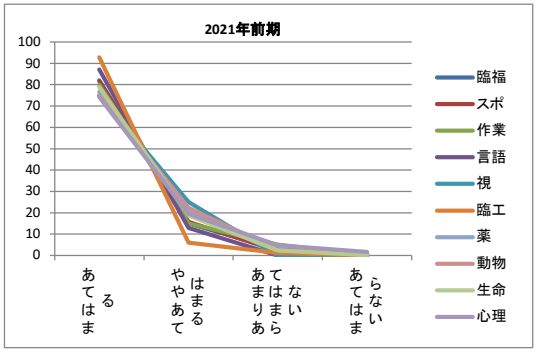


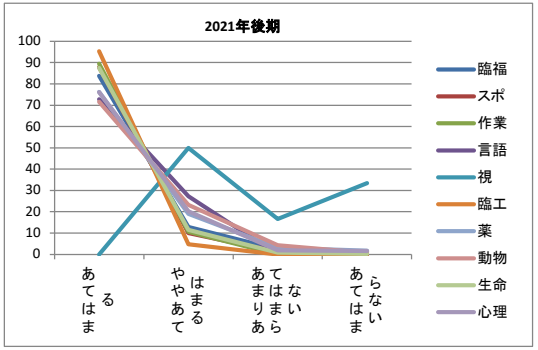


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。







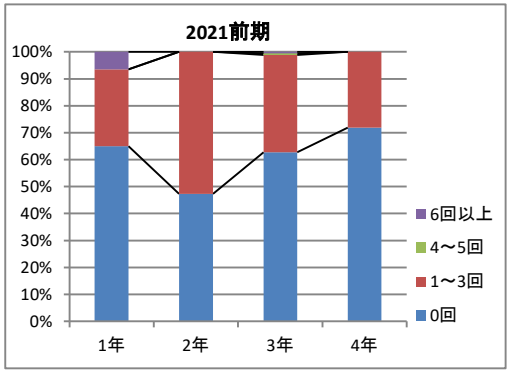


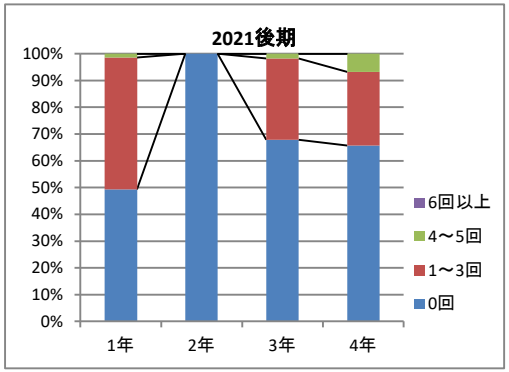
授業アンケート　令和3年度　2021年度

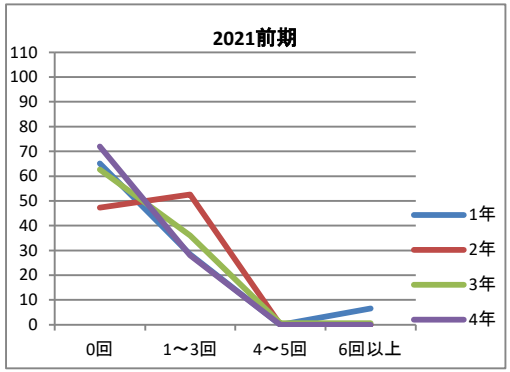
図Ⅲ　臨福

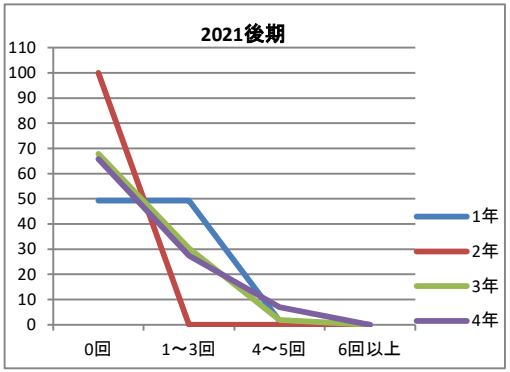
<臨床福祉学科>

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

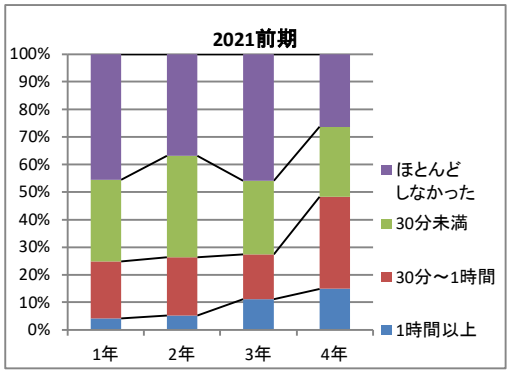


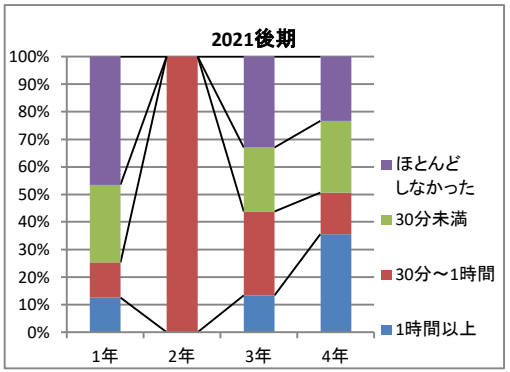


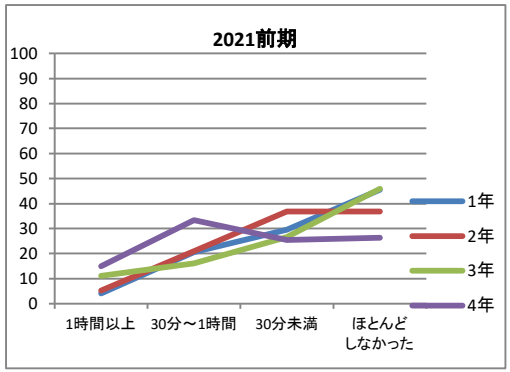


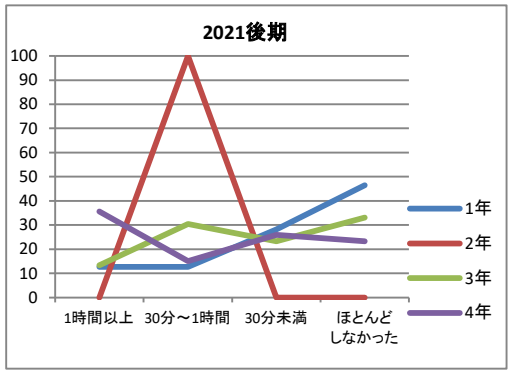


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

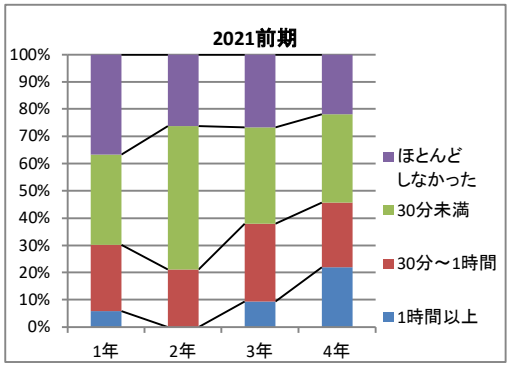


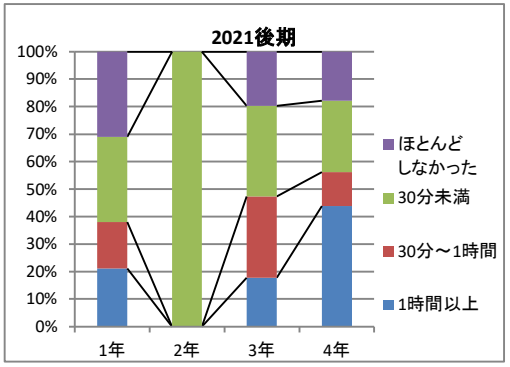


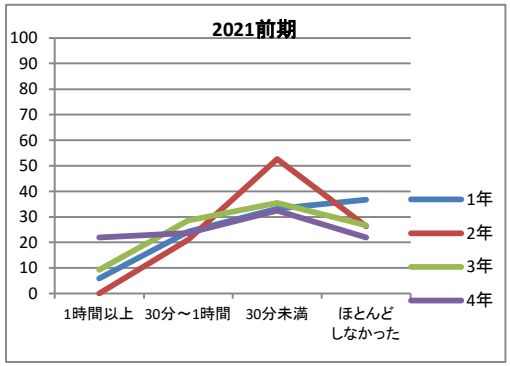


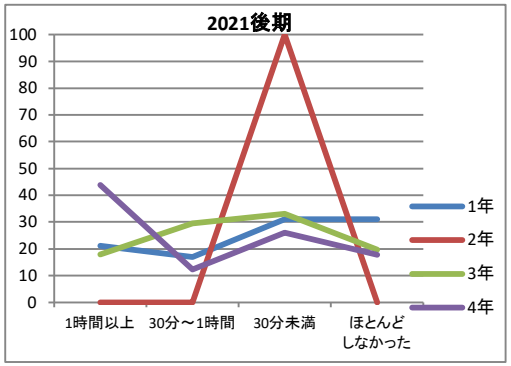


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



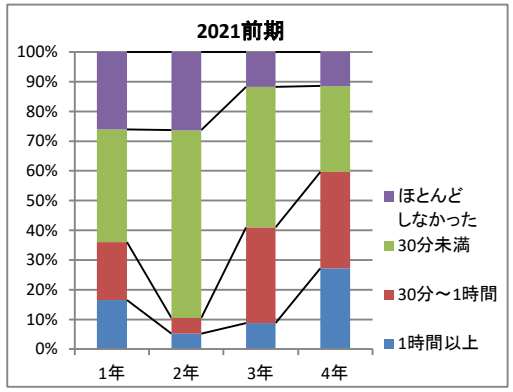


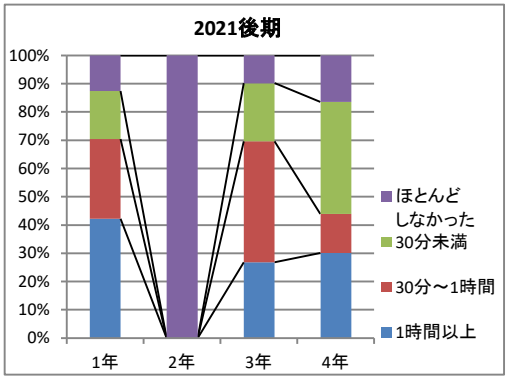


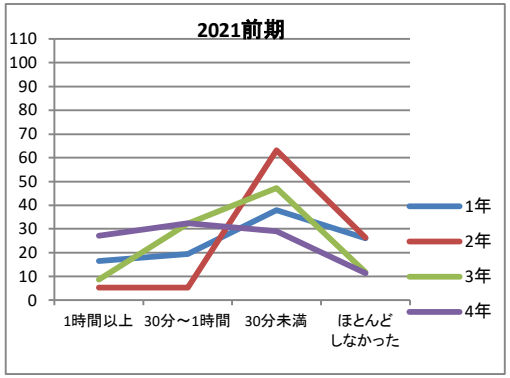


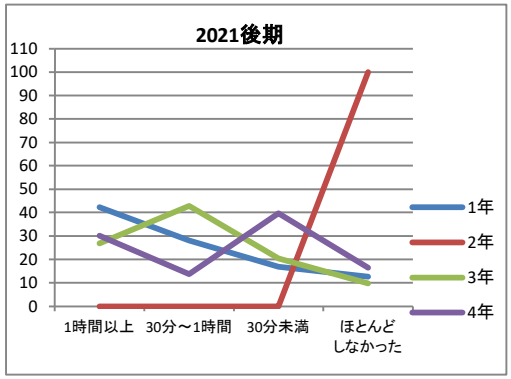
図Ⅲ　臨福

【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

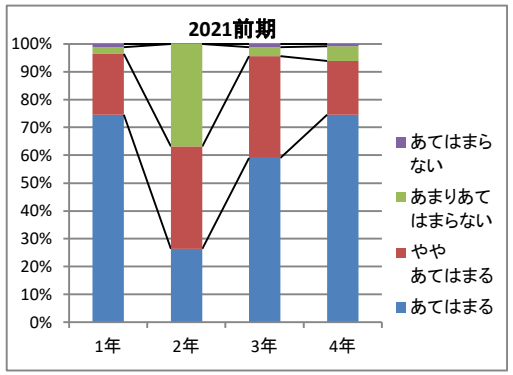


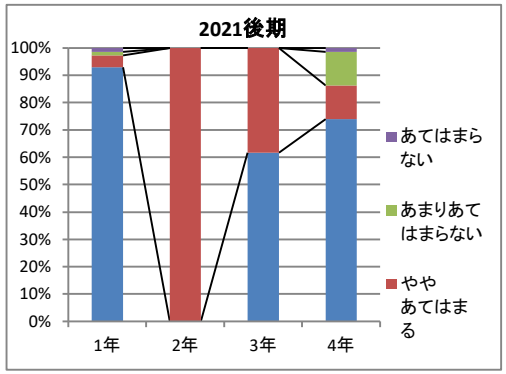


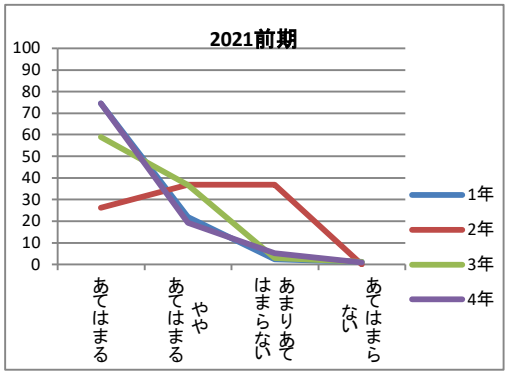


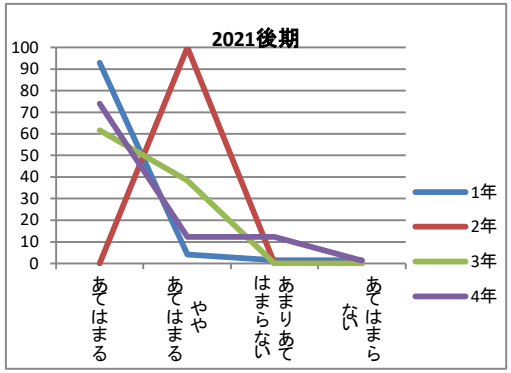


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

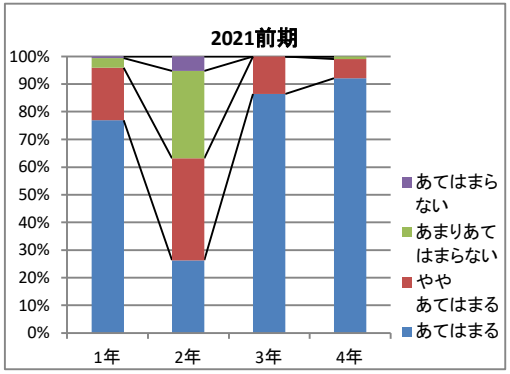


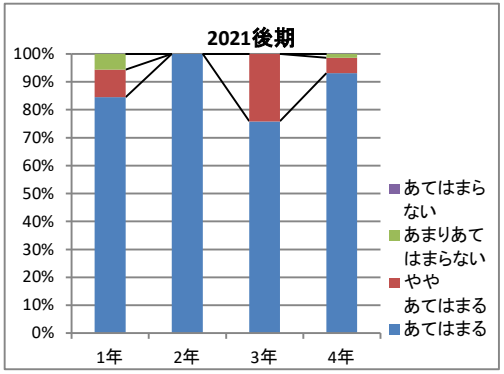


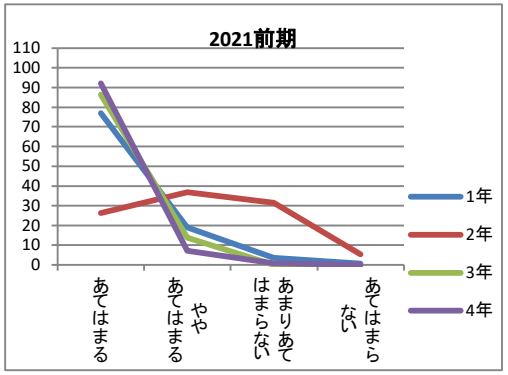


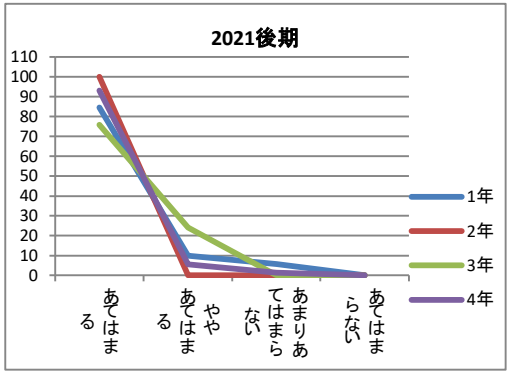


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

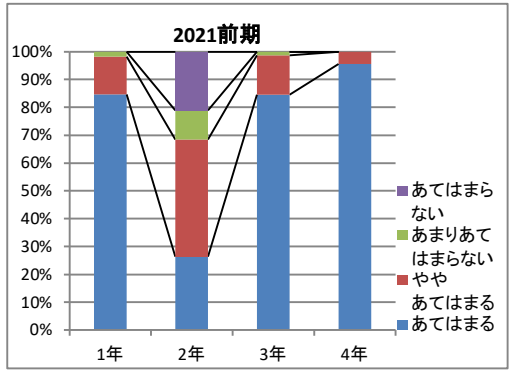


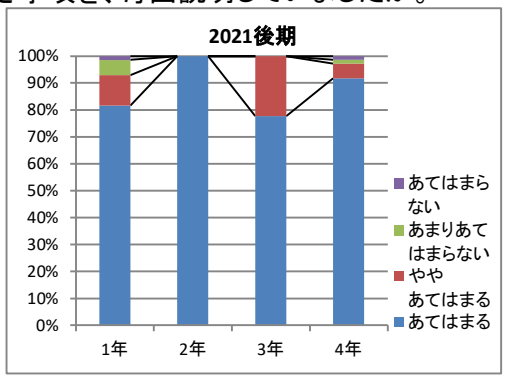


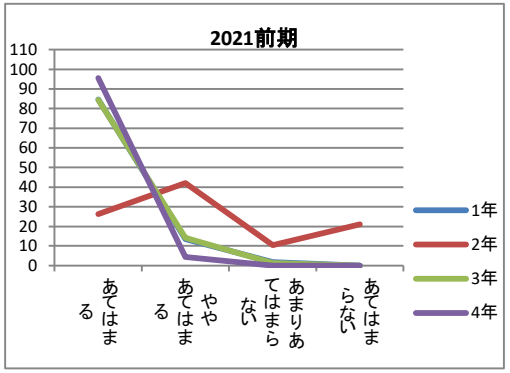


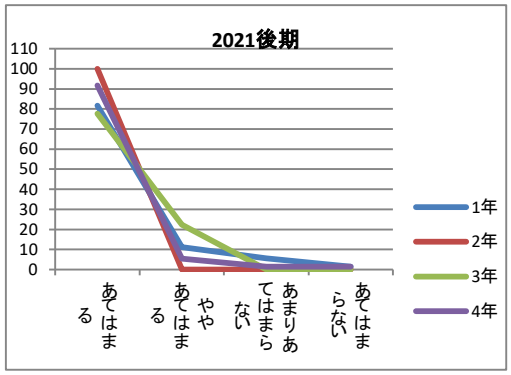


【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

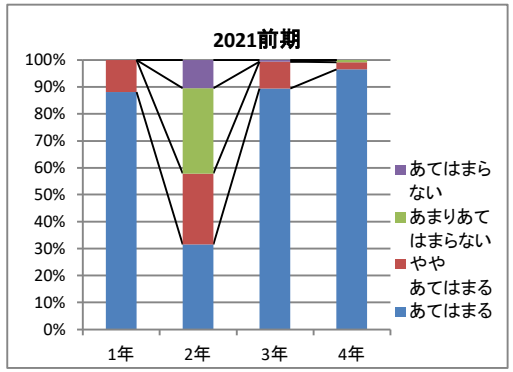


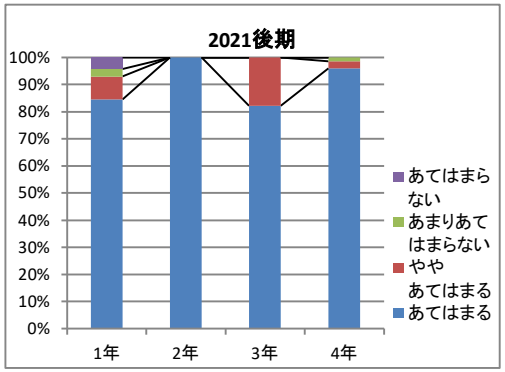


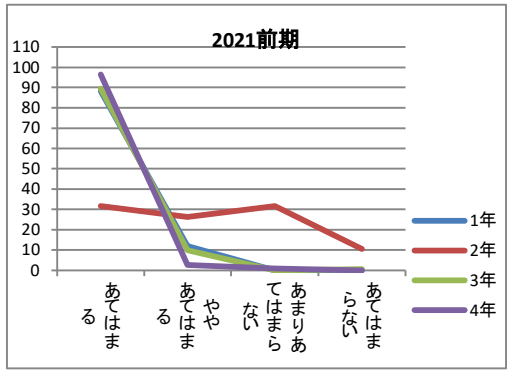


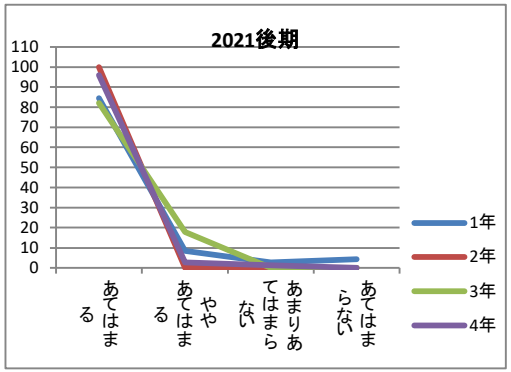


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

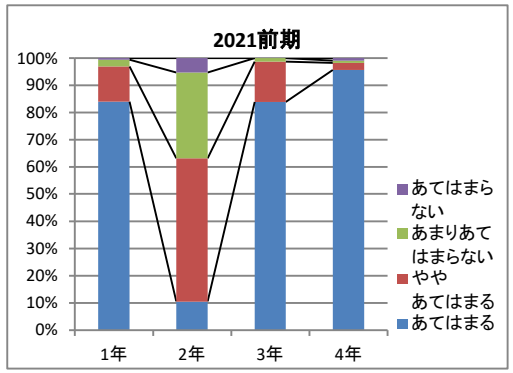


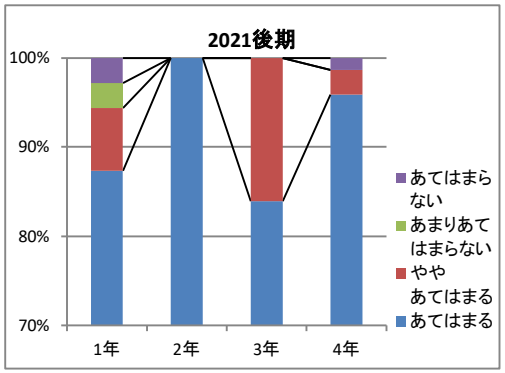


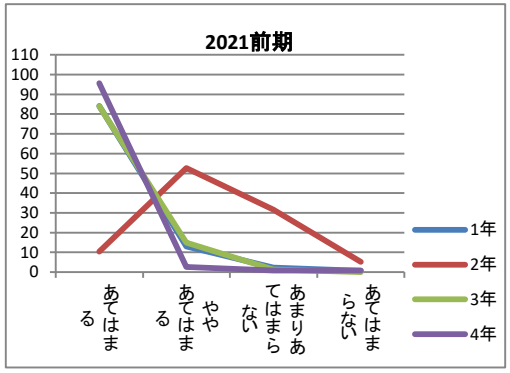


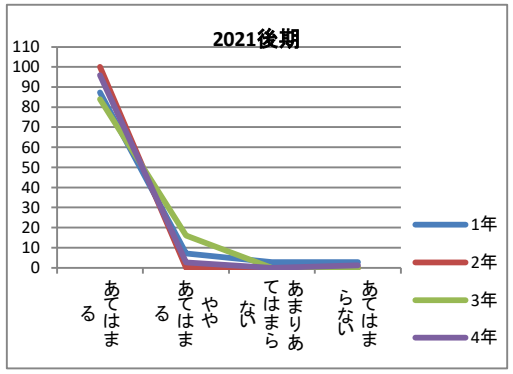


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

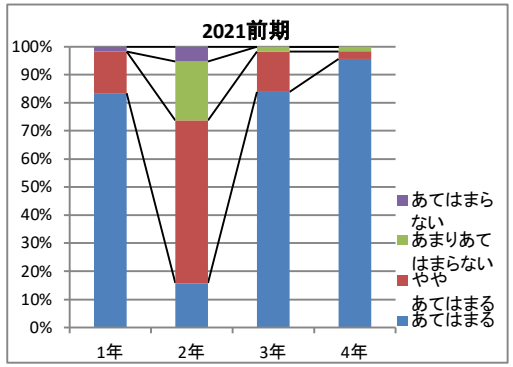


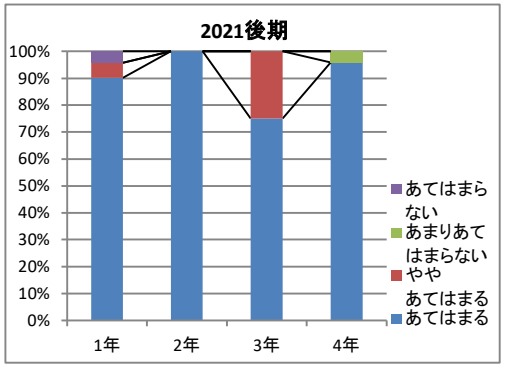


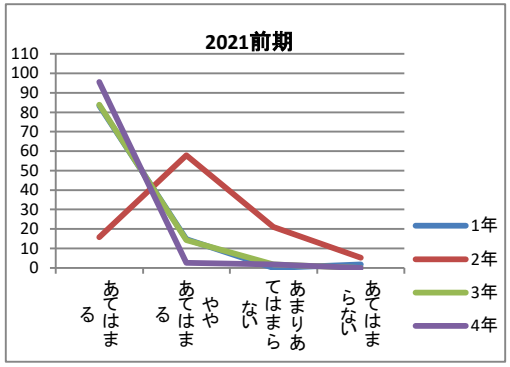


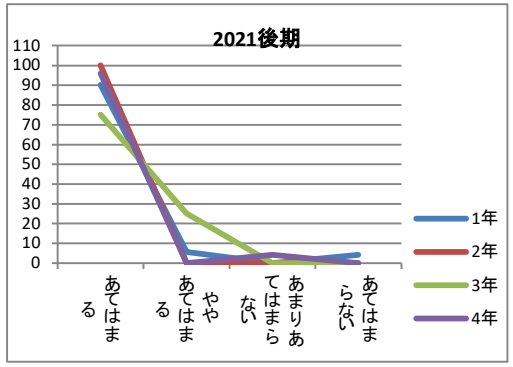


【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

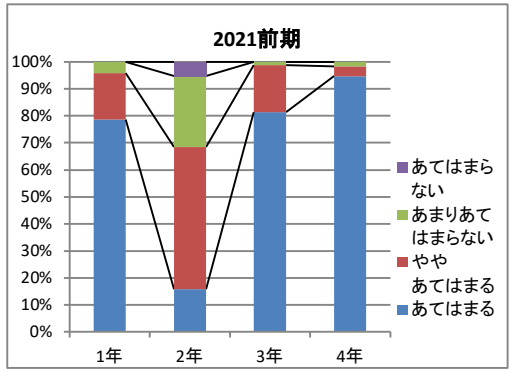


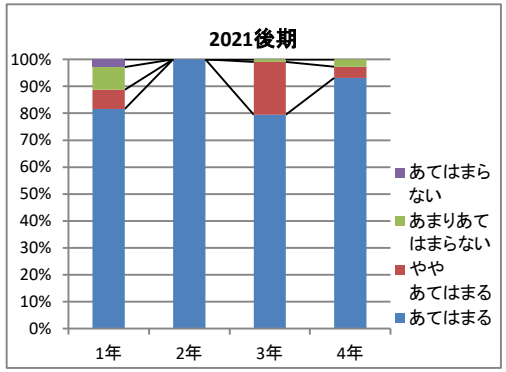


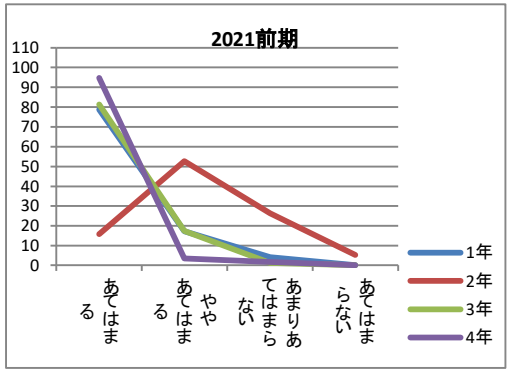


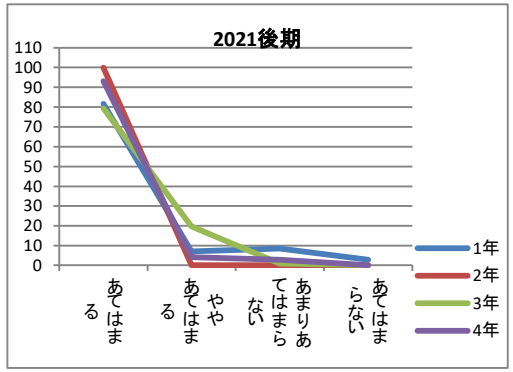


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

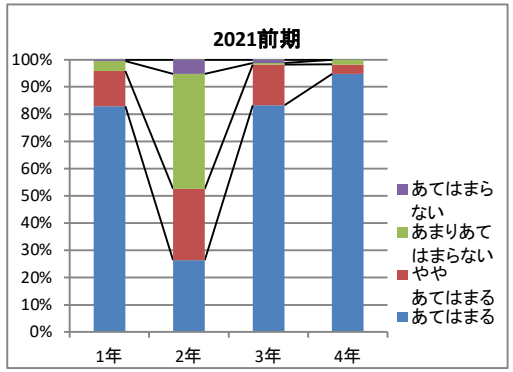


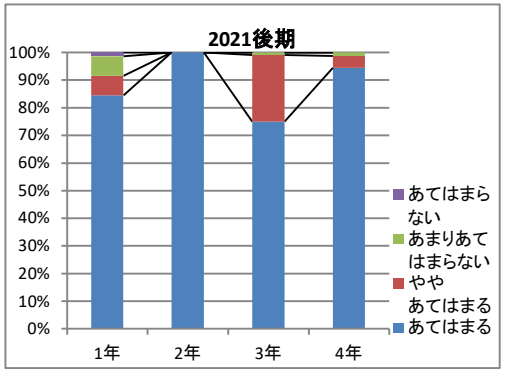


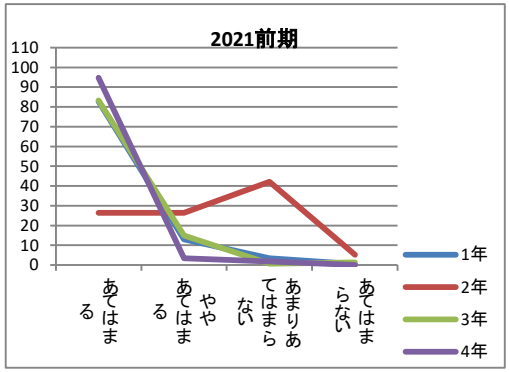


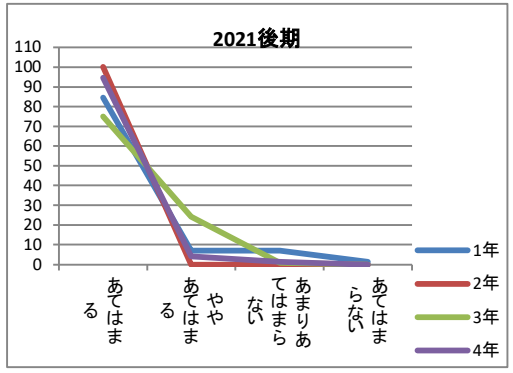


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。



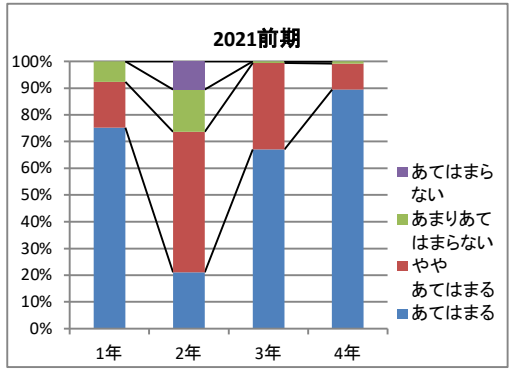


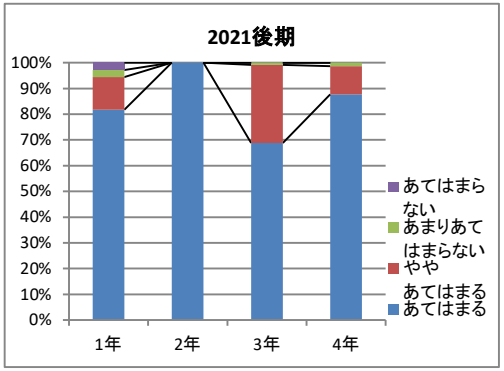


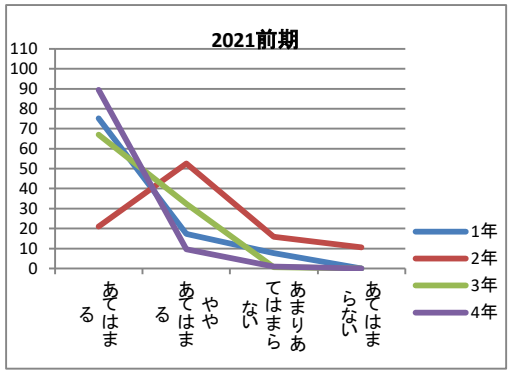


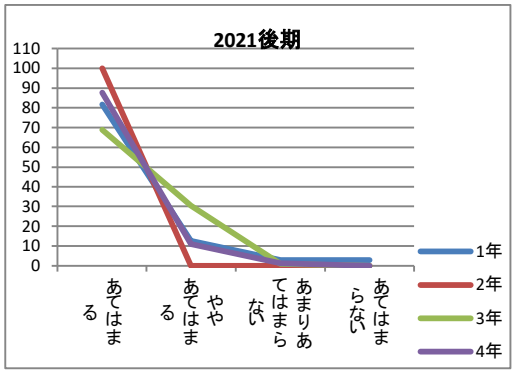
図Ⅲ　臨福

【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

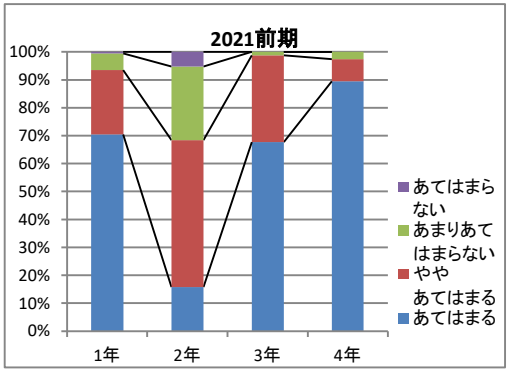


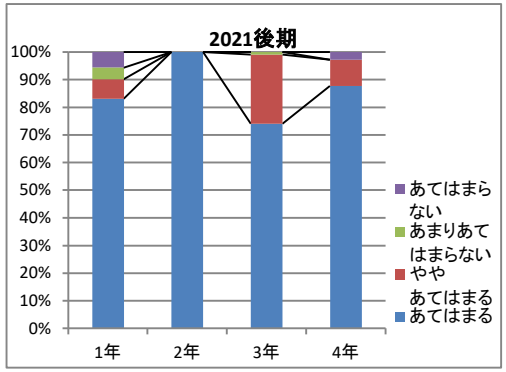


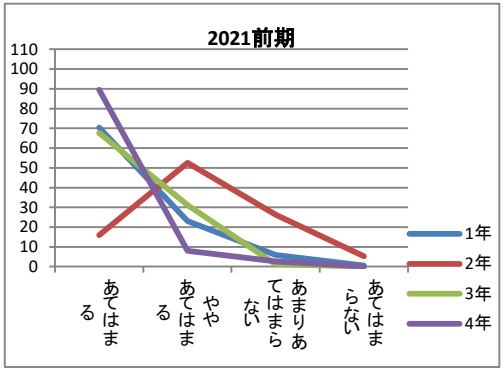


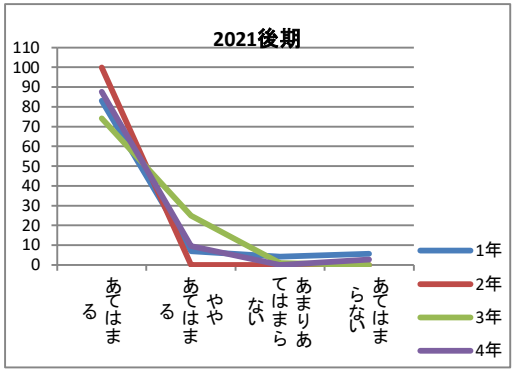


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

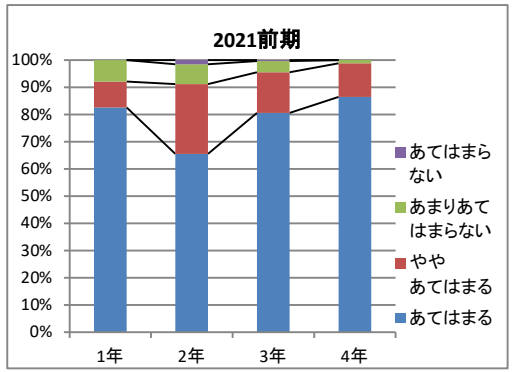


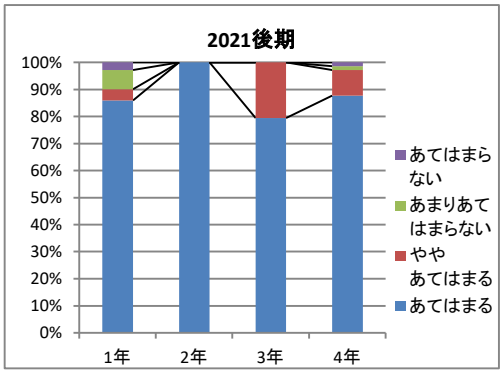


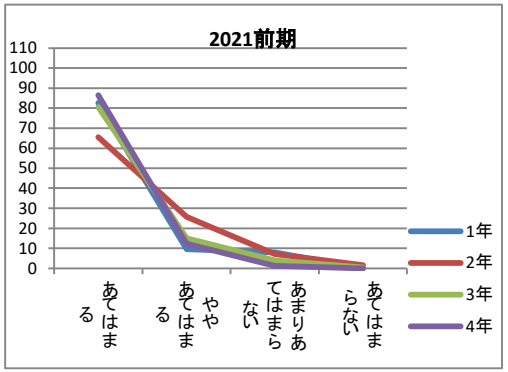


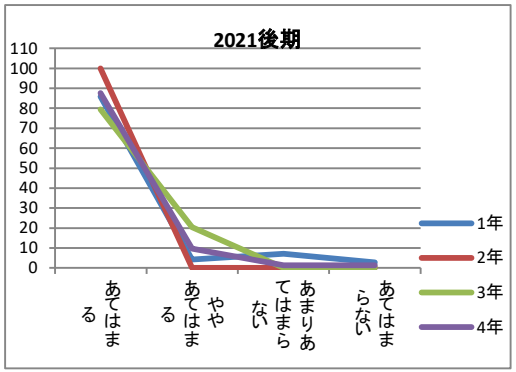


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。







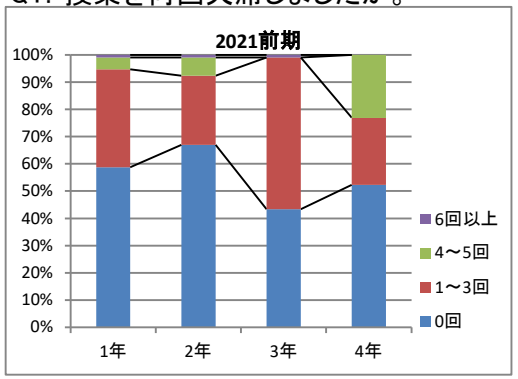


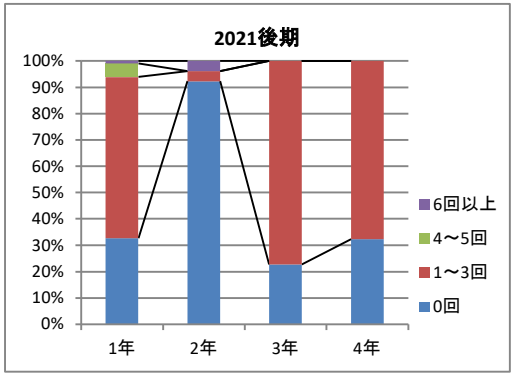
授業アンケート　令和3年度　2021年度

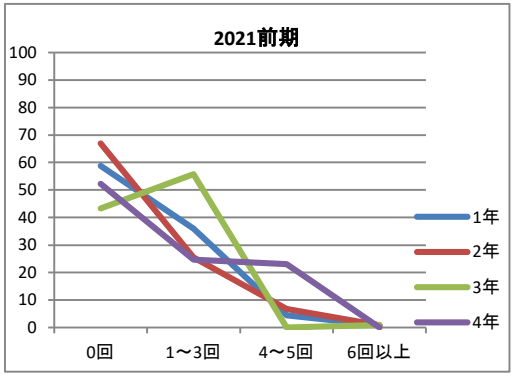
<スポーツ健康福祉学科>

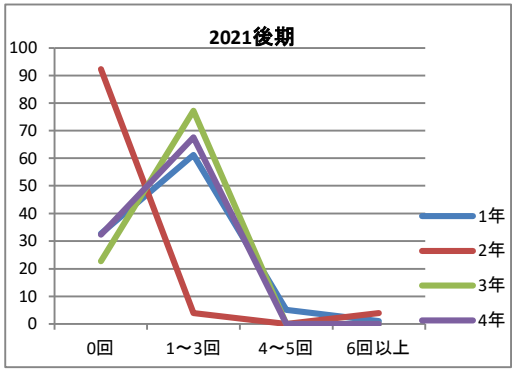
図Ⅳ　スポ

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

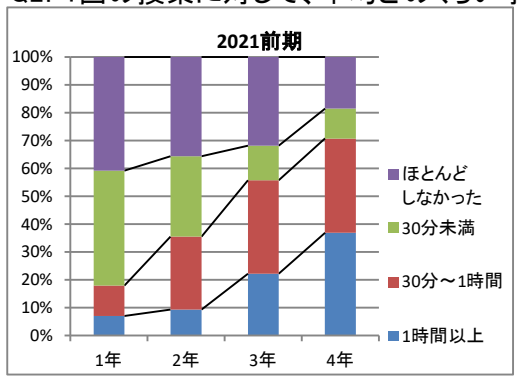


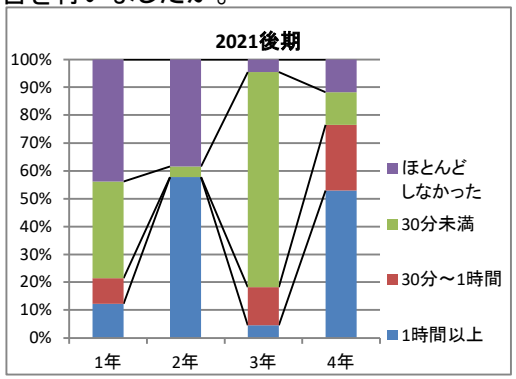


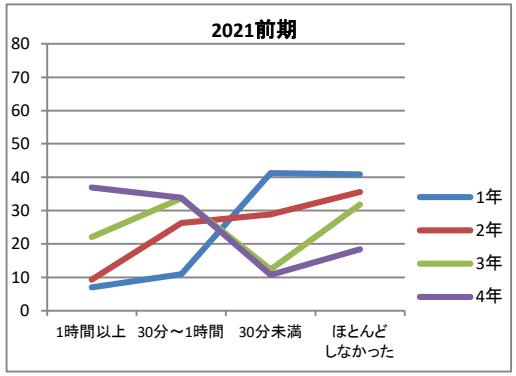


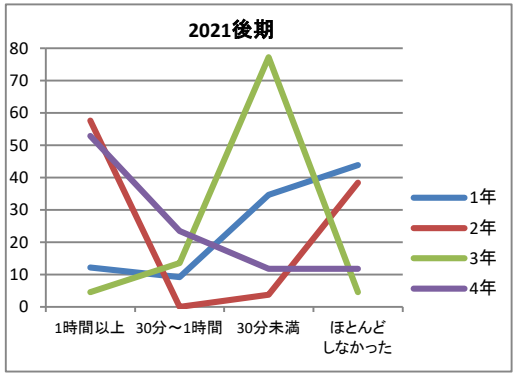


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

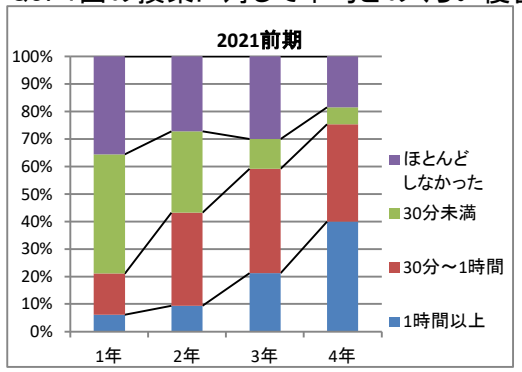


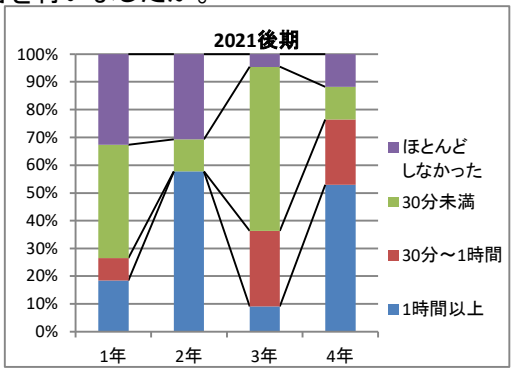


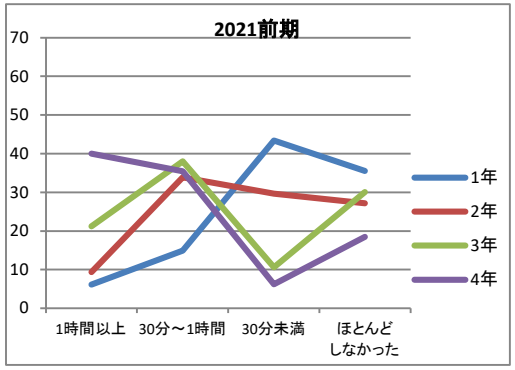


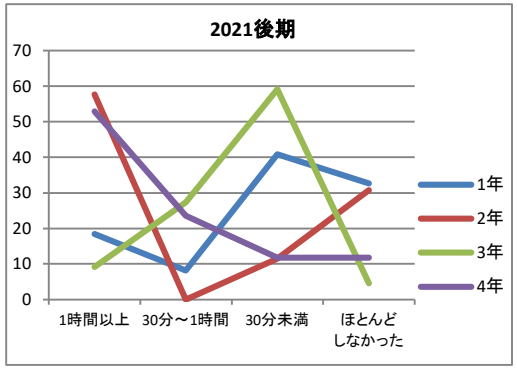


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



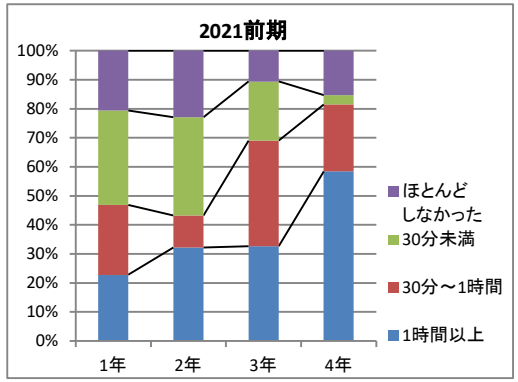


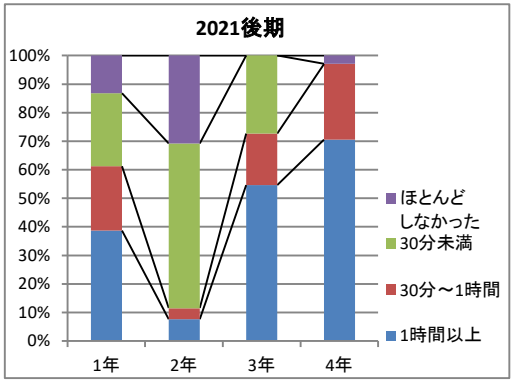


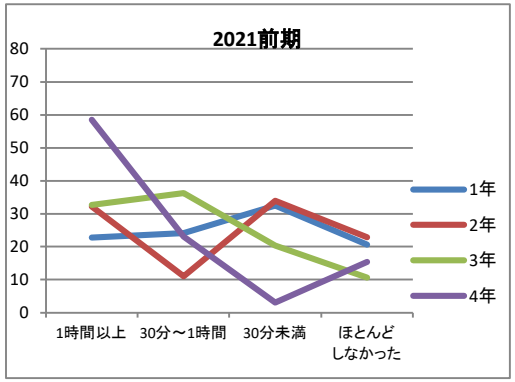


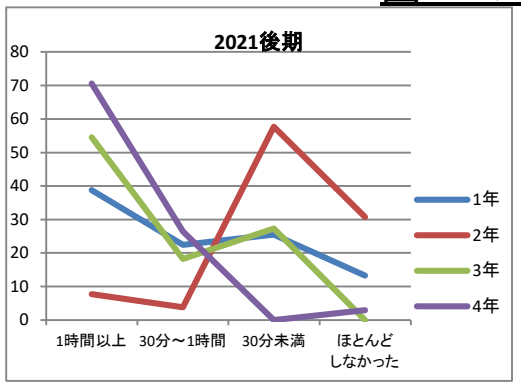
図Ⅳ　スポ

【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

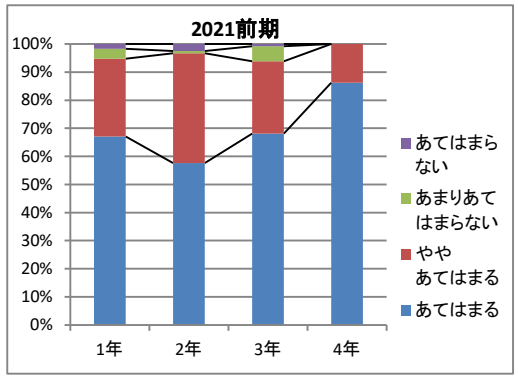


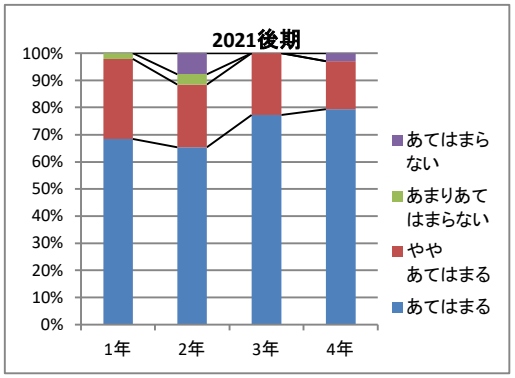


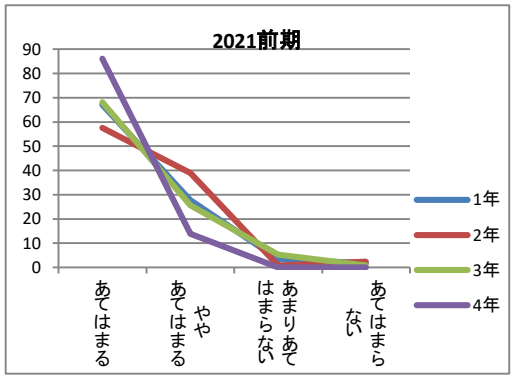


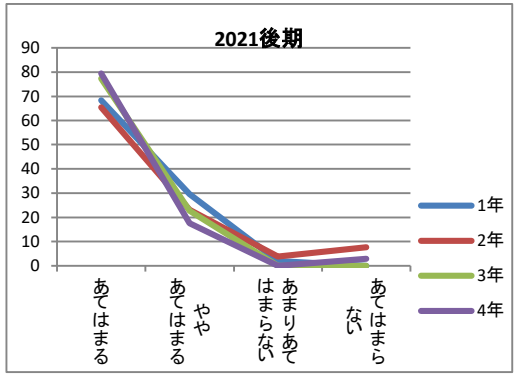


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

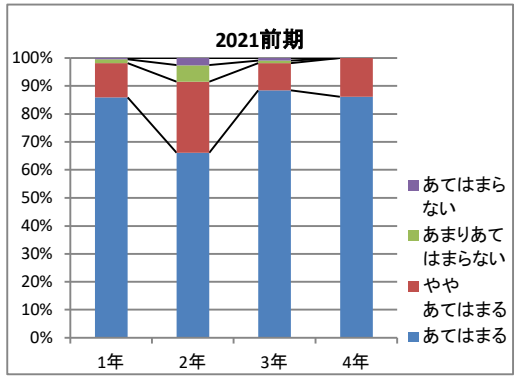


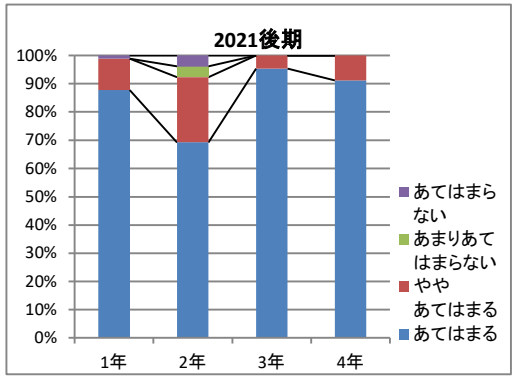


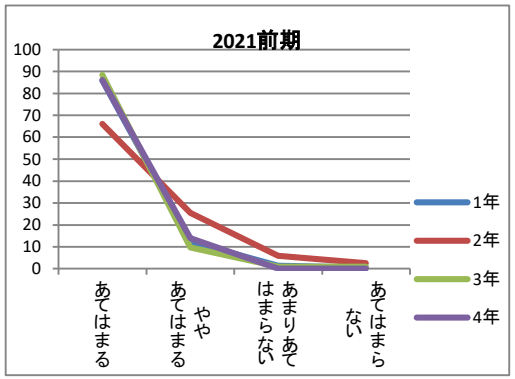


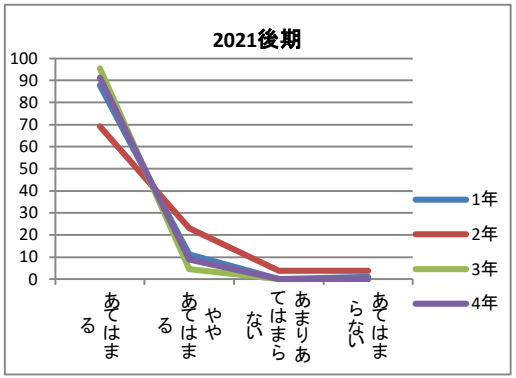


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。



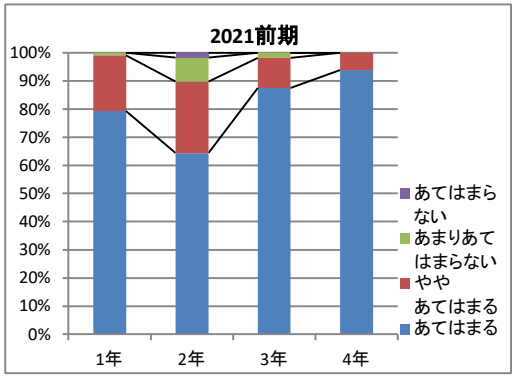


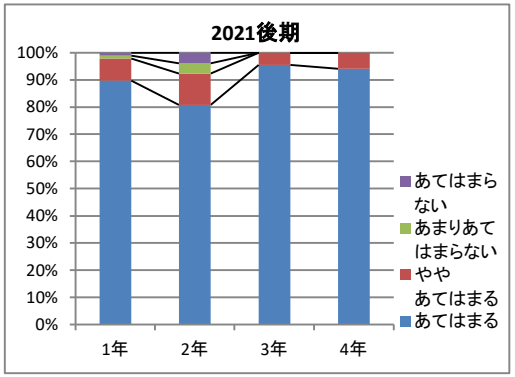


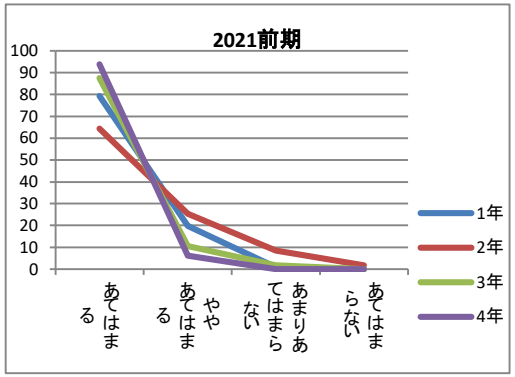


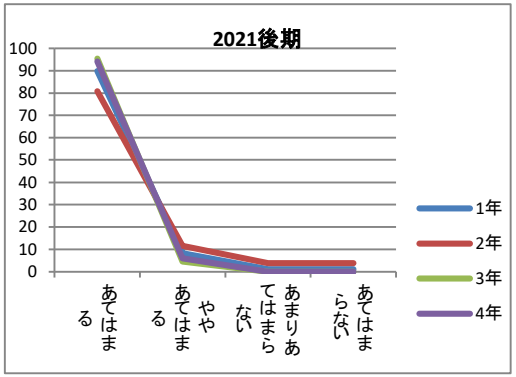
図Ⅳ　スポ

【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

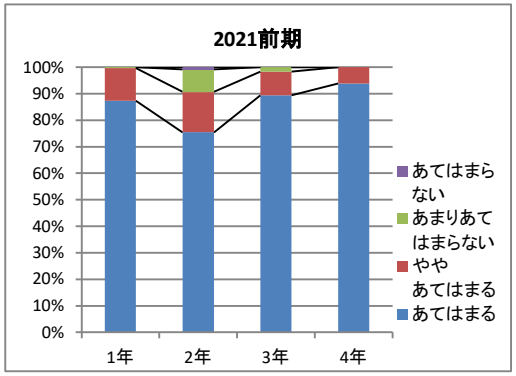


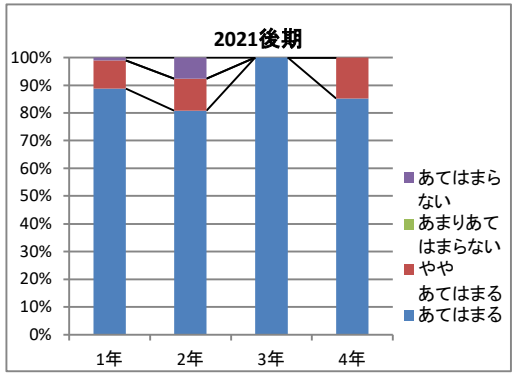


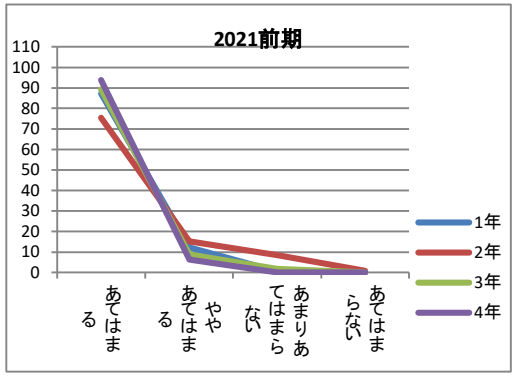


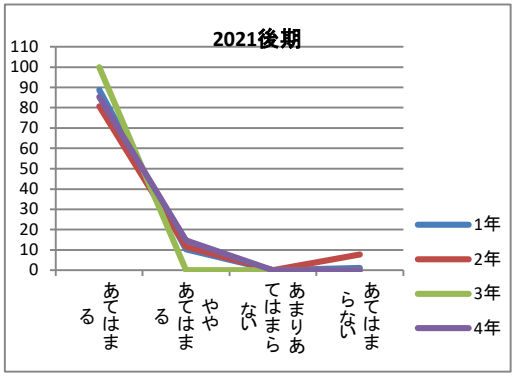


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

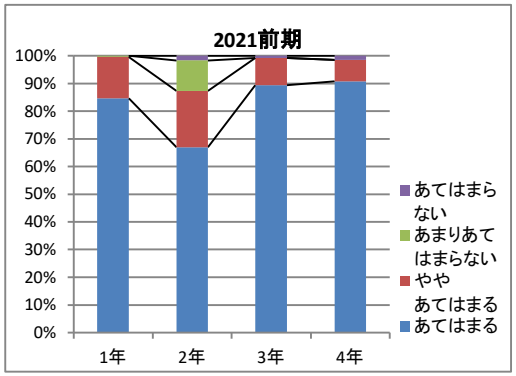


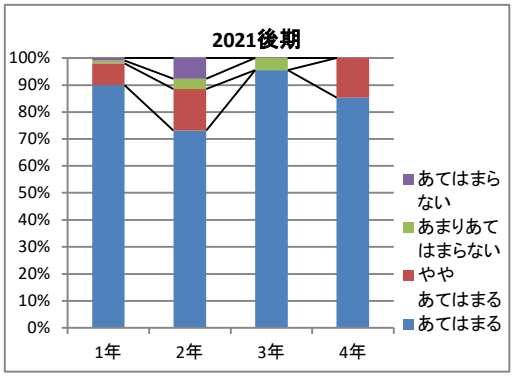


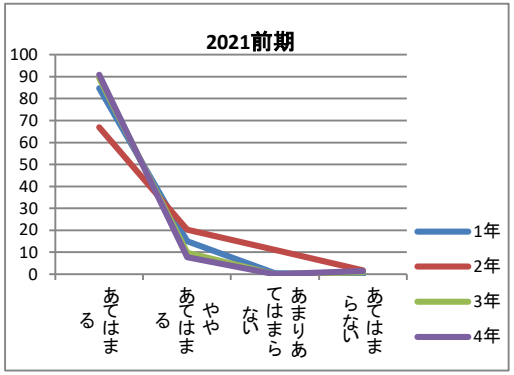


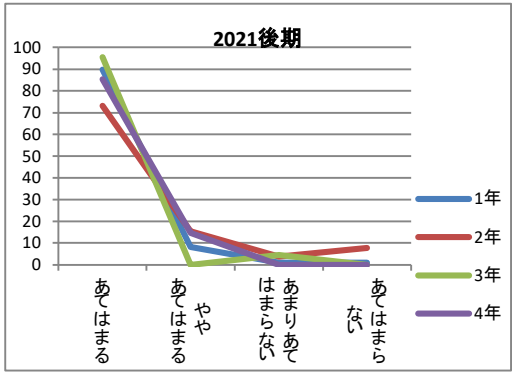


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。



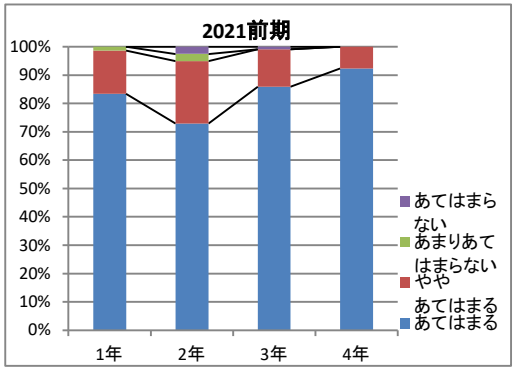


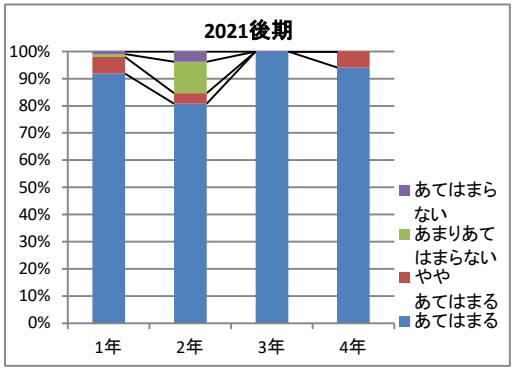


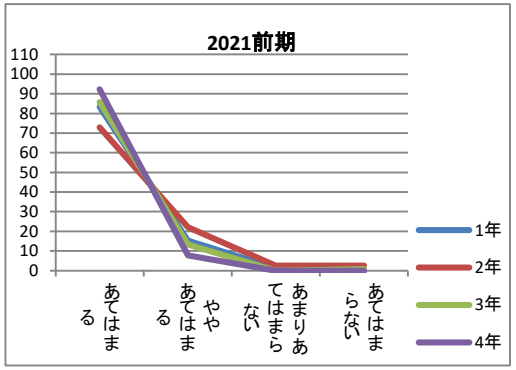


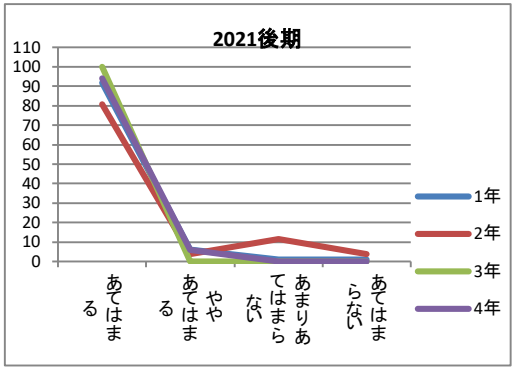
図Ⅳ　スポ

【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

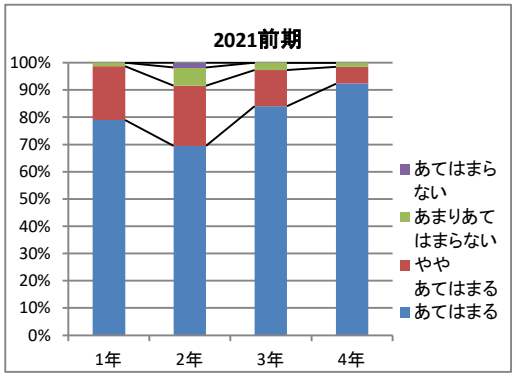


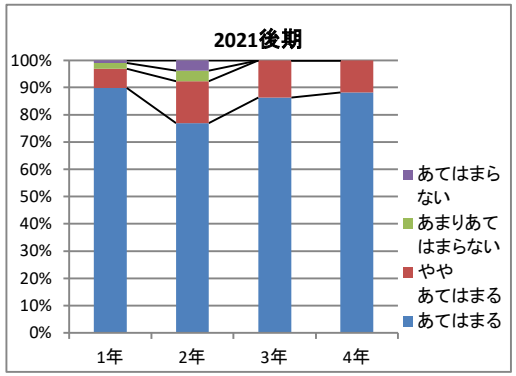


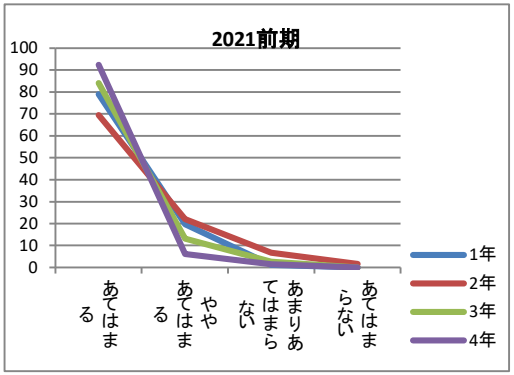


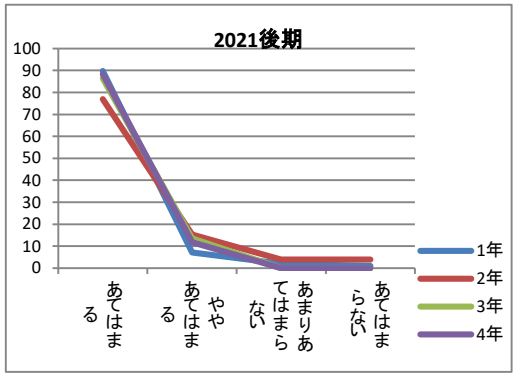


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

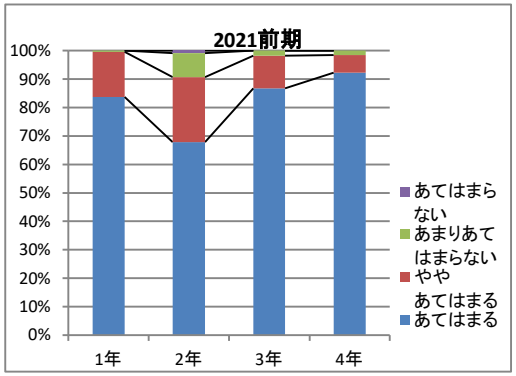


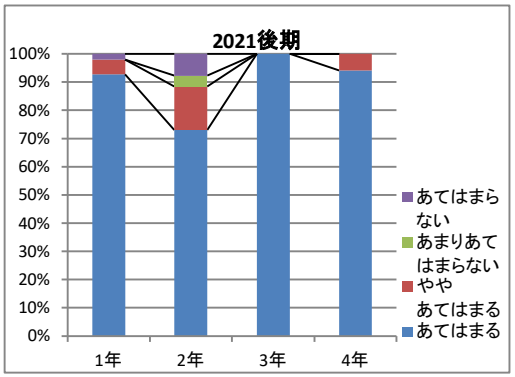


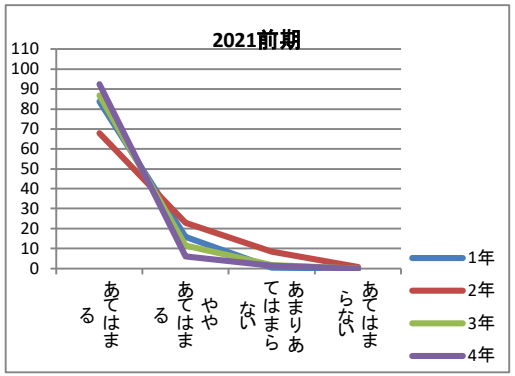


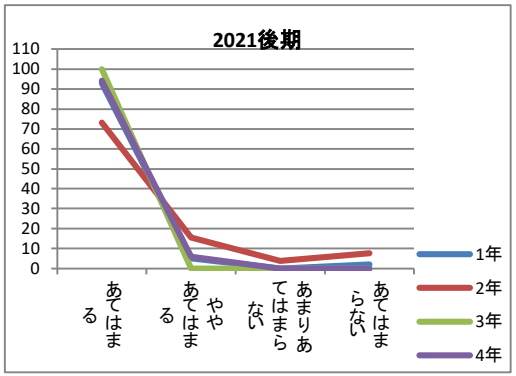


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。



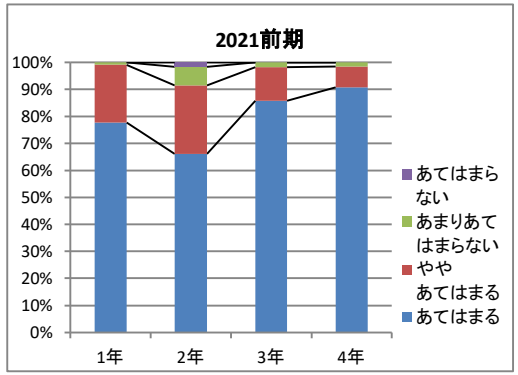


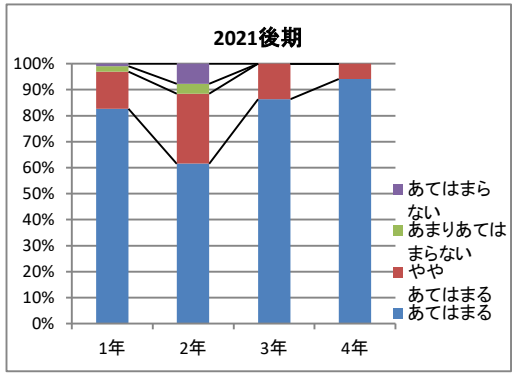


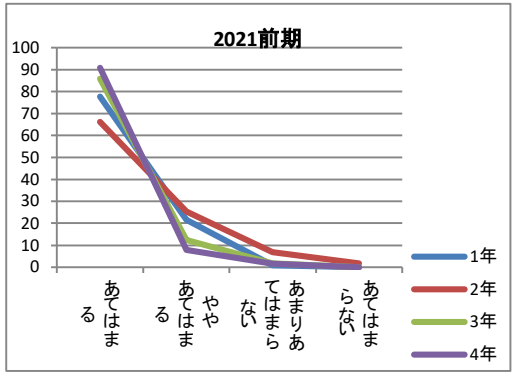


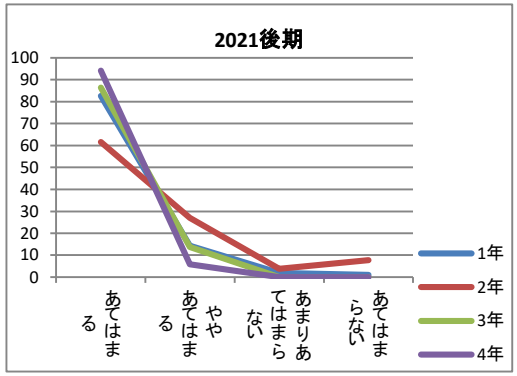
図Ⅳ　スポ

【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

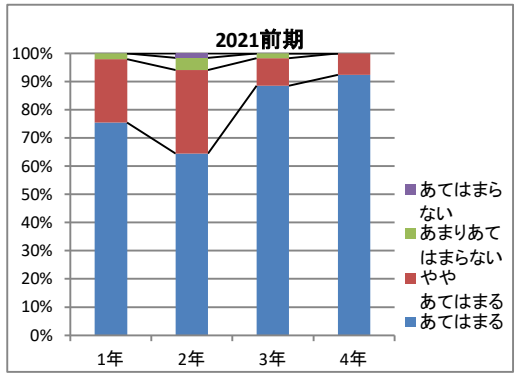


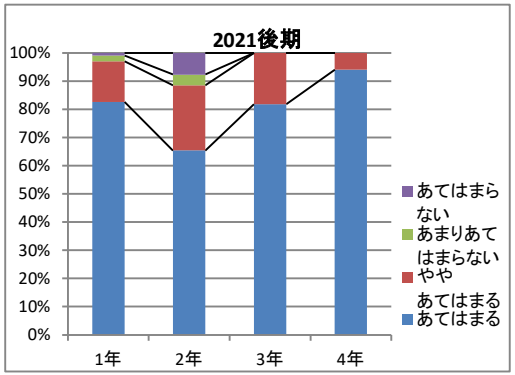


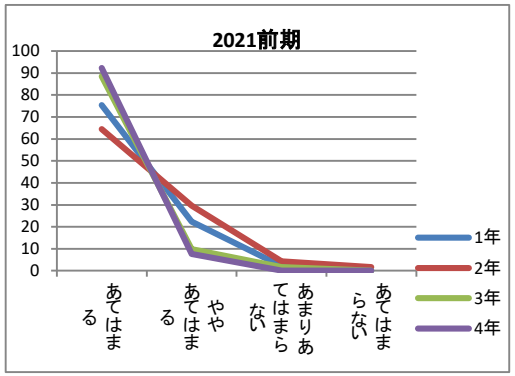


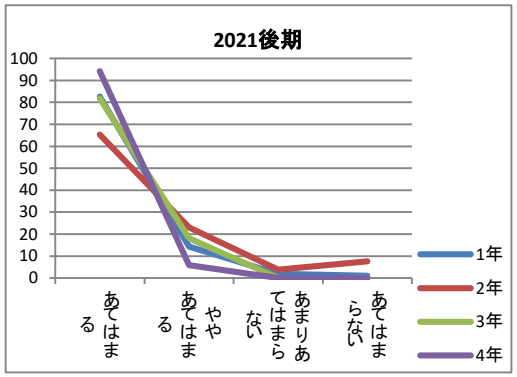


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

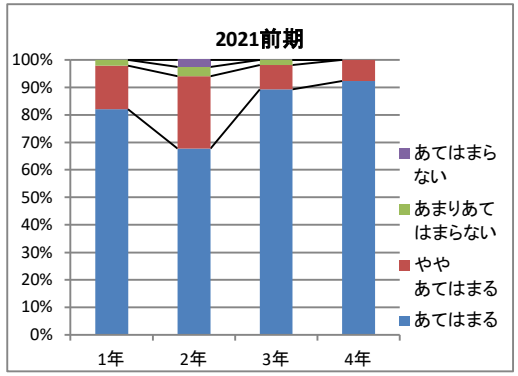


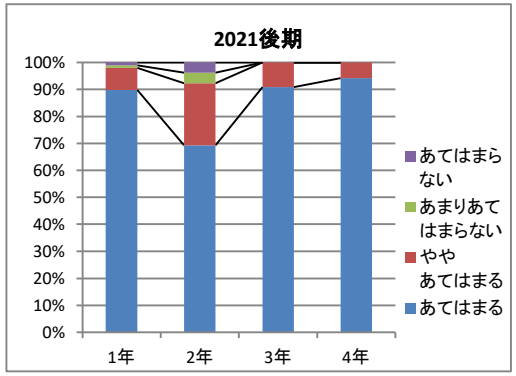


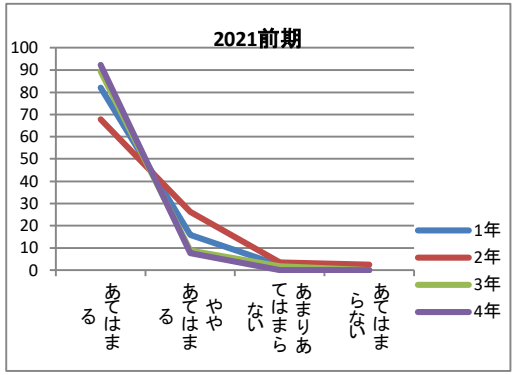


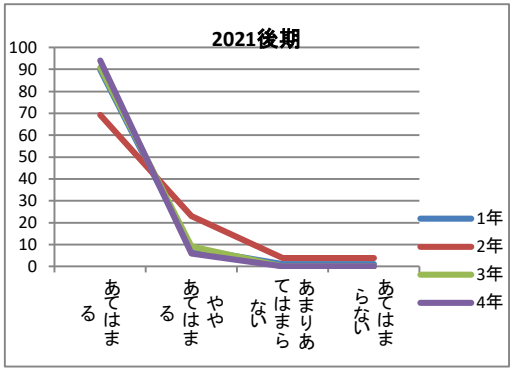


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。







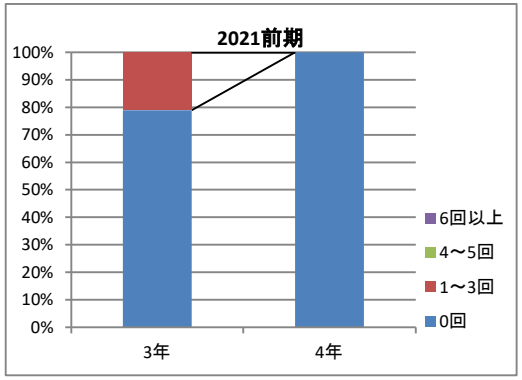


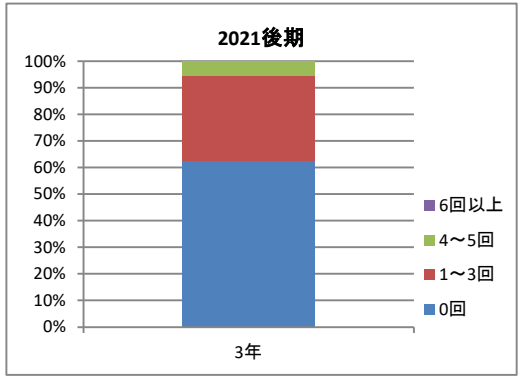
授業アンケート　令和3年度　2021年度

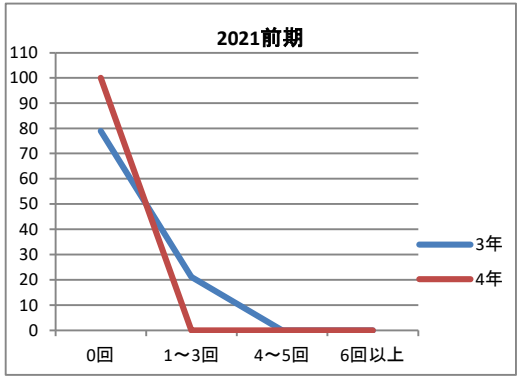
図Ⅴ　作業

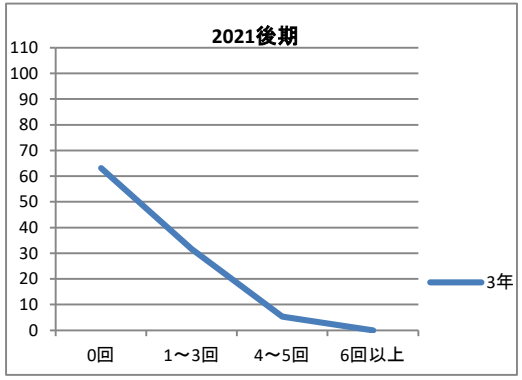
<作業療法学科>

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

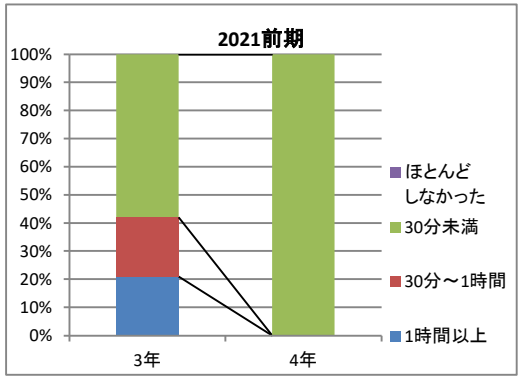


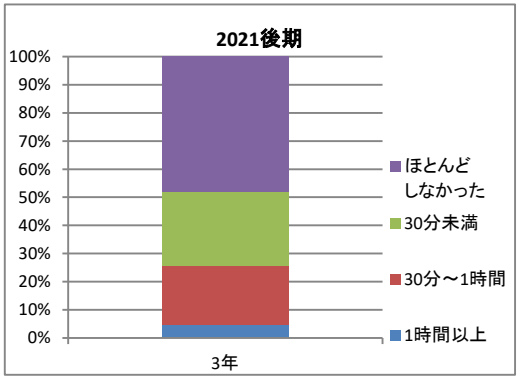


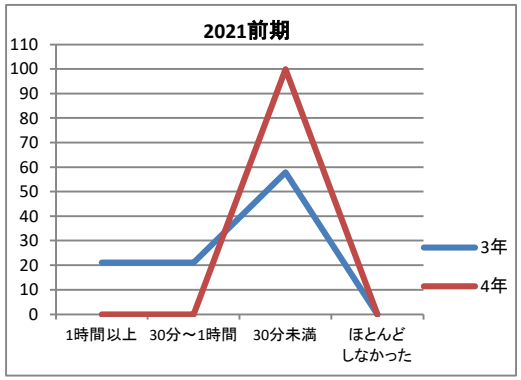


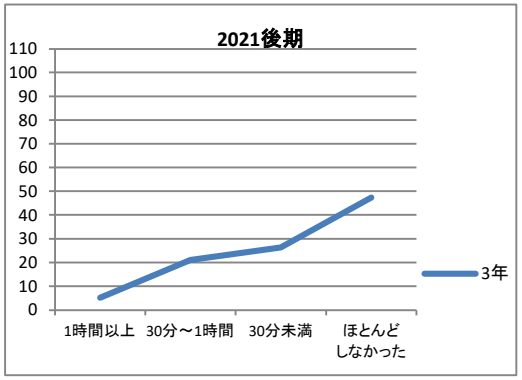


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

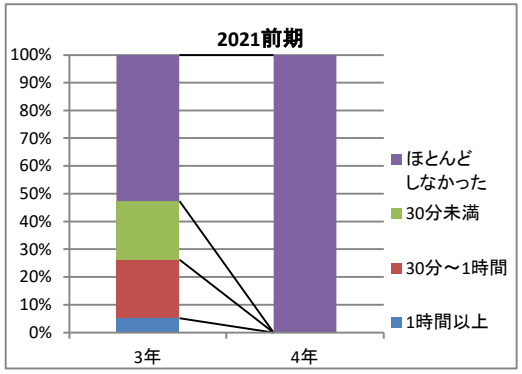


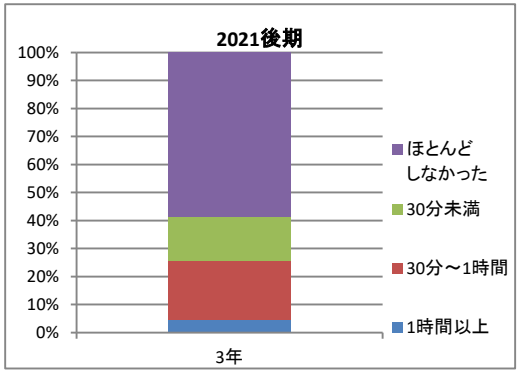


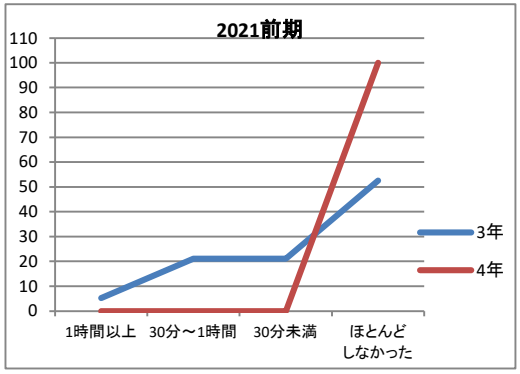


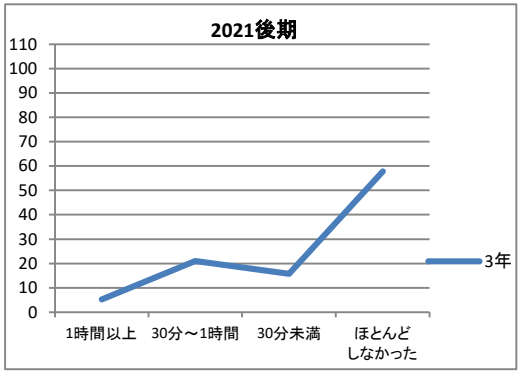


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



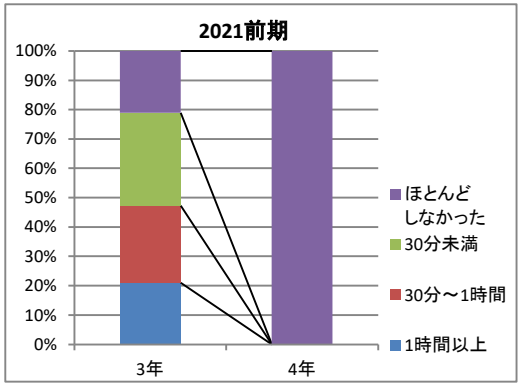


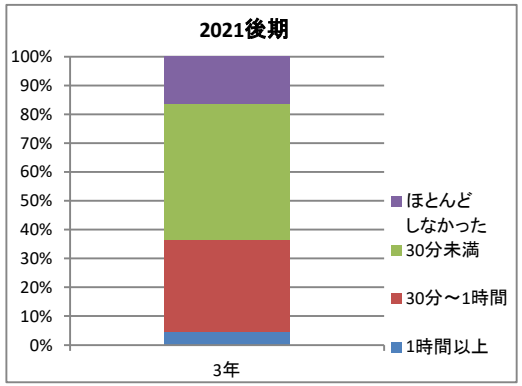


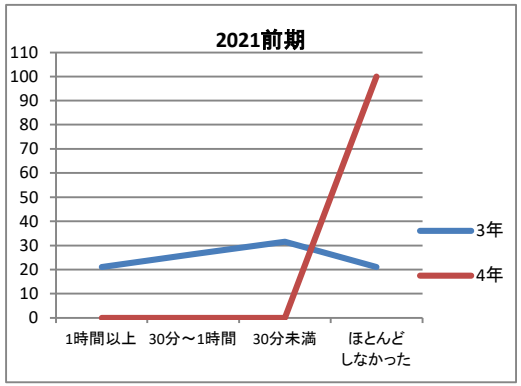


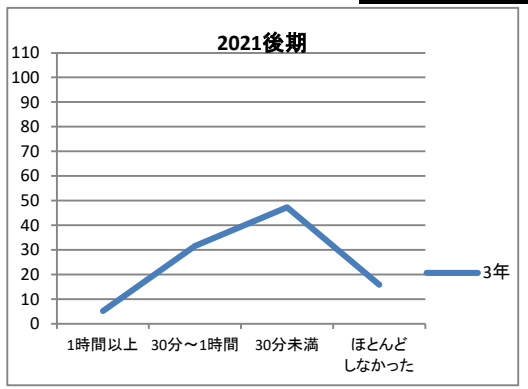
図Ⅴ　作業

【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

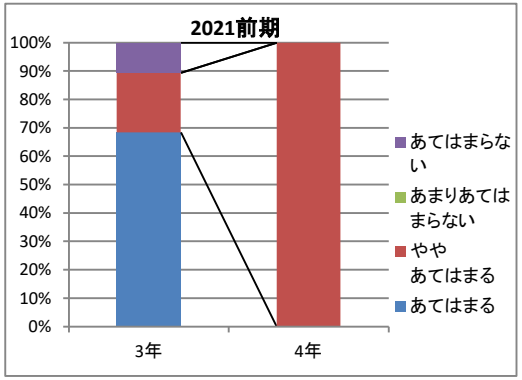


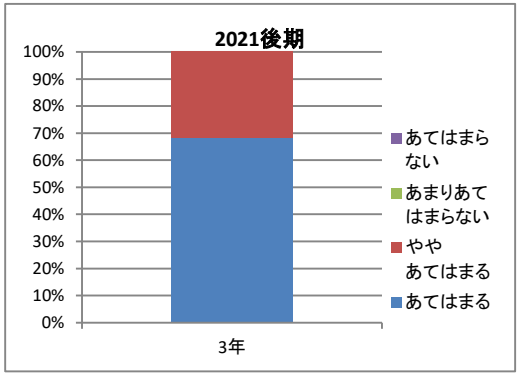


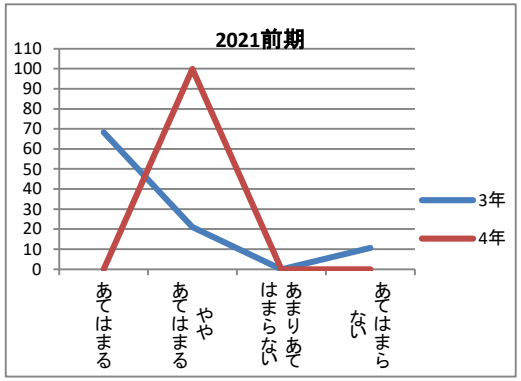


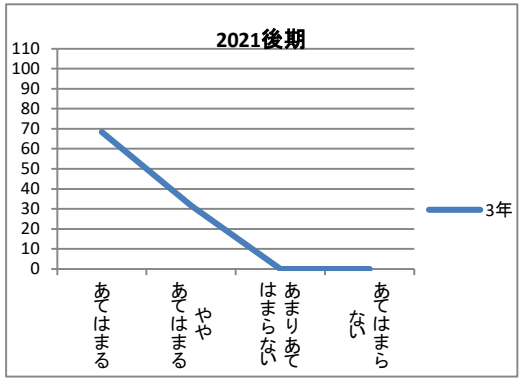


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

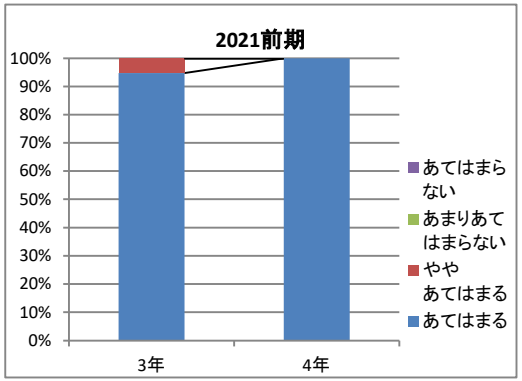


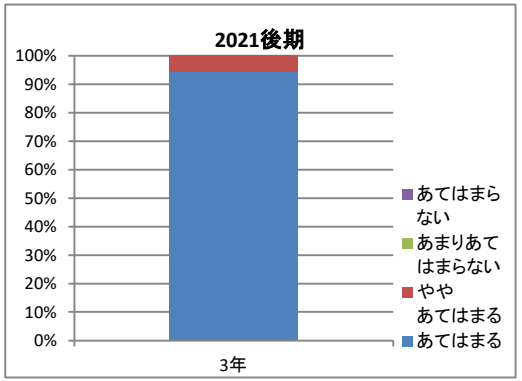


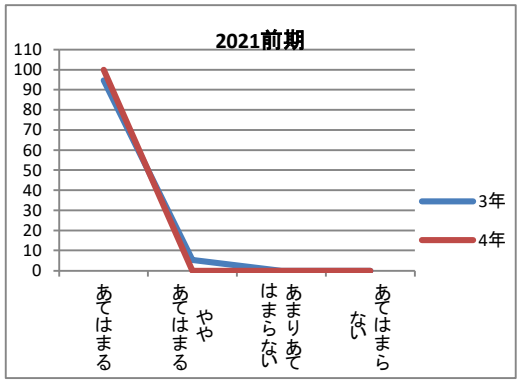


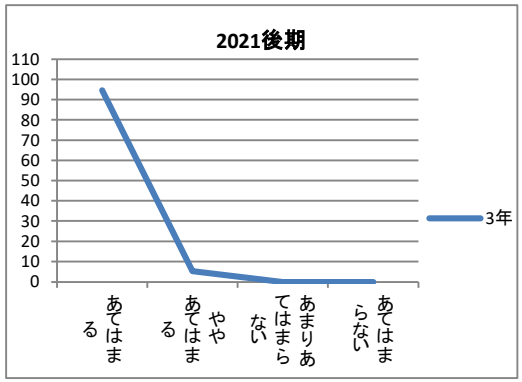


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。



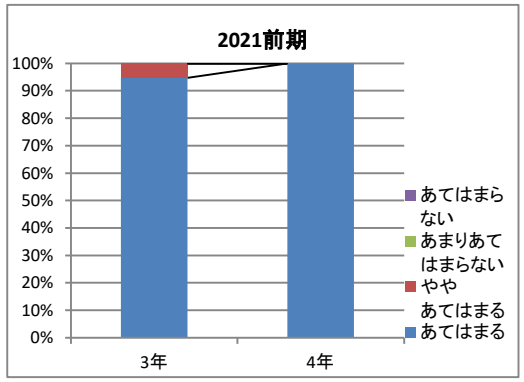


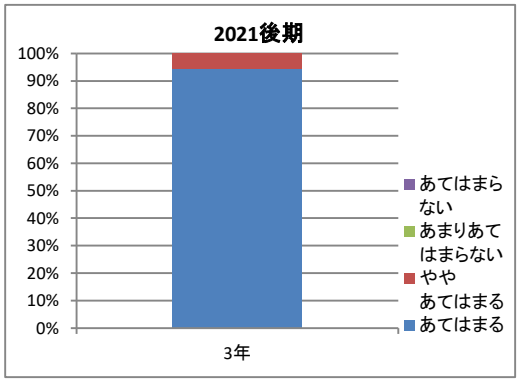


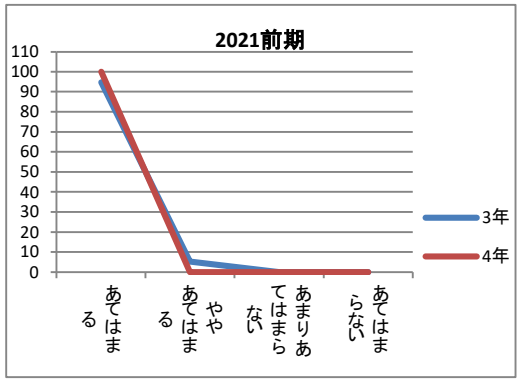


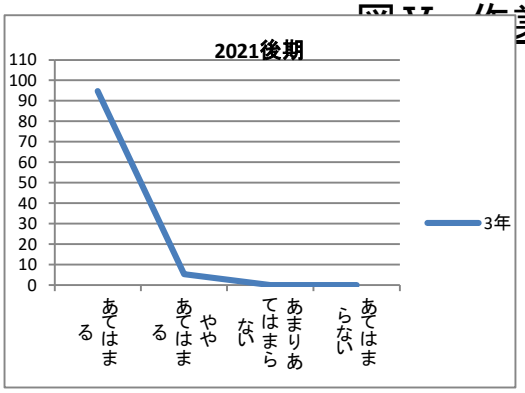
【教員の授業に対する取り組み】

Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

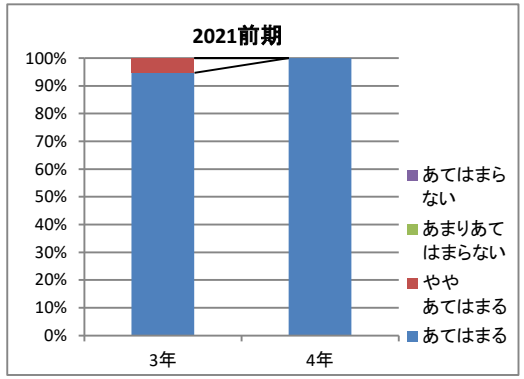


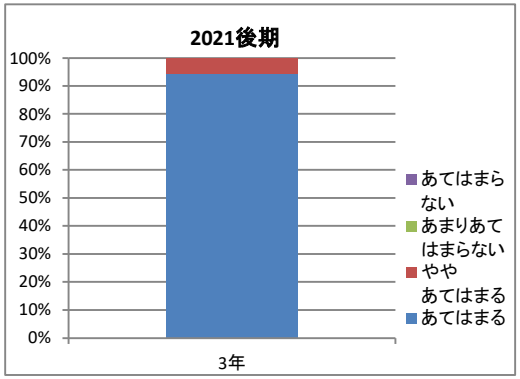


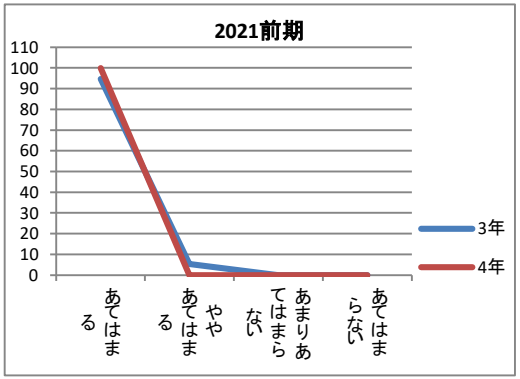


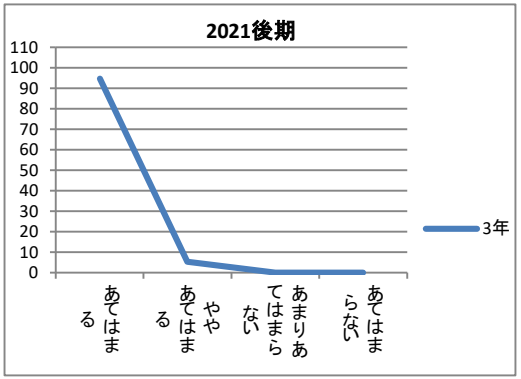


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

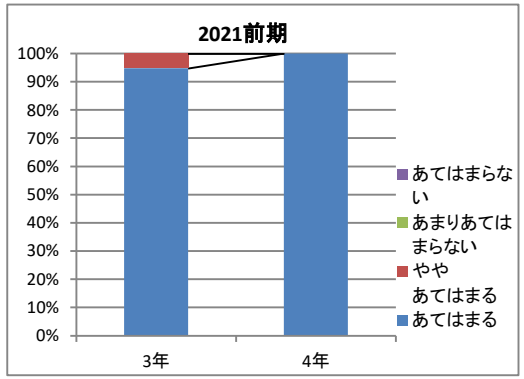


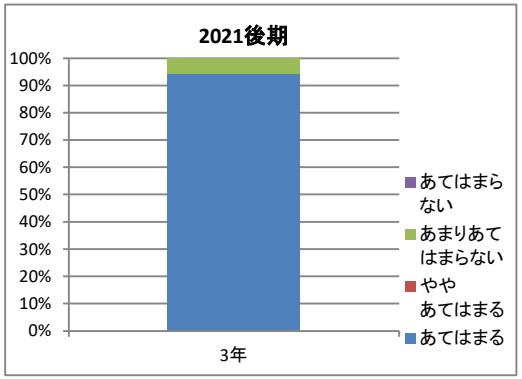


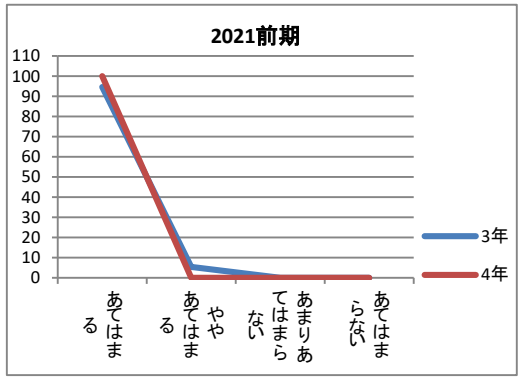


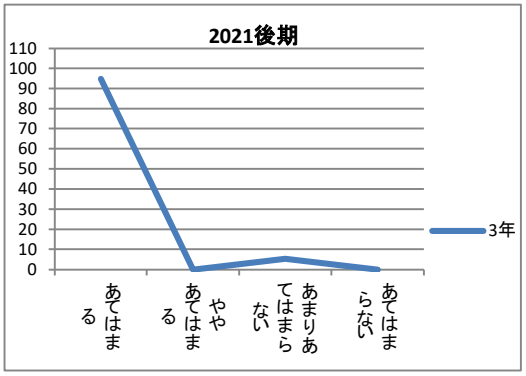


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。



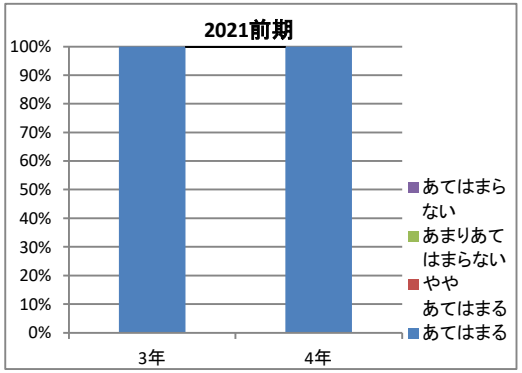


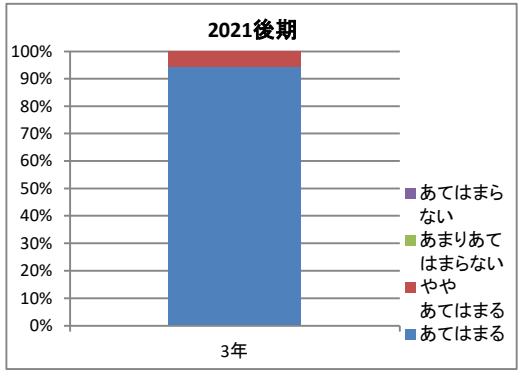


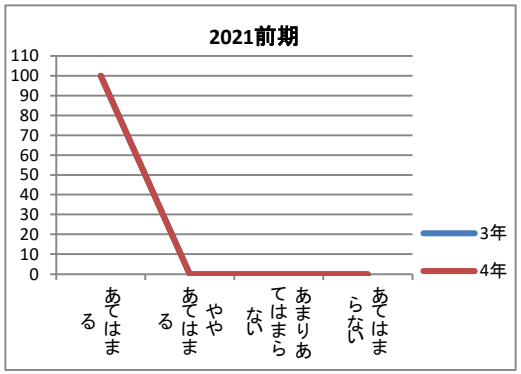


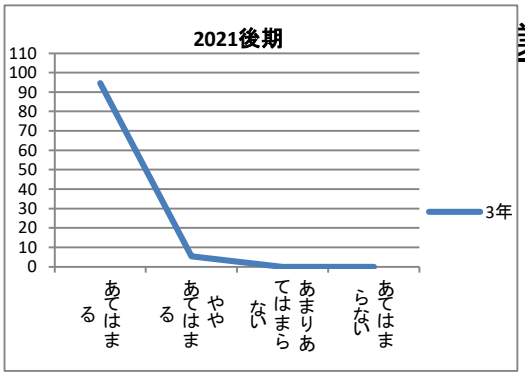
【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

業

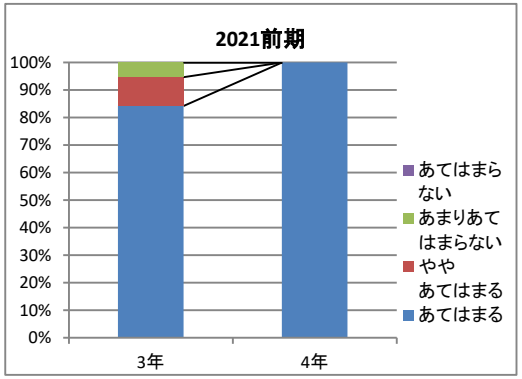


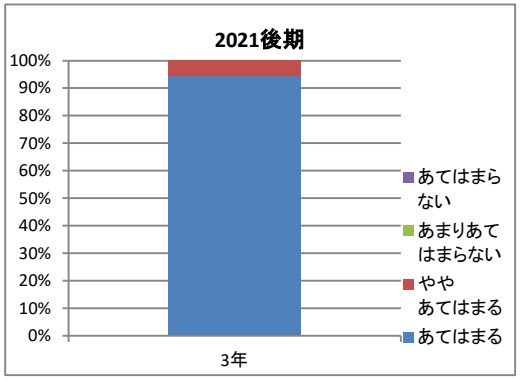


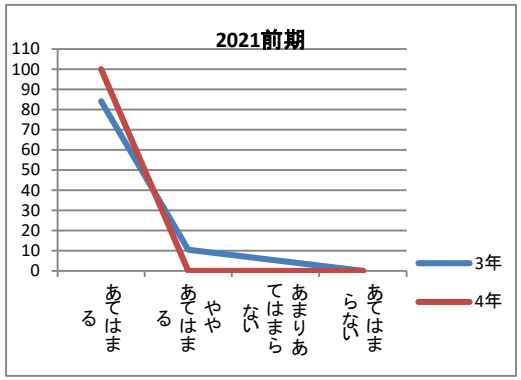


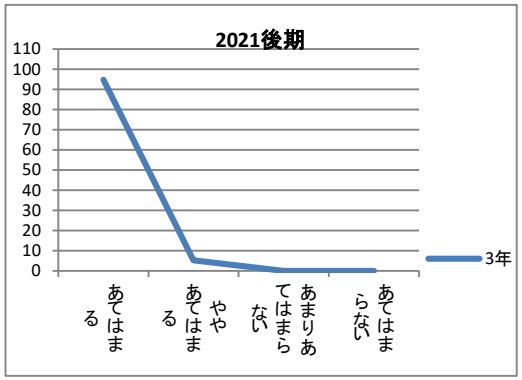


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

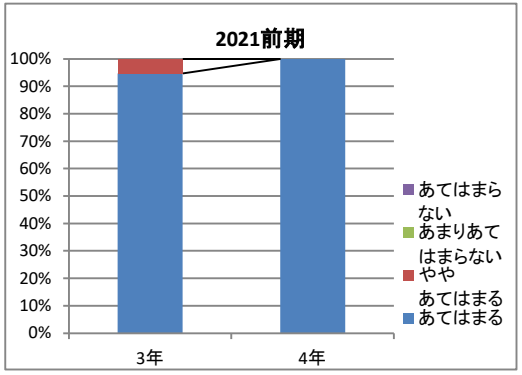


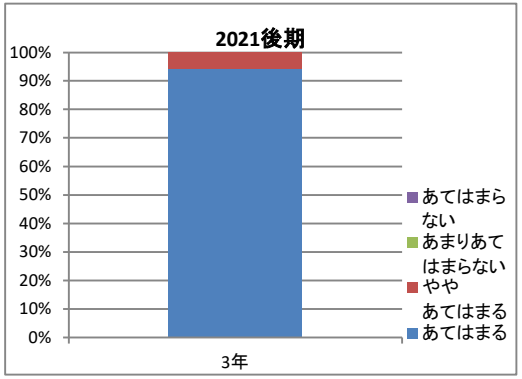


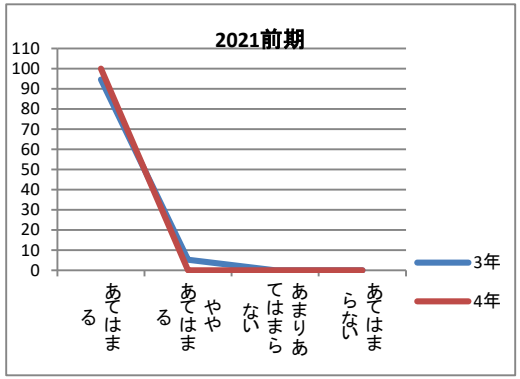


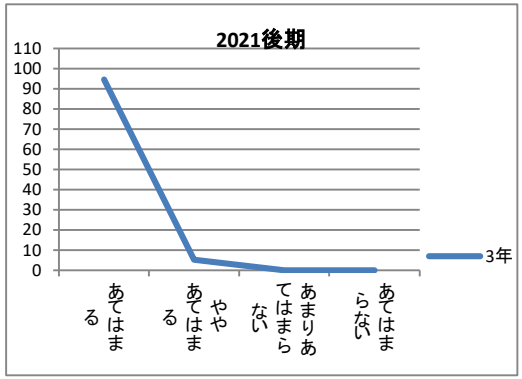


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。





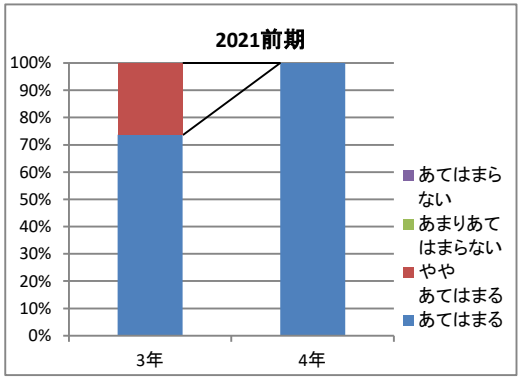


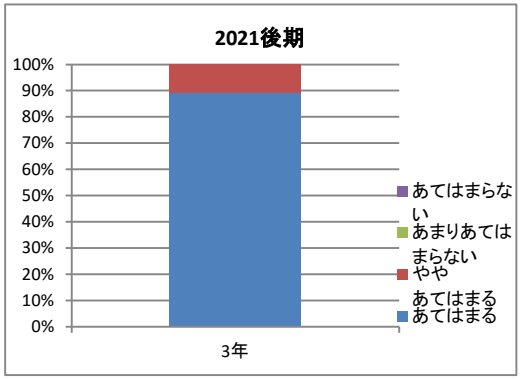


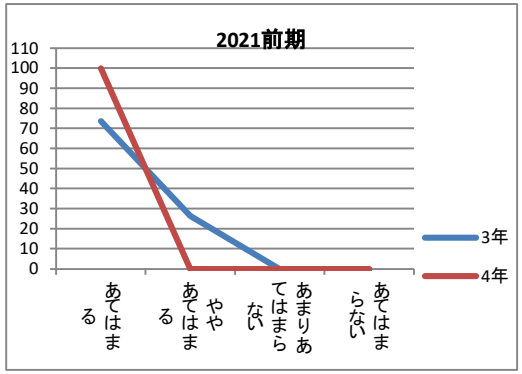
【授業に対するあなたの理解・達成度】

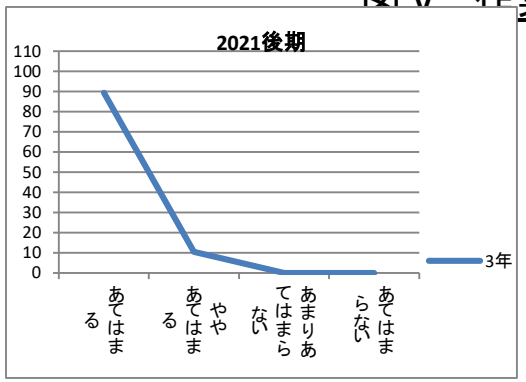
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

図V　作業



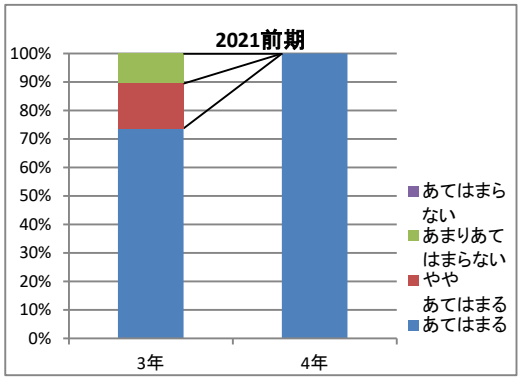


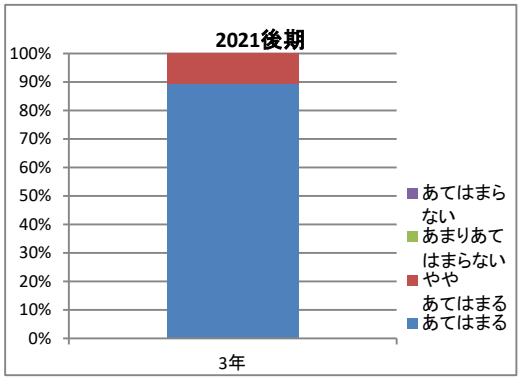


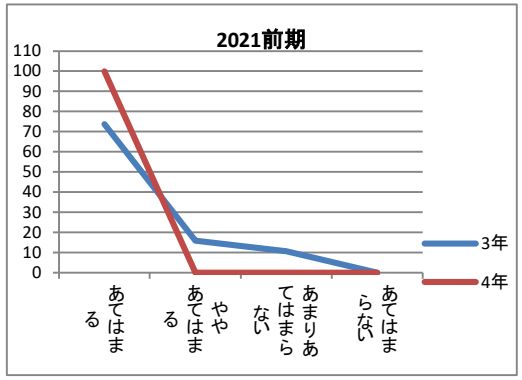


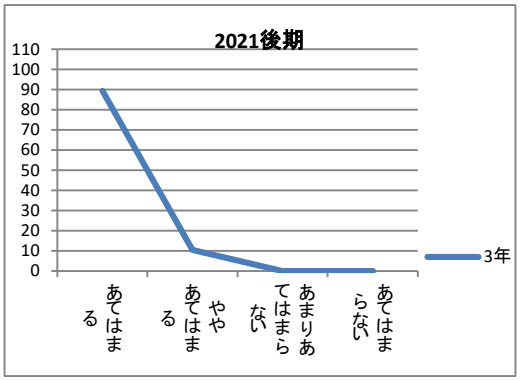
【授業に対するあなたの理解・達成度】

Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。



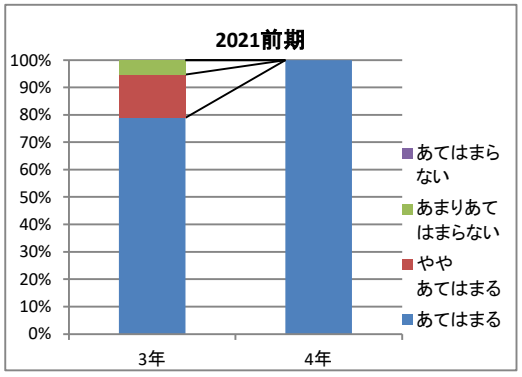


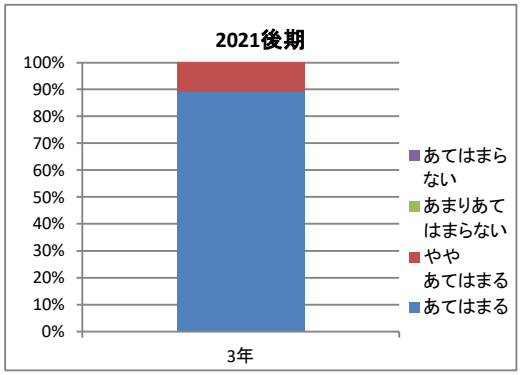


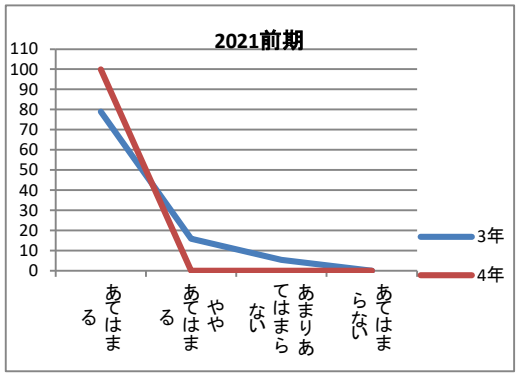


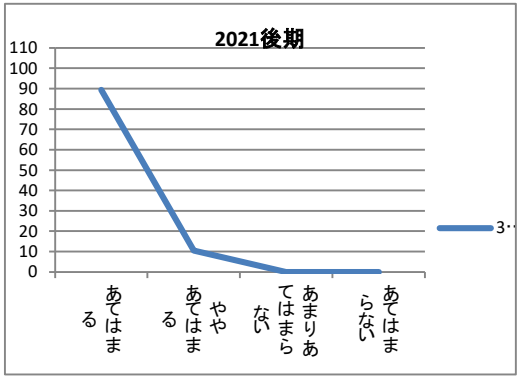
【総合評価】

Q15. 授業は意義あるものでしたか。







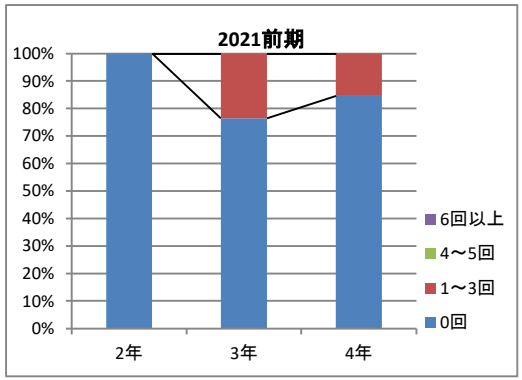


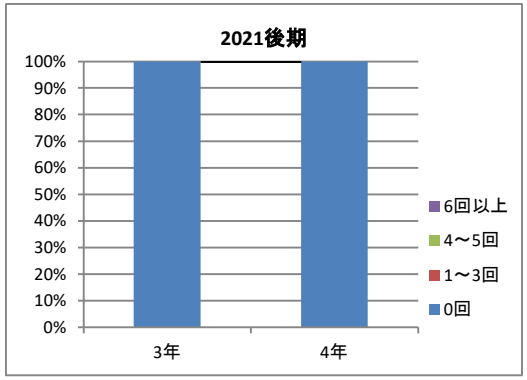
授業アンケート　令和3年度　2021年度

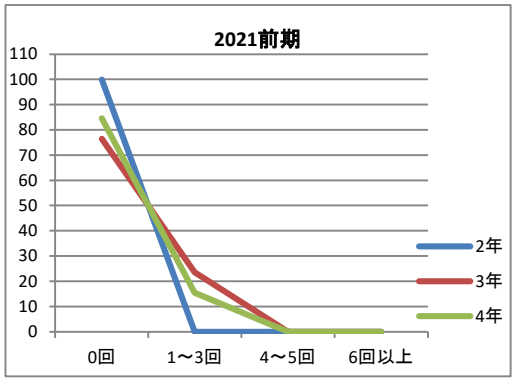
<言語聴覚療法学科>

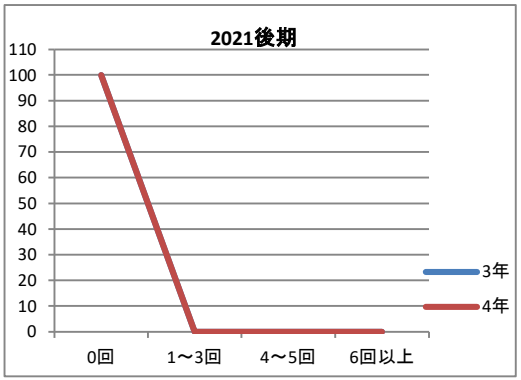
図Ⅵ　言語

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

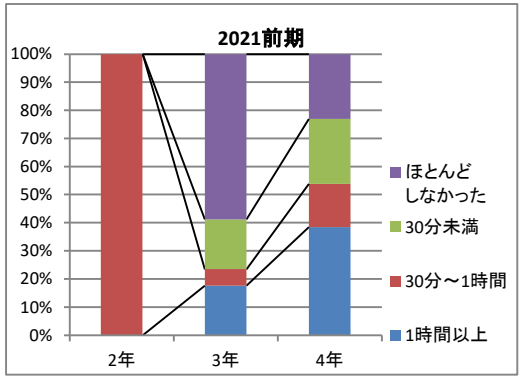


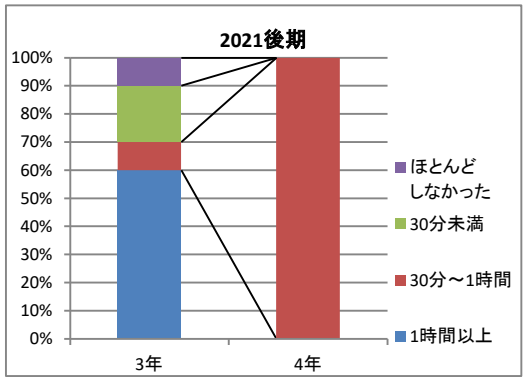


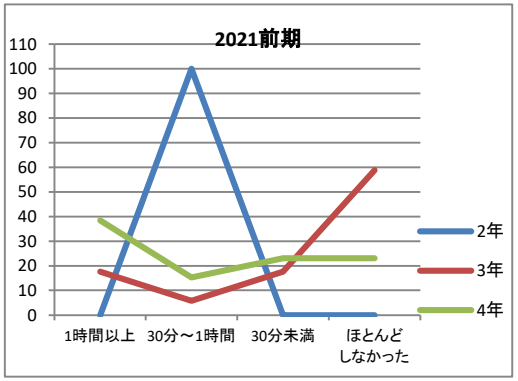


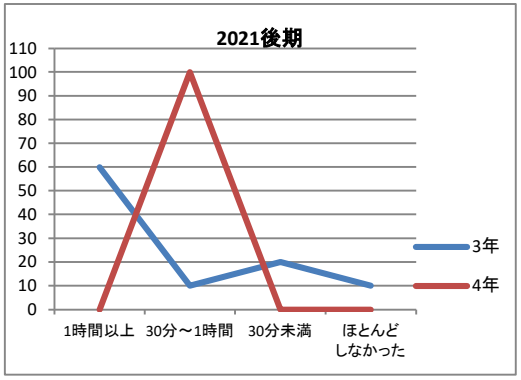


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

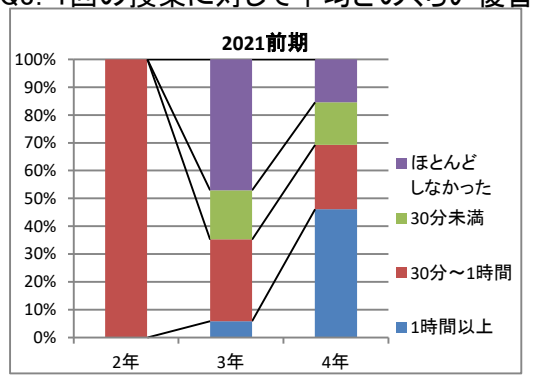


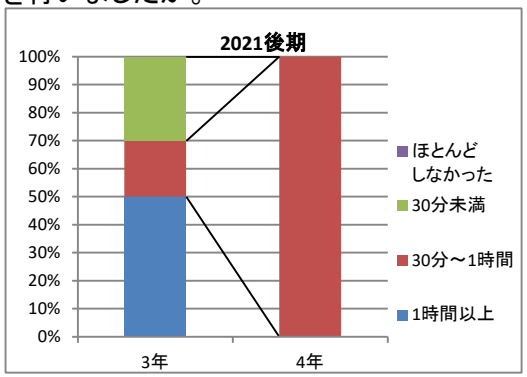


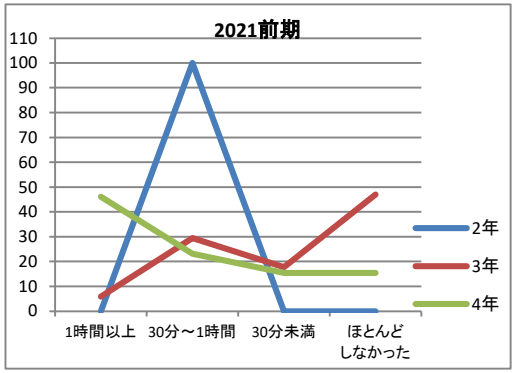


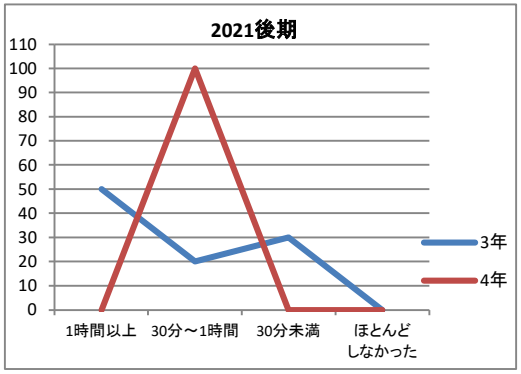


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



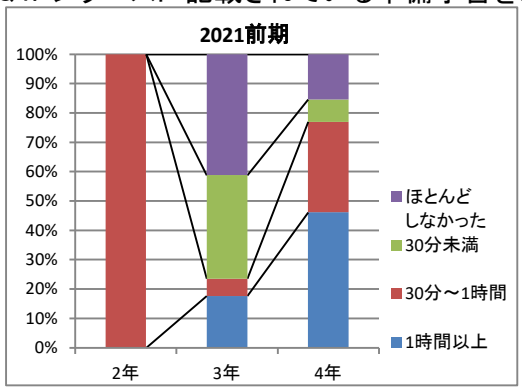


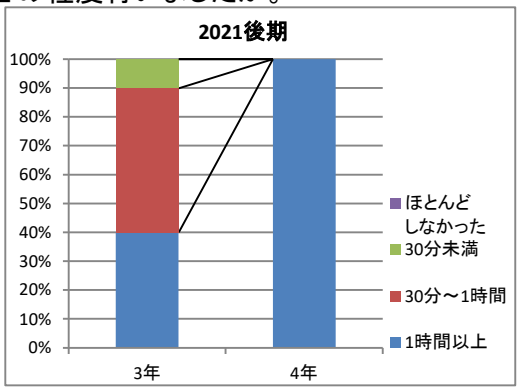


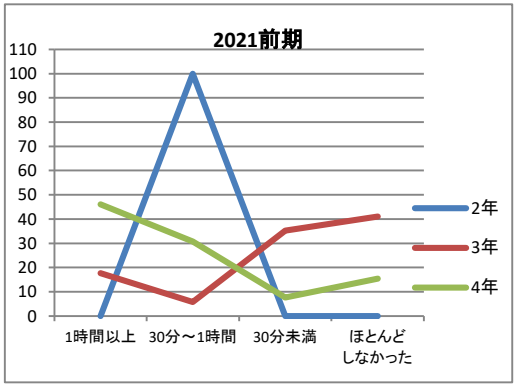


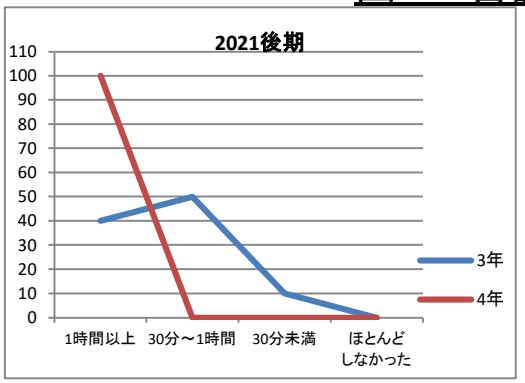
図Ⅵ　言語

【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

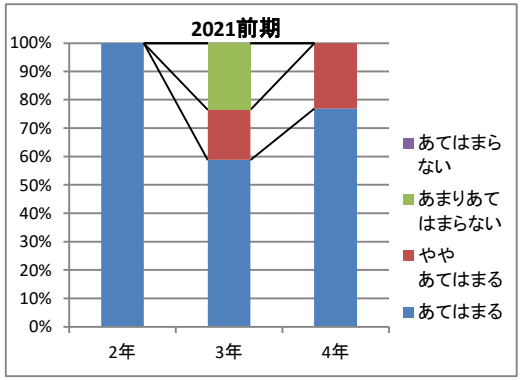


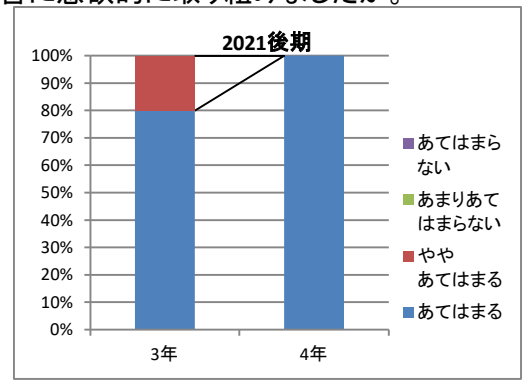


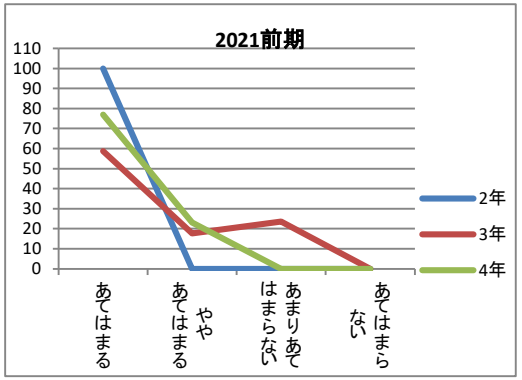


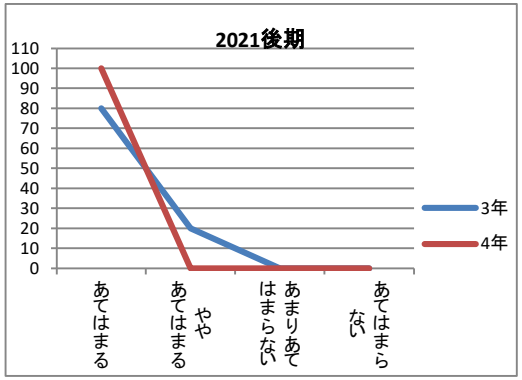


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

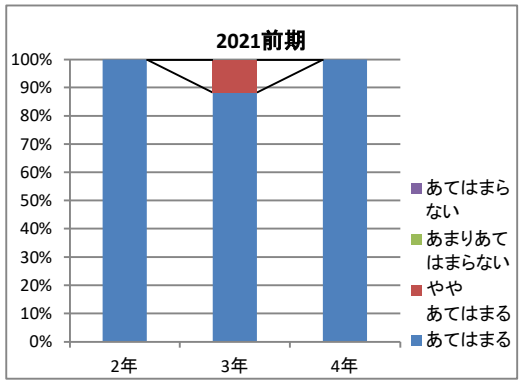


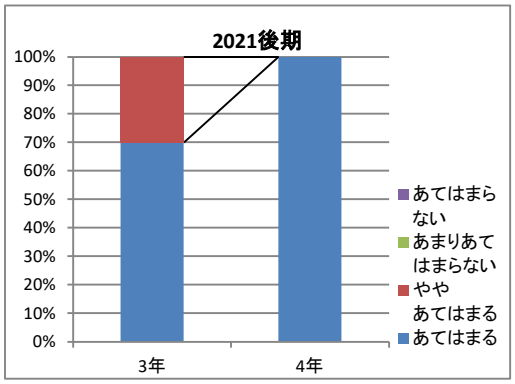


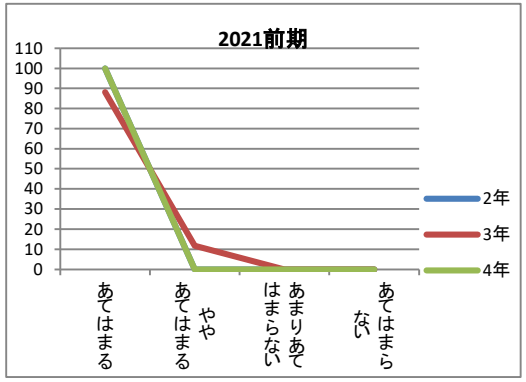


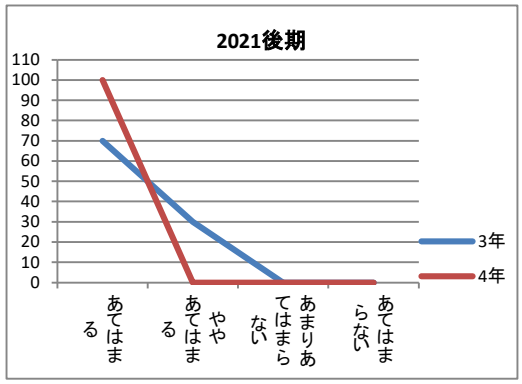


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

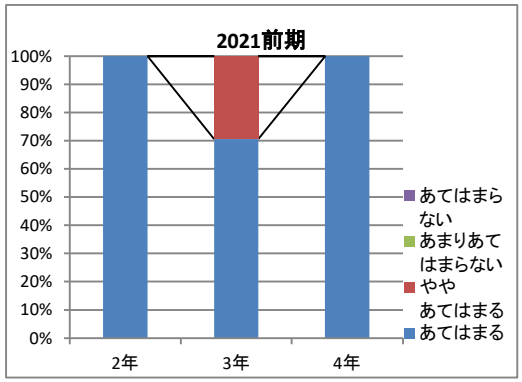


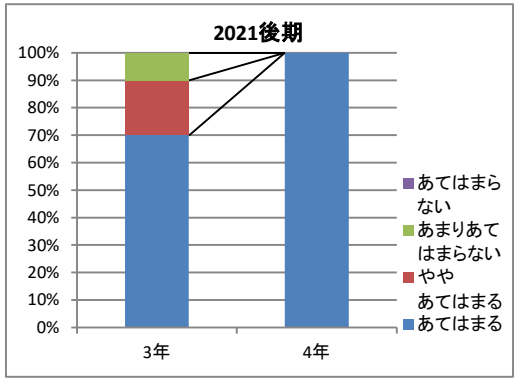


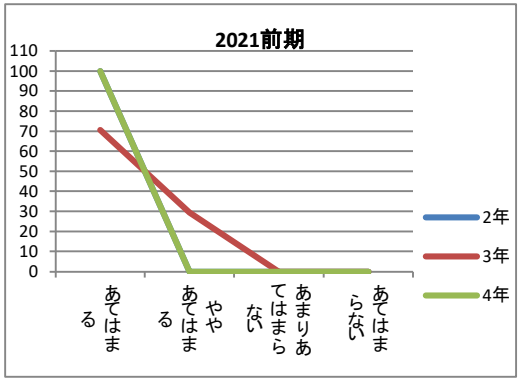


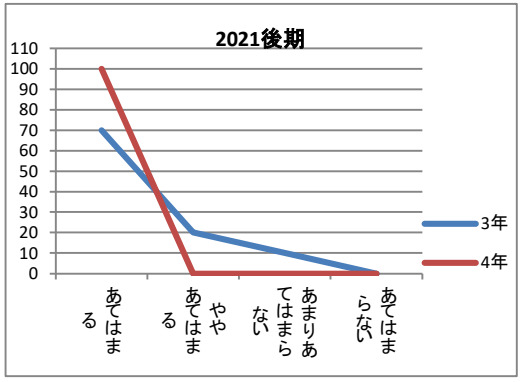


【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

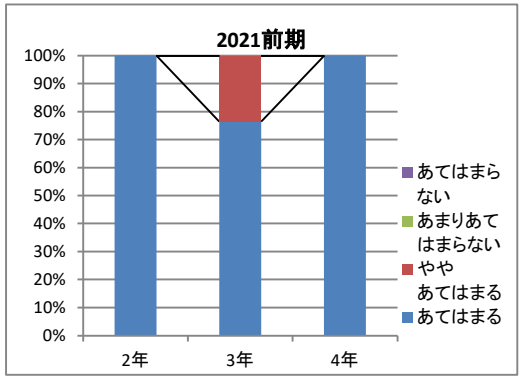


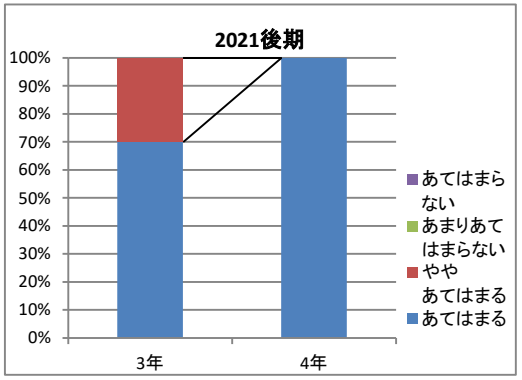


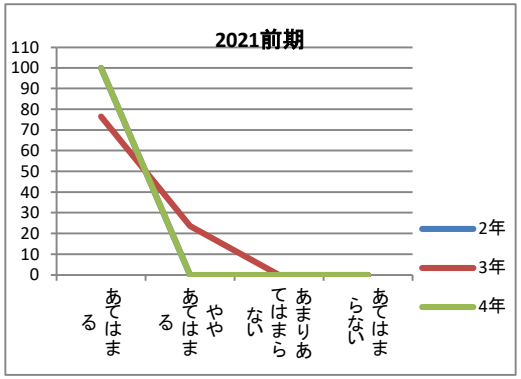


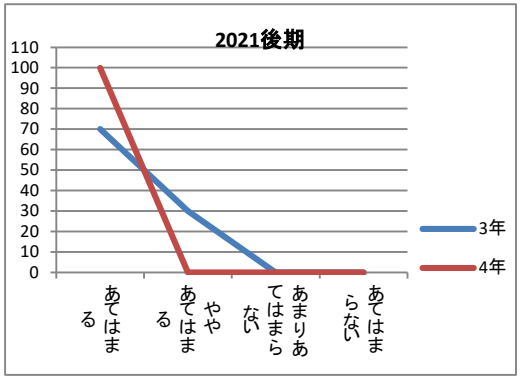


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

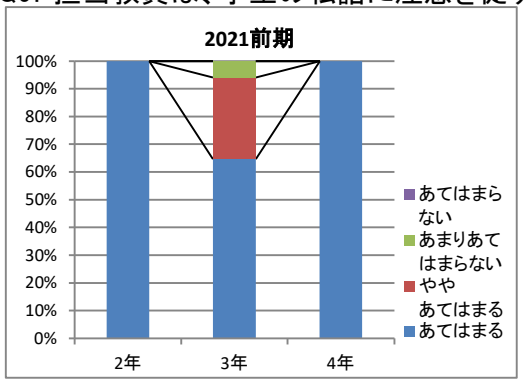


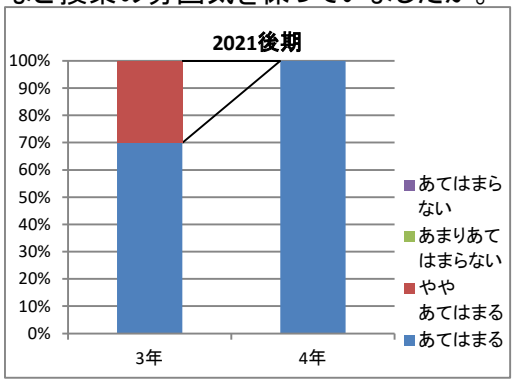


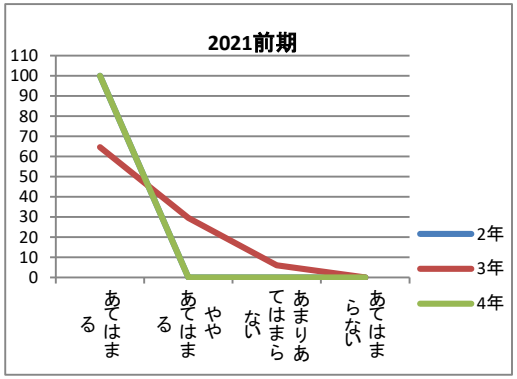


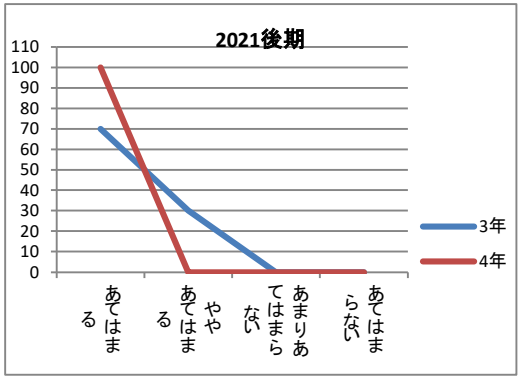


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

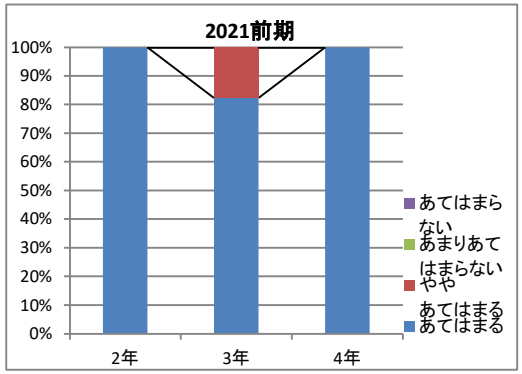


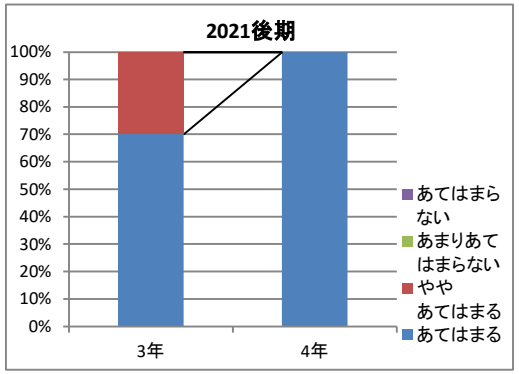


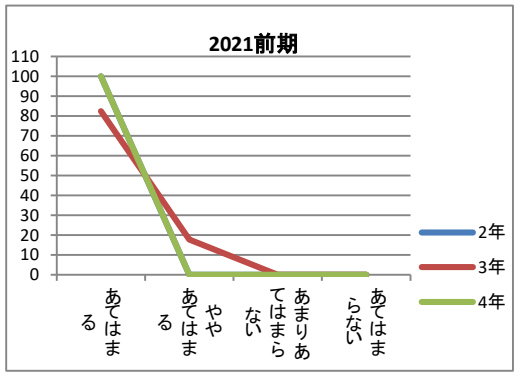


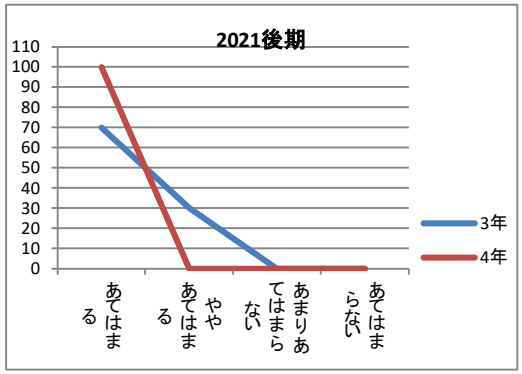


【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

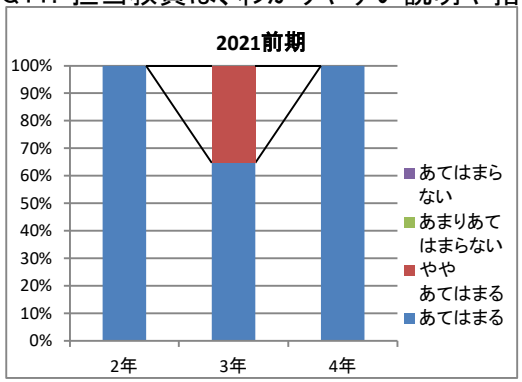


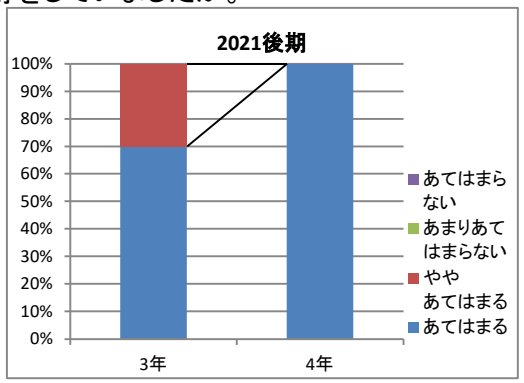


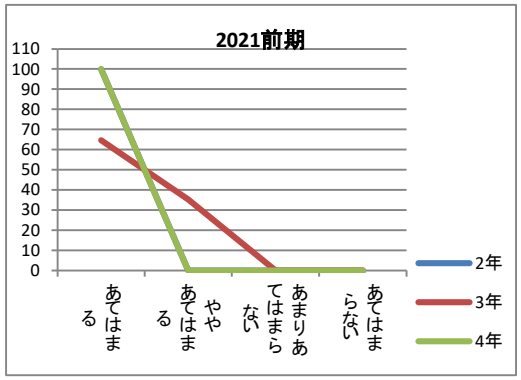


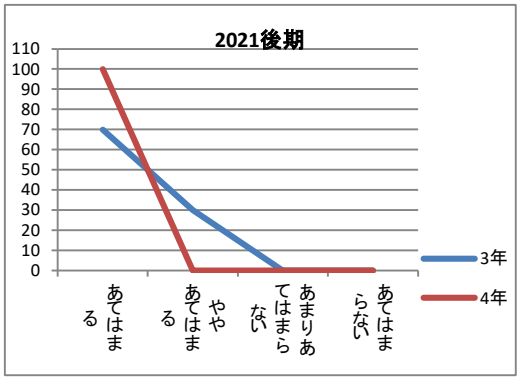


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

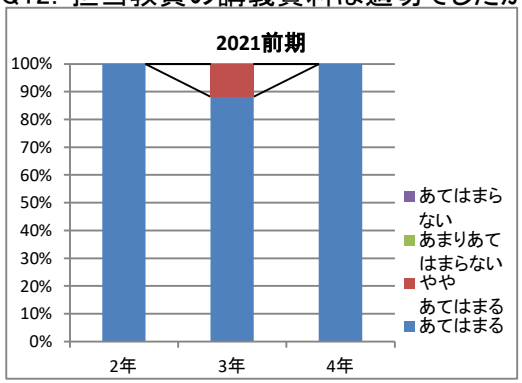


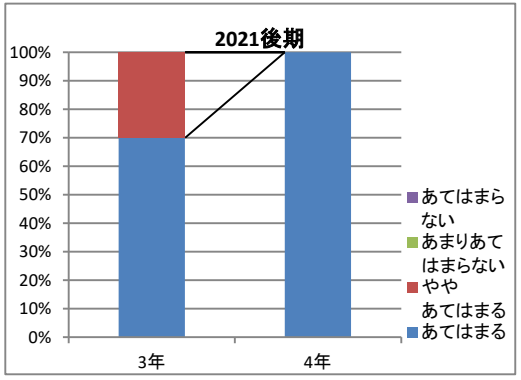


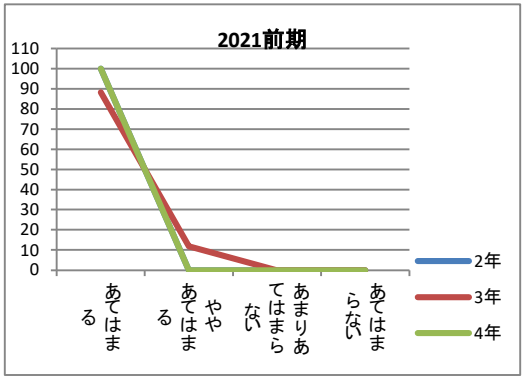


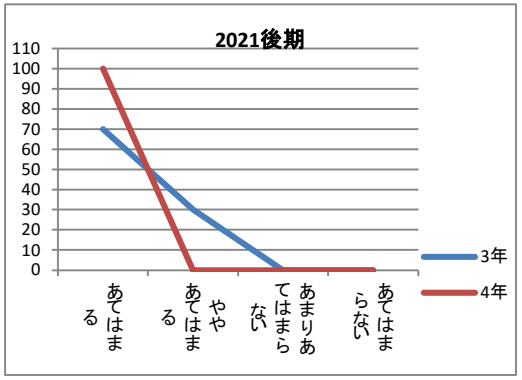


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。

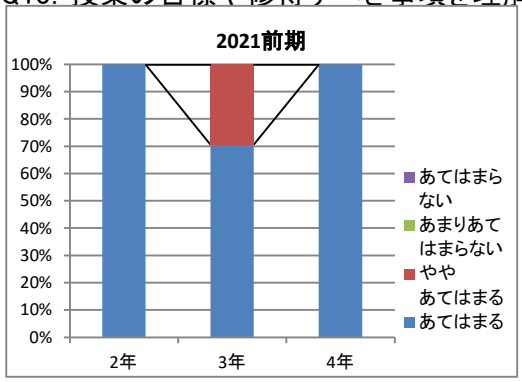


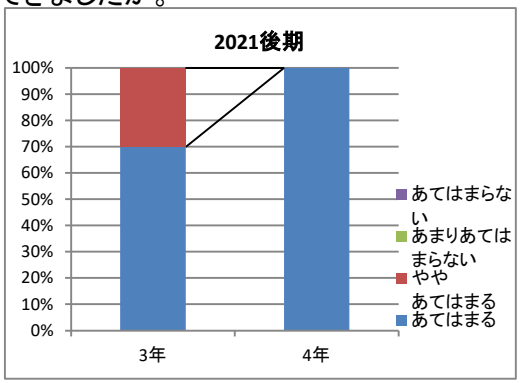


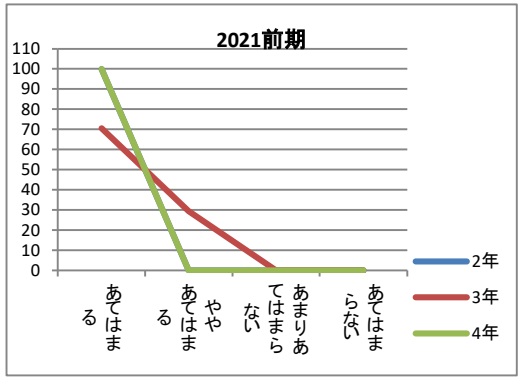


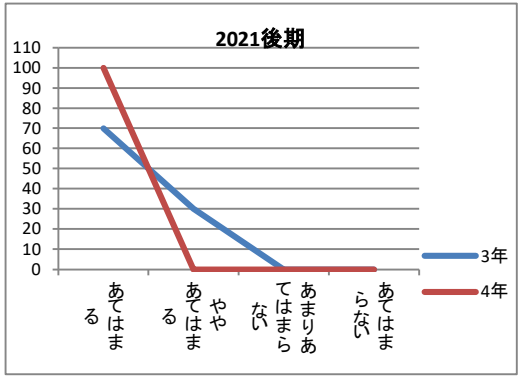


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

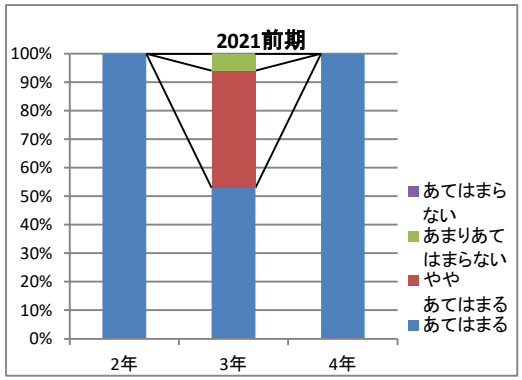


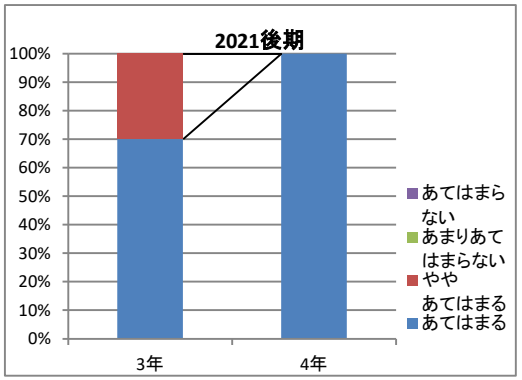


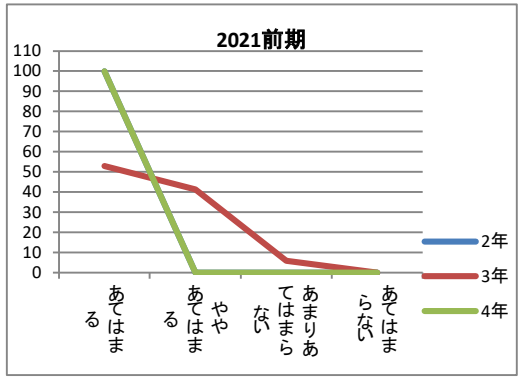


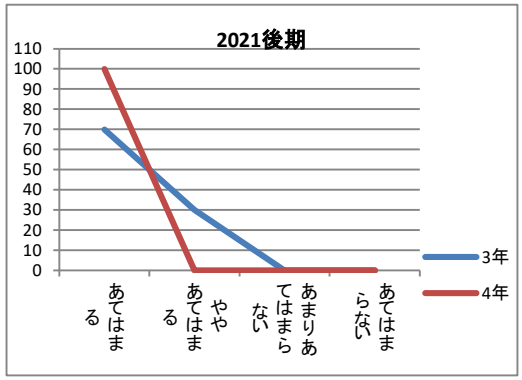


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

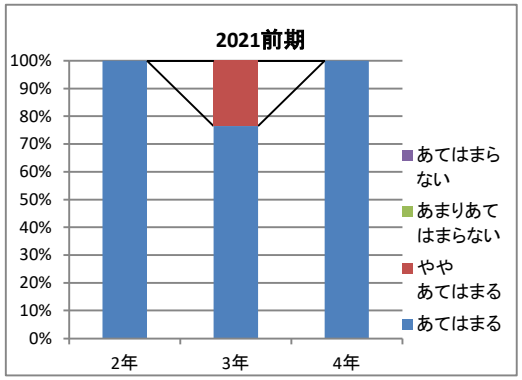


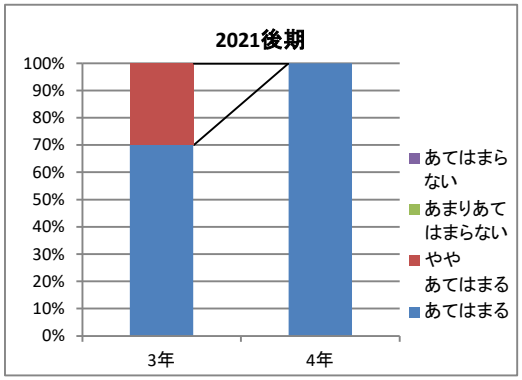


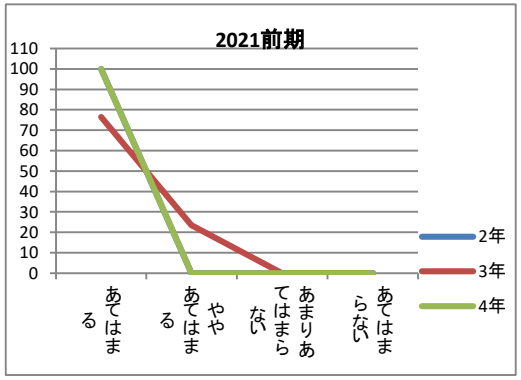


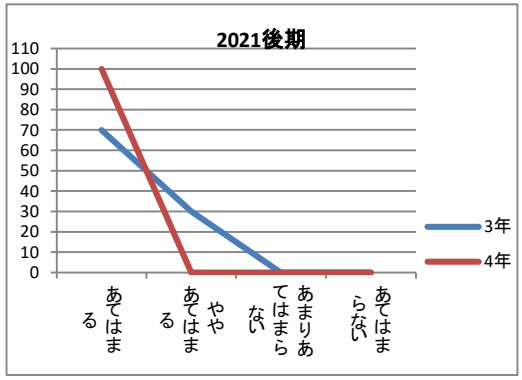


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。









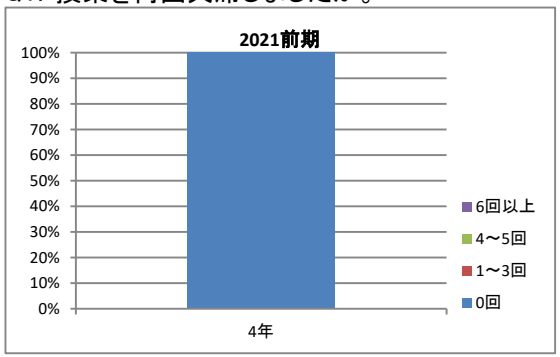
授業アンケート　令和3年度　2021年度

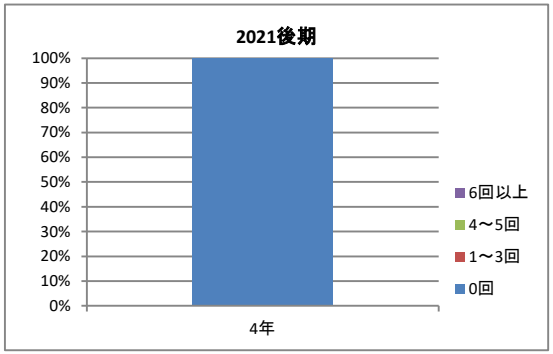
<視機能療法学科>

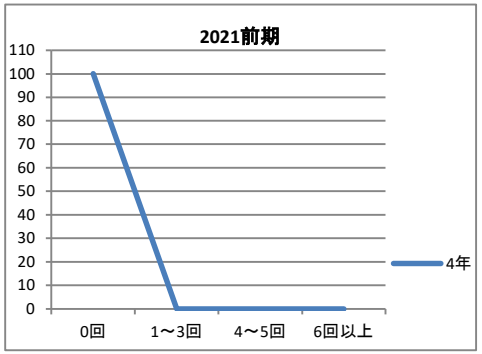
図Ⅶ　視機能

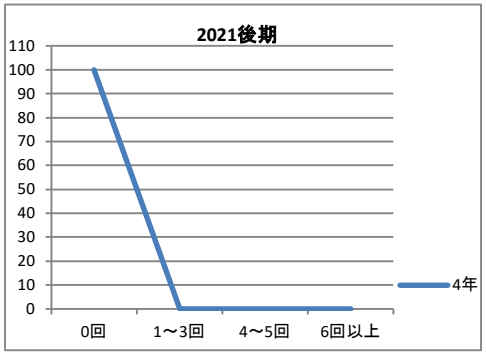
【あなたの授業に対する取り組み】

Q1. 授業を何回欠席しましたか。



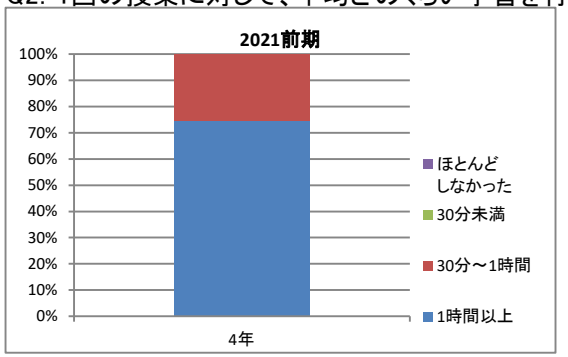


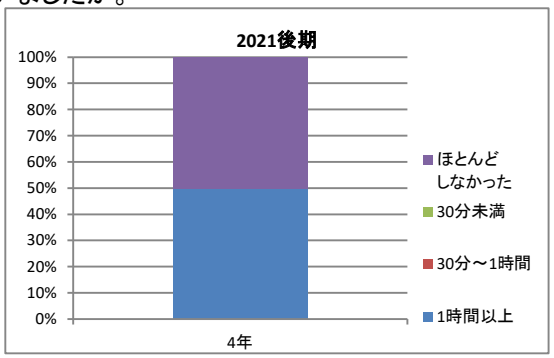


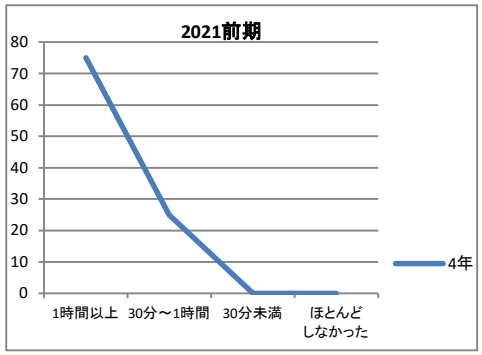


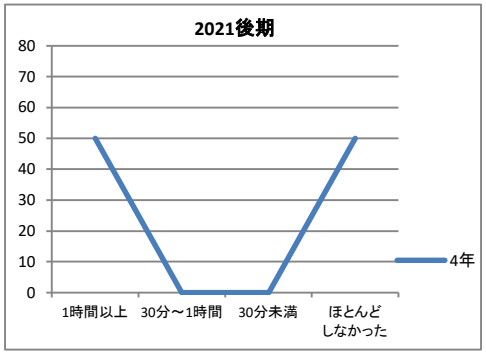
【あなたの授業に対する取り組み】

Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。



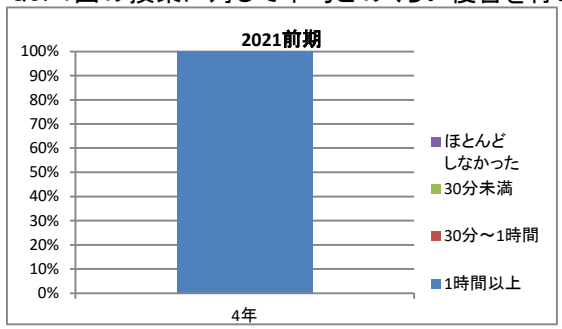


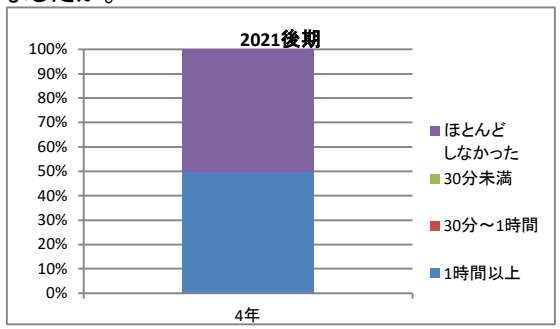


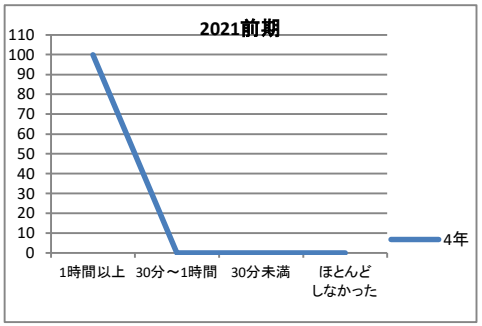


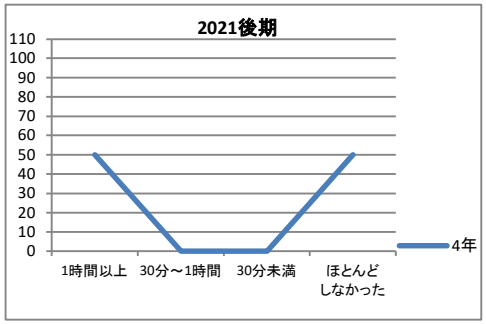
【あなたの授業に対する取り組み】

Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



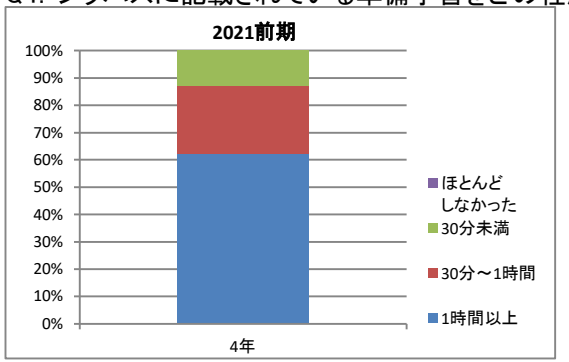


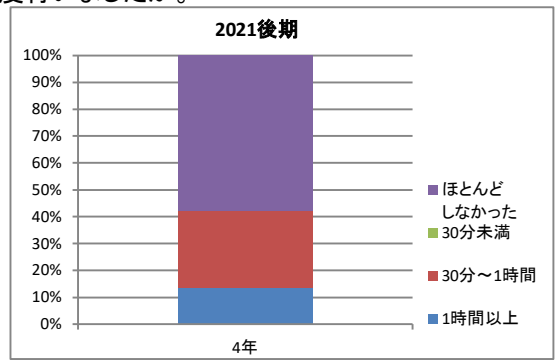


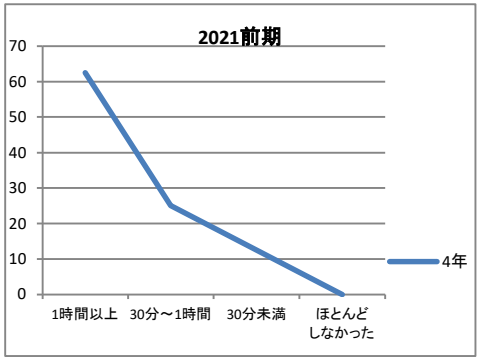


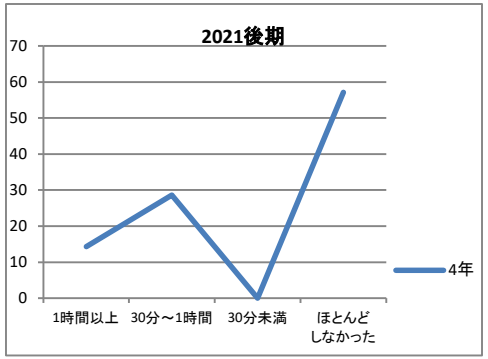
図Ⅶ　視機能

【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

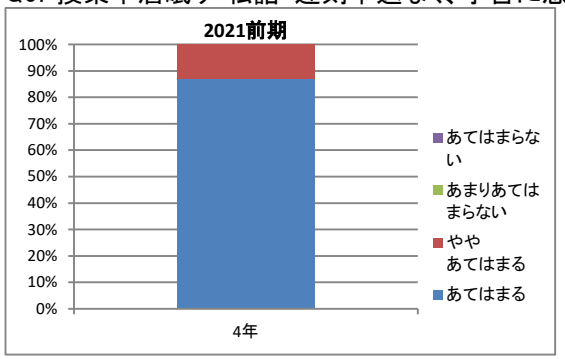


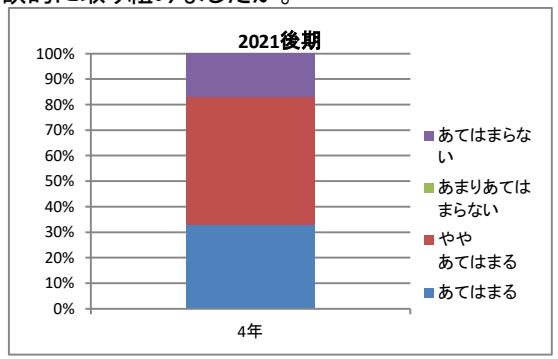


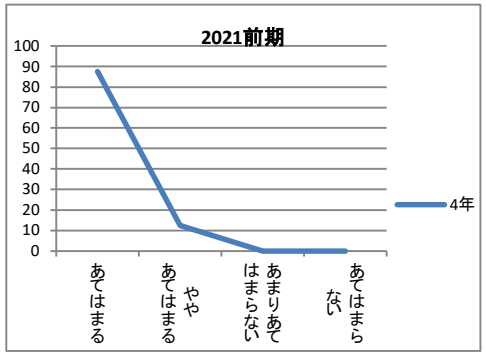


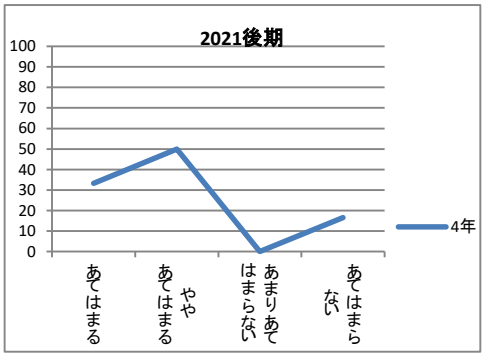


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

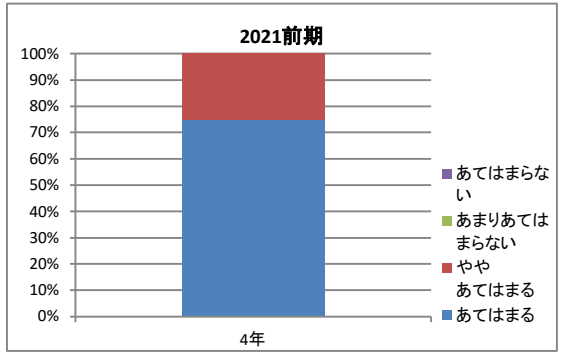


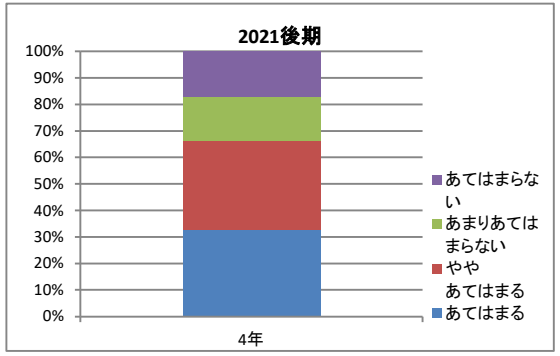


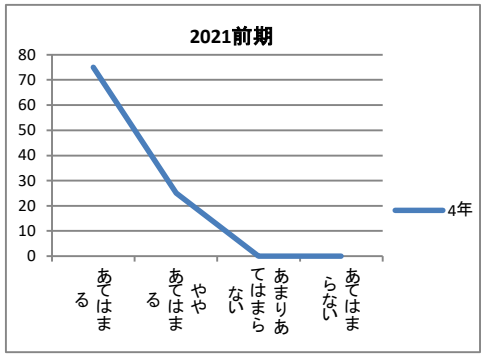


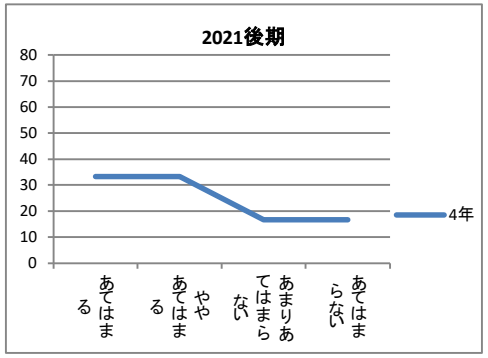


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

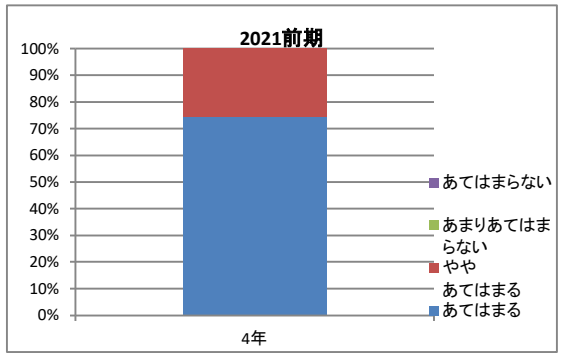


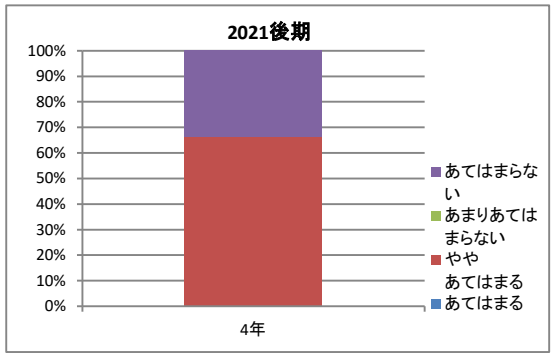


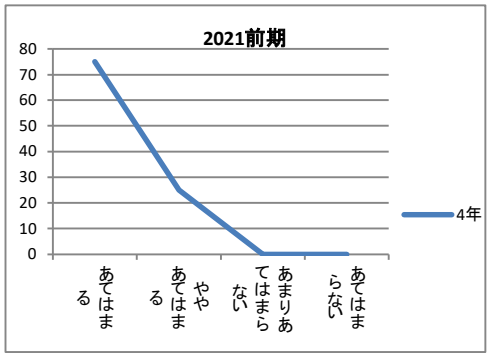


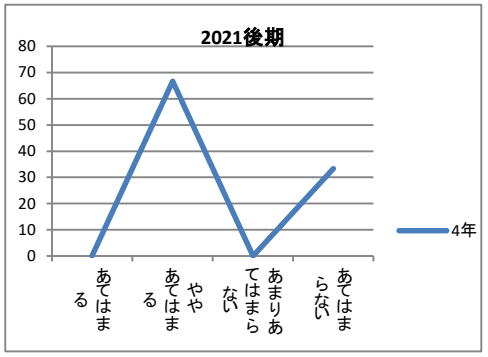


【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

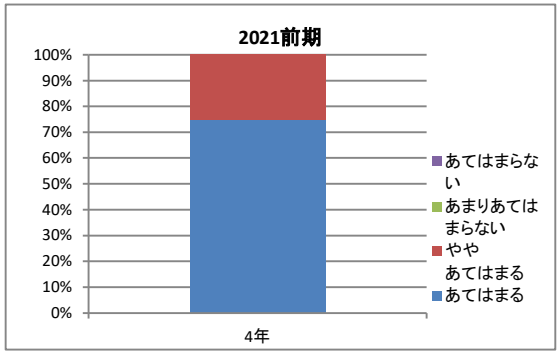


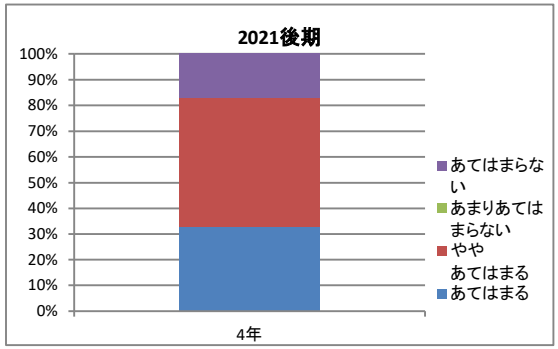


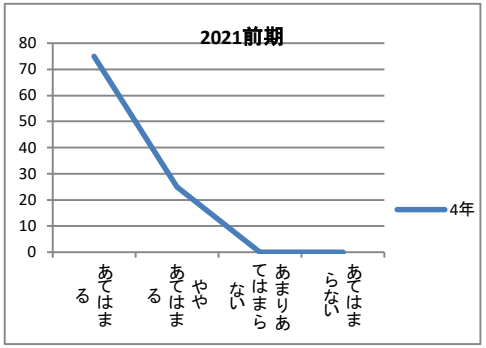


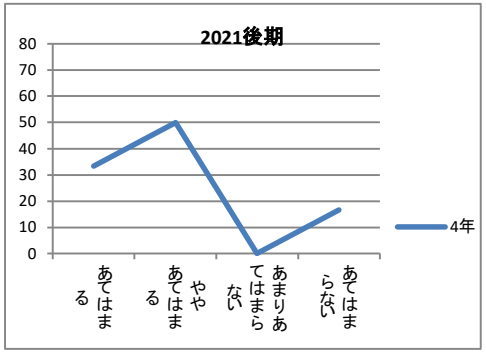


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

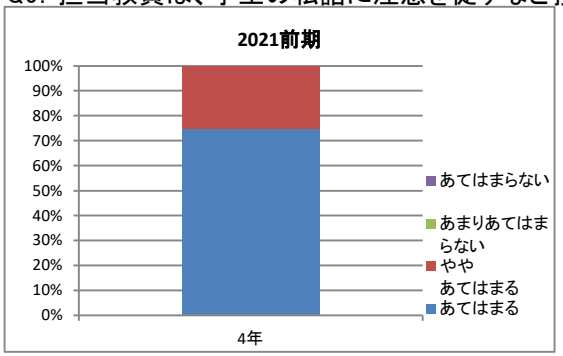


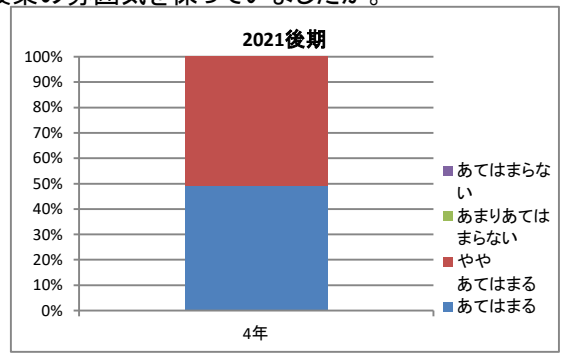


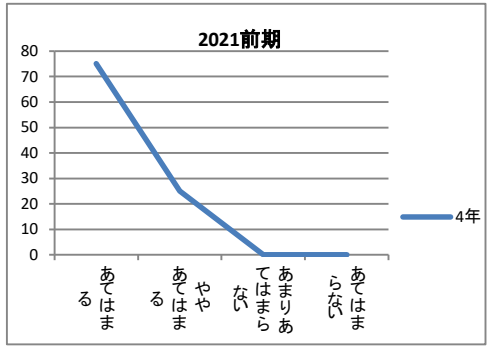


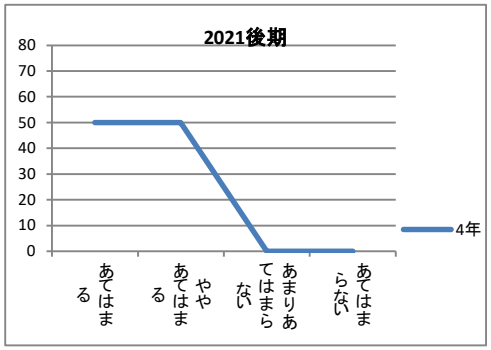


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

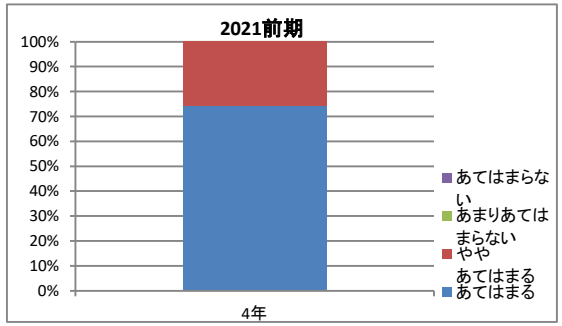


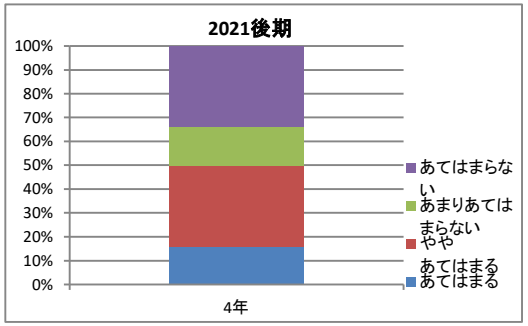


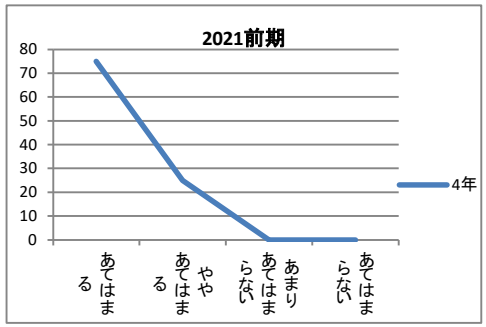


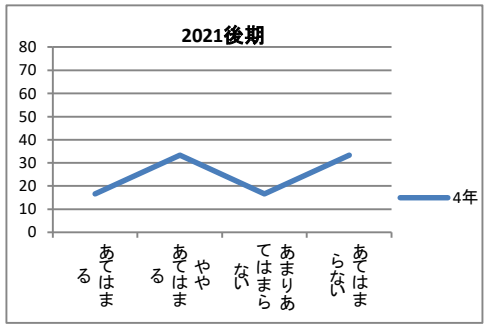


【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

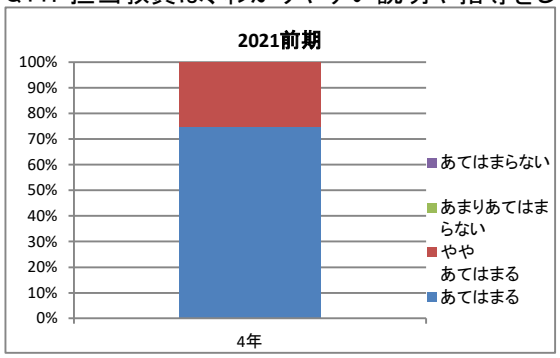


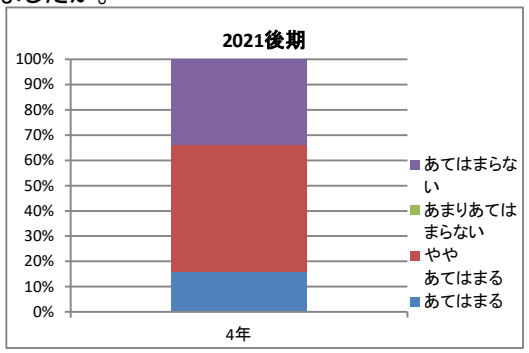


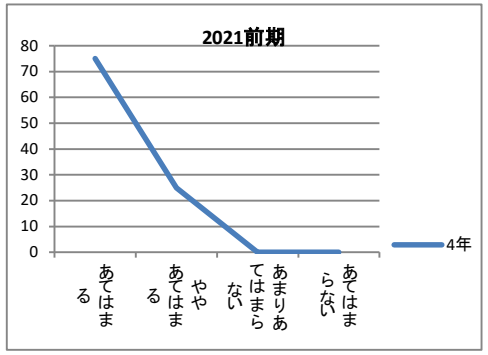


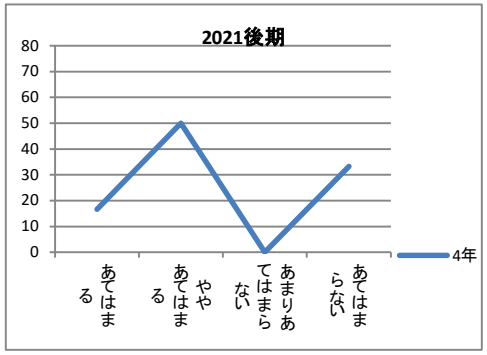


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

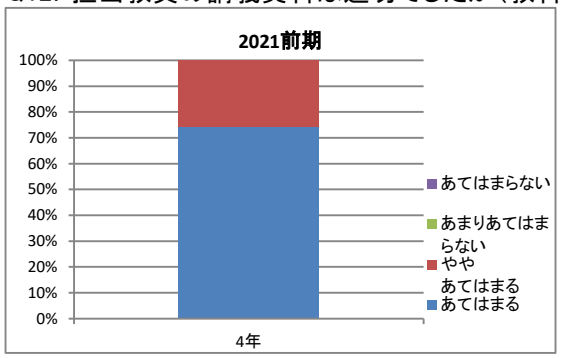


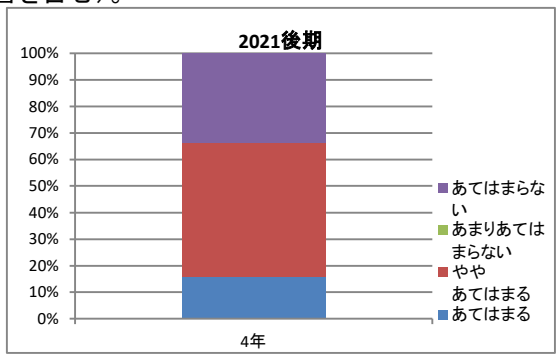


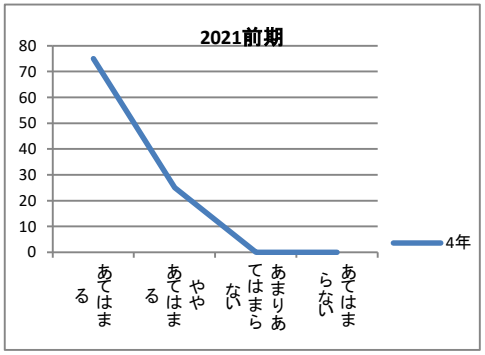


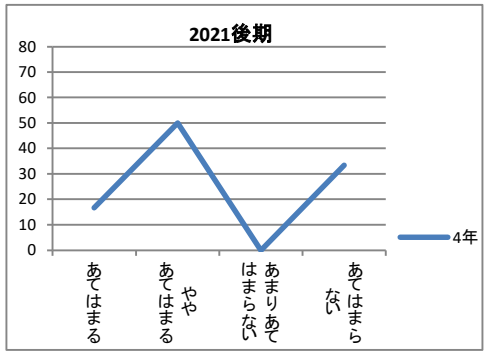


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。



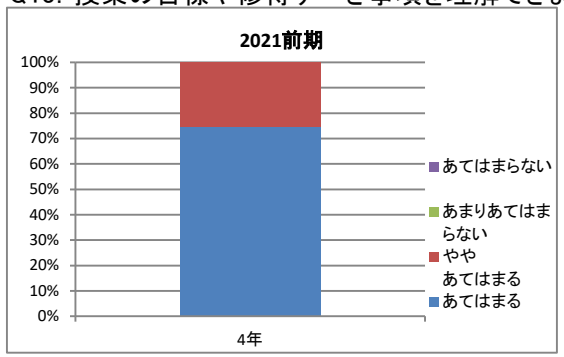


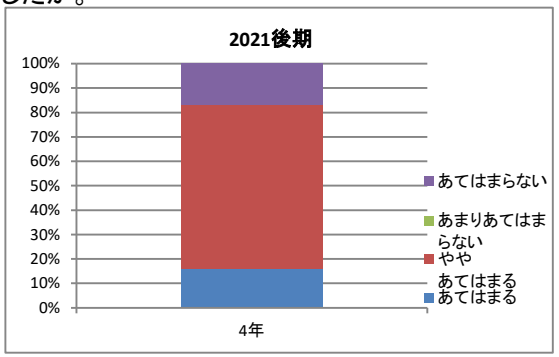


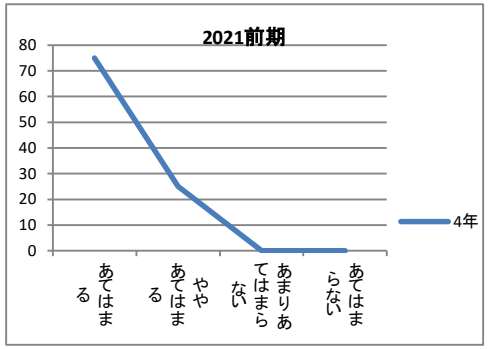


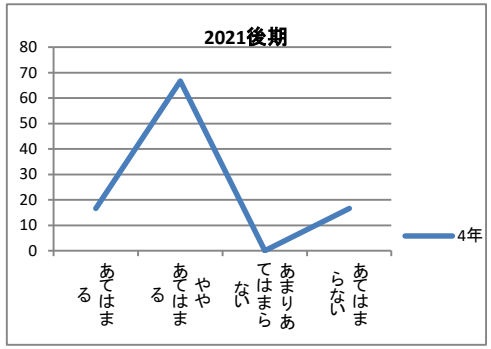
図Ⅶ　視機能

【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

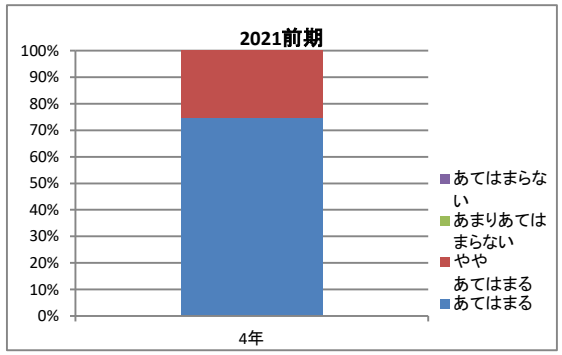


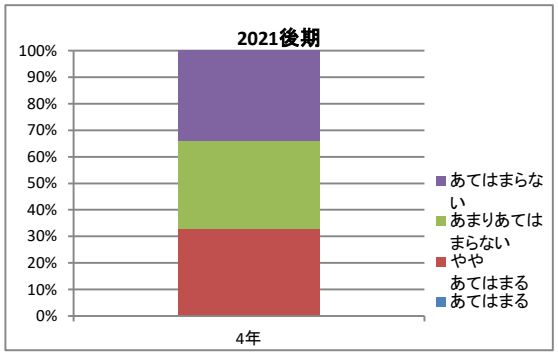


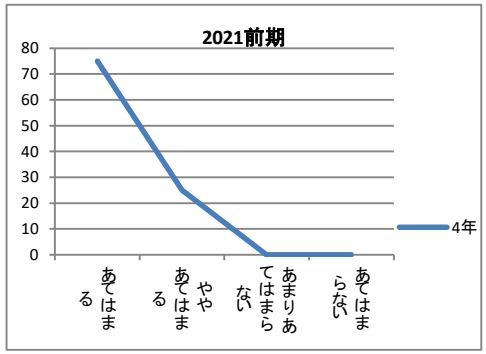


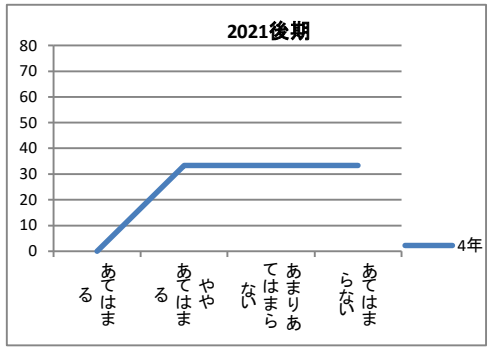


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

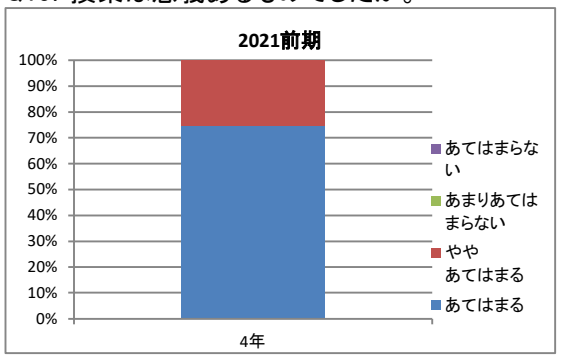


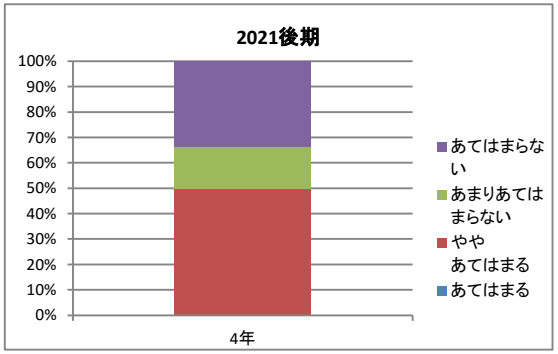


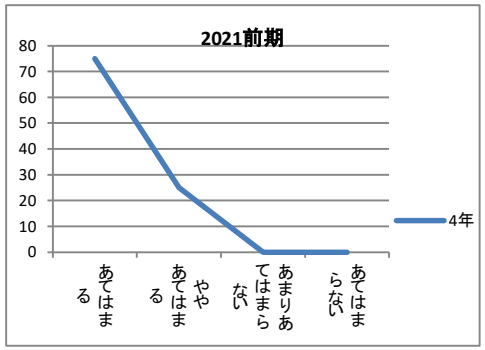


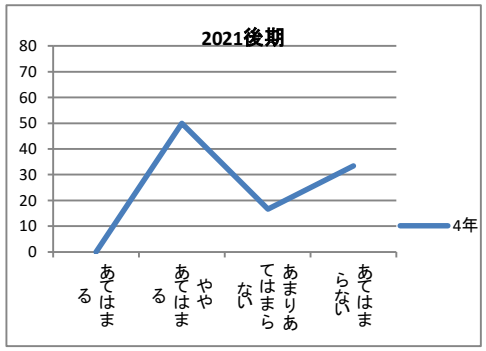


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。







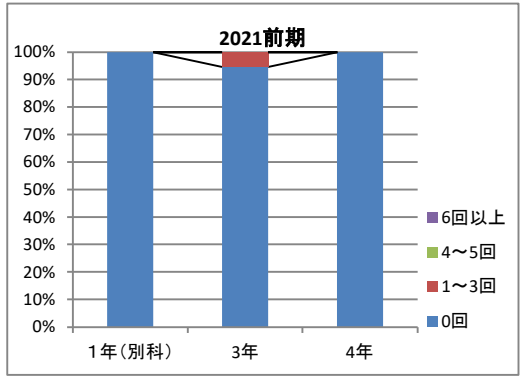


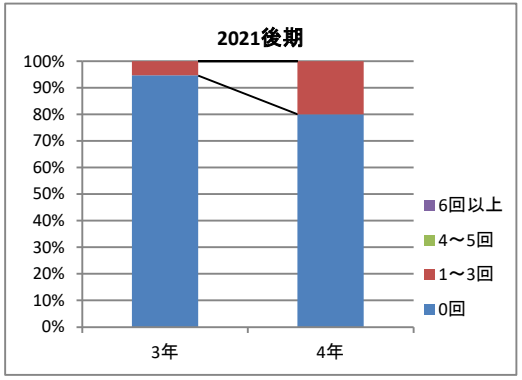
授業アンケート　令和3年度　2021年度

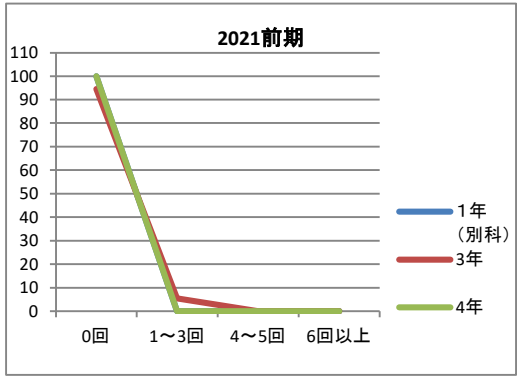
図Ⅷ　臨工

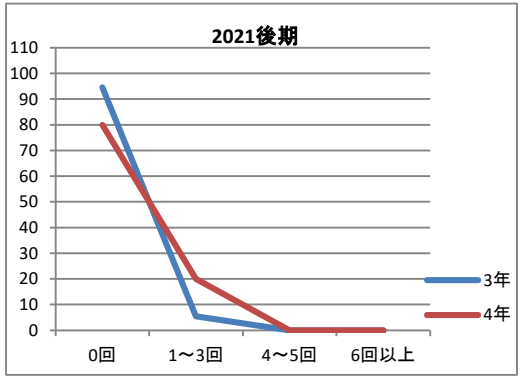
<臨床工学科>

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

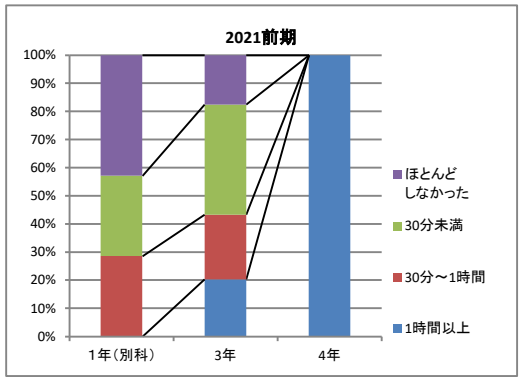


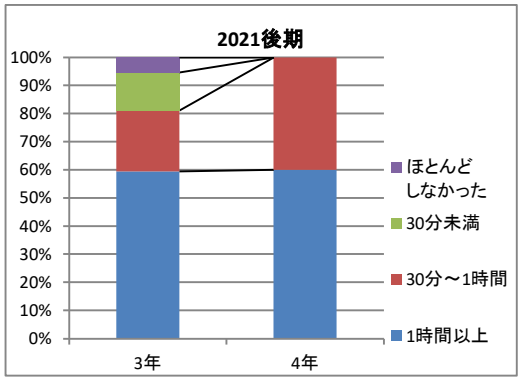


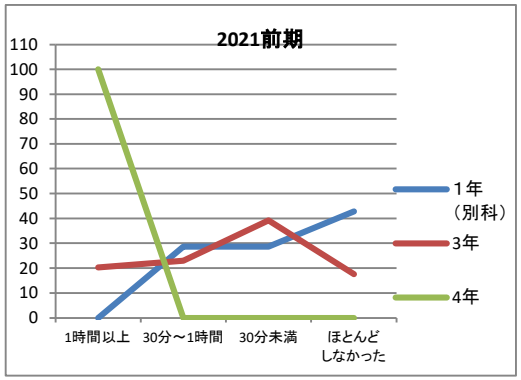


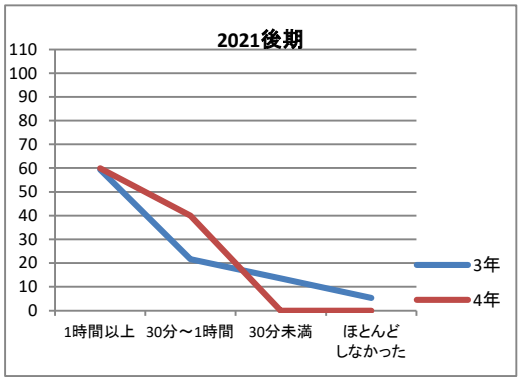


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

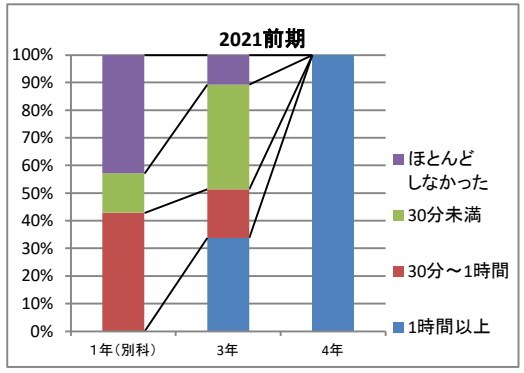


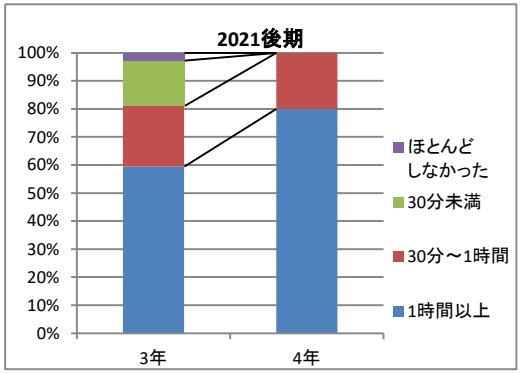


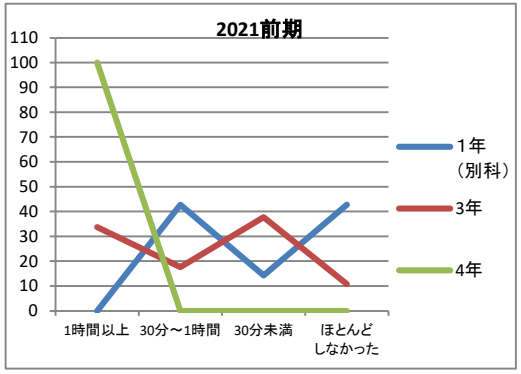


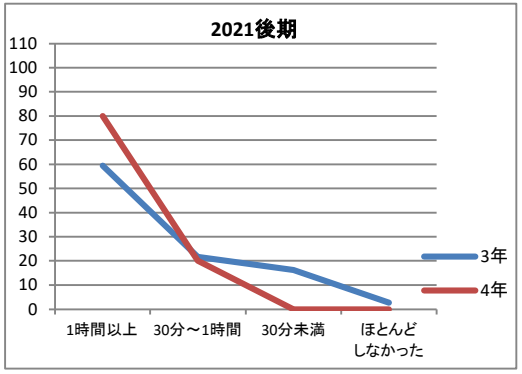


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



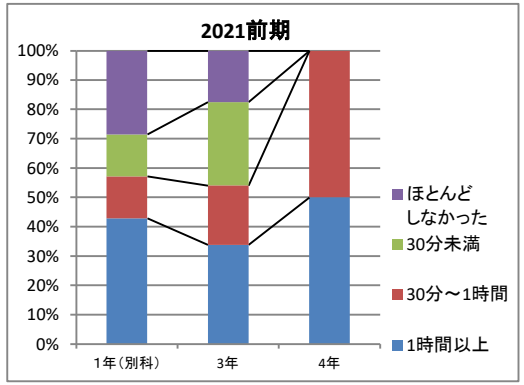


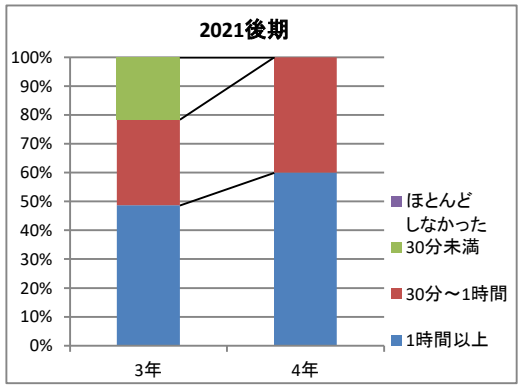


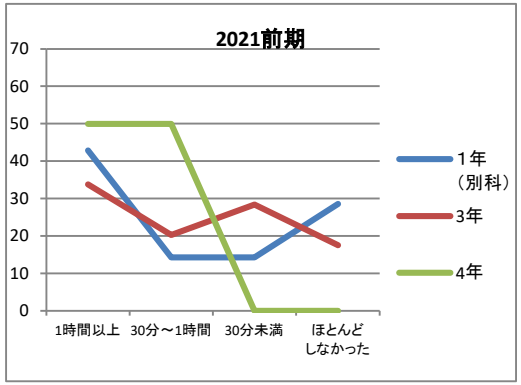


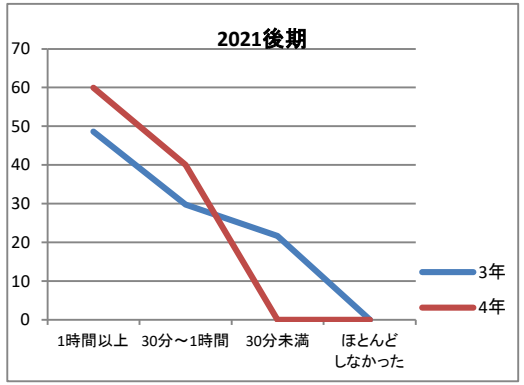
図Ⅷ　臨工

【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

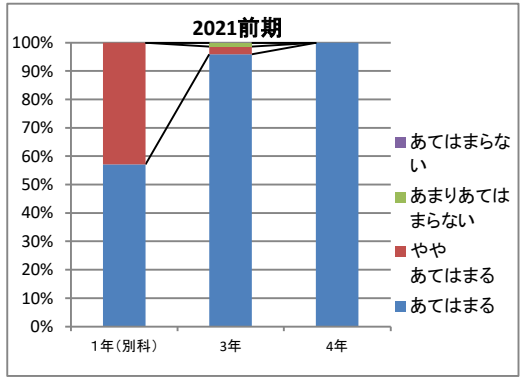


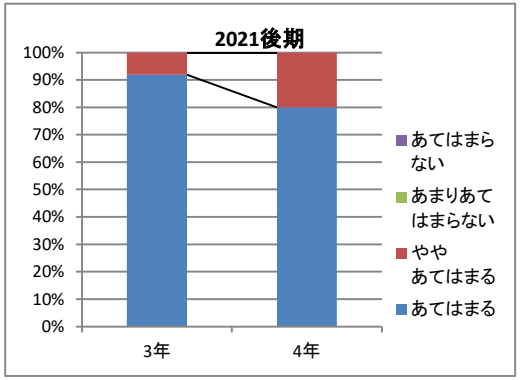


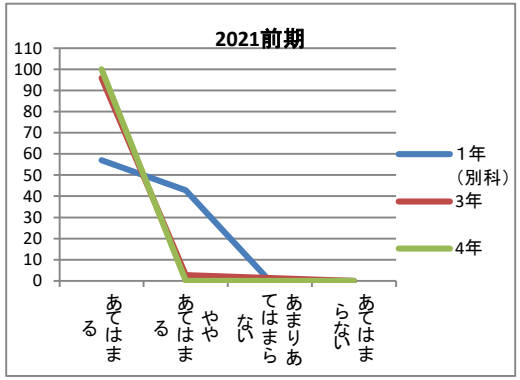


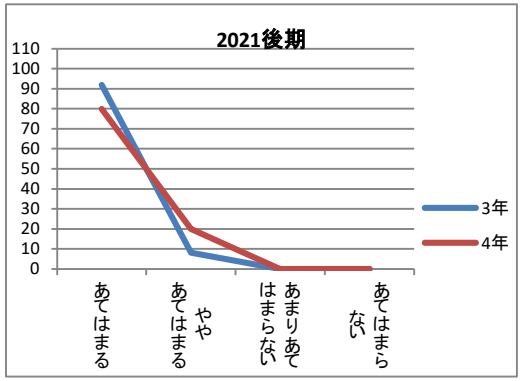


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

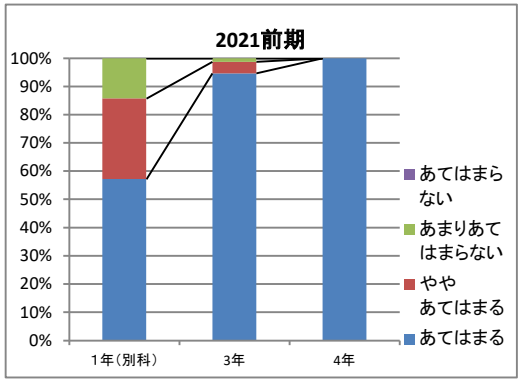


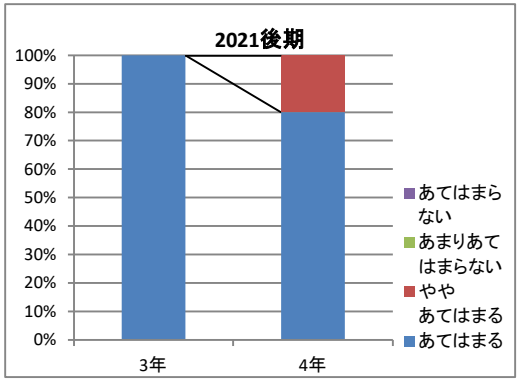


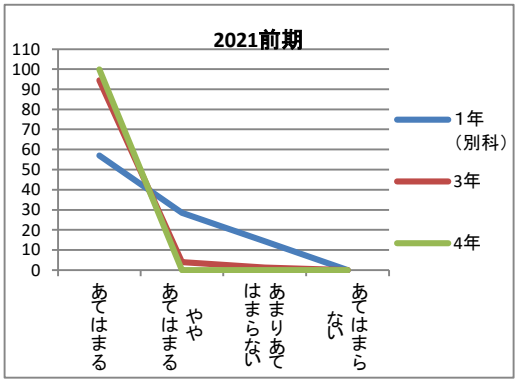


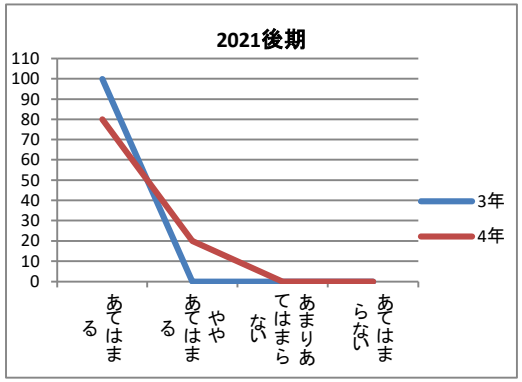


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

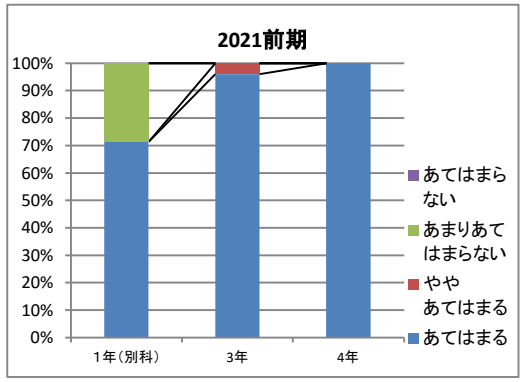


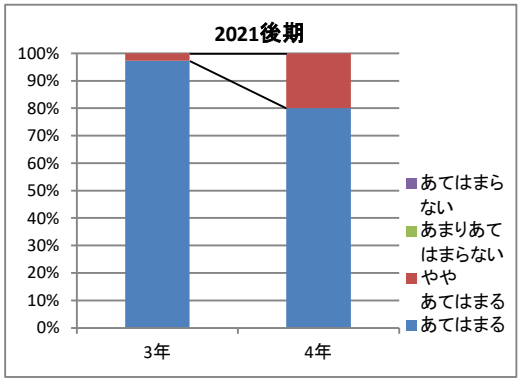


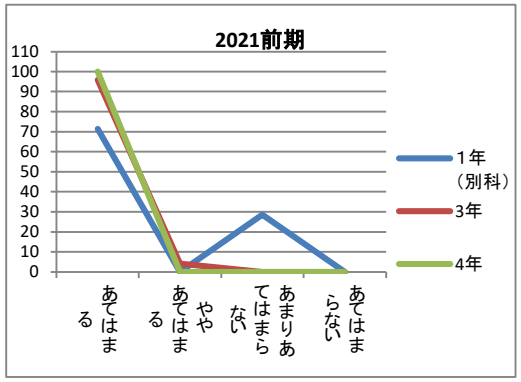


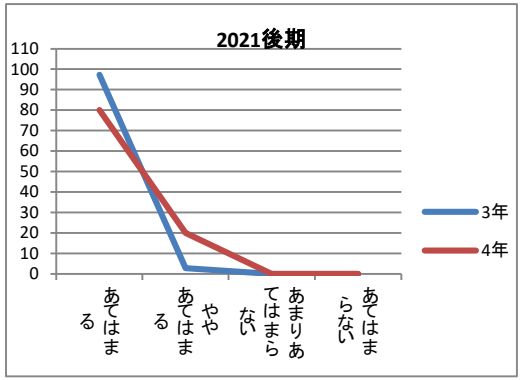


【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

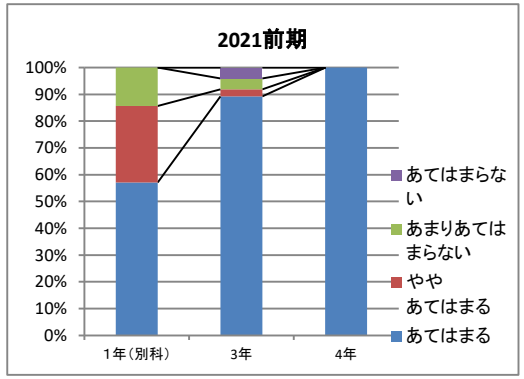


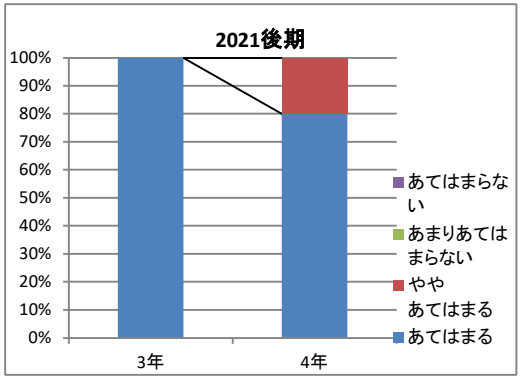


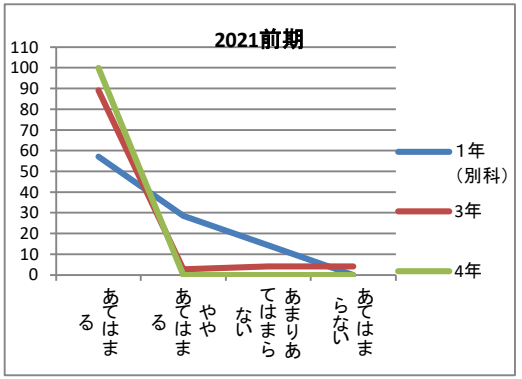


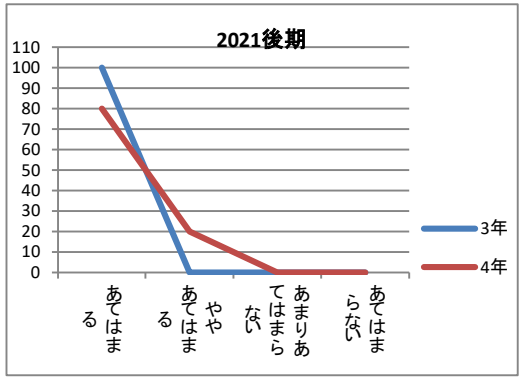


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

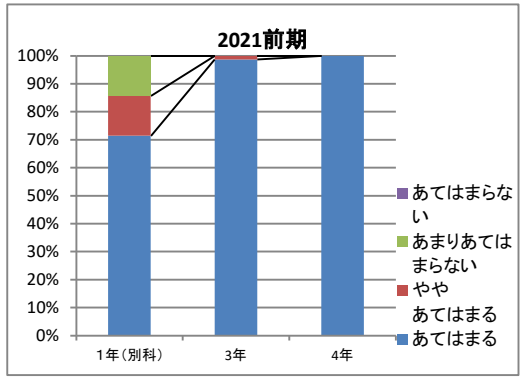


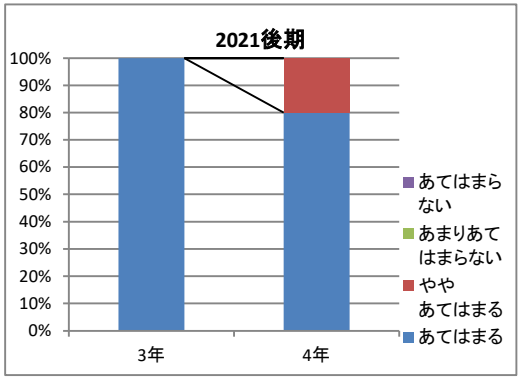


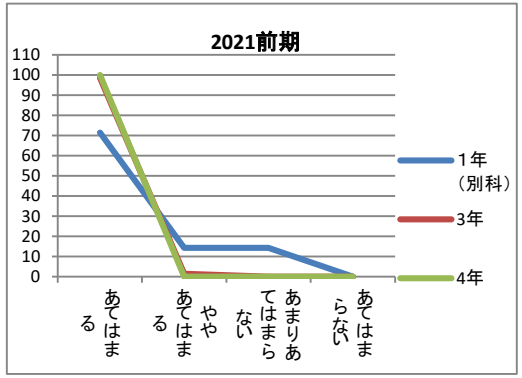


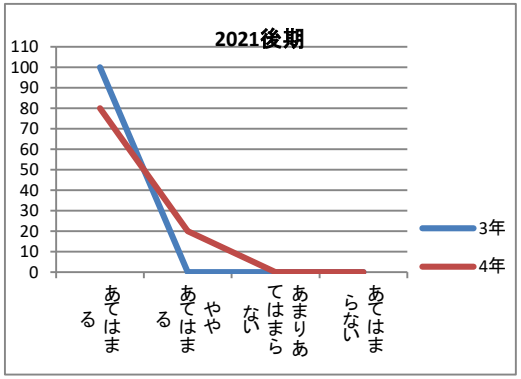


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

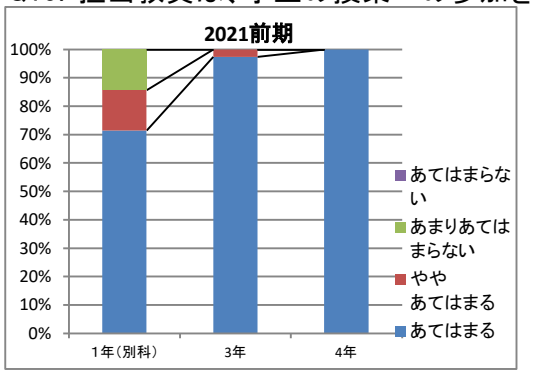


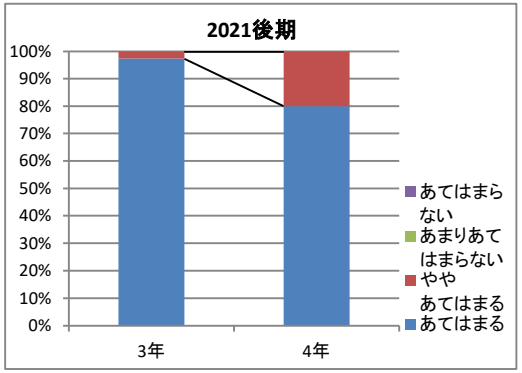


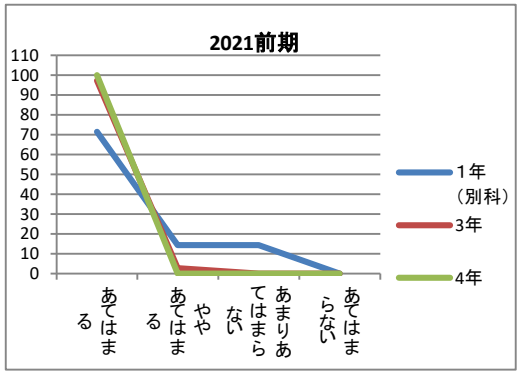


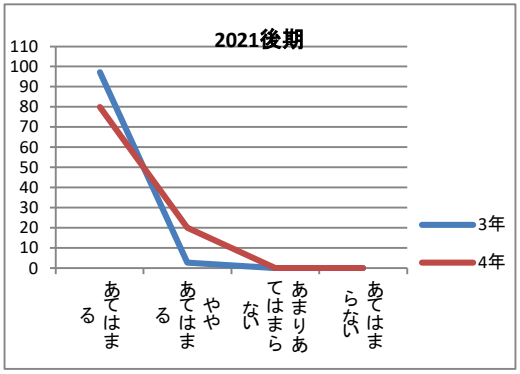


【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

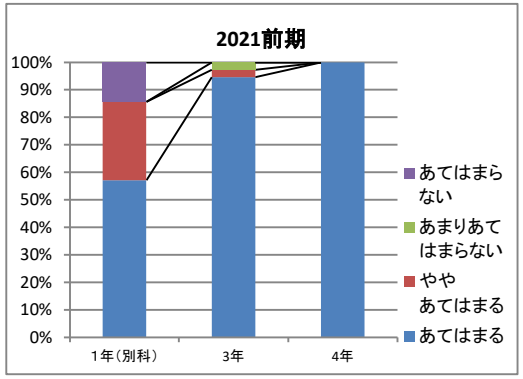


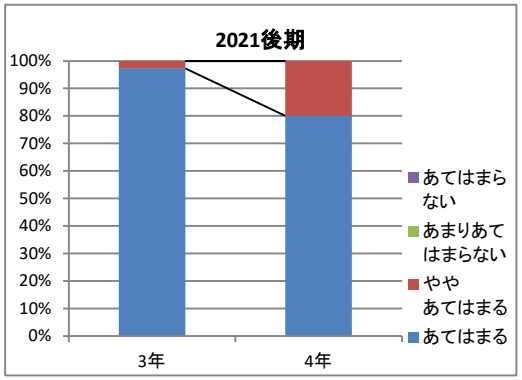


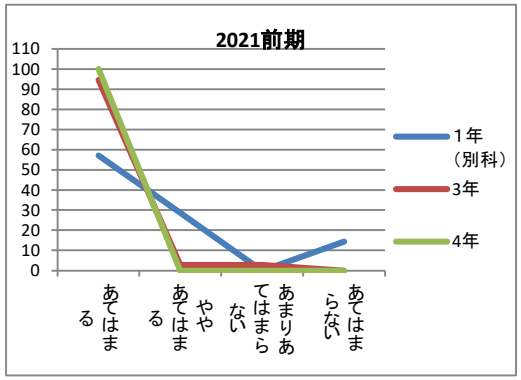


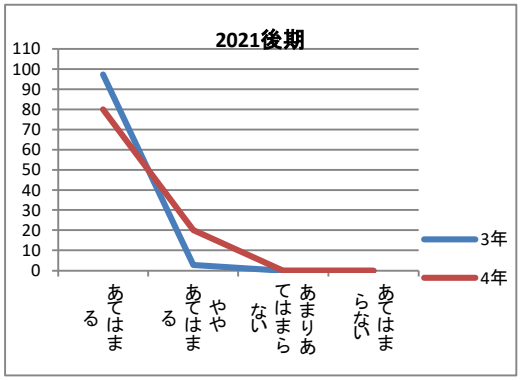


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

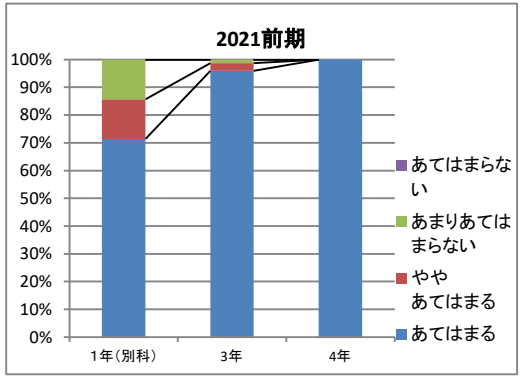


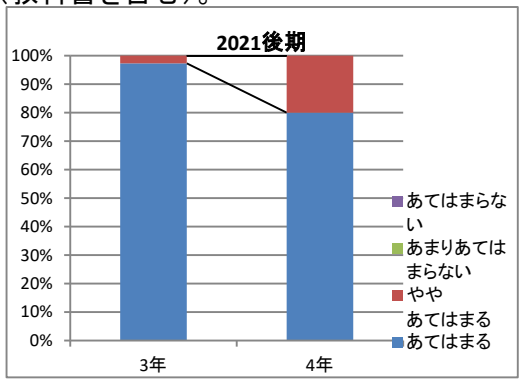


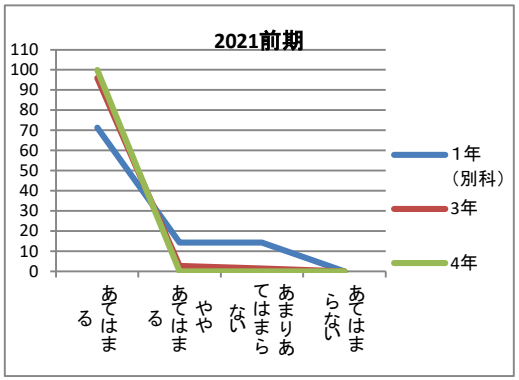


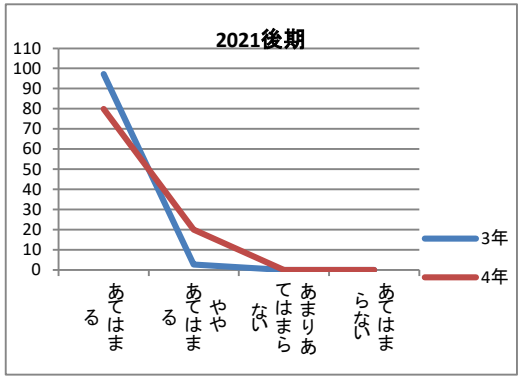


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。

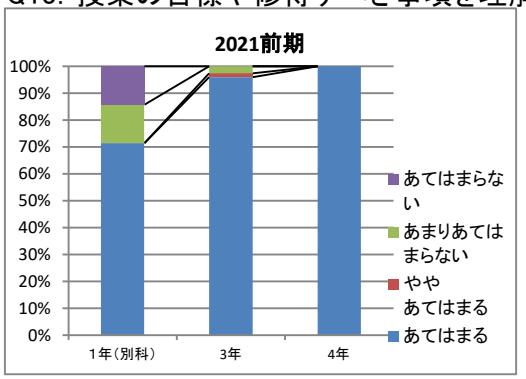


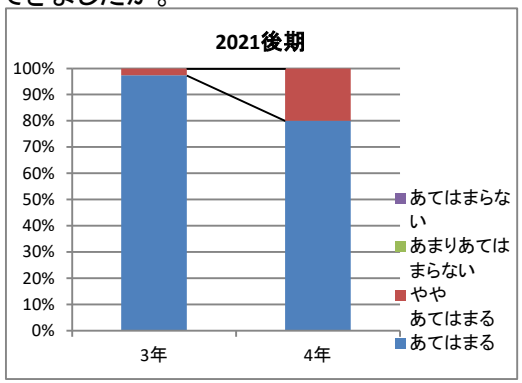


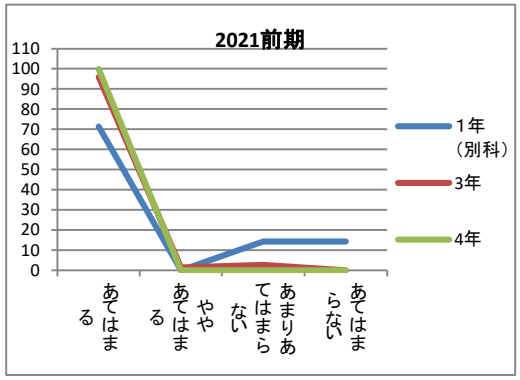


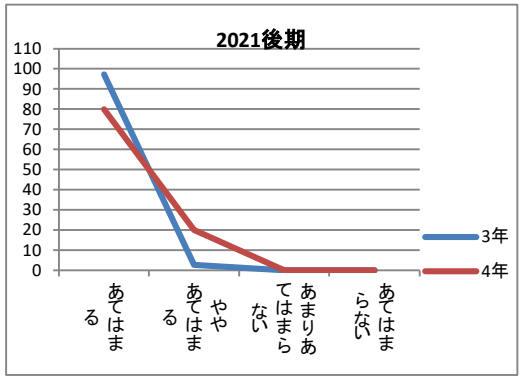


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

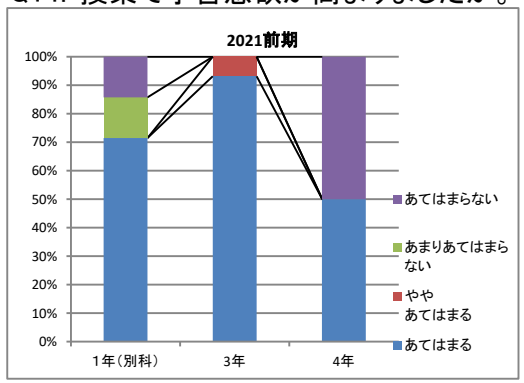


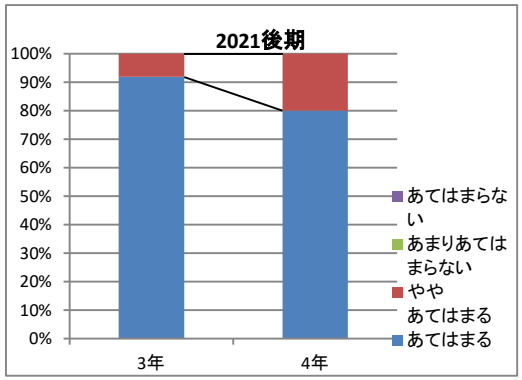


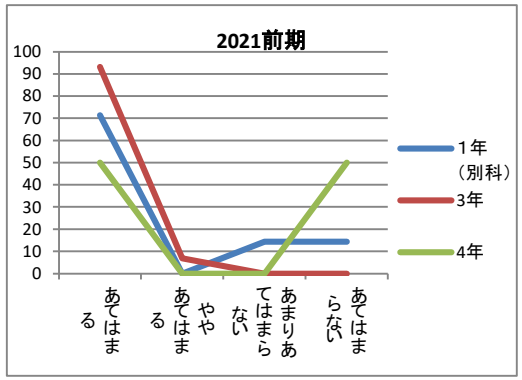


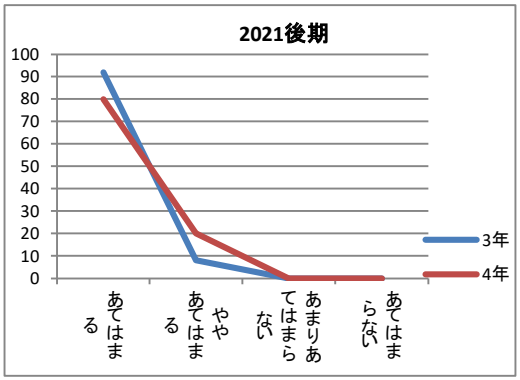


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

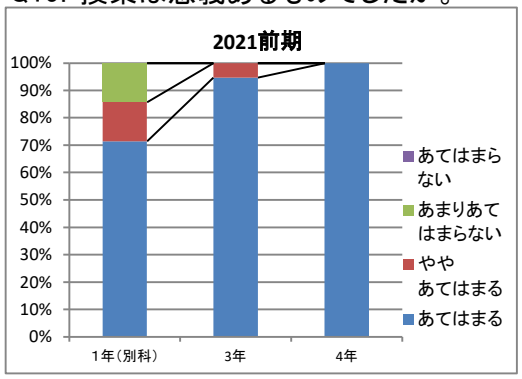


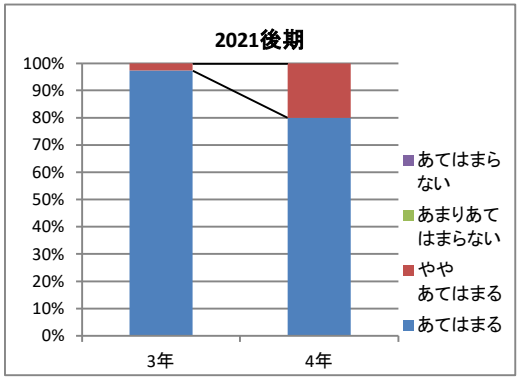


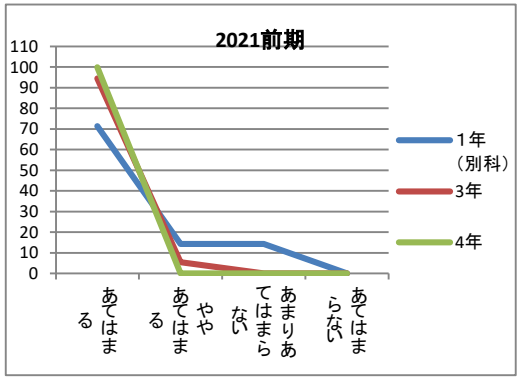


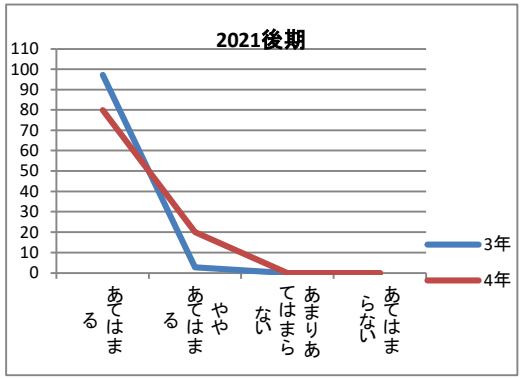


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。







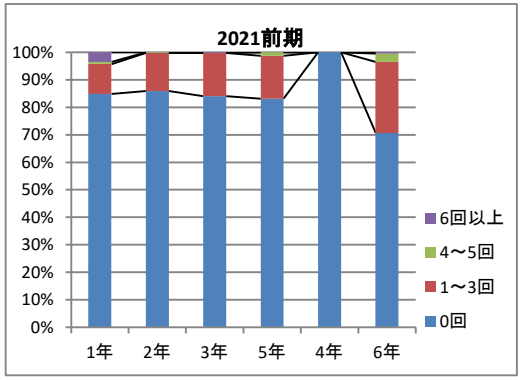


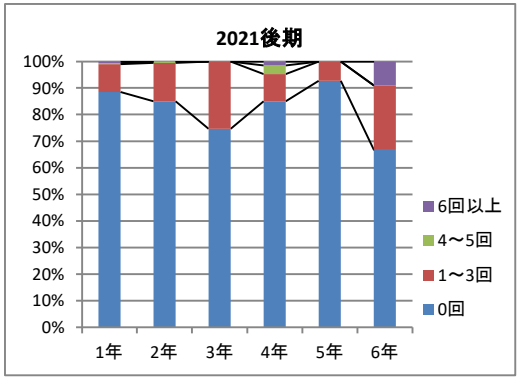
授業アンケート　令和3年度　2021年度

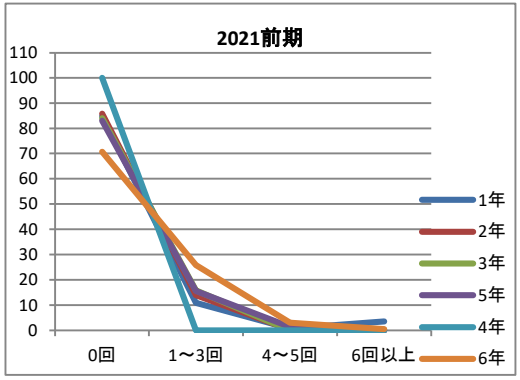
図Ⅸ　薬

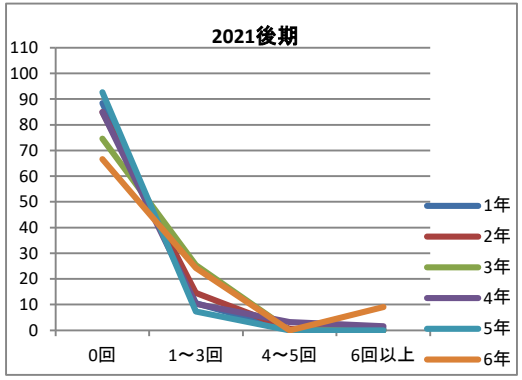
<薬学科>

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

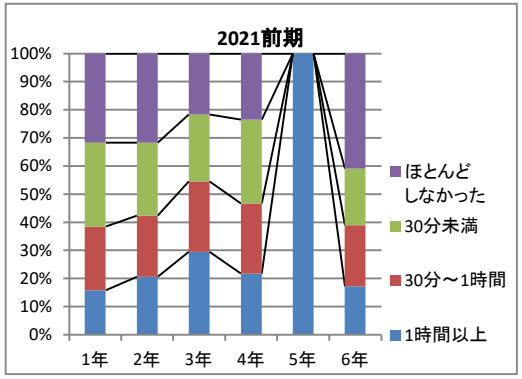


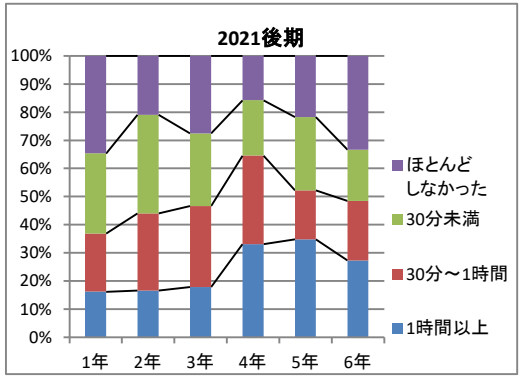


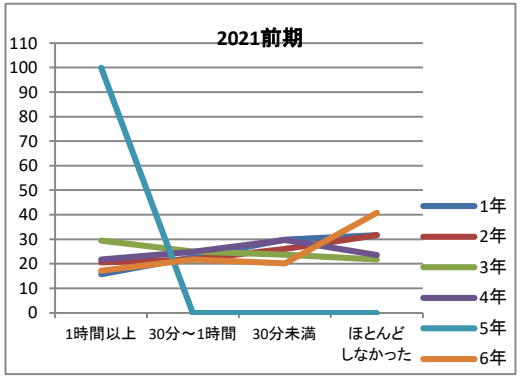


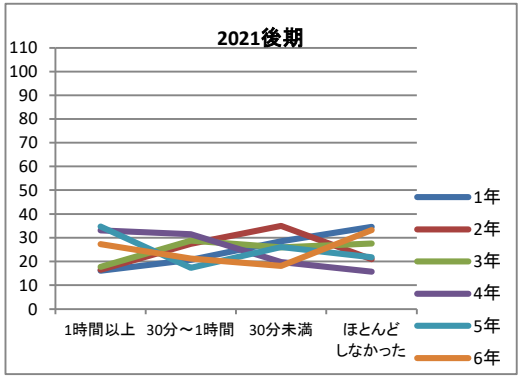


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

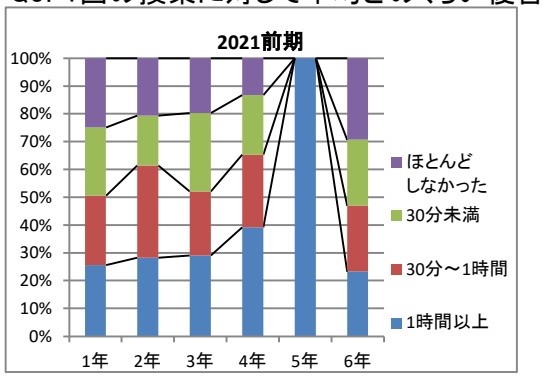


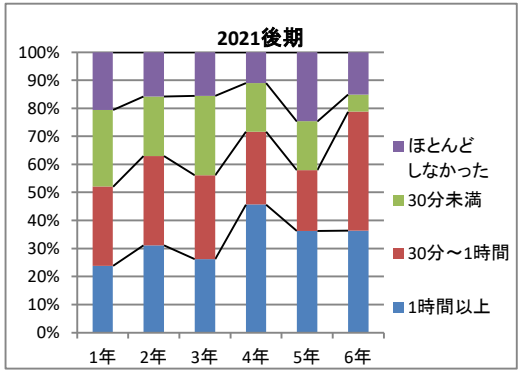


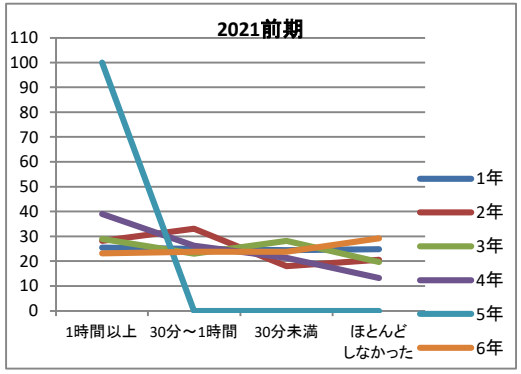


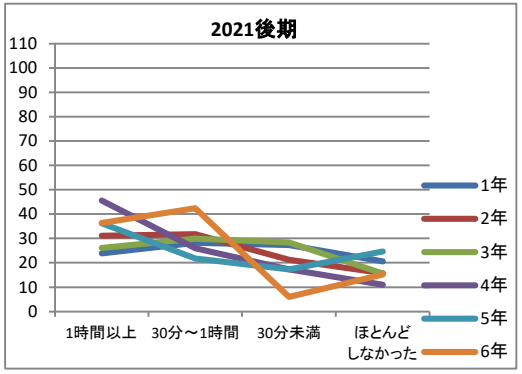


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



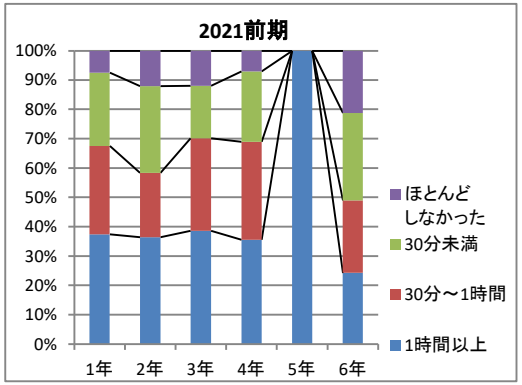


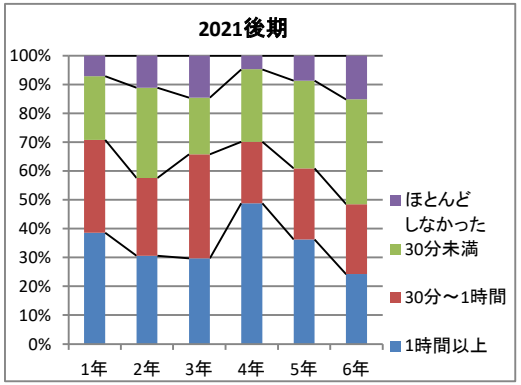


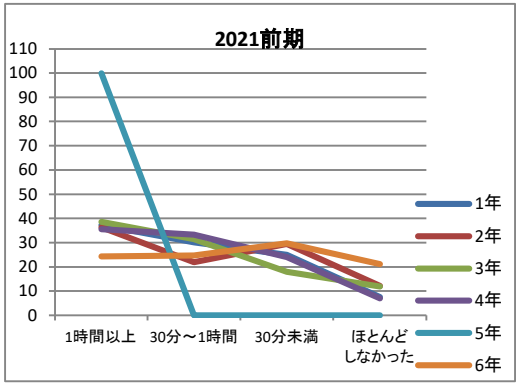


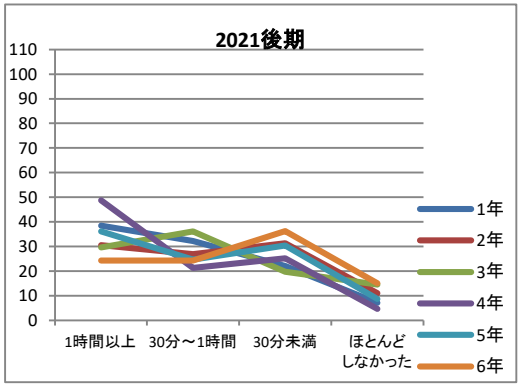
図Ⅸ　薬

【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

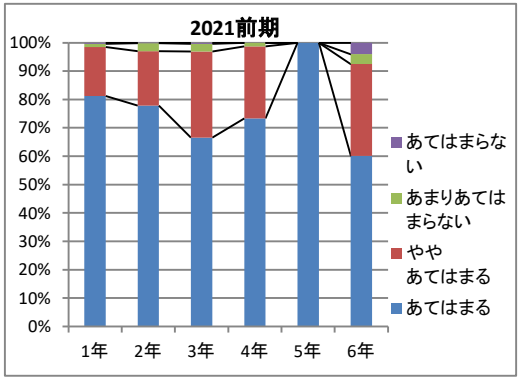


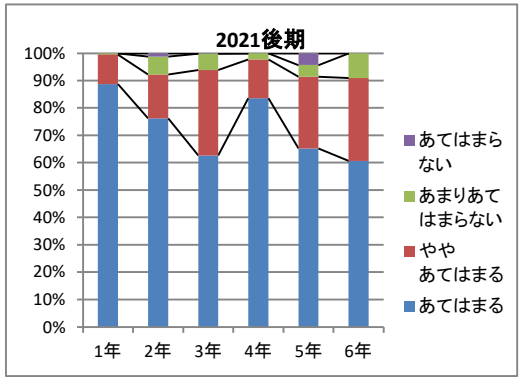


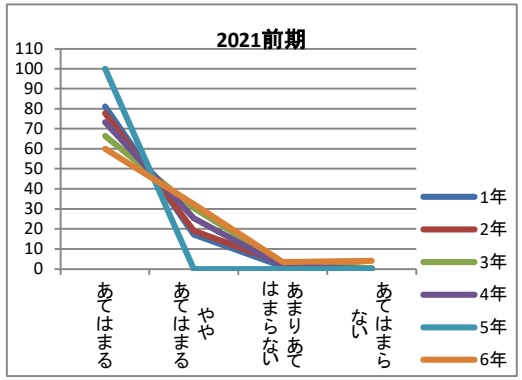


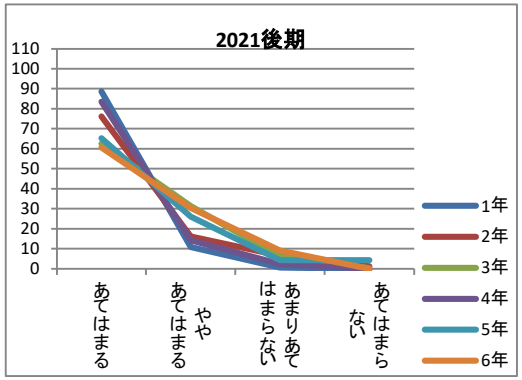


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

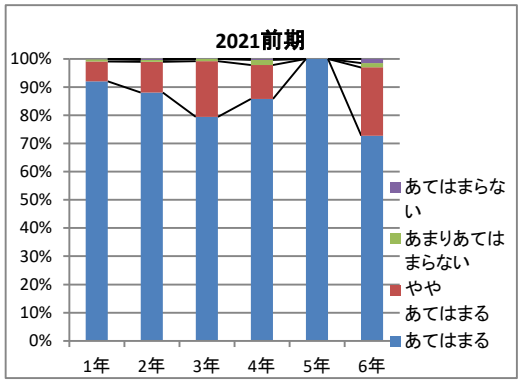


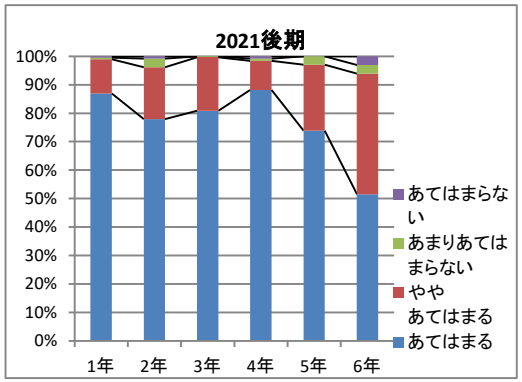


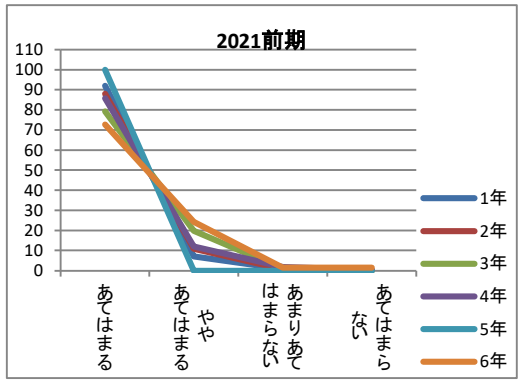


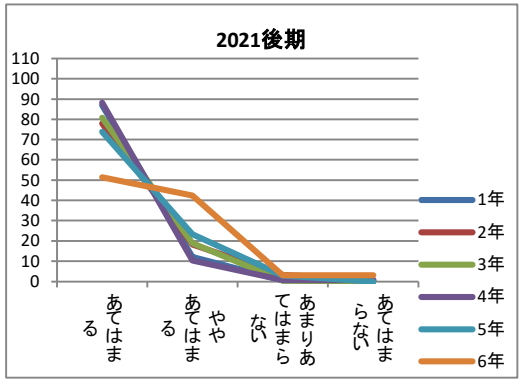


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。



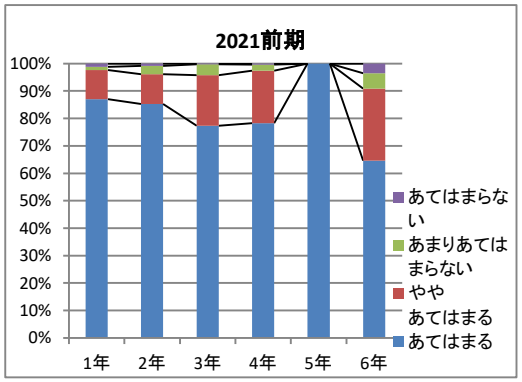


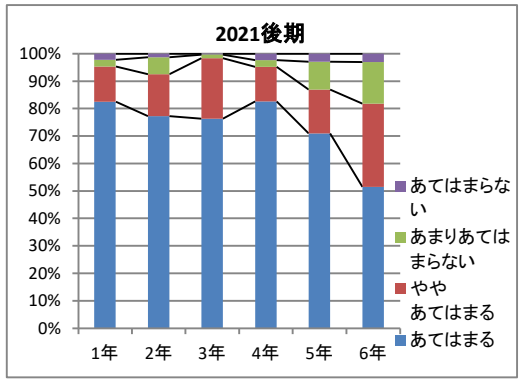


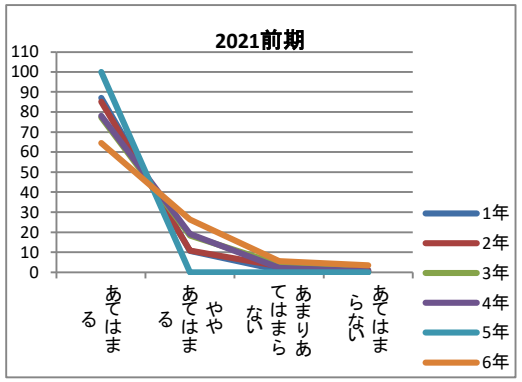


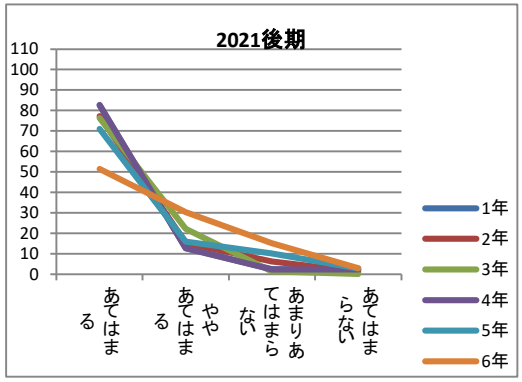
図Ⅸ　薬

【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

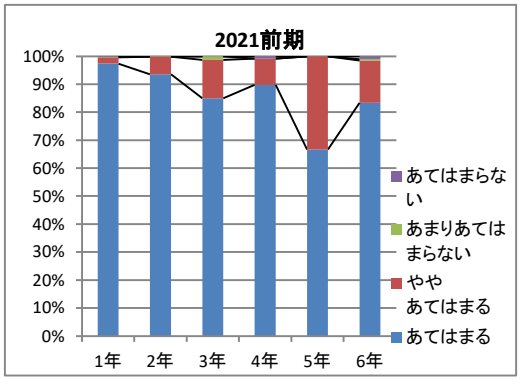


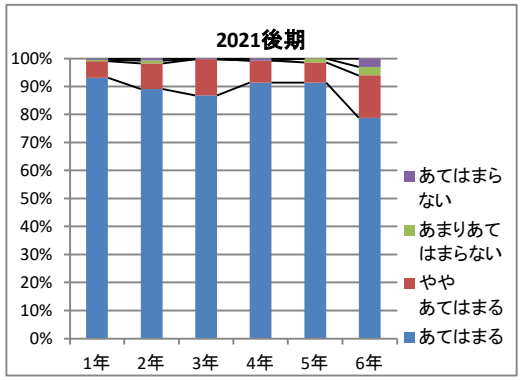


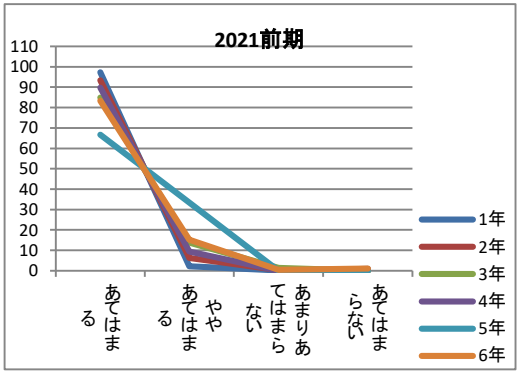


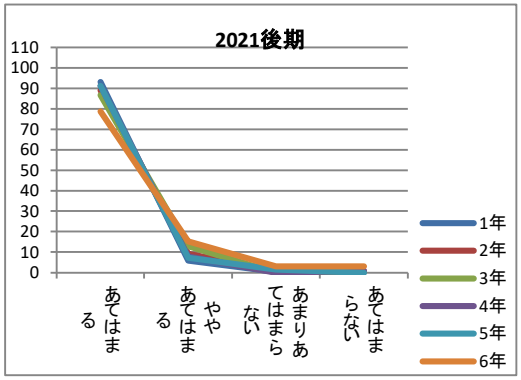


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

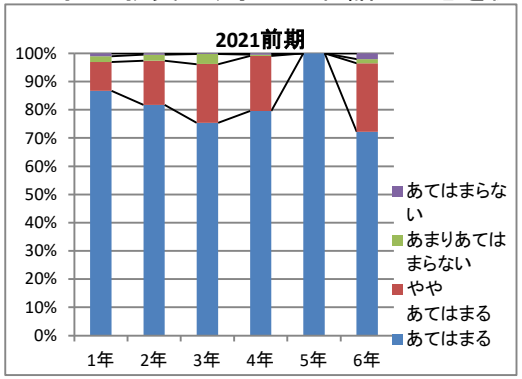


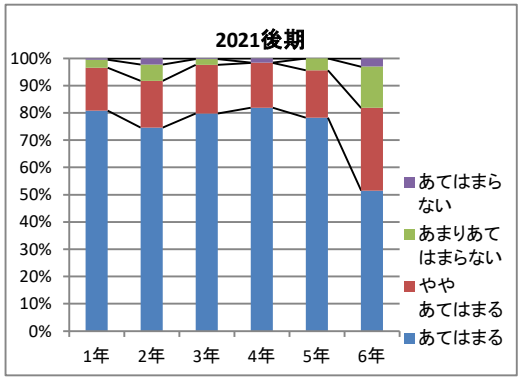


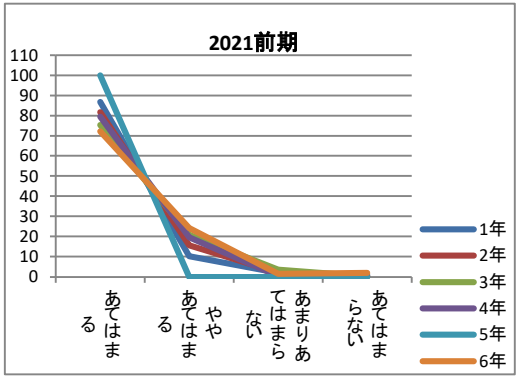


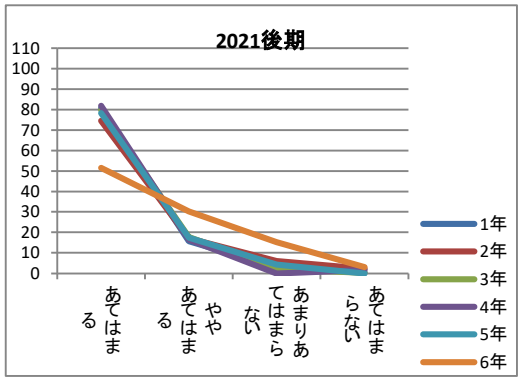


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。



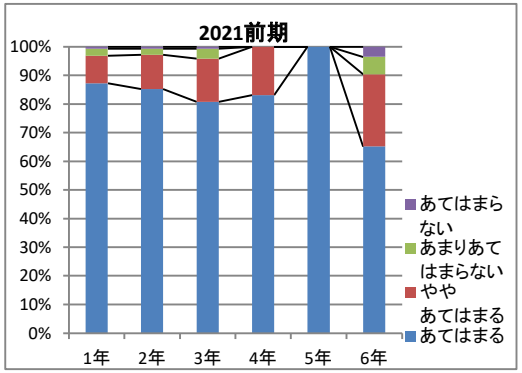


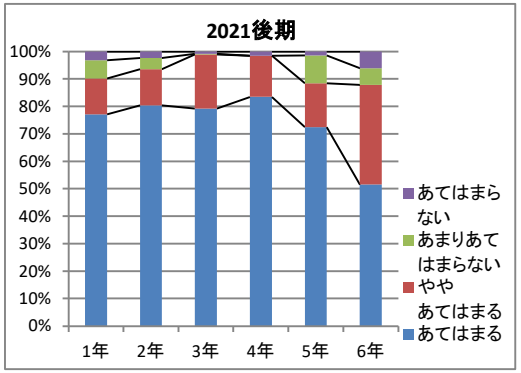


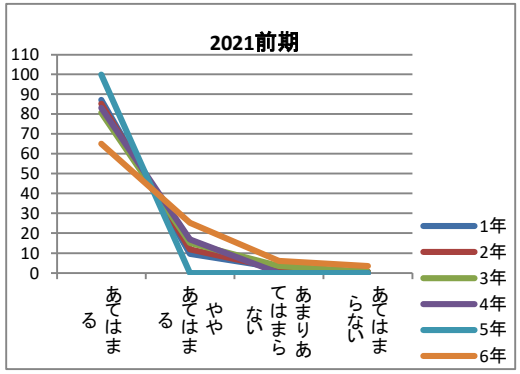


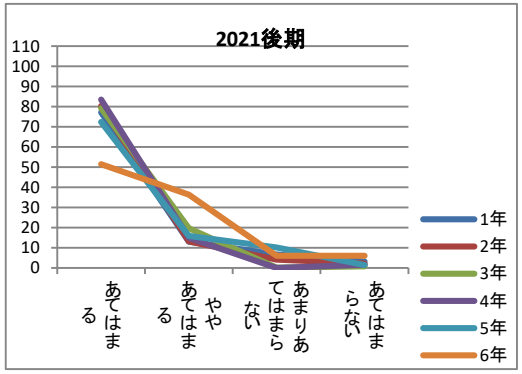
図Ⅸ　薬

【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

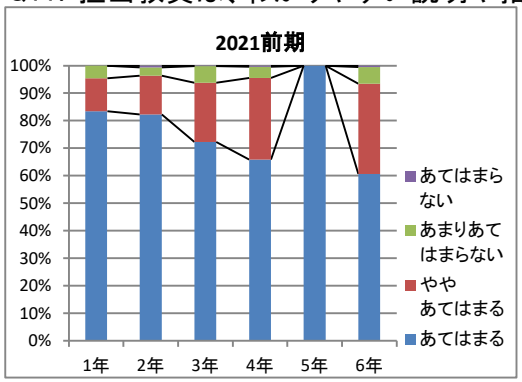


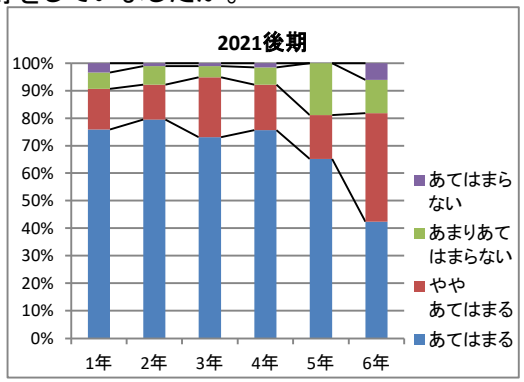


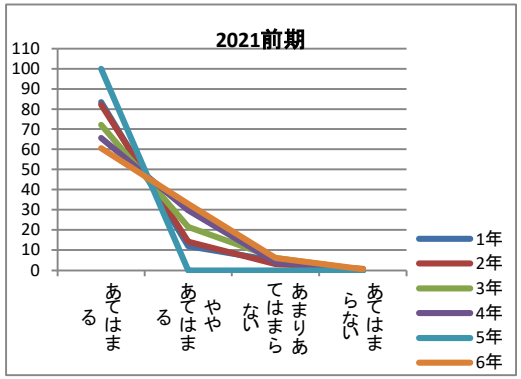


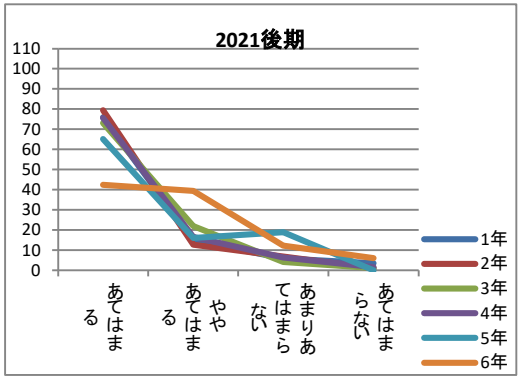


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

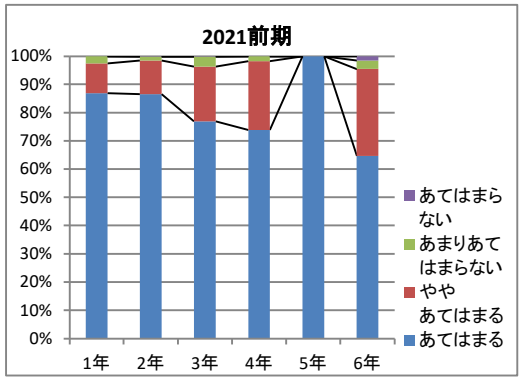


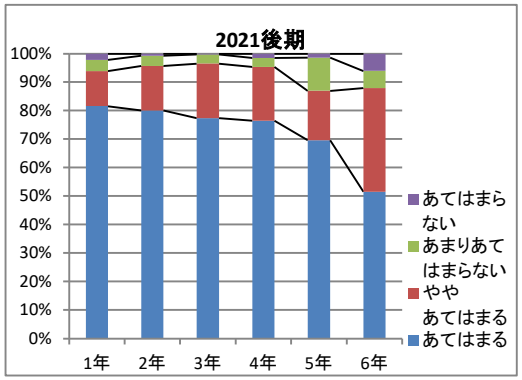


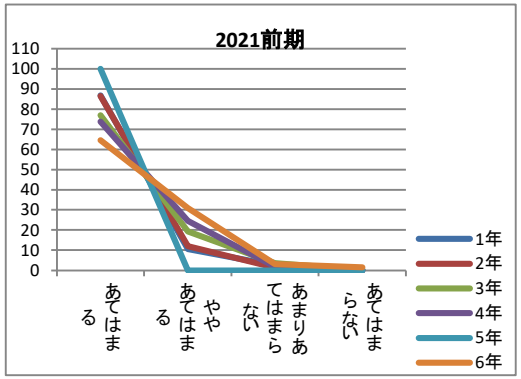


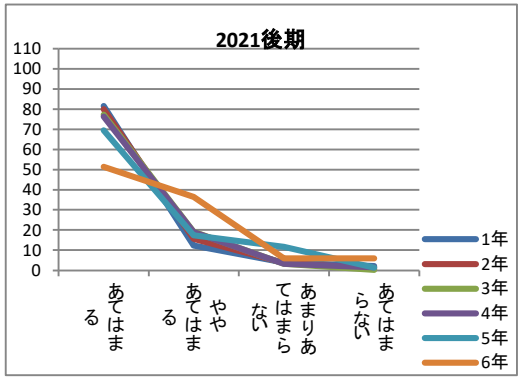


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。



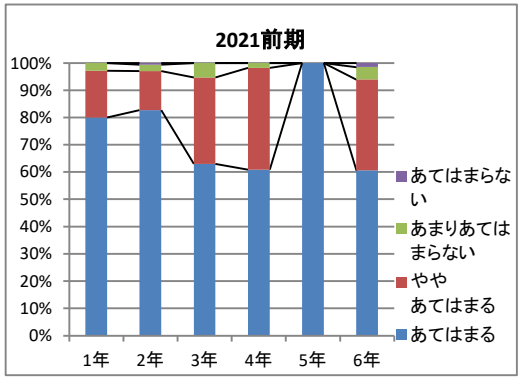


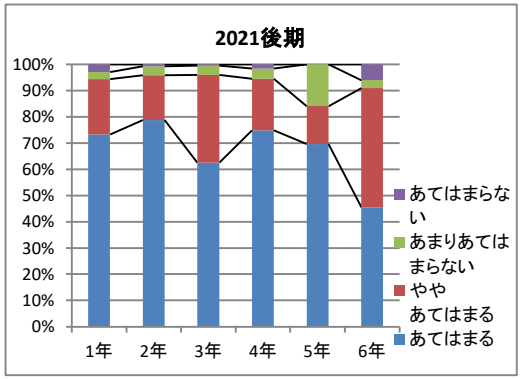


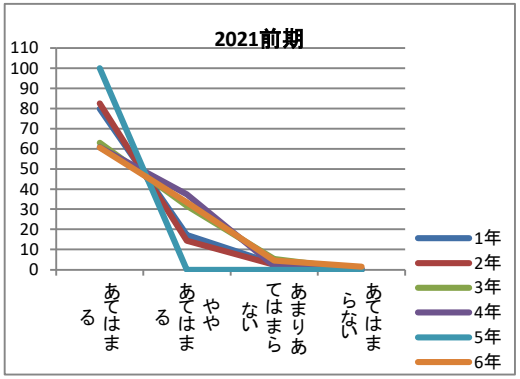


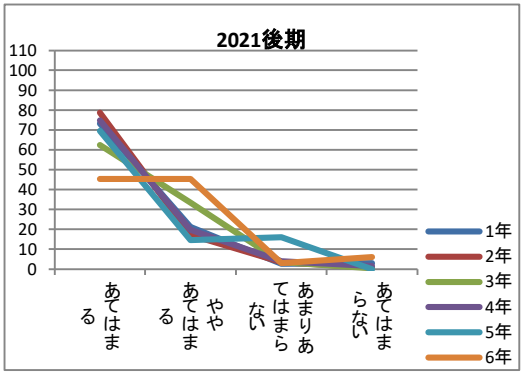
図Ⅸ　薬

【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

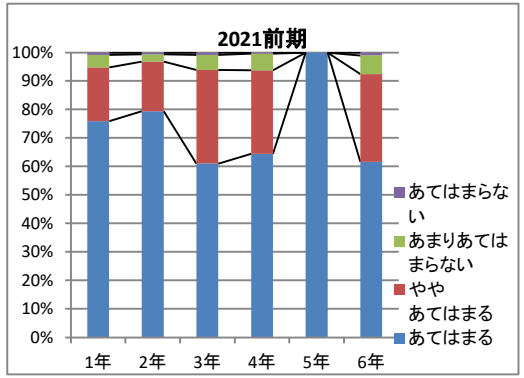


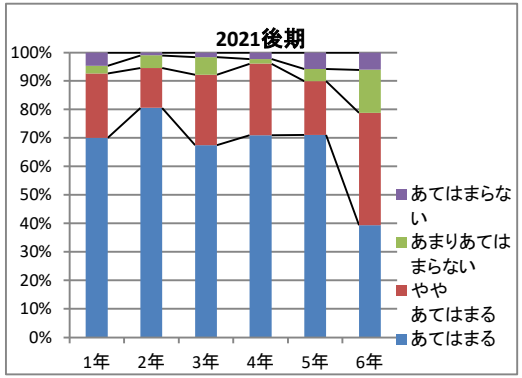


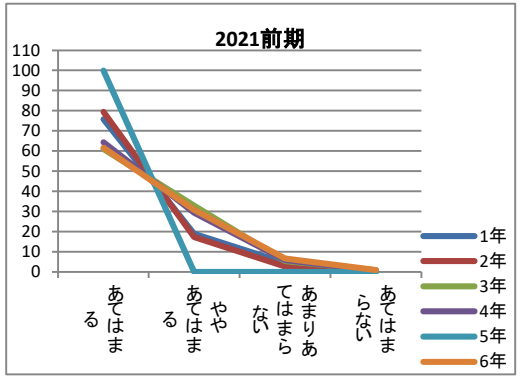


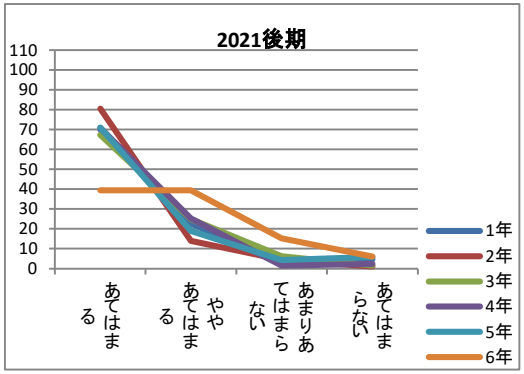


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

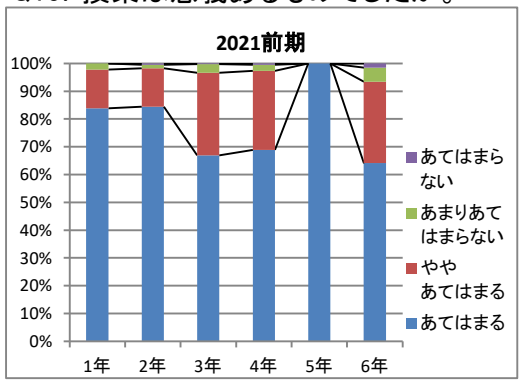


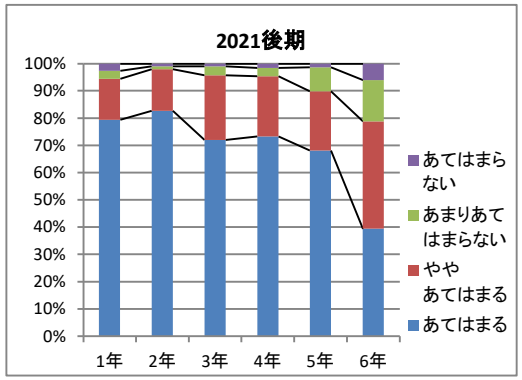


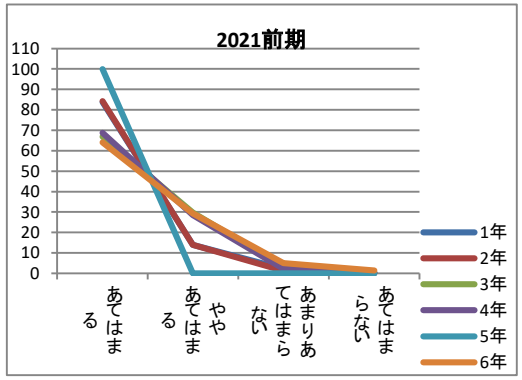


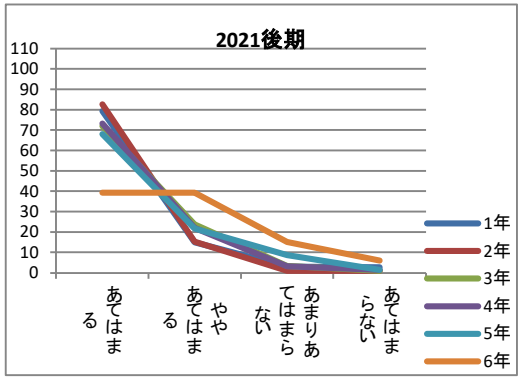


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。







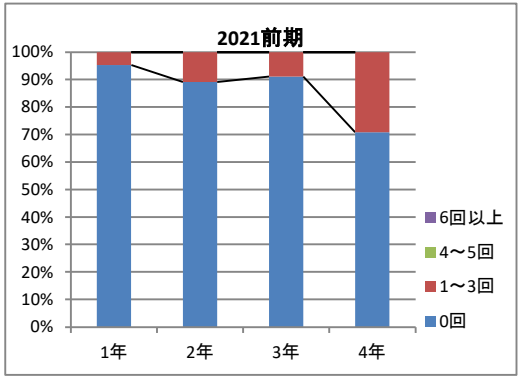


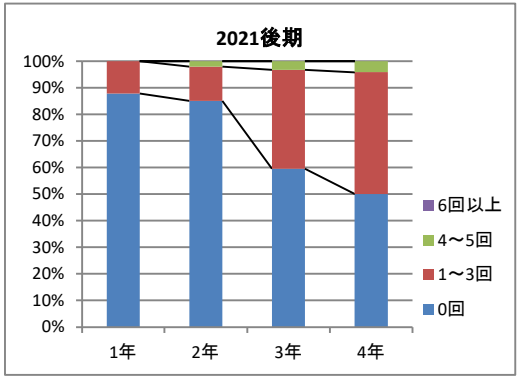
授業アンケート　令和3年度　2021年度

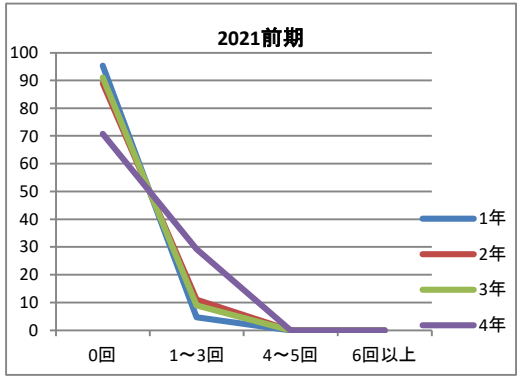
図Ｘ　動物生命

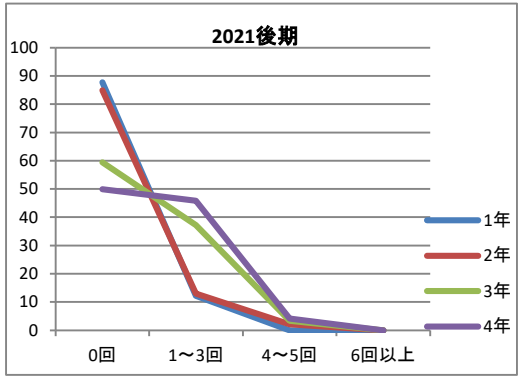
<動物生命薬科学科>

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

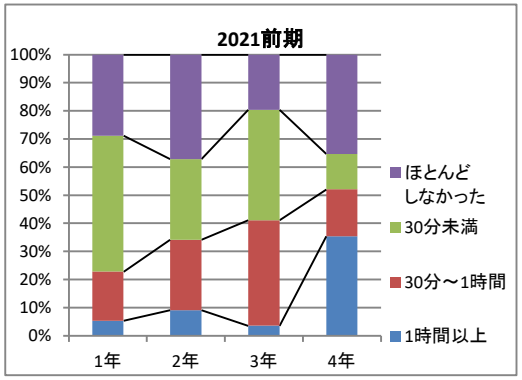


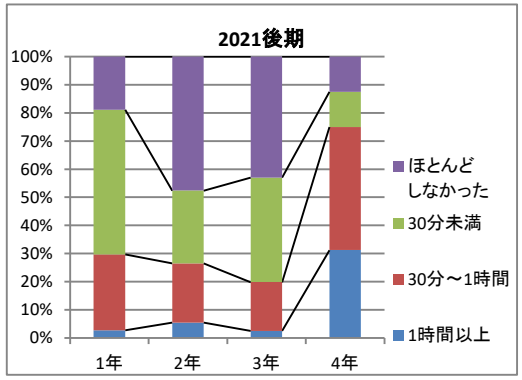


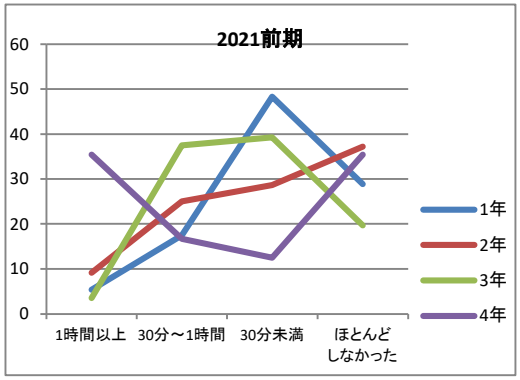


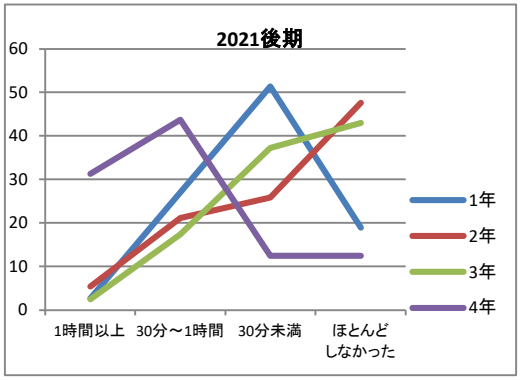


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

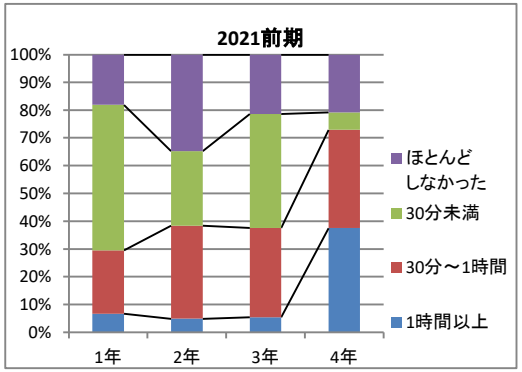


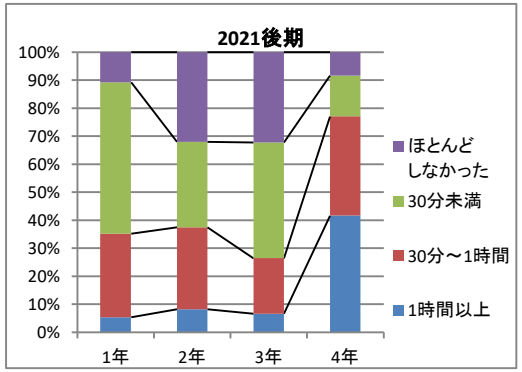


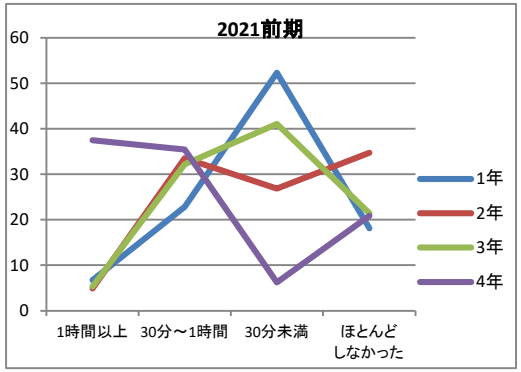


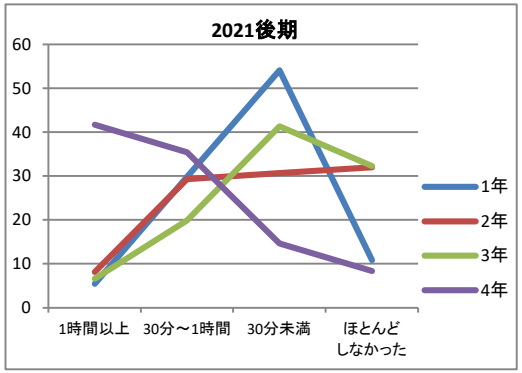


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



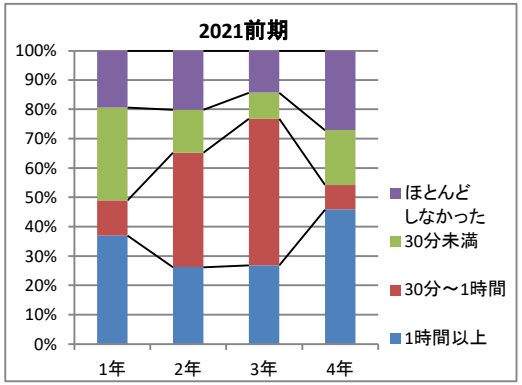


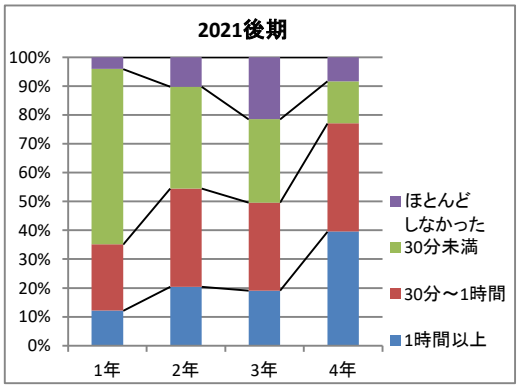


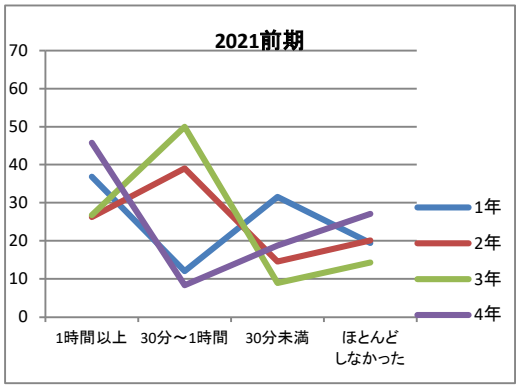


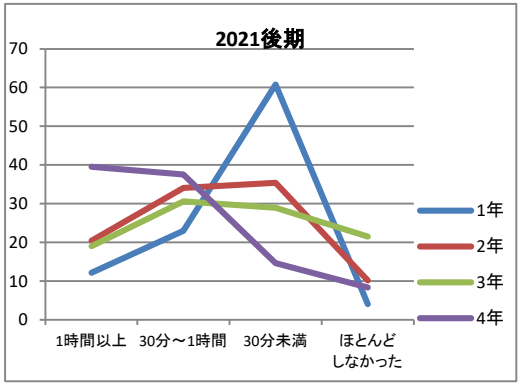
図Ｘ　動物生命

【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

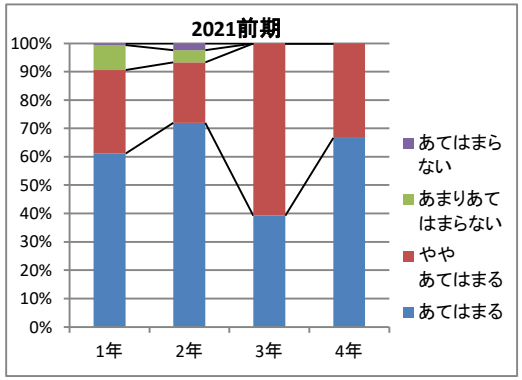


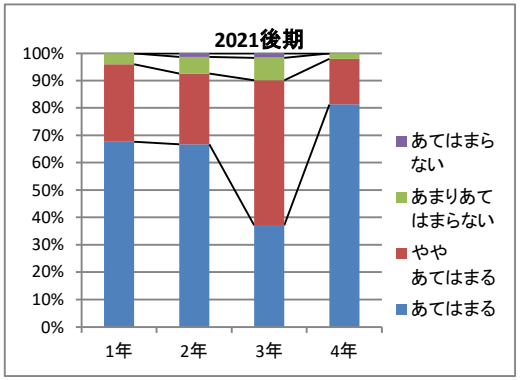


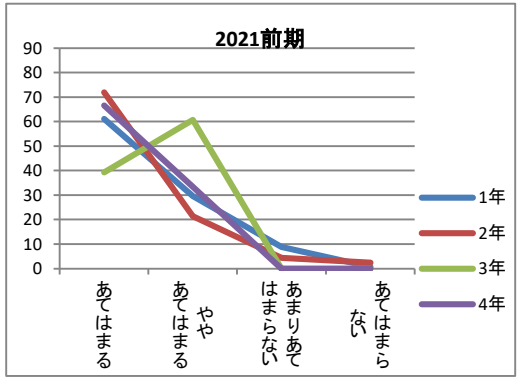


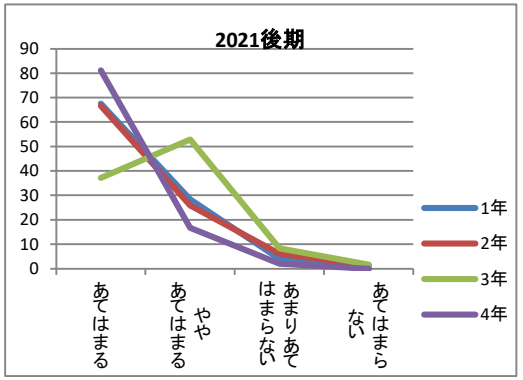


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

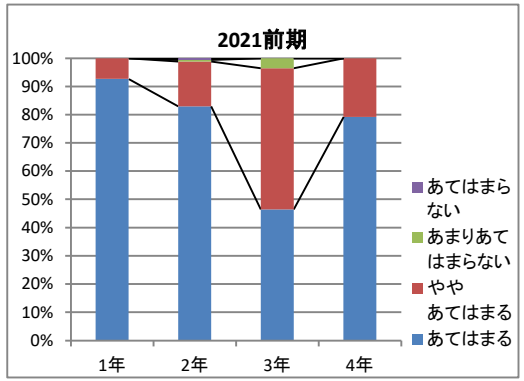


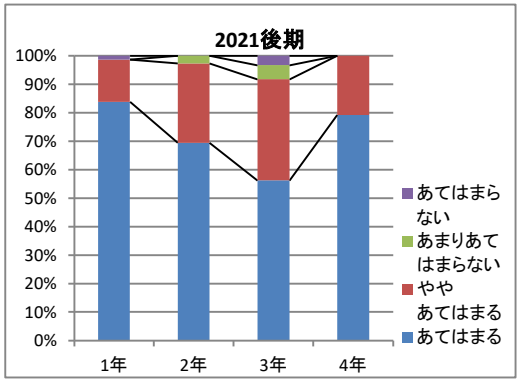


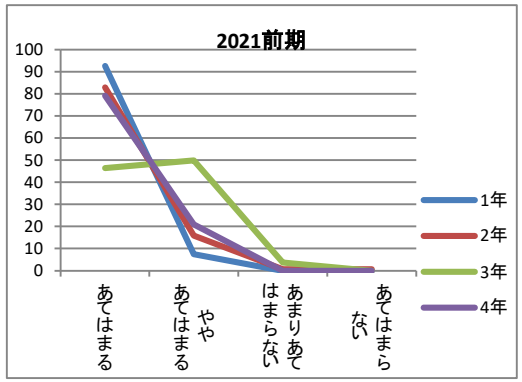


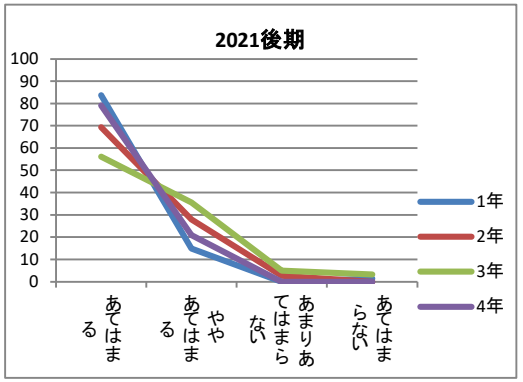


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。



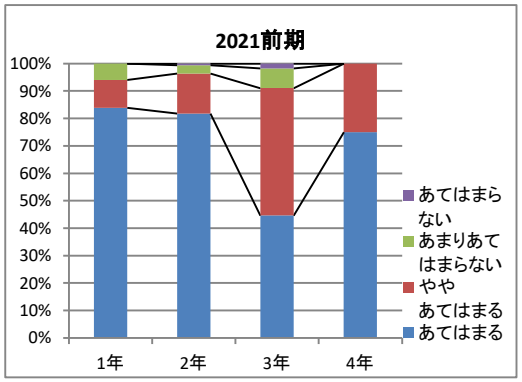


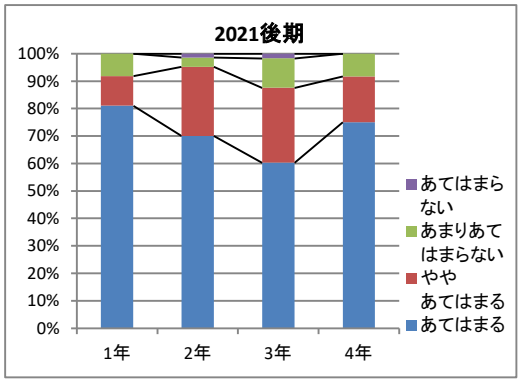


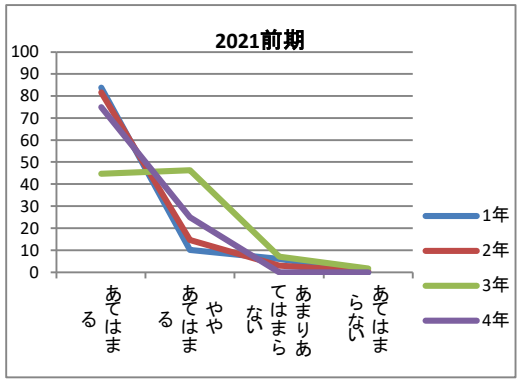


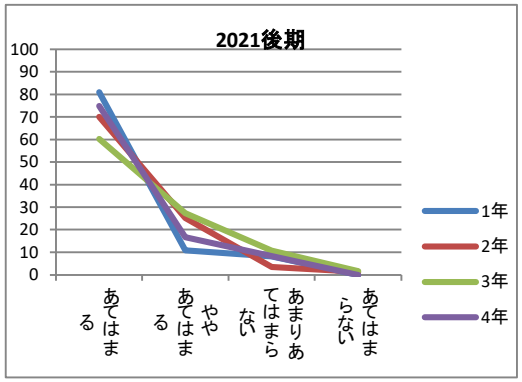
図X　動物生命

【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

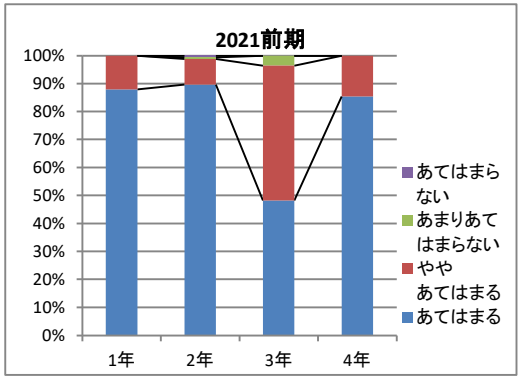


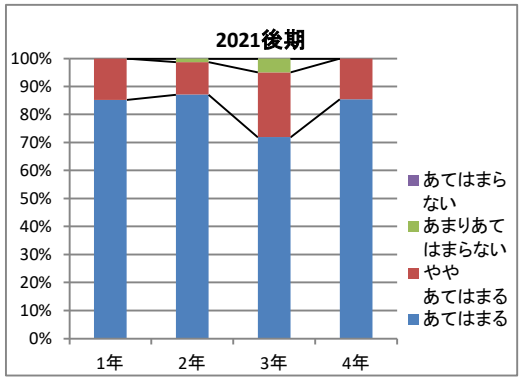


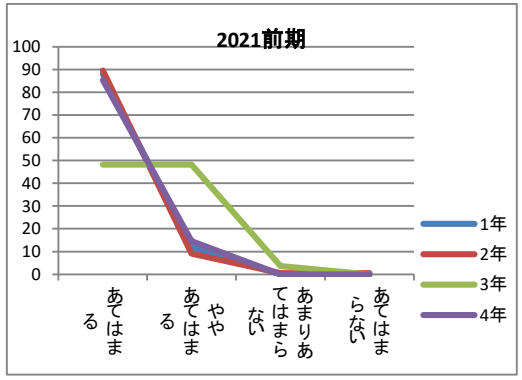


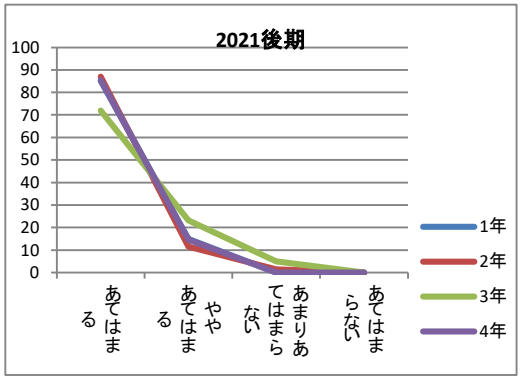


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

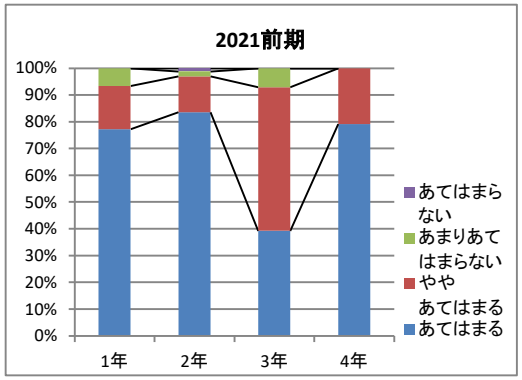


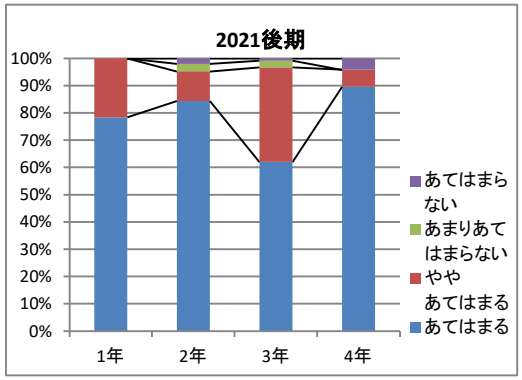


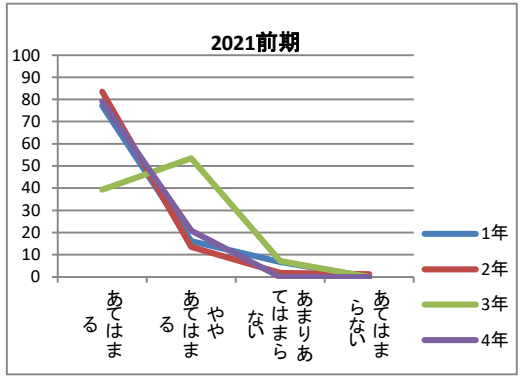


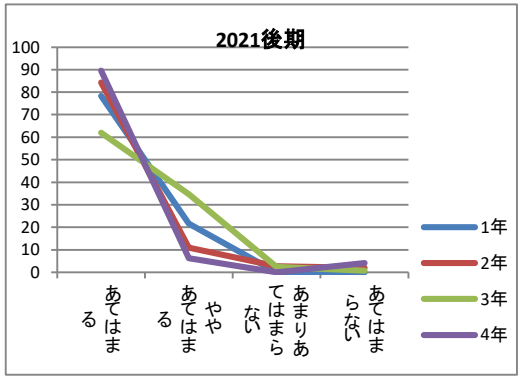


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。



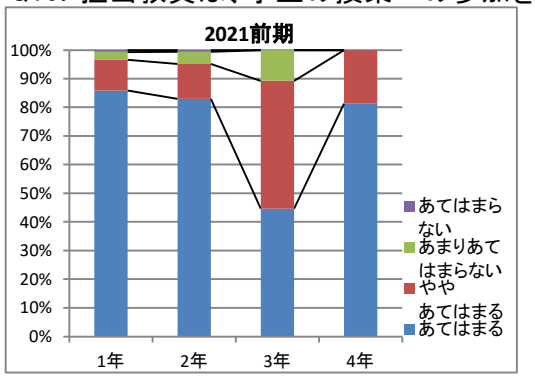


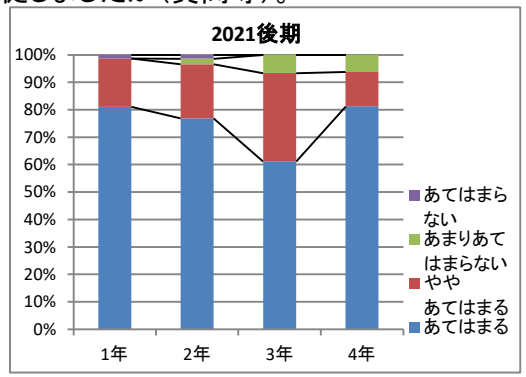


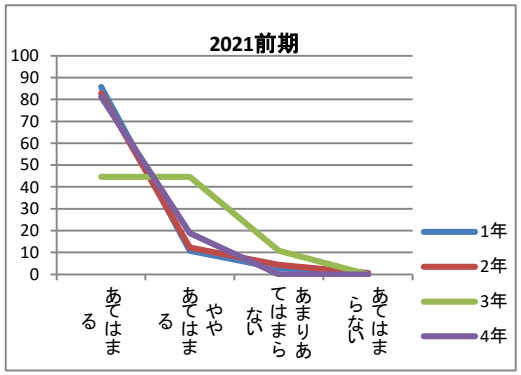


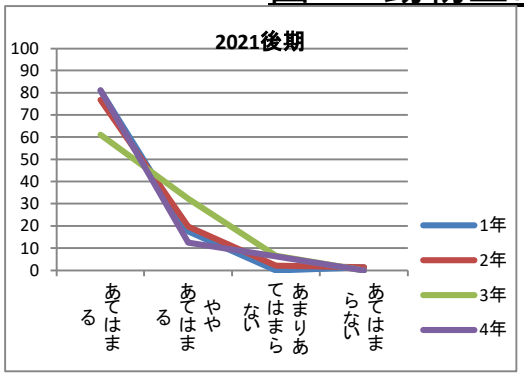
図X　動物生命

【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

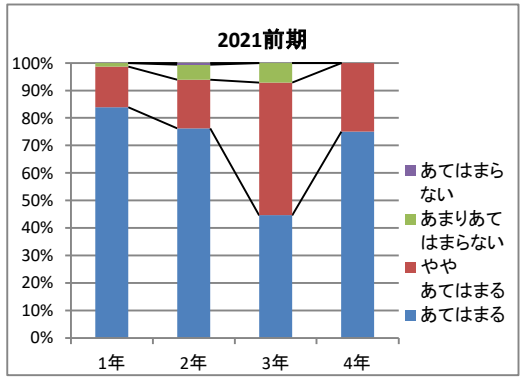


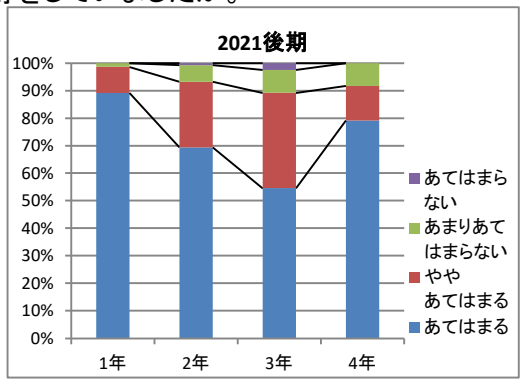


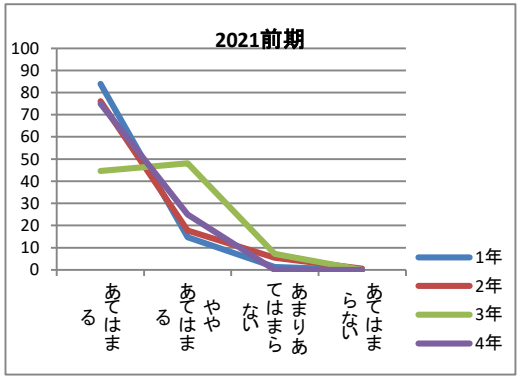


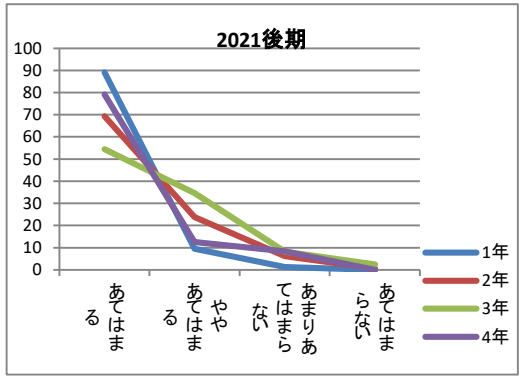


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

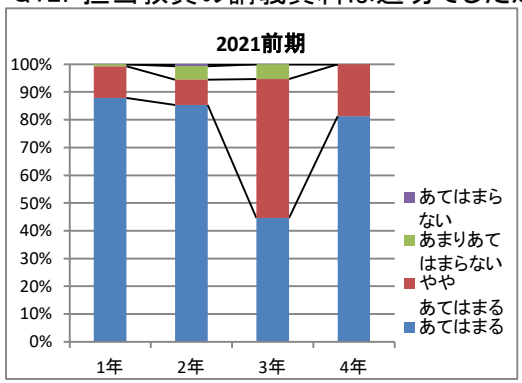


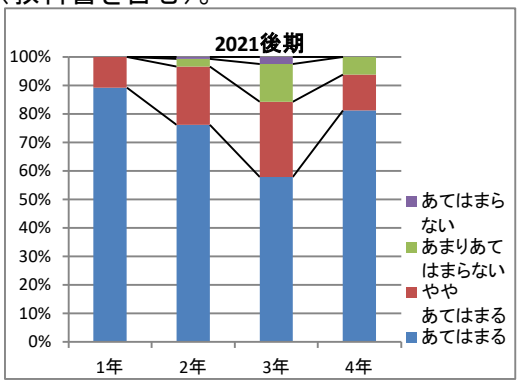


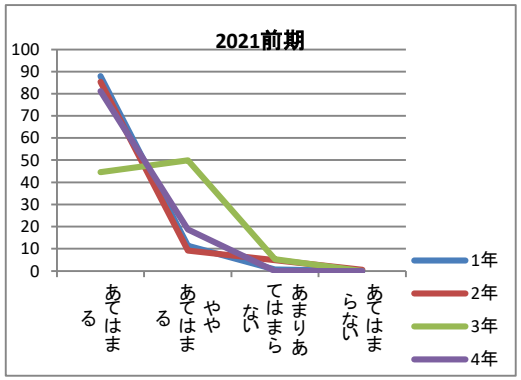


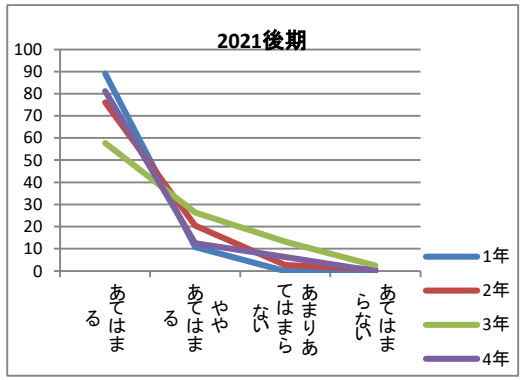


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。



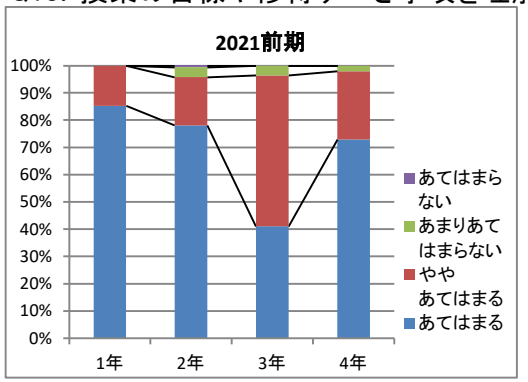


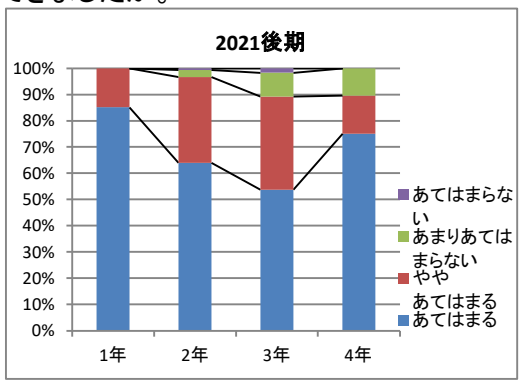


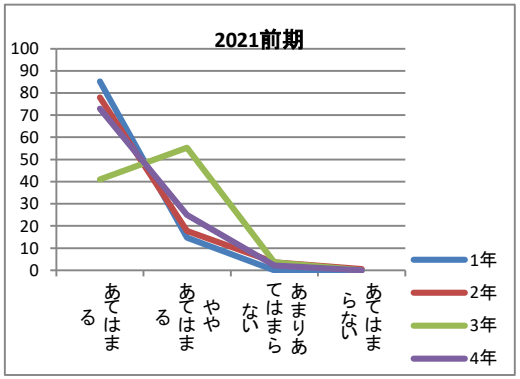


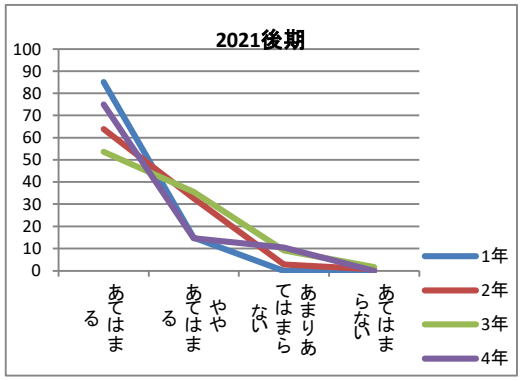
図X　動物生命

【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

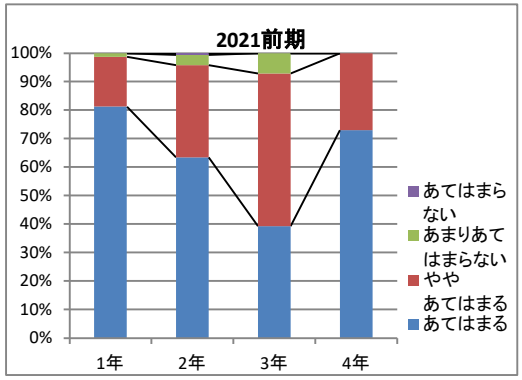


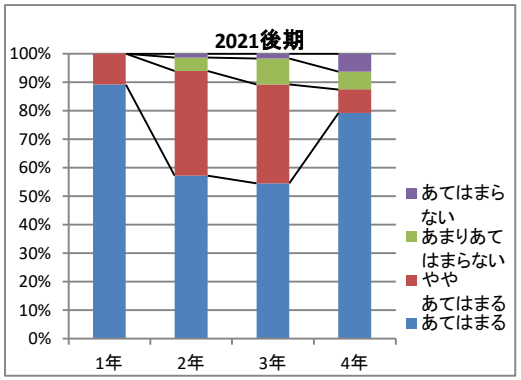


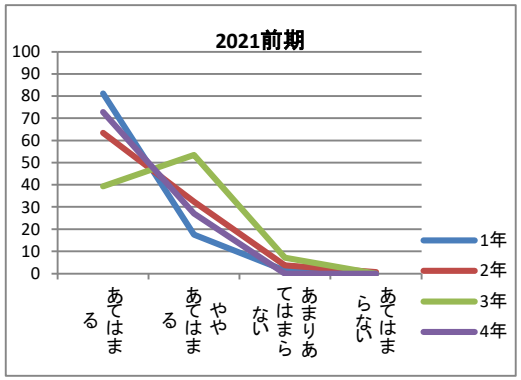


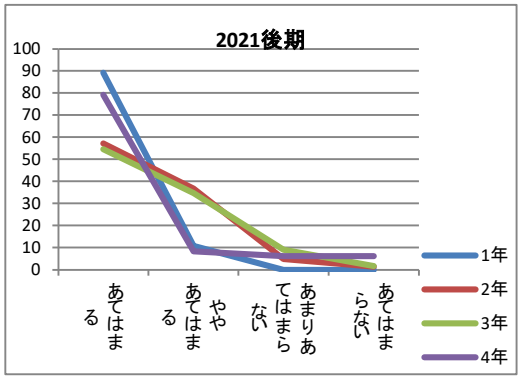


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

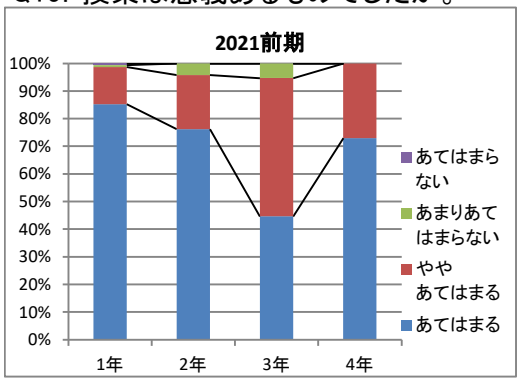


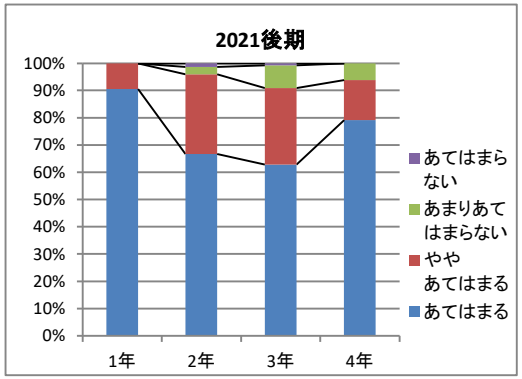


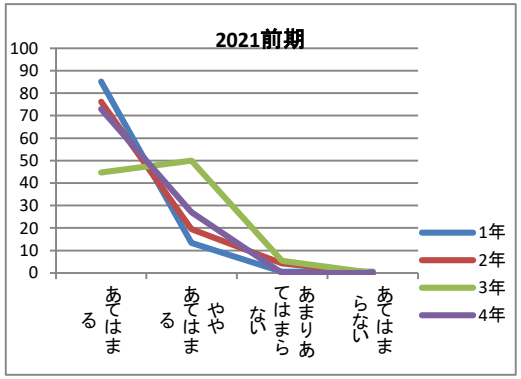


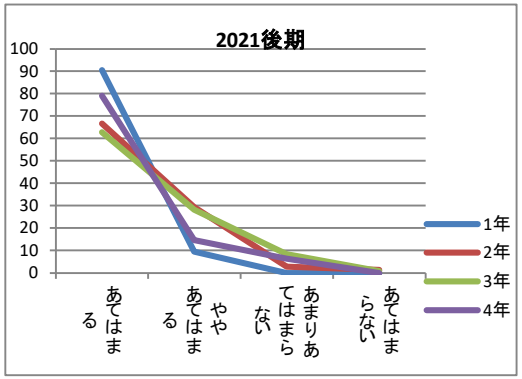


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。







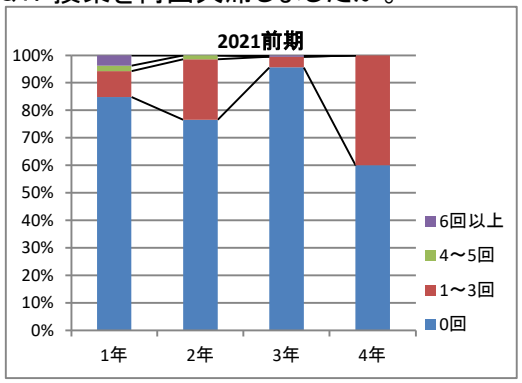


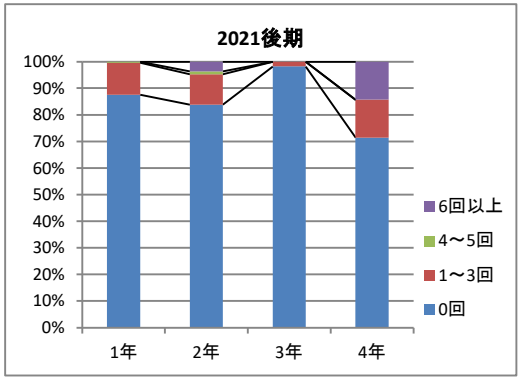
授業アンケート　令和3年度　2021年度

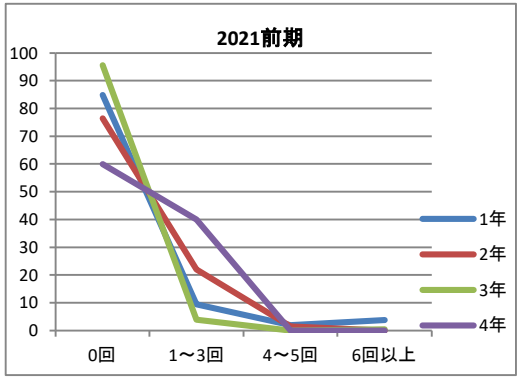
図XI　生命医科

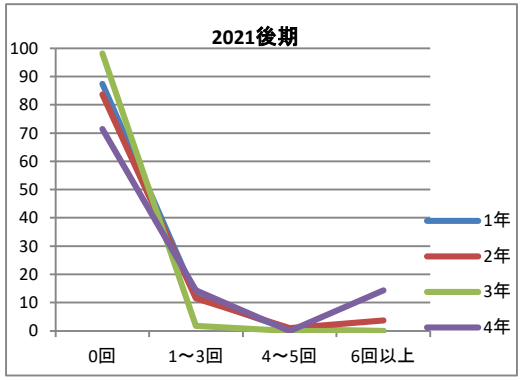
<生命医科学科>

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

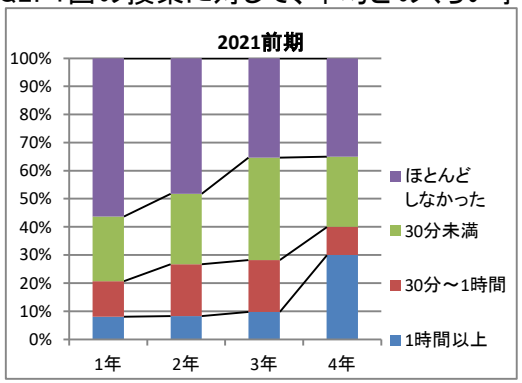


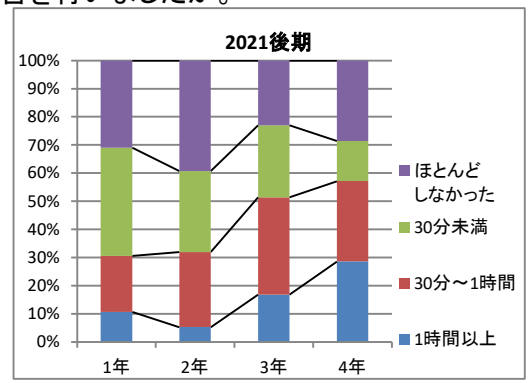


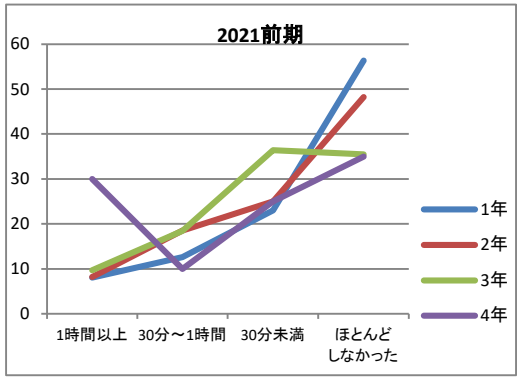


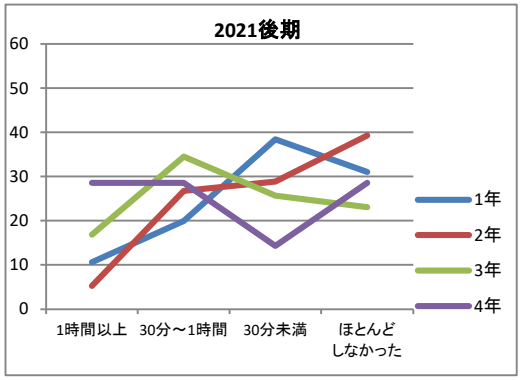


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

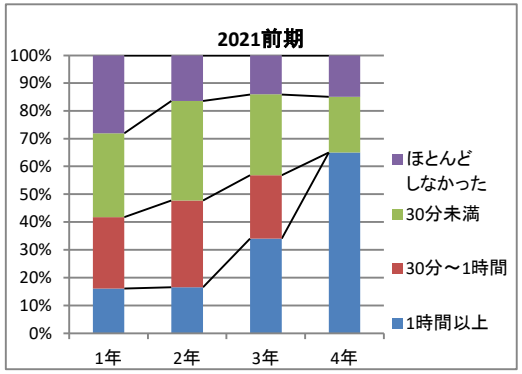


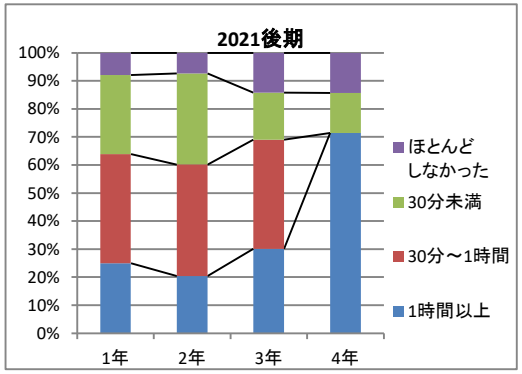


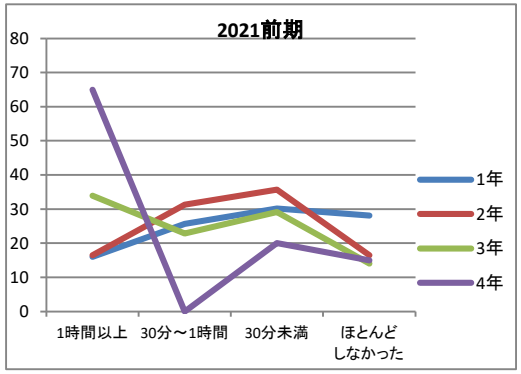


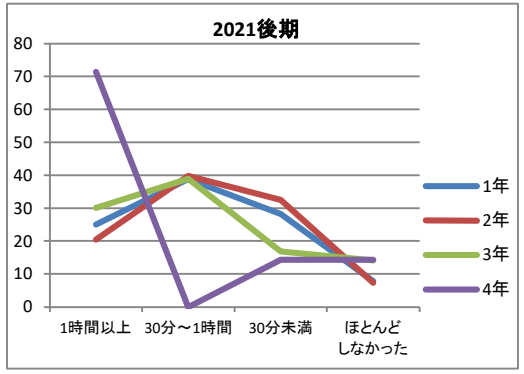


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



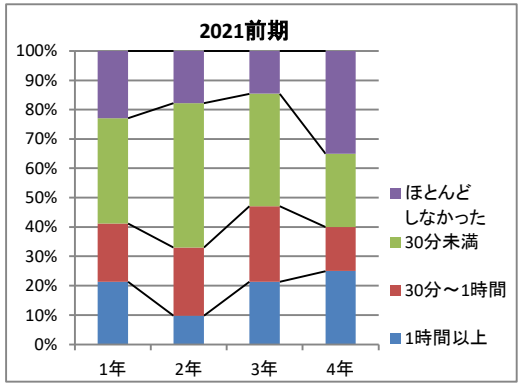


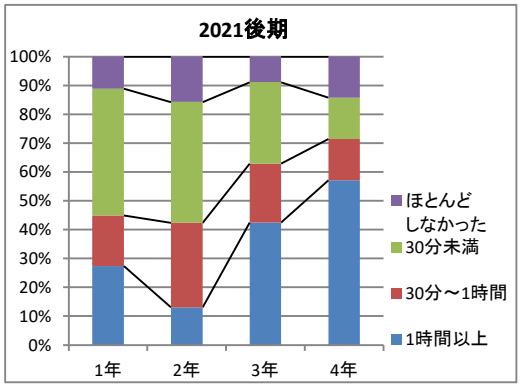


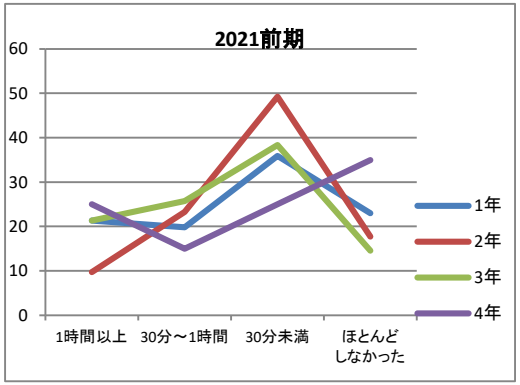


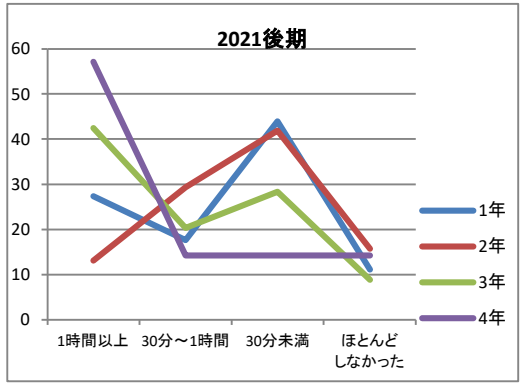
図XI　生命医科

【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

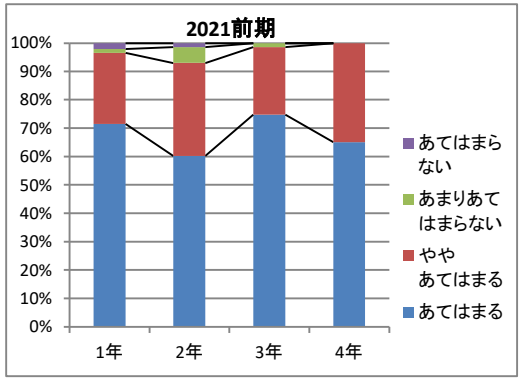


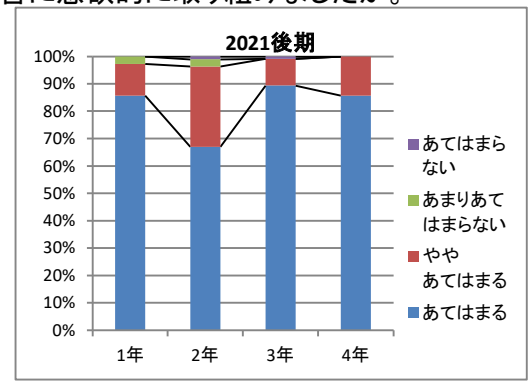


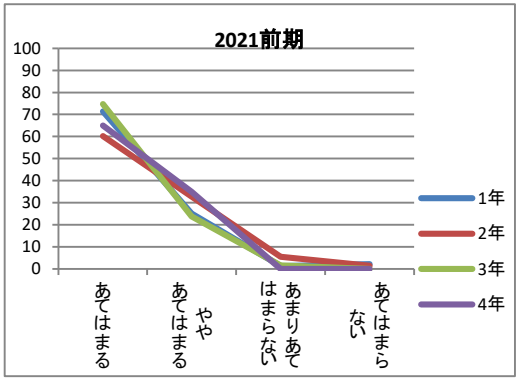


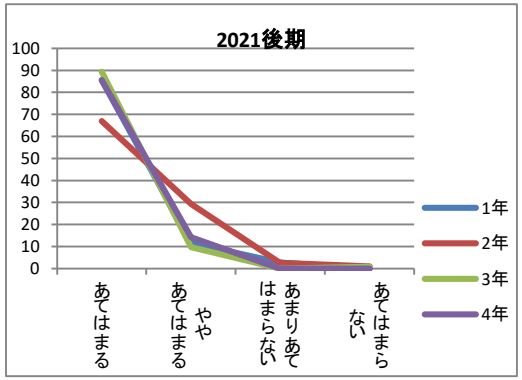


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

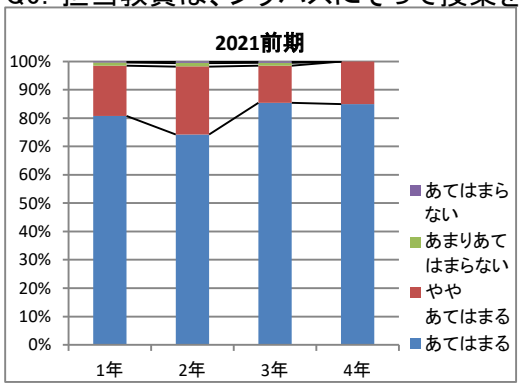


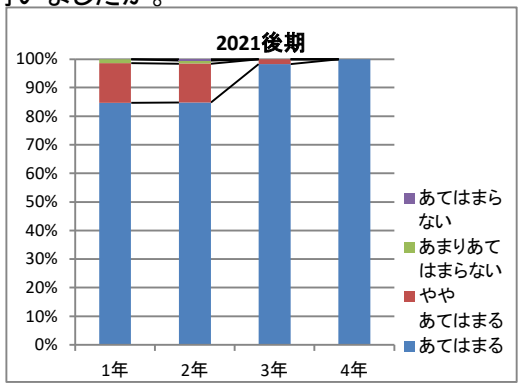


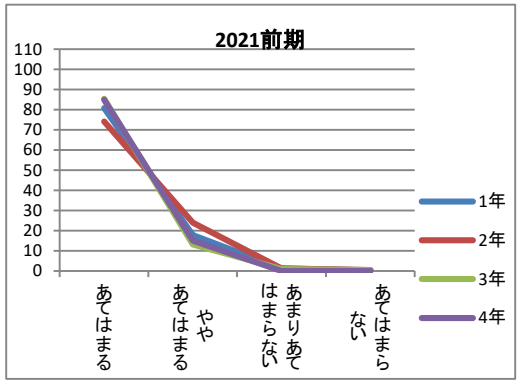


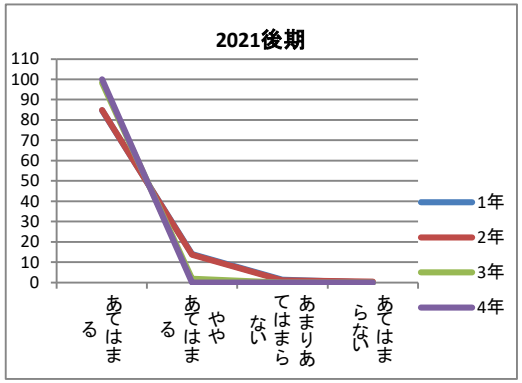


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。



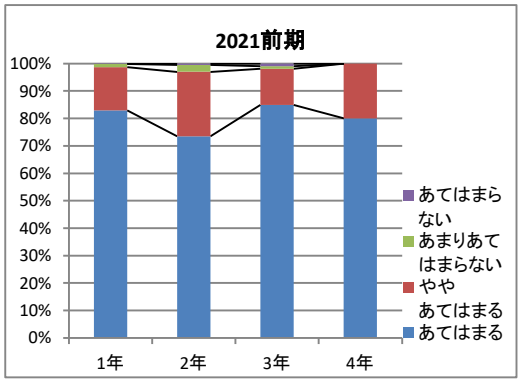


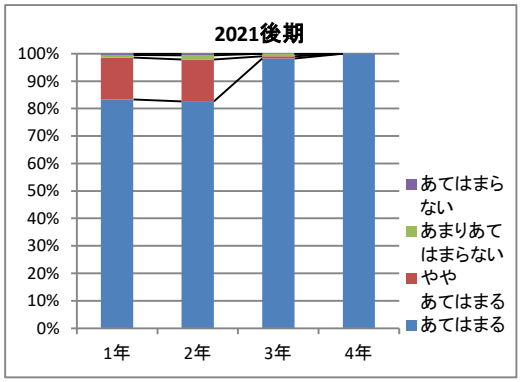


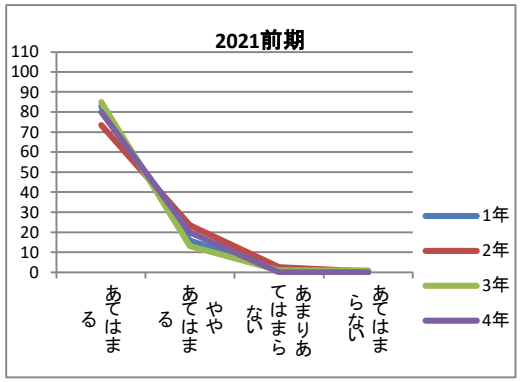


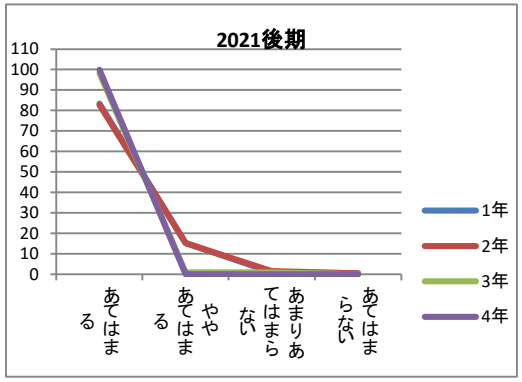
図XI　生命医科

【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

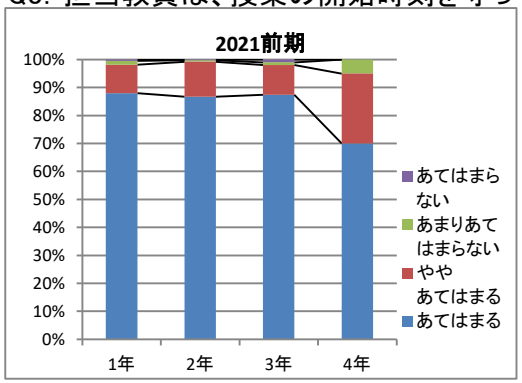


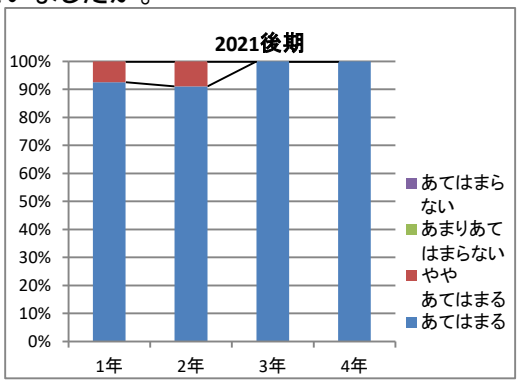


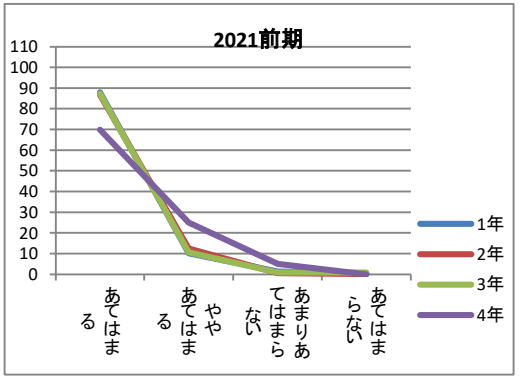


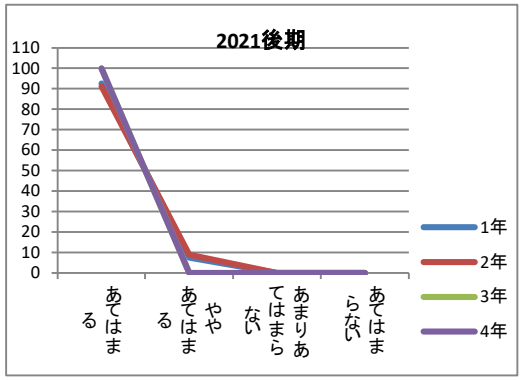


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

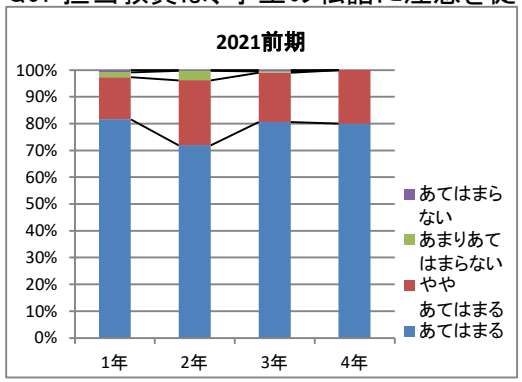


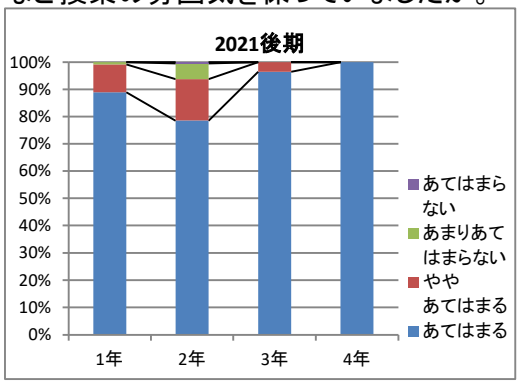


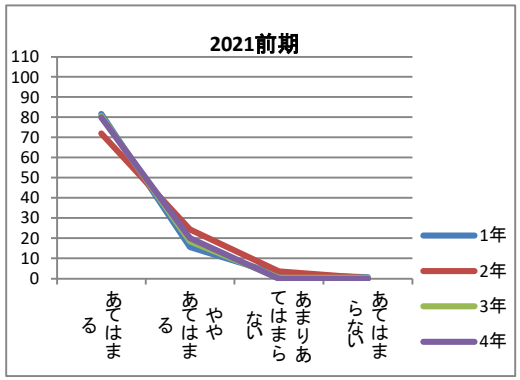


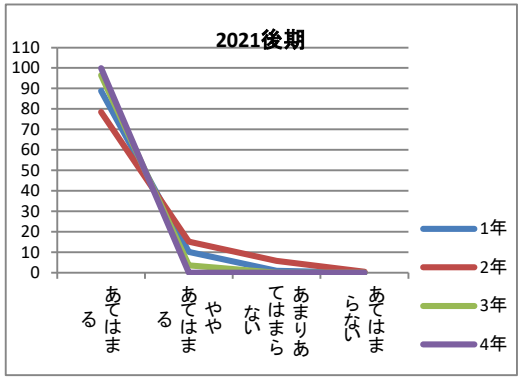


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。



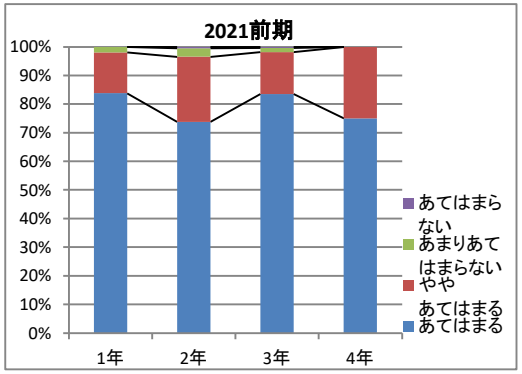


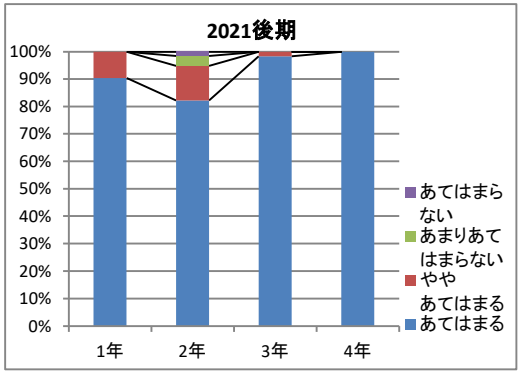


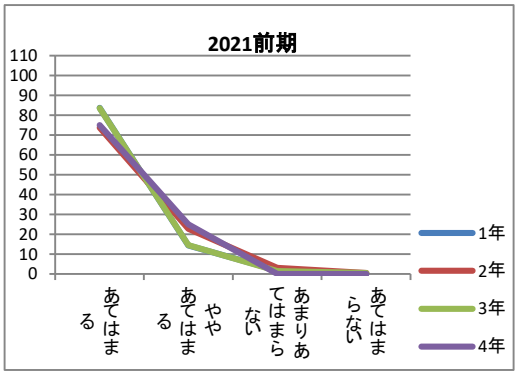


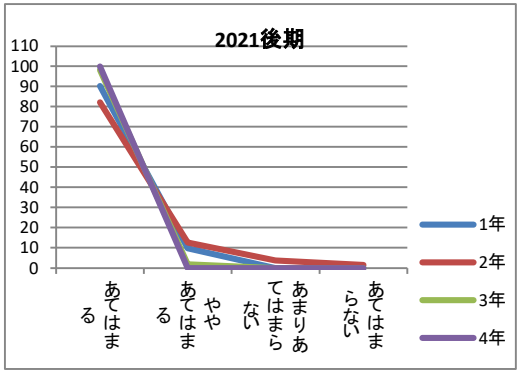
図XI　生命医科

【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

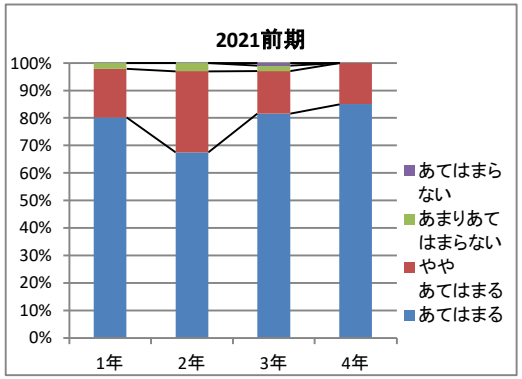


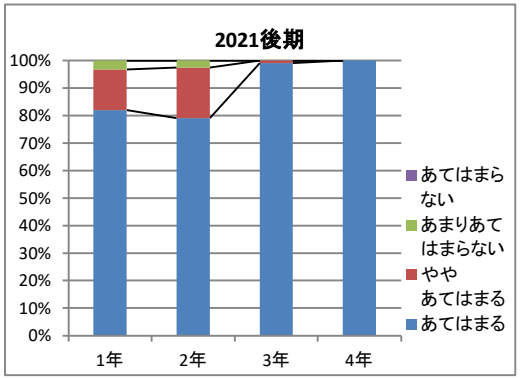


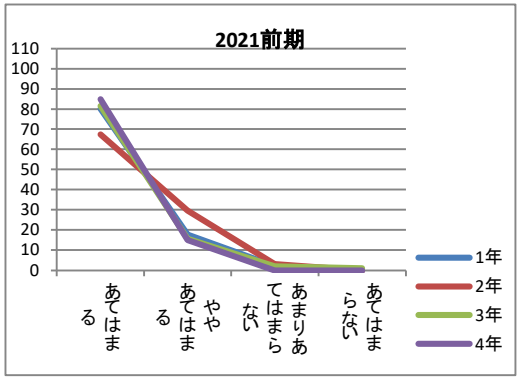


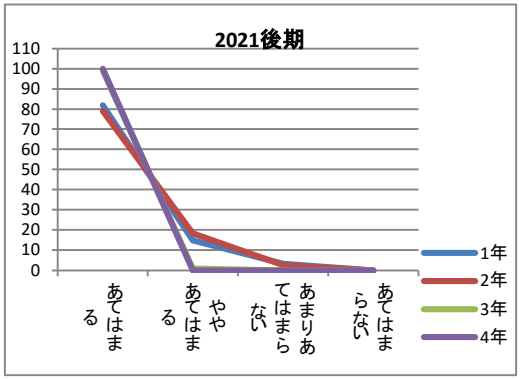


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

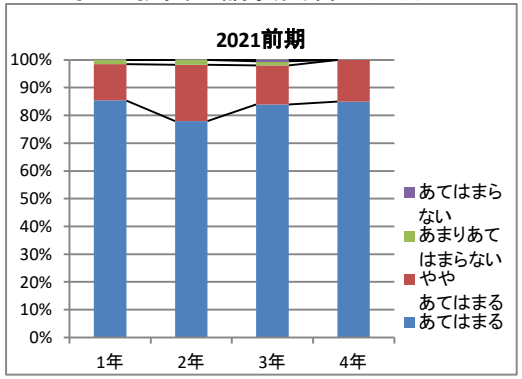


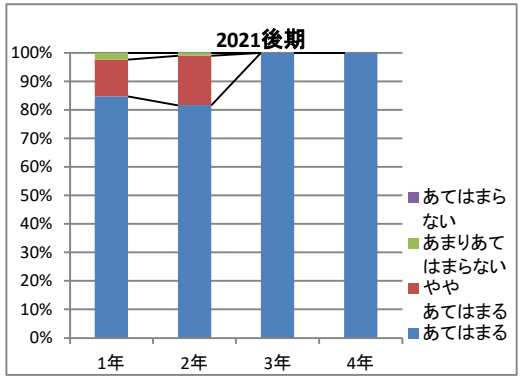


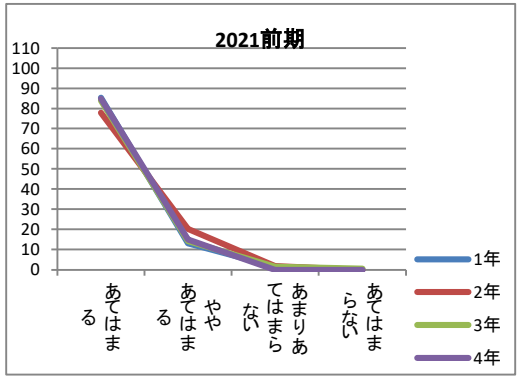


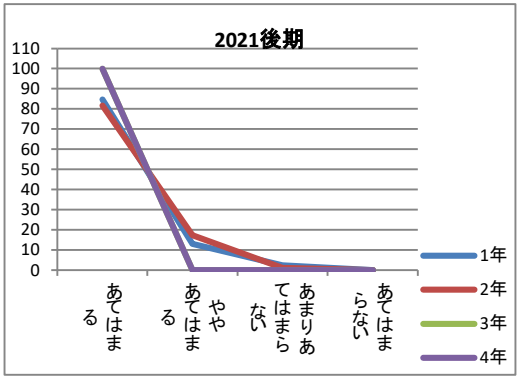


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。



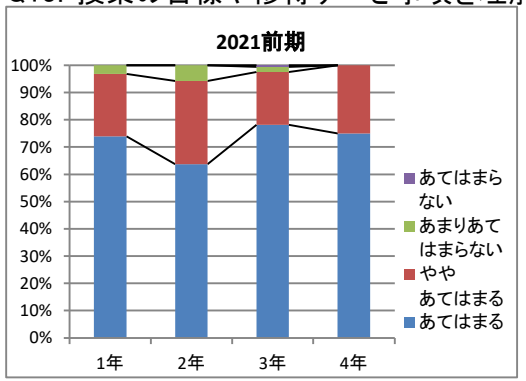


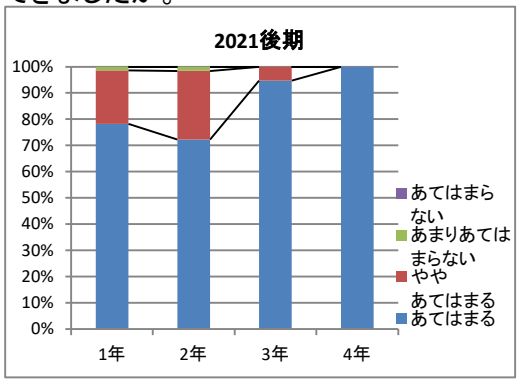


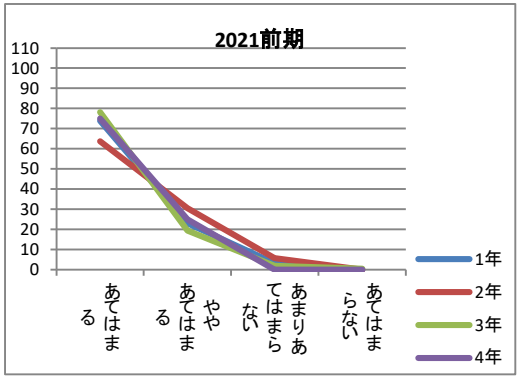


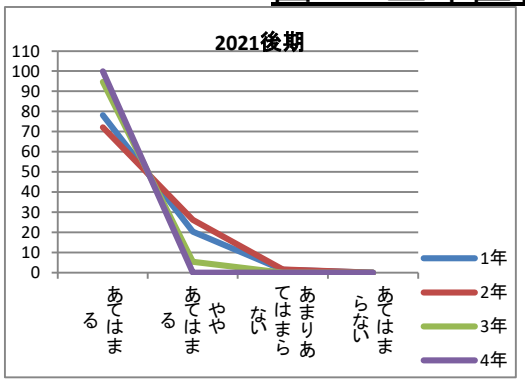
図XI　生命医科

【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

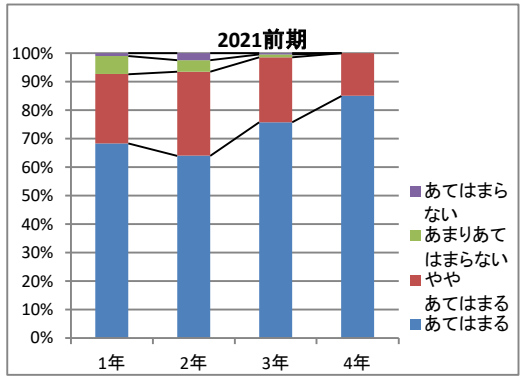


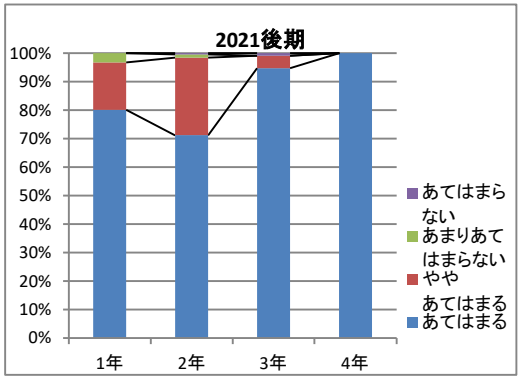


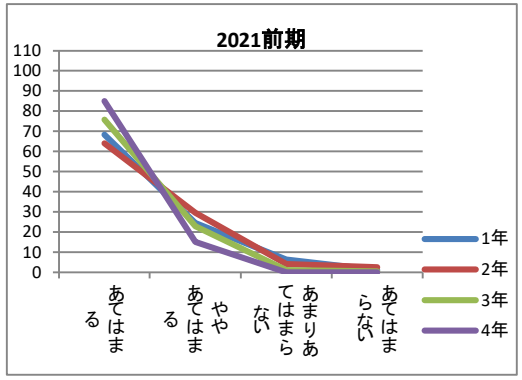


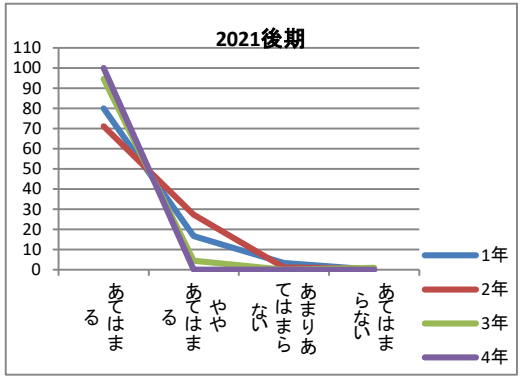


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

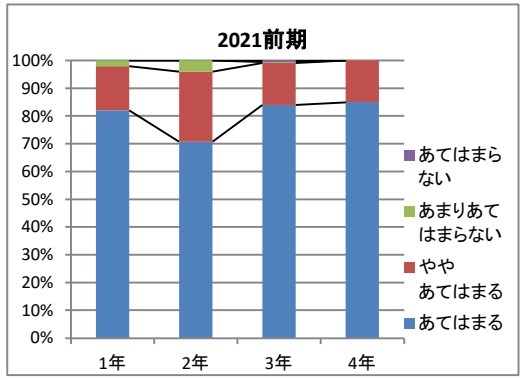


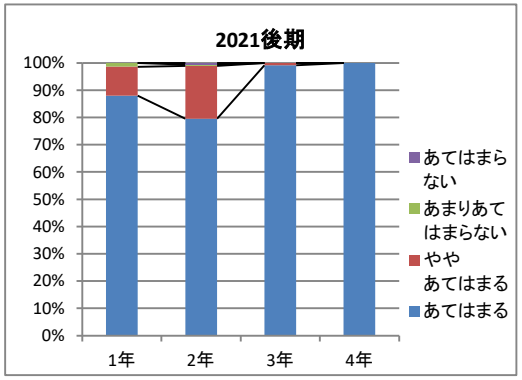


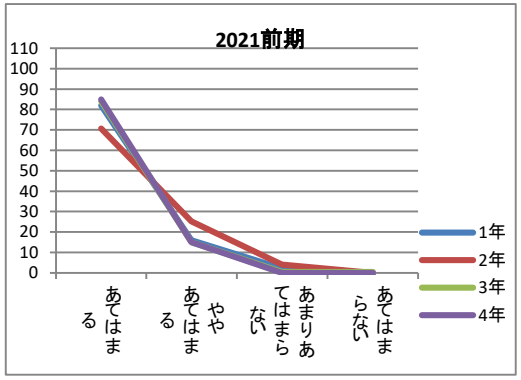


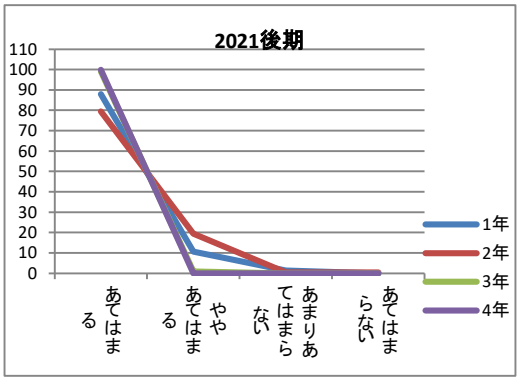


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。







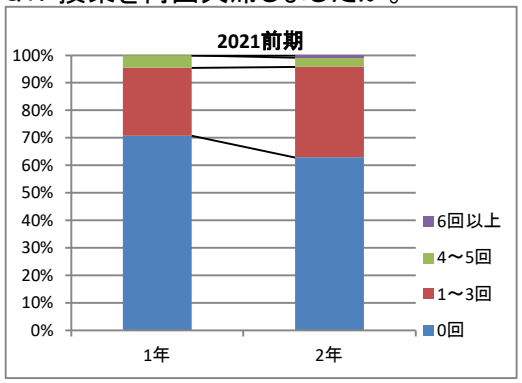


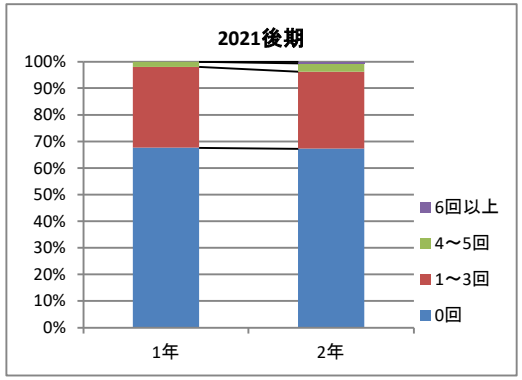
授業アンケート　令和3年度　2021年度

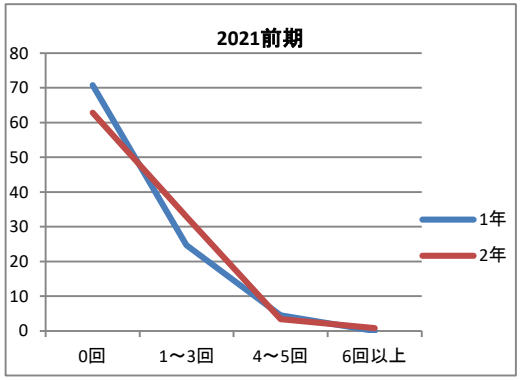
図XII　心理

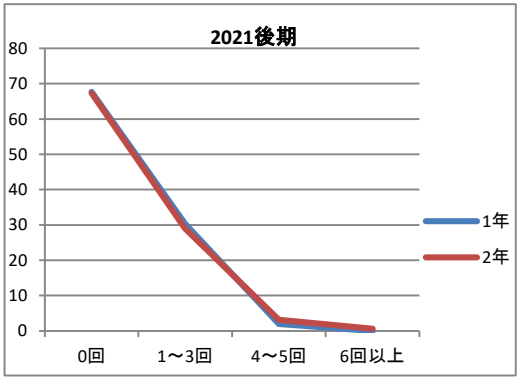
<臨床心理学科>

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

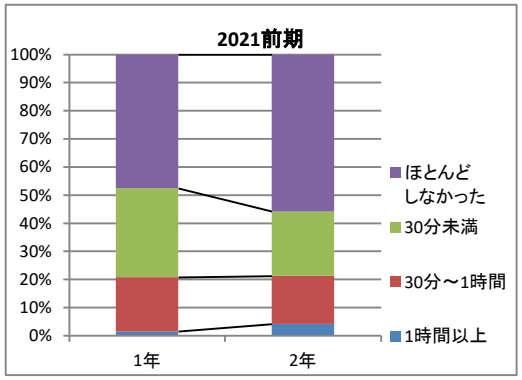


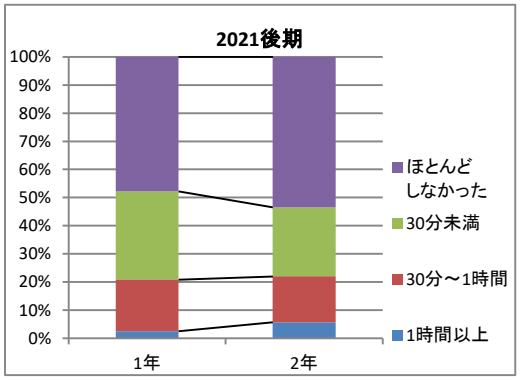


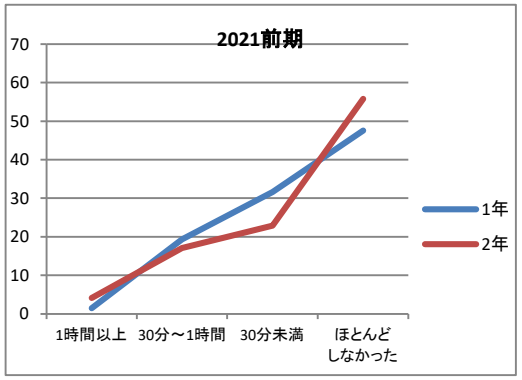


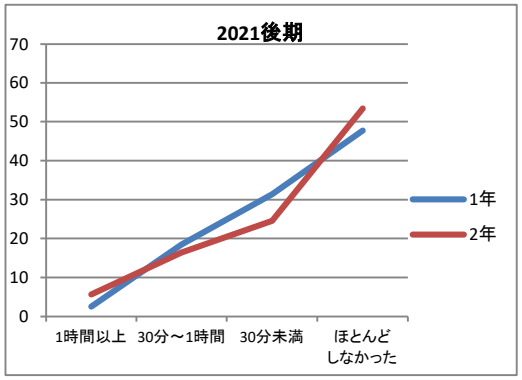


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

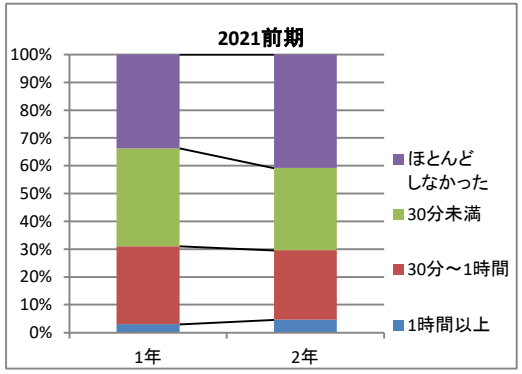


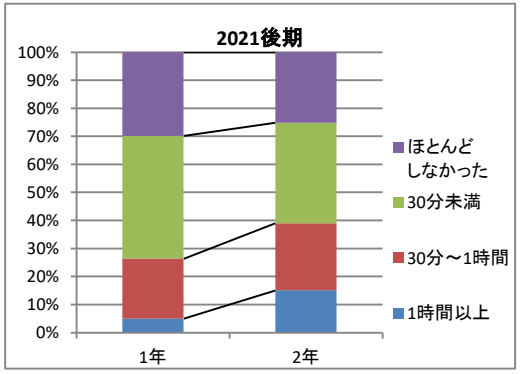


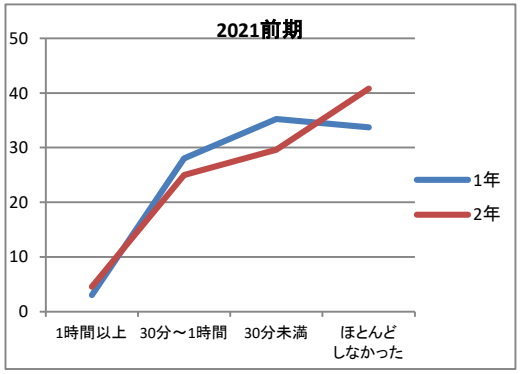


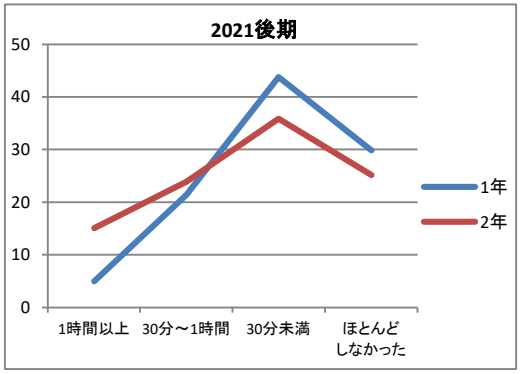


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。

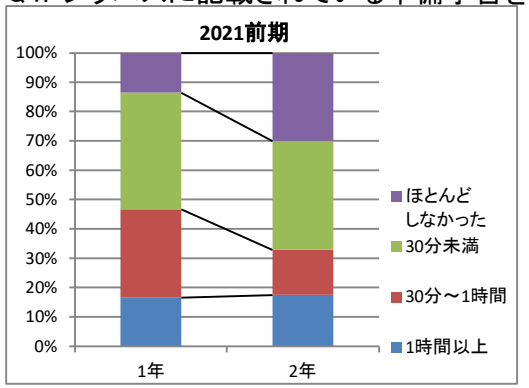


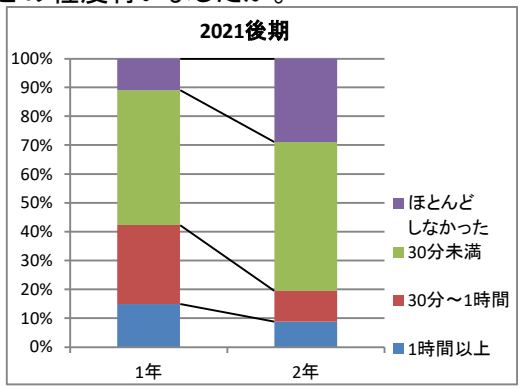


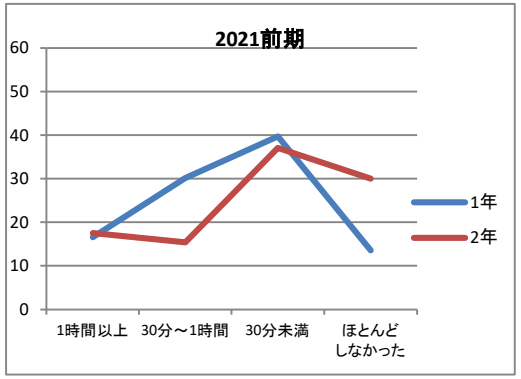


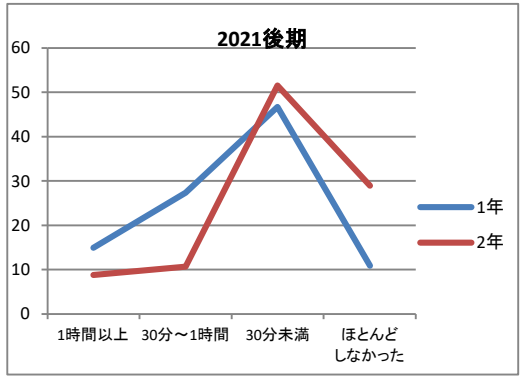


【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

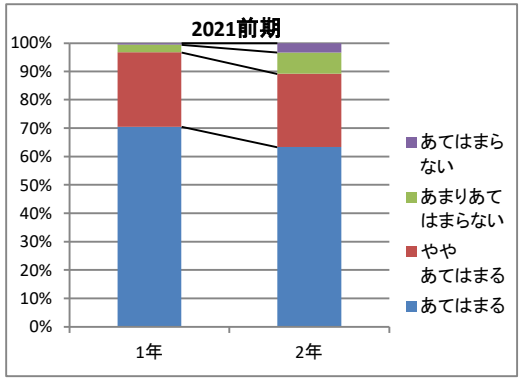


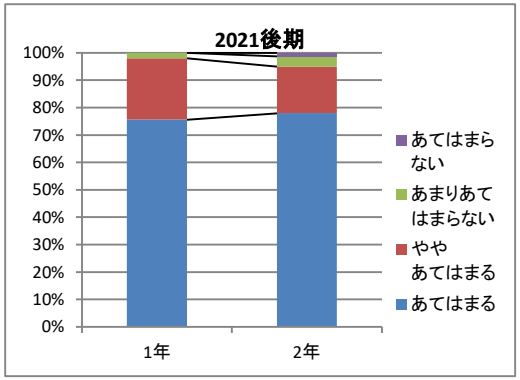


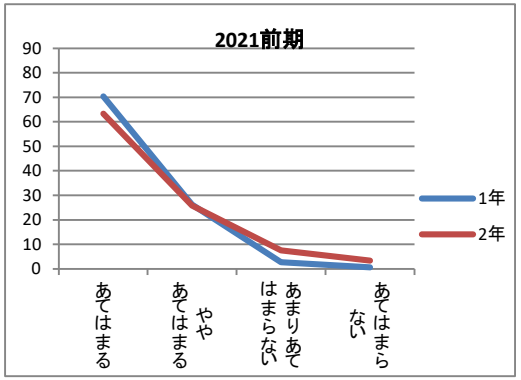


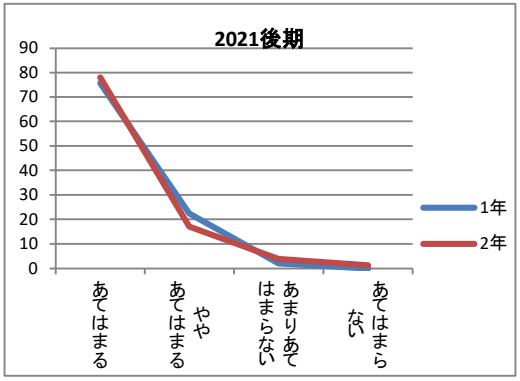


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

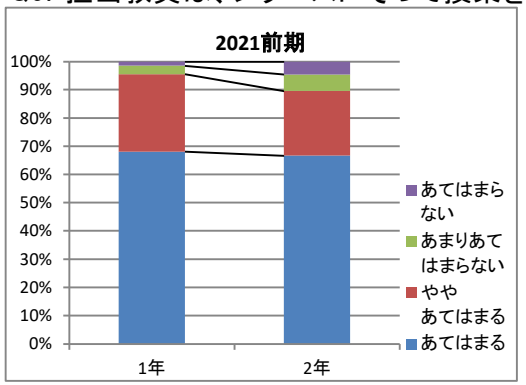


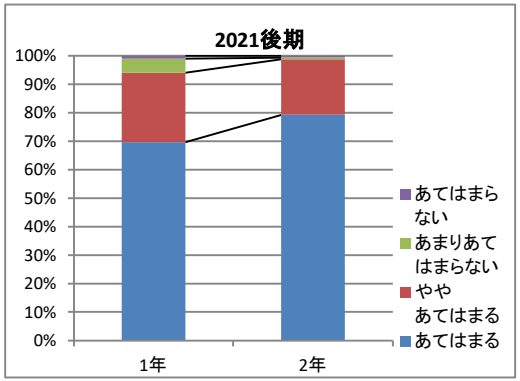


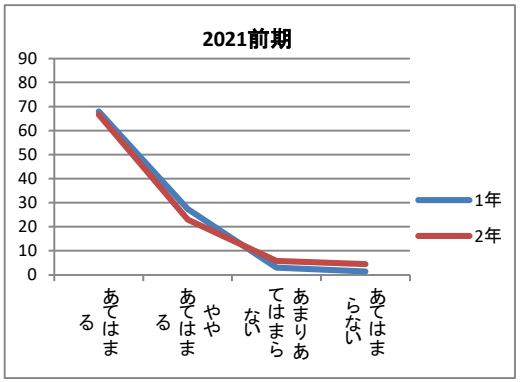


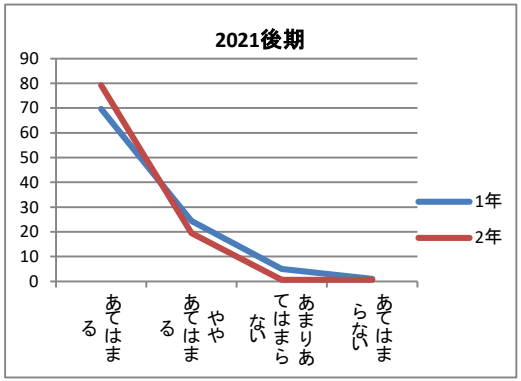


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

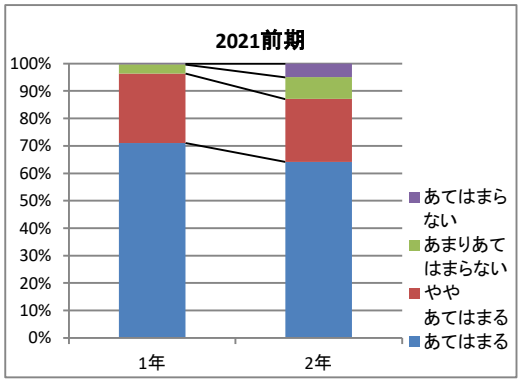


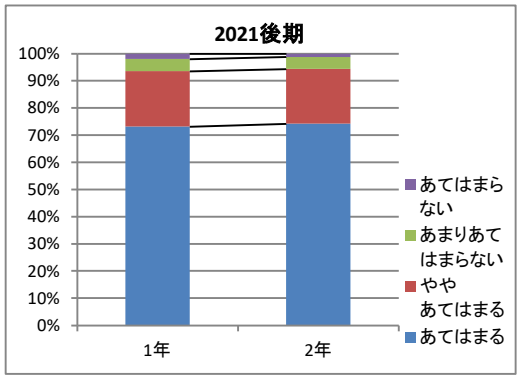


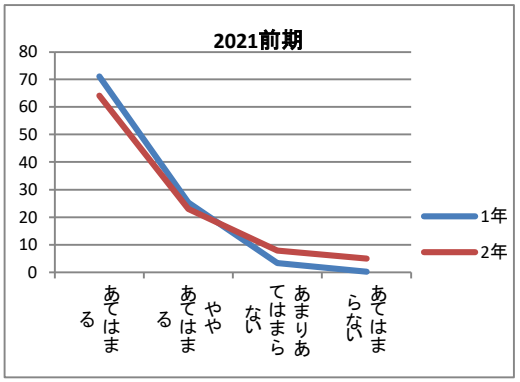


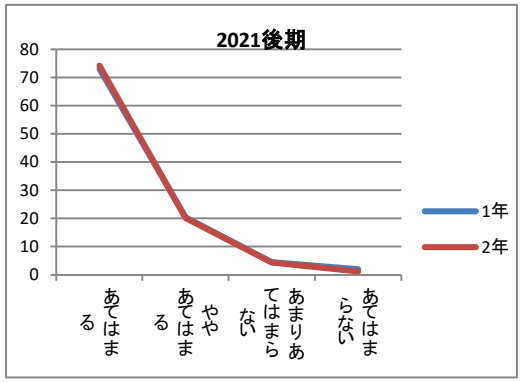


【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

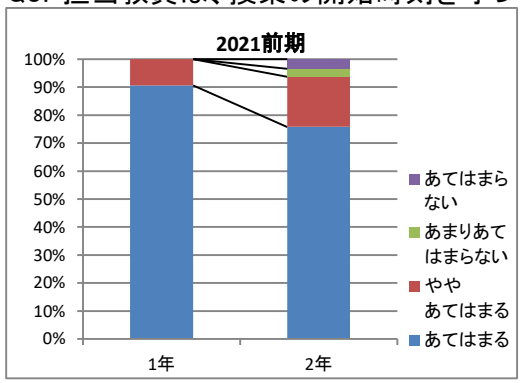


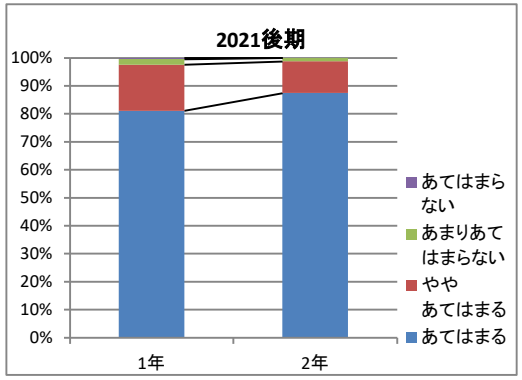


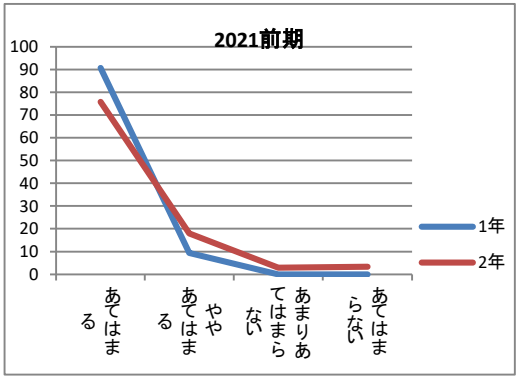


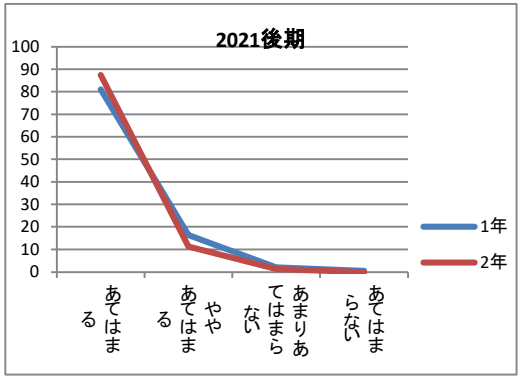


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

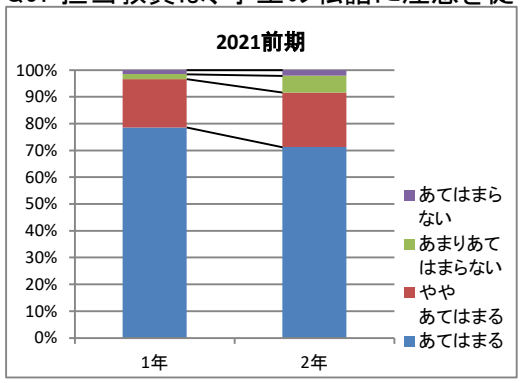


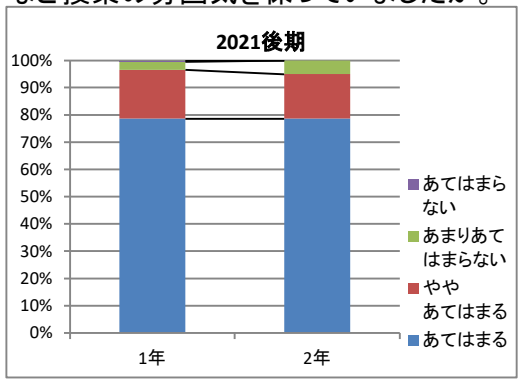


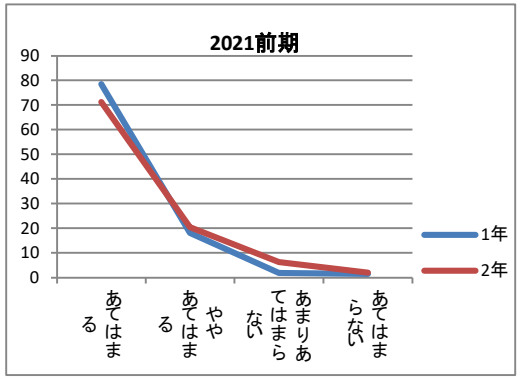


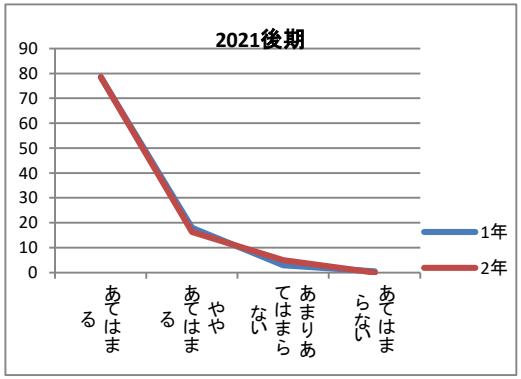


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

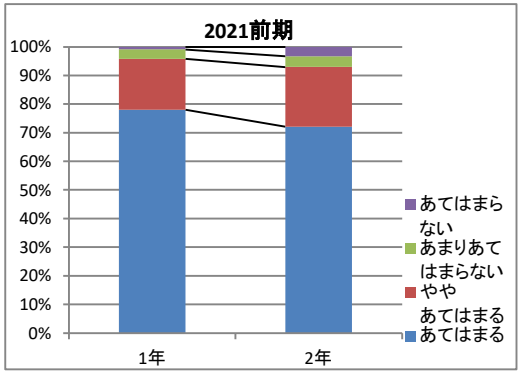


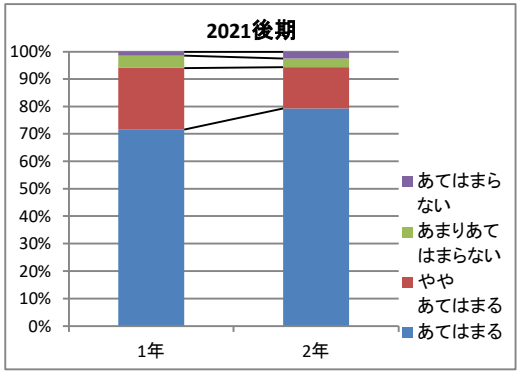


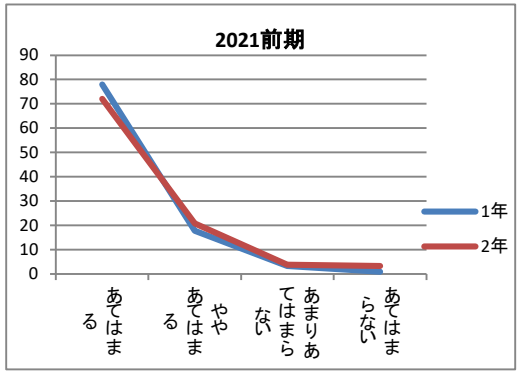


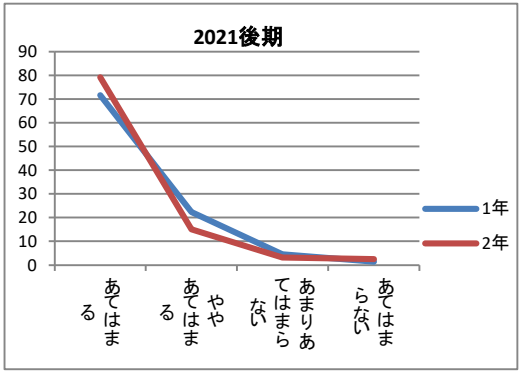


【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

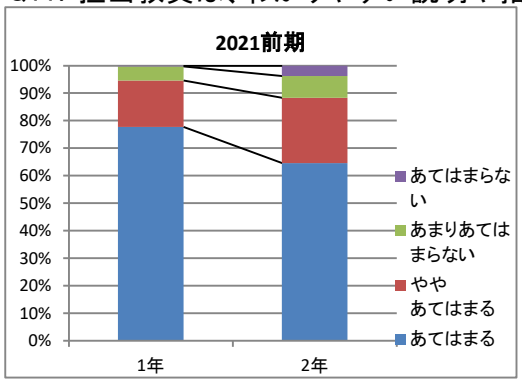


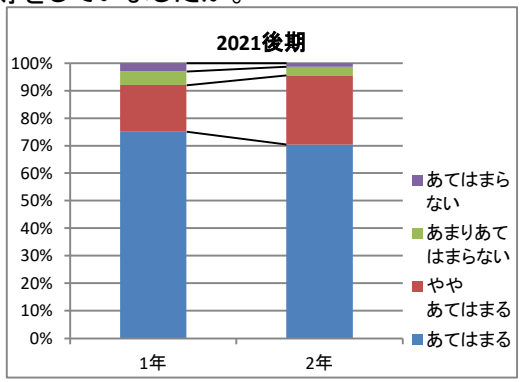


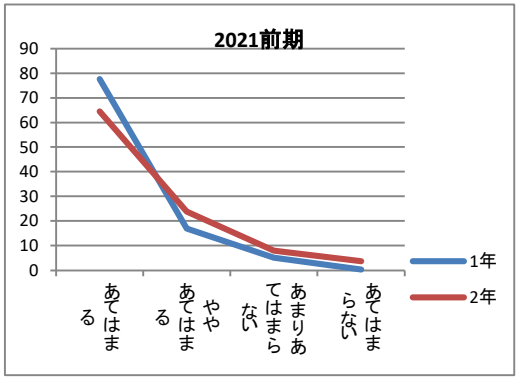


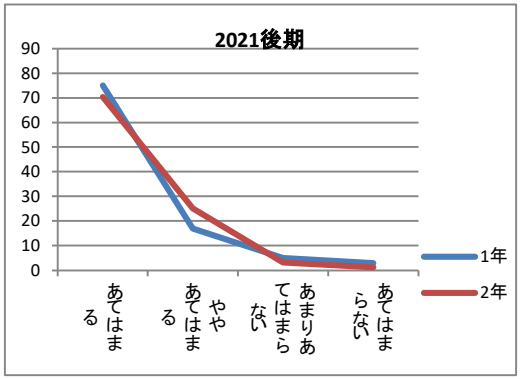


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

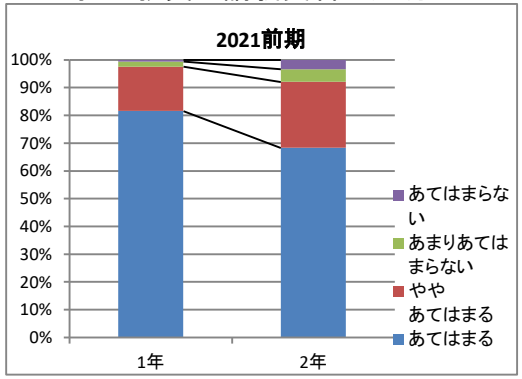


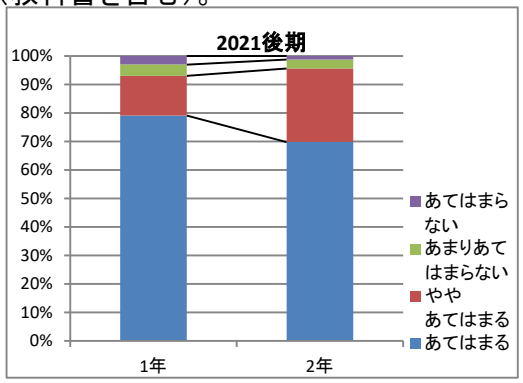


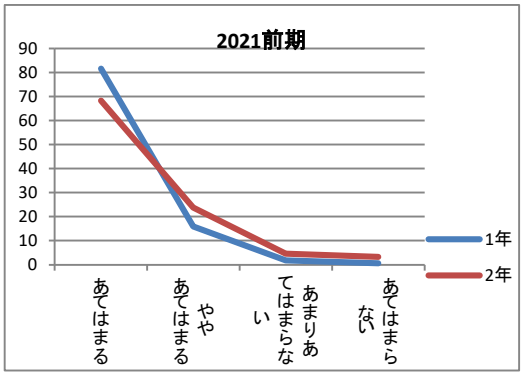


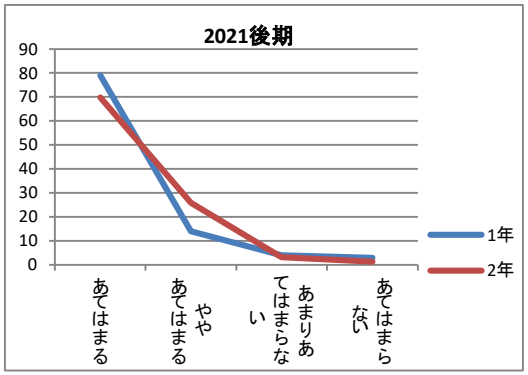


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。



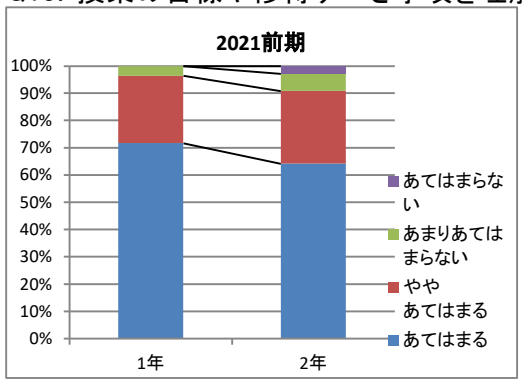


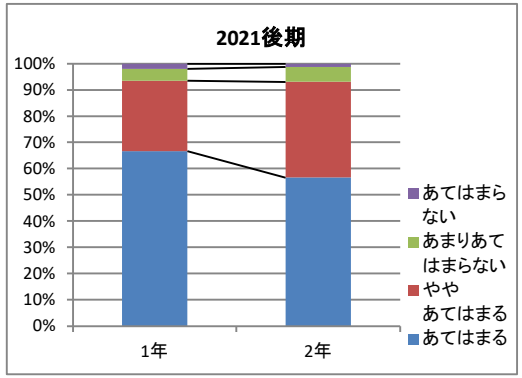


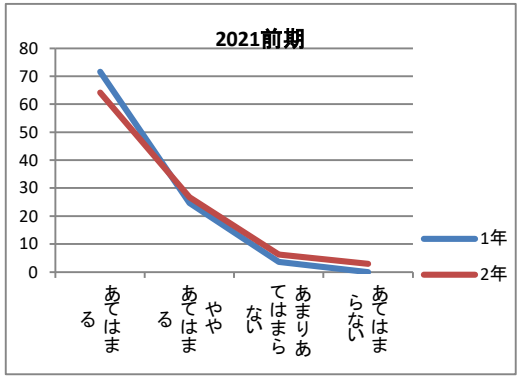


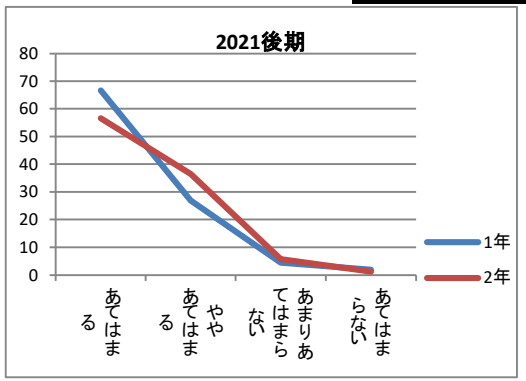
図Ⅻ　心理

【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

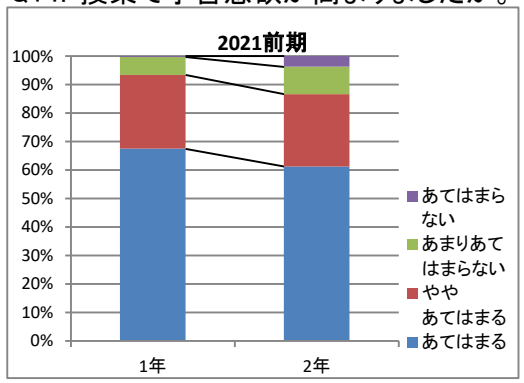


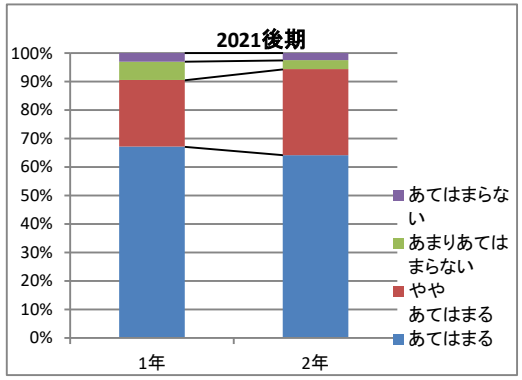


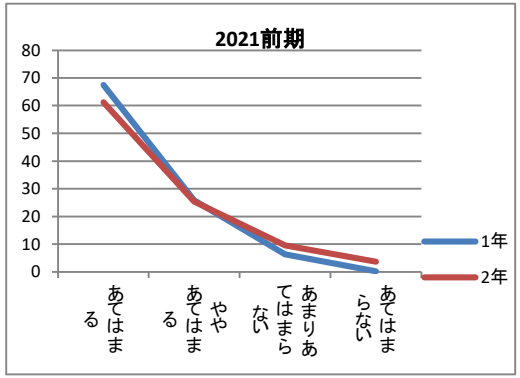


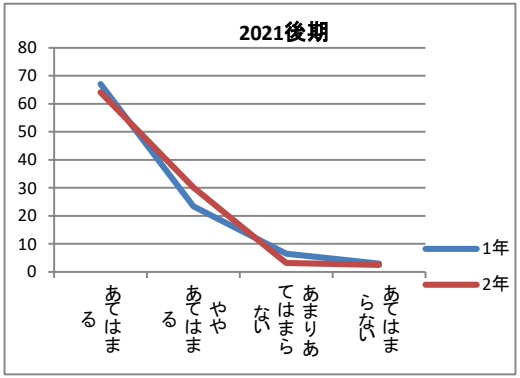


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

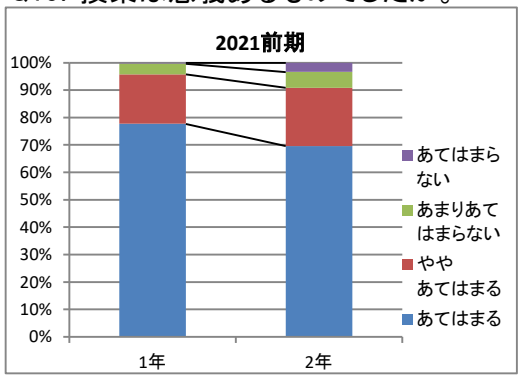


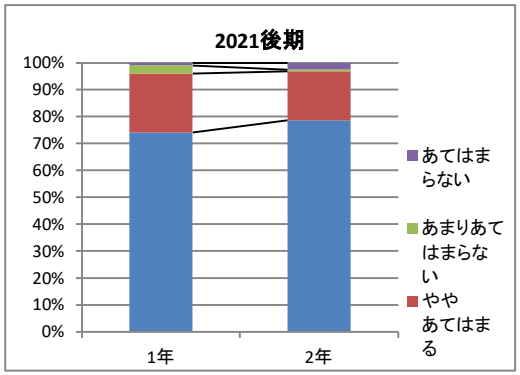


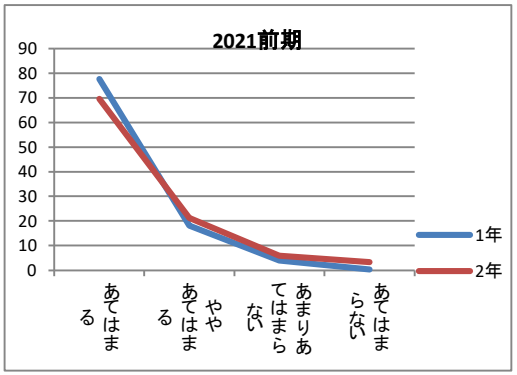


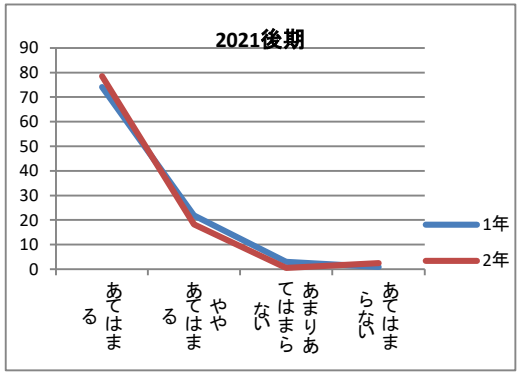


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。









令和４年度自己点検・自己評価委員会総会
（事務部門）

九州保健福祉大学

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州保健福祉大学	事務局	事務局長	的場　嘉男

【前年度結果報告】

１．入学者定員１００％確保

薬学科は前年度より微増であったが、その他の学科はすべて減少した。要因として宮崎県内からの入学者が減少した。

２．私立大学等改革総合支援事業（タイプ１とタイプ３）での補助金獲得

一昨年度は「タイプ３地域社会への貢献」で選定されたが昨年度は「タイプ１とタイプ３の両方で補助金獲得はならなかった。タイプ１選定点６９点、本学６２点　タイプ３選定点３２点　本学２９点

３．新型コロナウイルス感染症対策（クラスター０件）

コロナウイルス感染症が落ち着ていた状況もありクラスターは発生しなかった。

【今年度数値目標・決意表明】

１．新名称九州医療科学大学へのスムーズな移行
　名称変更に伴う変更手続き等を漏れなく行いスムーズに九州医療科学大学へ移行できるように準備を進める。また、同時に新名称である九州医療科学大学をメディア、SNS などの媒体をとおして広く周知する。

２．入学者定員１００％確保
　九州医療科学大学としての新たな魅力を PR して入学者定員１００％を目指す。

３．私立大学等改革総合支援事業（タイプ１『特色ある教育の展開』とタイプ３『地域社会の発展への貢献』）での補助金獲得

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州保健福祉大学	庶務部　庶務課	課長	大石　正憲

【前年度結果報告】

１．働き方の改善を進めることで、一層の業務の効率化を図り、残業時間・休日出勤の減少を目指す

・積極的な声がけと確認により、時季指定５日分の有給休暇は全教職員が取得することが出来た。
　また、残業時間については、事務職全体で前年度と比較して約４５％増となり、目標を達成することができなかった。

・コロナ禍での働き方改革として、在宅勤務や分散勤務を実施した。

・教職員との連携・協力を密にすることで、課内のコミュニケーション向上に努めることが出来た。

２．外部資金の獲得に向けて更なるサポートを実施

・科学研究費等、外部資金に関する情報提供やサポート体制を強化し、更なる外部資金の獲得を目指した。科研費の新規採択は目標の５件以上に対して、６件の採択で目標を達成することができた。

・全学的な協力体制の下で、外部資金の獲得額は前年度と比較して約２８０万円の増加となり、目標を達成することができた。

【今年度数値目標・決意表明】

１．働き方や職場環境の改善を進める

・今年度も時季指定５日分の有給休暇取得１００％を目指す。
　また、部署間の連携体制を進めることで休日出勤の減少、残業時間の減少(前年度２０％減)を目指す。

・研修等を通じてハラスメントや職場環境に対する理解を深めるとともに、該当する事案の減少を目指す。

２．外部資金の獲得に向けて更なるサポートを実施

・科学研究費等、外部資金に関する情報提供やサポート体制を強化し、更なる外部資金の獲得を目指す。
　昨年度に引き続き、今年度も科研費の新規採択で５件以上を達成する。

・外部資金獲得に向けて、外部機関との連携を強化し情報収集に努めると共に、獲得の為の勉強会や研修を実施することで獲得額の向上(前年度２００万円増)を目指す。

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州保健福祉大学	庶務部　会計課	課長	牧野　喜代子

【前年度結果報告】

１．経費節減

大学全体に省エネの協力を依頼した結果、電気使用量は一昨年度に比べ 6%減、ガス使用量は 12%減、水道使用量は 29%減となった。しかしながら金額でみると電気代 1600 万円増、ガス代 40 万円増、水道代は 170 万円減の計 1470 万円の増となり、200 万円節減の目標は達成できなかった。
その他、会計課が関わる物品購入等において、購入企業との価格交渉等に努めることで合計 275 万円の値引きを実施したが、目標の 400 万円減には達しなかった。

２．優先順位をつけた予算の執行

老朽化した建物・設備の更新を優先し、昨年度は１号棟エレベーター更新とネットワークの基幹スイッチ更新を行った。このうち基幹スイッチ更新では文部科学省から 525 万円の補助金を獲得したうえで実施を行った。

【今年度数値目標・決意表明】

１．省エネルギー活動の推進

経費節約の一環として今年度も省エネルギー活動を推進する。ただし資源価格の変動により金額面での目標設定が困難なことから、電気・ガス・水道の使用量各 1%減を目標とする。このため昨年度に引き続きガス空調の効率的な使用を行うとともに、照明の LED 化を実施する。

２．優先順位をつけた予算の執行

次年度に開学 25 周年と大学名称の変更が予定されていることから、名称変更に伴う看板やプレート等の交換作業を優先して実施する。また開学当初から使用している設備や施設の補修を重点的に実施し、その他の修繕費と合計して昨年度の修繕経費 1200 万円を超えないことを目標とする。

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州保健福祉大学	教務部　教務課	課長	紺野　智子

【前年度結果報告】

●退学者減少に向けた取り組み
退学者 0 を目指した取り組みとして、〇転学科指導の強化、〇休学制度の効果的な運用、〇欠席過多学生に対する教員への情報提供及び連携体制構築、の 3 点に努めた。
➔　結果：退学者 19 名、退学率 19 名/1114 名(5/1)_1.7%(昨同 1.9%)
退学者が 20 名を切り、率も 0.2 ポイント減となり、3 年連続の減を継続している。
ただし、除籍者が増加(2→4)したため、事務局の連携を強化し課題の精査に取り組みたい。
●学生サポート体制の強化（満足度の向上）
・ブランドビジョン構築の一つとして学修成果の可視化に取り組み、令和 4 年度からのスタート（原則 1 年生）させた。今後は内容の精査も行い、更なる成果向上に向け、取り組みを加速させたい。
・障がい学生（聴覚）のサポートに取り組み、無事進級することが出来ている。卒業に向け、3 年次からの臨床実習など専門実践教育に向けて連携を強化する。

【今年度数値目標・決意表明】

●退学者減少に向けた取り組み（継続）
退学者 0 を目指した取り組みとして、転学科指導の強化を図り、学生・保護者・学科間教員の橋渡し役となる連携体制の構築を目指す。また、心身ともに課題を抱えた学生も増加傾向にあることから、安易な転科とならないよう、休学制度も有効な手段として効果的に運用したい。
さらには、退学予備軍となる欠席過多学生に対する、教員への情報提供及び連携体制構築に努める。
●学生満足度向上に向けた取り組み
九保ブランドを目指し、オリジナルの基礎教育科目の見直しを行い、令和 4 年度からスタートしており、相応の成果を上げている。これを継続検討し、医療・福祉系の専門職教育の基礎となる人間力向上を目指したアクティブラーニングの提供・検討を、延岡市のみならず県北他町村とも連携し構築することで、九保ならではの教育の提供に努める。

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州保健福祉大学	教務部　教育ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ課	課長	紺野　智子

【前年度結果報告】

1. 教育ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ課は教務課と連携し、学修成果の可視化を推進し、さらにUNIVERSAL PASSPORT-RXの新機能(ポートフォリオ、マイステップ)の活用を検討・推進することで、教学に関する学生サービスの向上に資することを目標とする。
本年度は前述目標の達成のため、上記新機能の学生・教員への運用支援を行う。

【結　果】有効な運用支援を行うことが出来ておらず未達であるが、連続欠席者に対する教員との連携により、退学者減に貢献できた。各種教学データを効果的に利活用することで、継続して学生サービスの向上に努めたい。

2. IR推進室・総合企画部等他部門と連携し、九州保健福祉大学の教学IRの推進に努める。

【結　果】本部との連携は行われなかった。IR について実績を残せなかったが、他校の事例研究、テキスト等関連書籍の読み込み及びIR講習の受講等の学習に努めた。

【今年度数値目標・決意表明】

1. 学修成果の可視化を推進するため、上記新機能の学生・教員への運用支援を行う。

2. 各学科並びに各部署及びIR推進室等他部門と連携し、九州保健福祉大学の教学IRの推進に努める。

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州保健福祉大学	通信教育事務課	課長	矢野　朋光

【前年度結果報告】

●入学者の確保：前年度入学生が正科生１９３名、履修生２５名となり、目標の１００％には届かなかったが入学生を増やすという目的はある程度達せられた。
●学生満足度の向上：学生からの要望があればオンライン学習相談を実施したが、対面でも来学することで可能とした。電話での対応が多いことから丁寧な対応を心掛けた。スクーリング時のアンケートについては集計後速やかに教員へフィードバックした。
●国家試験合格率のアップ：対策講座を専門に扱っている業者での講座を実施し、合格率も前年度よりもアップしたが他と比較すると低いので検討事項とする。
●コロナ禍においての通信教育部の対応策の検討：科目単位認定試験のオンライン化に向け e-Learning システムを導入し、本格稼働に向け準備を進めた。またこのシステムを利用し、動画や映像教材の配信を行い通信教育の充実を検討した。

【今年度数値目標・決意表明】

●入学者の確保：増加傾向から減少傾向となってきたので改めて募集活動の見直しを図るとともに、ハイブリッドコースへの入学者確保に向け通信制高校へ向けた広報を行い、入学者確保に努める。
●学生満足度の向上：オンラインでの学習相談を積極的に取り入れるとともに、可能であれば対面を実施する。引き続きスクーリング時に学生アンケートを実施し速やかに教員へのフィードバックを行う。
●新たな通信教育部への挑戦：次年度より大学名称の変更、通信の学科名変更、ハイブリッドコースの新設などが計画されており、通信教育の在り方を再構築する機会と捉え、オンラインを重視し、今までの九州圏内だけではなく全国から学生を集められるように知名度アップを図る。

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州保健福祉大学	附属図書館	課長	矢野　朋光

【前年度結果報告】

1) 学習支援及び教育活動への直接の関与

2) 研究活動に即した支援と知の産生への貢献

3) コレクション構築と適切なナビゲーション

4) 他機関・地域等との連携

【今年度数値目標・決意表明】

1) 学習支援及び教育活動への直接の関与

2) 研究活動に即した支援と知の産生への貢献

3) コレクション構築と適切なナビゲーション

4) 他機関・地域等との連携

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州保健福祉大学	ｽﾁｭｰﾃﾞﾝﾄｻﾎﾟｰﾄｾﾝﾀｰ 学生課	課長	加藤　泰輔

【前年度結果報告】

〇学生満足度の向上

R4 年 11 月に規模縮小ではあったが 3 年ぶりに九保祭を、12 月にはウィンターイルミネーション企画（キッチンカー、軽音楽部、ダンスサークル）を開催することができた。学生に対する情報提供に関しては、課内で共有・活用することで「速やかに・確実なもの」を提供することができた。また、コロナ沈静化を確認して英語村と共同して留学生との交流会を実施することができた。

〇事件・事故の防止

当課に届け出があった学生の交通事故は、第 1 当（加害者）9 件であった。なお、危険運転に起因する事故はなかったがマナー不足が確認された学生に対しては対面で指導するなど事故防止に努めた。

〇防災に対する意識向上

令和 4 年 12 月 1 日（木）大学全体での消防・防災・避難訓練を実施して防災意識の向上を図った。

〇感染症への対応

感染情報が 703 件。その都度の迅速な対応と関係課・学科と情報共有して学生の不安軽減に努めた。

【今年度数値目標・決意表明】

（１）【３つの力】で学生満足度の向上をめざす（すべては窓口対応から始まる）

①安定した傾聴力　　②課題の発見力　　③的確な判断・情報発信力

（２）事件・事故・防災（災害）に対する「備え」と「危機管理」の意識向上

①事件、事故を発生させない（注意喚起の徹底）（交通事故ゼロを目指す）

②事件については関係部署・機関との連携による早期解決をめざす（抱え込まない）

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州保健福祉大学	キャリアサポートセンター	主任	猪股健久

【前年度結果報告】

１．　就職目標　100%

【結果】98.4%　　［98.9%］　　※［　　%］は 2021 年度　最終

２.卒業者数に占める就職希望者の割合目標 90%以上

【結果】80.0%　　［80.9%］　　2023 年 5 月 8 日現在（2022 年度最終）

３.質の高いキャリアサポートを目指し、教職員や外部機関と連携し学生一人ひとりが満足できるよう進路支援を実施した。また、低学年からのキャリア意識の醸成を目的とした各種のイベントを対面で開催することができた。更に、職種ごとの企業説明会を学内にて開催したことで、年間を通したキャリア支援を実現できた。

【今年度数値目標・決意表明】

１．　就職目標　100%

２．　修学支援新制度での要件を満たす「就職・進学率」90%以上

３．　キャリア支援の強化

①就職情報運営会社や地元公的機関との連携強化による就職支援の充実

②公務員就職支援の強化

③各種イベントへの参加促進を強化

④オンラインによる実践的なキャリア支援講座の充実

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
法人本部	入試広報室	参事	大政　孝則

【前年度結果報告】

2023 年度順正学園の学部・専門学校総志願者数は、1,873 名(前年度 1,867 名)で前年対比 100.3%、入学者総数は、601 名(前年度 570 名)で前年対比 105.4%であった。学園全体の充足率は全体定員 940 名中入学者数 601 名で 63.9%と前年度の目標であった全学科定員確保は未達となった。また留学生 200 名入学の目標については、秋・春入学者数 153 名（昨年 141 名）となり目標は未達となった。

	志願者数			入学者数			入学定員充足率
	2023 年度	2022 年度	対前年比	2023 年度	2022 年度	対前年比	
吉備国際大学	996	815	122.2%	357	290	123.1%	66.1%
九州保健福祉大学	775	928	83.5%	184	210	87.6%	54.0%
九州保健福祉大学総合医療専門学校	103	124	83.0%	60	70	85.7%	100.0%
総　数	1,873	1,867	100.3%	601	570	105.4%	63.9%

【今年度数値目標・決意表明】

◎入試

入学者選抜において、受付・入試実施・発表・入学手続までの入試業務をミスのないよう行う。

◎広報

各設置校のブランドビジョンを柱に学部・学科の情報発信を行い、入学定員充足率 100%を目指す。
留学生募集については、秋、春、留学生別科を含めて 200 名の入学を目指す。

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
法人本部	入試広報室	課長	高木真理子

【前年度結果報告】

2023 年度九州保健福祉大学の学部志願者数は、775 名(前年度 928 名)で前年対比 83.5%、入学者数は、184 名(前年度 210 名)で前年対比 87.6%であった。学部全体の充足率は全体定員 320 名中入学者数 184 名で 57.5%と前年度の目標であった全学科定員確保は未達となった。

	志願者数				入学者数						入学定員充足率
	2023	2022	対前年比	2020	2023	歩留	2022	歩留	2020	歩留	
スポーツ健康福祉学科	76	88	86.4%	60	35	46%	39	44%	37	62%	87.5%
臨床福祉学科	41	46	89.1%	26	17	41%	22	48%	11	42%	42.5%
薬学科	294	345	85.2%	253	43	15%	34	10%	66	26%	43%
動物生命薬科学科	84	118	71.1%	78	23	27%	25	21%	28	36%	57.5%
生命医科学科	200	250	80.0%	193	45	23%	58	23%	66	34%	56.2%
臨床心理学科	80	81	98.8%	108	21	26%	32	40%	48	44%	52.5%
合　計	775	928	83.5%	718	184	24%	210	23%	256	36%	54.1%

【今年度数値目標・決意表明】

◎入試：学科のポリシーに沿った入学者選抜の実施、受験生に対して丁寧な対応やミスのない実施に努める。

◎広報：校名変更、救急救命コースの開設などを柱にメディア、SNS、進学サイトなど大幅に露出を増やすとともに、各学科の特色について学科と連携した広報を行い志願者数 900 名以上、歩留まり率（入学者数/志願者数）36%以上を目指す。

・薬学科　志願者数 300 名以上、歩留まり率：30%以上、動物生命薬科学科　志願者数 100 名以上、歩留まり率：36%以上　・スポーツ健康福祉学科　志願者数 180 名以上、歩留まり率：45%以上
・生命医科学科　志願者数 200 名以上、歩留まり率：35%以上
・臨床心理学科　志願者数 90 名以上、歩留まり率：40%以上